



TITLE:

# 京都大学埋蔵文化財調査報告 第2冊 : 白河北殿北辺の調査

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都大学埋蔵文化財調査報告 第2冊 : 白河北殿北辺の調査. 京都大学埋蔵文化財調査報告 1981, 2: 1-108

ISSUE DATE:

1981-03-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/230839>

RIGHT:

# 京都大学埋蔵文化財調査報告 II

— 白河北殿北辺の調査 —

京都大学埋蔵文化財研究センター



## 序 文

京都大学埋蔵文化財研究センターが発足して以来、本大学構内の遺跡調査は比較的順調に行なわれるようになった。これらの調査によってなされた新事実の発見は、相当の量にのぼり、単に京都大学敷地内の歴史を明らかにしたばかりでなく、平安京、とくに鴨東地域を解明するための有力な資料を提供することとなった。

ただし、そこに問題がないわけではない。これらの調査は全て建物新営にともなう事前調査であるため、調査地区が研究的見地からセレクトできないことや、建設計画の量が調査会の能力を上廻るために、調査員はフィールドワークに多くの時間をとられ、研究活動が十分にできないということである。

埋蔵文化財研究センターは、本来、研究を主目的とすべき機関であるが、研究員はフィールド調査に追われて、折角得られた新資料を、より深く研究するという余裕が少ないのである。

にも拘らず、ここに、本来の研究活動の成果をしめす、調査報告書の第二冊目が出来上ったのは、まことに喜ばしいことである。今回、調査の対象となった遺跡は、第一冊目の遺跡に比べて、面積も広く、出土した遺物の量も比較にならぬほど大きい。しかも、調査を担当した研究員のうちには、当センターから別の職籍に移ったものもいる。これらの困難を克服して、この報告書が出来上ったのは、ひとえに、担当者たちの熱意によるものであり、当センターの活動を正しい路線上に歩ませようとした意図によるものである。

そして、本報告書の作成には、多くの人々の助言や協力を得たが、とくに、第1次調査のときの調査会会長であられた横尾義貫氏（当時工学部教授）と、第2次調査のときの調査会会長であられた藤岡謙二郎氏（当時教養部教授）には、当時の困難な状況下によく本調査を遂行していただいたし、また、名古屋大学の榑崎彰一教授には、出土資料について、種々の御指導をいただいた。ここにあつく御礼を申しあげたい。

昭和55年12月1日

京都大学埋蔵文化財研究センター長

樋口隆康

## 例 言

- 1 本書は昭和51年度と昭和52年度に実施した京都市左京区聖護院川原町京都大学医療技術短期大学部校舎新営予定地(第1期工区, 第2期工区)発掘調査報告書であり, 京都大学埋蔵文化財調査報告第2冊にあたる。
- 2 発掘調査は, 昭和51年度を京都大学農学部構内遺跡調査会, 昭和52年度を京都大学構内遺跡調査会が実施し, その概要報告は、『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』と『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』に掲載した。
- 3 調査区の位置は, 国土座標に従って1辺50mの方形の地区割をし, 南から北へA Z—B A—B Bと変わるアルファベット2文字と, 西から東へ増加する数字とで表示する。
- 4 層位と遺構の位置は, 国土座標第6座標系( $x=-108,000$   $y=-20,000$ )が( $X=2,000$   $Y=2,000$ )となる京都大学構内座標によって表示する。ただし, 昭和54年度に旧来の構内座標を京都市の調査基準点座標系に変換したため, 調査当時の座標値を新座標値に換算したものをを用いた。
- 5 遺物番号は瓦類とそのほかの遺物とにわけて通し番号を付した。
- 6 注は各章ごとにまとめて章末に記載し, 参考文献は本文中に[著者名, 発表年次]の形式で表わし, 本文末に一括した。
- 7 本報告書は, 京都大学埋蔵文化財研究センター研究部が計画・立案し, 岡田保良(現国士舘大学イラク古代文化研究所講師), 宇野隆夫(現京都大学文学部考古学研究室助手), 泉拓良(京都大学埋蔵文化財研究センター研究部主任), 五十川伸矢(同助手)が分担執筆した。執筆者名は目次に記した。
- 8 遺物の実測は, 土器を小笠原義治(京都大学文学部考古学研究室聴講生), 陶磁器類を土橋理子(現奈良県立橿原考古学研究所附属博物館員), 瓦を上原真人(現奈良国立文化財研究所技官)が主として行なった。土器・陶磁器の計測は津隈久美子(京都大学構内遺跡調査会調査員)が行ない, 遺物の写真撮影は泉拓良が担当した。
- 9 製図は, 泉拓良, 宇野隆夫, 清水芳裕(京都大学埋蔵文化財研究センター助手), 浜崎一志(同助手), 増井正哉(京都大学工学研究科修士課程建築学専攻生)が行なった。
- 10 編集は泉が行ない, 京都大学埋蔵文化財研究センター研究部全員が協力した。

# 目 次

第1章 調査概要 .....	(岡田)...	1
1 調査の概略 .....		1
2 遺跡の立地と歴史的環境 .....		3
第2章 層位と遺構 .....	(岡田)...	9
1 層 位 .....		9
2 遺 構 .....		11
第3章 遺 物 .....	(泉, 宇野, 五十川)...	25
1 土器と陶磁器の種類と器種 .....	(宇野)...	25
2 土器と陶磁器 .....	(宇野)...	26
3 金属器, 土製品, 石製品 .....	( 泉 )...	44
4 瓦 類 .....	(五十川)...	46
第4章 遺物の考察 .....	(宇野)...	61
1 考 察 の 方 法 .....		61
2 土 師 器 .....		63
3 瓦 器 .....		76
4 須 恵 器 .....		78
5 陶 磁 器 .....		79
6 土器・陶磁器の構成と比率 .....		83
第5章 遺構の考察 .....	(泉, 岡田)...	89
1 遺 跡 の 構 成 .....	(岡田)...	89
2 遺構の変遷と白河北殿北辺の展開 .....	(岡田)...	95
3 遺跡の歴史的性質 .....	( 泉 )...	102
参考文献 .....		106

## 図版目次

- 1 調査地区割図
- 2 調査区遠景(南から)
- 3 発掘前全景
  - 1 第1次調査区(南から)
  - 2 第2次調査区(南から)
- 4 近世遺構全景
  - 1 第1次調査区西部(南東から)
  - 2 第2次調査区(南から)
- 5 古代・中世遺構全景
  - 1 第1次調査区東部(南西から)
  - 2 第2次調査区(南から)
- 6 層位図(A-A'・B-B')
- 7 層位図(C-C'・D-D')
- 8 層位図(E-E'・F-F')
- 9 古代・中世遺構平面図(1)
- 10 古代・中世遺構平面図(2)
- 11 古代・中世遺構平面図(3)
- 12 溝・柵・建物
  - 1 溝SD11(北から)
  - 2 柵SA01(南から)
  - 3 建物SB01(北から)
- 13 溝
  - 1 溝SD05・SD06(西から)
  - 2 溝SD13(西から)
  - 3 溝SD24(南から)
  - 4 溝SD04の検出(西から)
- 14 井戸
  - 1 井戸SE13
  - 2 井戸SE22
  - 3 井戸SE18
  - 4 井戸SE11
  - 5 井戸SE19
  - 6 野壺SE36, 井戸SE32
- 15 石組・石敷・護岸
  - 1 石組SX02(南東から)
  - 2 石敷SX01(東から)
  - 3 護岸SX06(南から)
- 16 遺物の出土状況
  - 1 火舎香炉・六器の出土状況
  - 2 溝SD06の土器出土状況
- 17 土器・陶磁器実測図(1)  
SE25, SE22, E12層, SE40
- 18 土器・陶磁器実測図(2)  
SE30
- 19 土器・陶磁器実測図(3)  
SD13, SD11下層, SD11中層
- 20 土器・陶磁器実測図(4)  
SD11上層
- 21 土器・陶磁器実測図(5)  
SD06, SK10
- 22 土器・陶磁器(1)  
SE25, SE22, E12層

- 23 土器・陶磁器(2)  
E12層, S E40, S D12
- 24 土器・陶磁器(3)  
S E30, S D09, S E16
- 25 土器・陶磁器(4)  
S D13, S E18, S D23下層
- 26 土器・陶磁器(5)  
S D11中層, S D03
- 27 土器・陶磁器(6)  
S D03, S D11上層
- 28 土器・陶磁器(7)  
S D11上層, S E24
- 29 土器・陶磁器(8)  
S D06
- 30 土器・陶磁器(9)  
S K10, S K08
- 31 土器・陶磁器(10)  
S D24
- 32 陶磁器・土製品  
包含層
- 33 陶磁器・火舎香炉・六器  
包含層
- 34 軒丸瓦実測図
- 35 軒平瓦実測図(1)
- 36 軒平瓦実測図(2)
- 37 軒丸瓦(1)
- 38 軒丸瓦(2)・緑釉丸瓦
- 39 軒平瓦(1)
- 40 軒平瓦(2)
- 41 軒平瓦(3)
- 42 軒平瓦(4)・瓦製円板

## 挿 図 目 次

- 1 調査地点の位置……………5
- 2 白河街区と調査地点……………7
- 3 溝S D11層位図……………14
- 4 井戸S E26・S E12実測図……………16
- 5 井戸S E19・S E11・S E03・  
S E32実測図……………17
- 6 井戸配置図……………19
- 7 近世遺構配置図……………23
- 8 E13層, S X06下層・上層,  
S E13, S D12出土の遺物……………29
- 9 S D10, S K12出土の遺物……………32
- 10 S D09, S E16出土の遺物……………33
- 11 S E26, S E18, S D23下層  
出土の遺物……………35
- 12 S D03出土の遺物……………37
- 13 S E12, S E17, S E19,  
S E11, S E24出土の遺物……………39
- 14 S E15, S D08, S K08,  
S D23上層出土の遺物……………41
- 15 S D24出土の遺物……………42
- 16 A 5・A 6層, A 2・A 3層,  
攪乱層出土の遺物……………43

17	火舎香炉, 六器	45	23	第1期の遺構配置図	91
18	石製品	46	24	第2期前半の遺構配置図	91
19	丸瓦	51	25	第2期後半の遺構配置図	93
20	平瓦	53	26	第3・4期の遺構配置図	93
21	篋記号	54	27	『新撰増補京大絵図』にみる 調査区周辺	94
22	胎土分析資料	79			

## 表 目 次

1	井戸の時期と分類	19	12	SK10出土の土師器皿・碗	73
2	土師器時期区分の大略	27	13	関連文献資料の数量と構成	74
3	瓦類の出土地点	59	14	出土遺物総量の変化	75
4	計測値の誤差	62	15	土器・陶磁器の種類別比率	83
5	土師器杯・皿・碗の口縁部分類(1)	64	16	器種別の比率	85
	土師器杯・皿・碗の口縁部分類(2)	65	17	土師器の器種別比率	85
6	SE25出土の土師器皿	67	18	各時期における瓦器, 須恵器, 陶磁器, 石製容器の器種	85
7	SE22出土の土師器皿	67	19	主要器種の変遷	86
8	SE30出土の土師器皿	69	20	出土遺物からみた遺構の年代	89
9	SD13出土の土師器皿	69	21	調査区周辺に関する文献記事(1)	98
10	SD11上層出土の土師器皿	71		調査区周辺に関する文献記事(2)	99
11	SD06出土の土師器皿	71			

# 第1章 調査概要

## 1 調査の概略

京都大学医学部附属病院西構内にあった元医学部眼科教室、のちの口腔外科教室3棟を取り壊し、その跡地に京都大学医療技術短期大学部校舎を2期にわけて建てる計画を、昭和51年に実施することになった。元眼科教室の建物は、明治43年建設で、正統的な古典系木造様式建築の代表作といわれ、工学部建築学教室建築史研究室が取り壊し前に建物調査を行なった[京都大学広報委員会77]。また、校舎予定地が白河北殿の北辺に当ることから、京都市文化観光局文化財保護課より工事に際して立合調査を行なうよう指導があった。さらに、同年8月建物調査を担当した川上貢工学部教授から崇徳院廟に關係する遺跡が発見される可能性があるとの指摘を受けた。そのため、周知の遺跡外ではあったが、建物解体後の8月13日、新宮予定地に4ヶ所の試掘坑を設けて泉拓良文学部助手が調査を行なった。その結果、平安時代から室町時代に至る遺跡の存在が明らかになり、京都大学施設部と施工業者の浅沼組の協力を得て、発掘調査を実施することになったのである。

当時、京都大学北部構内で発掘調査を実施していた、京都大学農学部構内遺跡調査会(会長横尾義貫工学部教授)が調査を受託した。調査会は、調査にあたって川上貢工学部教授を班長とし、工学部建築学教室建築史研究員の大学院生と学生を主体とした京都大学病院内遺跡調査班を編成した。全面調査を行なう前に、第2期工事予定地についても試掘調査を行ない、遺跡がその地まで及んでいることを確認した。調査期間の制約と調査体制の不備から、第1期・第2期工事予定地すべてを1回で調査することは不可能と思われたため、昭和51年度では第1期工事予定地と、それに伴う共同溝予定地についてのみ発掘調査することとし、第2期工事予定地は昭和52年度に調査することとなった。

京都大学構内は、その当時すでに北部構内と教養部構内が周知の遺跡となっており、あらたに病院構内で遺跡が発見されたことから、吉田地区の全構内に遺跡が広がっている可能性が強いと考えた。そのため、京都大学全構内の遺跡調査を恒常的に行なう組織が必要となり、発掘調査を実施する組織として京都大学構内遺跡調査会、調査や保存について研究する組織として京都大学埋蔵文化財研究センターを設立し、昭和52年以後構内遺跡の調査と保存について積極的に取り組むことになった。したがって、第2次調査は新設された京都大学構内遺跡調査会(会長藤岡謙二郎教養部教授)が実施することになり、本報告書の



作成は京都大学埋蔵文化財研究センター(センター長樋口隆康文学部教授)が行なうことになったのである。

### 第1次調査

調査地点 京都市左京区聖護院川原町京都大学医療技術短期大学部校舎等新営予定地第1期工区(京都大学構内AE14・AE15・AF15区)

発掘期間 昭和51年8月20日～12月8日

発掘面積 約2,200m<sup>2</sup>

調査主体 京都大学農学部構内遺跡調査会

調査会長 横尾義貫(工学部教授)

調査顧問 村田治郎(名誉教授)

調査委員 山田晶(文学部長), 西村敏雄(医学部附属病院長), 中戸克二(農学部長), 林屋辰三郎(人文科学研究所長), 村地孝(医療技術短期大学部主事), 樋口隆康(文学部教授), 川上貢(工学部教授), 藤岡謙二郎(教養部教授), 石田志朗(理学部助教授), 泉拓良(文学部助手), 中山忠之(京都市文化観光局文化財保護課長)

監 事 西村利雄(施設部企画課長), 鹿野英夫(農学部事務長), 竹田保(医学部附属病院管理課長), 竹原正(医療技術短期大学部事務長)

調査班長 川上貢(工学部教授)

調査主任 谷直樹(大学院工学研究科博士課程3年), 岡田保良(大学院工学研究科博士課程2年)  
(職名は当時のものを用い, 大学名は省略した。)

第1期工区は, 新営建物予定地と, その東端から北へのびる配管用共同溝の敷設予定地にわたり, 前者を中央で,  $Y=1745.5$  の座標に沿う南北方向の畔によって二分し, 都合3地区に分けて発掘した(図版1)。試掘を終えた段階では, 表土と近世の耕土を機械力によって排除した後, 発掘調査を必要とする遺物包含層は, 調査区全域で単一とみなしていた。しかし, 調査区の西3分の1ほど( $Y=1726$  付近より西)は, 耕土下に包含層はなく, 東半部では, 当初予想した包含層の上面に別の1層が介していることが, 耕土を除去した時点で判明した。したがって, 調査過程における検出作業は, 部分的に3面にわたって行なうこととなった。

遺構平面図は, 最終遺構面と, それまでの個別遺構とについては割付けによって縮尺20分の1で, その他は平板測量によって50分の1で作成した(図版9～11, 図7)。主要な層位は, 西半部ではその南壁と東壁で, 東半部では南壁に近い旧建物基礎跡を利用したサブトレンチにおいて記録し, 北の共同溝地区ではその東壁の層位を記録した(図版6～8)。なお11月25日に現地説明会を行なった。

## 第2次調査

調査地点 京都市左京区聖護院川原町京都大学医療技術短期大学部校舍等新営 予定地 第2期工区(京都大学構内AF14区)

発掘期間 昭和52年6月15日～8月31日

発掘面積 約800m<sup>2</sup>

調査主体 京都大学構内遺跡調査会

調査会長 藤岡謙二郎(教養部教授)

調査委員 樋口隆康(文学部教授), 西川幸治(工学部教授), 足利健亮(教養部助教授), 西村進(教養部助教授), 泉拓良(埋蔵文化財研究センター助手), 太田増人(事務局庶務部長), 熊谷直家(医療技術短期大学部主事)

監 事 西村利雄(施設部企画課長), 竹原正(医療技術短期大学部事務長)

調査班長 岡田保良(埋蔵文化財研究センター助手)

調査主任 宇野隆夫(埋蔵文化財研究センター助手)

(職名は当時のものを用い、大学名は省略した。)

この調査区は、南辺が第1次調査区の西半部の北に接している。 $X=879.9$ (東西方向),  $Y=1729.7$ (南北方向)それぞれの正方位線に沿って、十字形に層位観察用の畔を残し、4区画に分けて調査を行なった。高野川系の氾濫砂礫層が主要遺構のベースとなっているが、これと上層の近世耕土層との間の堆積はわずかで、かつ決して均一な包含層をなしていない。したがって、この調査における主要な層位を、第1次調査の層位との連続でとらえることはほとんどできなかった。一応、十字の畔の南面と西面の全部と、調査区の北壁と東壁の層位とを記録した。遺構のほとんどが井戸と溝であったため、調査区の全体を各遺構面ごとに縮尺50分の1で平板測量し、井戸の詳細を縮尺10分の1で割付け実測した。現地説明会は、8月10日に行なった。

なお本書作成にあたって、地点表示は構内座標にしたがい、AE14・AE15・AF14・AF15の各地区名を用いた(図版1)[京大埋文研78a]。ただし、これらの地区の区画は、調査当時の仮の構内座標系を用いたため、昭和54年度に正確な国土座標系に変換した後の地区割とは若干ずれることになった。本文や図版には、今後の調査にかかる遺構との相対関係の精確さを期して、すべて新たに変換した座標値を使用した。

## 2 遺跡の立地と歴史的環境

京都大学構内の中でも、医学部や病院構内において、平安時代から室町時代にかけての遺跡が高密度に広がっている事実は、いまや周知のこととなっている。しかし、そうした認識はごく最近のことであり、本書で報告する調査がその端緒となった。昭和51年夏のこと

とである。調査地点は、丸太町通りの北約150m、鴨川から東へ約300m隔たった病院西構内旧眼科教室の跡地であった(図1)。

**白河北殿とその周辺** 平安時代の末、鴨川の東には、白河天皇の法勝寺造営を契機として、本格的な市街化の波が訪れる。神楽岡(吉田山)の西麓は、吉田神社が10世紀ごろから鎮座していたとはいえ、鴨川、高野川、白川等の流路はそのころまだ安定しておらず、岡にほど近く、高野川の河原が広がっていた[藤岡78]。本調査地点あたりが、定住可能な土地となるには、当時かなりの土木事業が施されたことを想定しておく必要がある。文献資料のうえからは、直ちにこの地点と限定しうる歴史上の記載は見当たらない。しかし、福山敏男は、平安後期の六勝寺の位置について論考した中で、その時代の市街地形成がこのあたりに及んでいたことをはやくも示唆している[福山43]。また、その市街地の形態が平安京の条坊を鴨川を越えてそのまま東へ延長させた方格状であったという推定は、現在もなお、基本的な考え方として踏襲されている。その後、岡崎の京都会館建設に先立って推定六勝寺跡の調査が行なわれ、その報告に際して、杉山信三は、南は粟田口辺から北は神楽岡西麓の京都大学構内に至る広い範囲について、あらためてその条坊の街区の復原と、可能な限りの位置の点定を行なった[杉山・岡田61, 杉山62]。ただし、この街路と街区の配置に関してのみ、近年の六勝寺跡や京都大学構内遺跡の調査から得た知見に基づいて、筆者なりの修正を試みた(図2)[岡田79]。

調査区の敷地の南には、現在春日上通りと呼ぶ小路が東西に通じている。これは、ほぼ平安京の中御門大路を鴨川の東へ延長した道筋にあたる(図2)。六勝寺と同時代に創始された聖護院と熊野社は、境域の消長や一時の移転はあったにせよ、道とともに今日その位置をほぼ保っていると考えられ、当時のこのあたりの歴史的環境を復原するうえで、貴重な遺産となっている。

さて、上皇や女院たちが六勝寺をはじめ、盛んに造寺造仏活動に励んでここ白河の地に「京・白河」と並び称されるほどの都市的繁栄をもたらそうとすること、白河上皇がはじめて白河に御所と定めたのは「白河泉殿」であった。法勝寺の初代別当覚円僧正の房舎を造替したものらしく、その占地は南は二条末から北は大炊御門末に至る2町四方の敷地が有力とされる[杉山62]。この御所には蓮華藏院をはじめとする多くの堂塔が併存したが、そのために手狭となったのか、何か不都合であったのか、理由は定かでないが、大炊御門をはさんで北側に、元永1(1118)年に新たな御所が造営された。これが南の泉殿に対して「白河北殿」と呼ばれた院の御所である。ただその占地については、泉殿(南殿)ほどの史

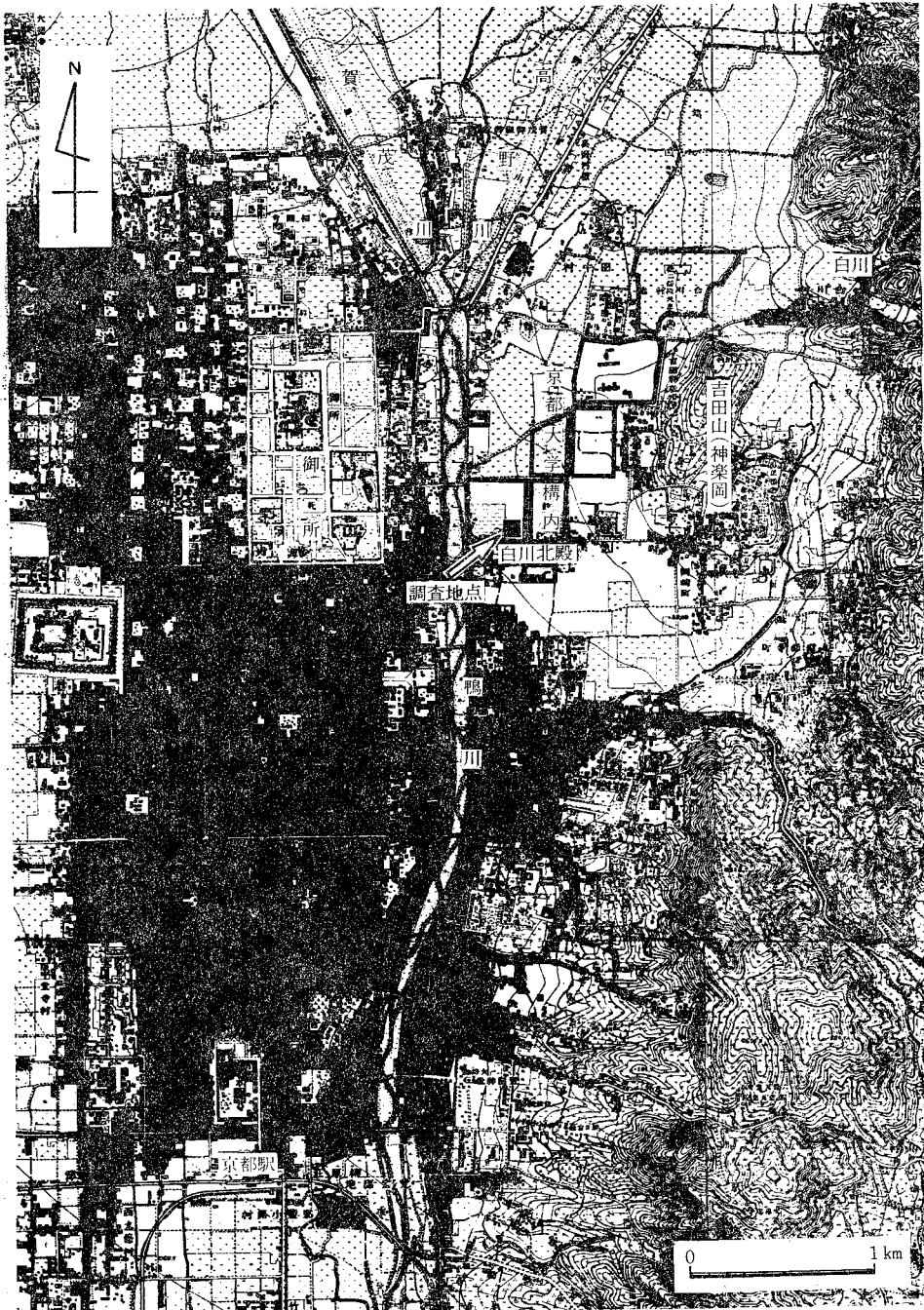


図1 調査地点の位置 縮尺 1/40,000  
(明治25年仮製2万分1地形図から作製)

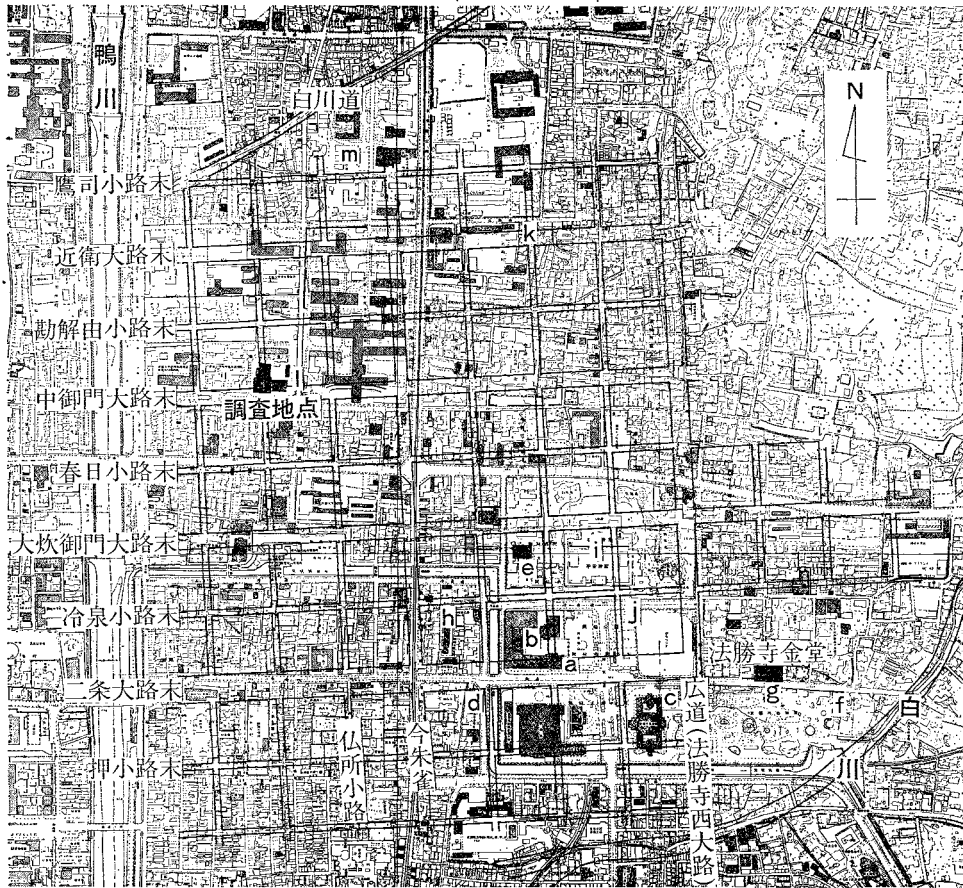
料がなく、北辺が春日の末までであったのか、大治4(1129)年の改造でさらに北へ中御門末まで及んだかどうかは明らかでない[川上77]。また東と西の辺についても、南殿とどういう関係にあったか定かではない。ただその位置について、『保元物語』に「白河殿(南殿)より北、河原より、春日の末にありければ」とあり、これに従えば「河原より」という語は、少なくとも北殿が南殿よりも河原に近く、ひと目に映る場所であったことを示しているように思われる。この北殿には、宝莊殿院と号する九躰阿弥陀堂が付属しており、長承1(1132)年に供養され、北殿よりさらに河原に近く、冷泉末と春日末のあいだを占めていたらしい[杉山62]。さらに長承3(1134)年、北殿の東側には「東御所」が造立され、康治1(1142)年には「東小御堂」が供養されている。北殿を含めて、これらの御所や御堂の占地が、中御門末よりも北へ及ぶことはないようである。

次に、それらより北については、先の東御所や小御堂を造進した、院近臣の民部卿藤原顕頼の宿所が北殿の北辺にあり、久安4(1148)年に他の家屋とともに焼亡するという記録があるほか、鳥羽院皇女の前斎院御所も北殿の北辺あたりと考えられている[川上77]。さらに近衛末の北側には高陽院泰子の福勝院が仁平1(1151)年に造立されるが、当時この地は熊野社境内であったことが指摘されている[杉山62]。

**白河北殿焼亡以後** 保元1(1156)年、白河北殿は崇徳上皇方がたてこもる所となり、一夜のうちに灰燼に帰してしまった。その後、平治1(1159)年、跡地には平清盛が千躰阿弥陀堂を造進しており、また、寿永2(1183)年には粟田宮が創始され、崇徳院の廟所とされた。これは応仁の乱で焼亡し、宮は四条通の南に再興される。明治ごろには、その旧地が京都大学医学部附属病院構内であったとも伝えられていたが、もはや確かなものではなくなっていた[西田30]。

保元の乱の後、白河と呼ばれた一帯の造営活動は衰退の一途を辿ったようではあるが、院の御所と異なって、社寺はその経営が直ちに途絶えることはなかった。特に神楽岡西麓から鴨川にかけては、もとの河原に帰することもなく、吉田社と熊野社のそれぞれの社領として再編されていったことがうかがえる。かつて近衛末の北側まで境内を有していた熊野社は、14世紀末には崇徳院と大吉祥院敷地を除く「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原」と四至が限られ[福山77]、同じころ吉田社の伸長は著しかったようで、『京都坊目誌』によれば、足利義満が近衛末より北、土御門末とのあいだは、河原から神楽岡に至るまで社領と定めており、熊野社と境内を接していたことになる。

京都大学構内の遺跡のうえから、室町後期以降このあたりは田畑化が進んだようで、そ



地点	遺構	規模・構造	方向・方位	比定物件	参考文献
a	建物基壇	東西16.5m, 南北12m	N2°50'20''W	尊勝寺南大門	杉山・岡田61
b	溝	石組, 幅0.8m, 側高0.3m, 検出長67.8m	南北 0°	尊勝寺	同
c	建物	柱跡, 方5間 (11.1m)	0°	円勝寺五大堂	円勝寺発掘調査団71
d	池	汀	—	延勝寺庭園	六勝寺研究会72
e	建物	桁行36m, 梁行25.2m, 5間4面総装階	N0°22'E	尊勝寺灌頂堂	工業・藤村73
f	池	汀	—	法勝寺庭園	木村・畑・上原75
g	建物	桁行51.2m, 梁行25.5m, 7間4面総装階	N0°12'W	法勝寺金堂	杉山・梶川75, 梶川77b
h	築垣	凝灰岩幅1m, 溝幅1.1m, 深さ0.3m	南北	得長寿院	梶川77a
i	溝と段	瓦石組溝	南北	尊勝寺	梶川・渡辺77
j	築垣	南溝・基壇・大行・北溝各幅0.8, 2.4, 3, 2.6m	東西N2°50'40''W	最勝寺北	同
k	溝	幅0.9m, 深さ0.2m, 検出長10m	東西N6°30'W	室町時代福勝院	京都府教委78
l	溝	幅1.0m, 深さ0.35m, 検出長56m	南北N2°50'W	法勝寺西大路より六町西	本報告書
m	溝と壇	溝幅3m, 壇幅3m, 検出長40m	東西N0°50'W	室町時代遺構	京大埋文研79

図2 白河街区と調査地点 縮尺 1/15,000

の画期はやはり応仁の大乱か、あるいはそれより少し遡るころに求められる。以後、幕末までその風景はほとんど変わらなかったとみなしうる。本調査地の西、鴨川までのあいだは、明治維新のときに府の操練場、明治5年には牧畜場となり、同20年には京都織物会社の設立をみる。この地が京都大学の土地となって病院眼科教室が開設されるのは明治43年のことである。この建物は、発掘調査を開始する昭和51年春まで存続した。

## 第2章 層位と遺構

### 1 層位

調査当時の地表は、東北部で標高47.0m、西南部で46.5mをはかり、わずかに西方鴨川に向かって下がるが、ほぼ平坦な土地である。旧建物が存在した間の堆積が、元来表土とみなされるべきであったが、建物解体直後の第1次調査では、その最上層は瓦礫や廃材とともにひどく攪乱を受けていたため除外し、それ以下の土層を層位として記録した。しかし、第2次調査では、それ以後1年近くを経過していたので、解体時の最も新しい堆積を含めて、広範囲にわたる近代の攪乱層を表土として実測している。

#### (1) 第1次調査区の層位(図版1・6・7)

東西方向の層位をA—A'間(A1～A9層)とB—B'間(B1～B7層)で(図版6)、南北方向の層位をC—C'間(C1～C6層)とD—D'間(D1～D7層)でみる(図版7)。

基本的には、近世後半期以降の黒色の耕土層(A1, B1・B2, C1・C2, D1・D2)と、平安中期以前の氾濫による堆積と考えうる砂礫層(A7～A9, B7, D6・D7)とのあいだに、平安後期から室町中期ごろまでの遺物包含層を認める。東半では、これが比較的良好に遺存しており、遺物が最も多く出土し、また遺構も多数検出できた。

A—A'間でみると、近世耕土の下には、まず、ごく薄い淡灰色のA2層が存在する。遺物の出土量が少なく、年代を定めにくい、同様の埋土を伴う建物遺構SB01を検出しており、近世には降らないと考える。

A3・A5層がその調査区における最も標準的な遺物包含層で、この2層は、色調、土質とも類似するが、黄褐色砂A4層を部分的に介している。A3層は、おもに、中世京都Ⅱ期<sup>(a)</sup>ごろの土師器を出土し、A5層は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期ごろにかけての土師器が出土した。A6層は、このあたりに主要な遺構が形成される直前の堆積で、遺物は少ない。平安後期に、このあたりが開発される際の整地のために盛られた土層である可能性が強い。溝SD09がその直後の遺構であることが観察できる。

A7層以下は、この辺りがまだ高野川の氾濫にしばしば被われたころの堆積と考えられる。東寄りほど砂層の堆積が厚く、西に向かってしだいに粗い砂礫となる。

他の3区間の層位を、A—A'間との対応の上で観察しておく。B3層はA—A'間にない砂礫層で近世陶磁器を多数出土する。この堆積は南北に带状に広がり、第2次調査区内



にも検出できる(図版8-E5層)。B5層とD3層はともにA2層から連続する層位で近世までの堆積とみなしうる。B4層は、それらとは異質で、礫混りの粘質土であるが、層位のうえからやはりA2層に対応するのであろう。

さらに、D4層はA3層に、B6・C4・D5層はA5層に対応する。溝SD18の埋土ともなっているC5層は、A6層と併行するか、もしくはその直後ごろの堆積とみなすことができ、そのことは、出土遺物のうえからも、本遺跡の中でも古い遺構群に属するといふ知見と符合する。

C4・C5層の直下には、A7層よりさらに粘質に富むC6層があって、このあたりの遺構面を形成しているが、B-B'間ではこれらのような粒度の小さい土層が観察されない。つまり、本遺跡の最下遺構群は、北東から南西にかけてシルト質から礫へと漸移的に堆積の変化する水成層の上面に形成されたと考えることができる。

## (2) 第2次調査区の層位(図版1・8)

東西方向をE-E'間(E1~E16層)で、南北方向をF-F'間(F1~F10層)で土層の堆積をみる。E13層およびF8層の砂礫上面が、この調査区の最下遺構面にあたる。さらに調査区西南部ではそこに営まれた多数の井戸や小河川SX07が、後の氾濫による砂礫(E10・F7層)に埋れる。これらの砂礫層と、近世以降の耕土の下面との間隔は、あまりないが、そのあいだの堆積は変化に富んでいる。遺物の出土量は極めて少なく、そのため各層位の年代の判定は難しい。

一応、第1次調査区の層位と比較しながら、各層位の年代観を整理してみる。近世耕土層が2層にわたるのは第1次調査区と同様であるが、F3層のような、2枚の耕土の中間に当る層位は第1次調査区ではみられなかった。この土層では大ぶりの礫多数と粘質土が固くしまっており、氾濫層とも考えられず、西南側が一段下がることからみても、道路として盛られた可能性が高い。E5層は、先のB3層に連なると考えている砂礫層で、近世後半の流路であった痕跡と思われる。

次いで、黄褐色土(E6・F5層)、茶褐色土(E7・F6層)も第1次調査区には現われず、中世京都Ⅱ期ごろの土師器が少量含まれるが、若干年代はそれより降る可能性がある。E8層の砂礫の堆積は、E5層をもたらしした流路に先行する堆積であろうか。またはSD23に関連した堆積物かもしれない。E9層は、第1次調査区ではA3層など広くみられた層位に類似し、年代も対応するとみてよい。E11層は、調査区の西南部のごく一部に限られる土層であるが、これが第1次調査区で多量の遺物を出土したA5層に相当する。

E12層はさらに限られた層位であるが、平安京Ⅳ期の良好な資料を出土している。

E11・E12層を削って細砂層の堆積をみせるのが、小さな流路S X07である。これは、そのすぐ西側をかつてもつと大きな流れS X06のあった痕跡である。このS X06の内の砂礫層は、南北方向に沿って貼り付けられた青灰色粘土帯によってその東側の砂礫層と隔てられている。S X06内からは、平安京Ⅱ期の遺物が少量出土し、E13層以下の砂礫からは磨滅した弥生土器片や奈良時代の須恵器片がわずかに出土した。F 8層以下の砂礫は、このE13層以下に連なる。なお、S X06の流路は、第1次調査区内にも及んでいるはずであるが、確認できなかった。

## 2 遺 構

2次にわたる調査により、室町時代までの遺構として、建物(SB)、柵(SA)、溝(SD)、井戸(SE)、土坑(SK)、石組および河川など(SX)を検出した(図版5・9～15)。ここでは、各遺構を種類ごとに記すにとどめ、時期別の組合せやその変遷については、後の第5章にゆずる。これらより新しい明治時代までの遺構も多数検出したが、一部は個別に説明し、そのほかは後に一括して略述する(図版4、図7)。

### (1) 建物、柵

SB01(図版10・12-3) 等間隔に南北方向に並ぶ2列の柱穴群である。中世京都Ⅱ期ごろと考えている赤褐色土(A3層)より上位で検出した。各掘形は直径0.3～0.5mのほぼ円形をなし、埋土はA2層に類似する灰色土で、柱あたりはいずれも確認していない。柱間は等しく、桁行で1.80mをはかり、8間分を確認した。梁行は2.30m。西側の柱列のみ、さらに北へ2間分を検出したが、その北、およびそれらに対応する東側の柱列があったかどうか確認できなかった。南端では、この2列と直角方向に東へ連なる2間分の柱跡を検出したが、さらに東については不明である。ただし、その柱穴間隔は2.30mより小さい。柱穴内より、土師器小片、石鍋片を若干採集したほか、漆接ぎによって補修された青磁の壺蓋が出土した。

なお、この建物の桁行方向は、方位を真北から約3°西へ振る。層位のうえから、この建物の廃絶期間は、室町前期を遡りえないが、京都大学構内では、その方位はこの病院構内のしかも鎌倉前期以前の遺構にのみ特徴的に示されることは注意すべきである。すなわち、このSB01にあたる建物の創建自体がかなり遡るか、少なくともより古い時期の遺構が、室町時代にはまだ存在していて、SB01の方位を制約したかが考えられるからである。ただSB01には建て替えられた痕跡は認められず、後者である可能性が強い。

SA01(図版10・12-2) 前述のSB01の東側の柱列にほぼ沿って柱穴が1列に並ぶ柵である。平均1.98mの柱間7間分を検出したが、さらに南北に続く可能性がある。A5層の堆積の後に設けられ、掘形の1つが後述する溝SD13を切る。柵として、東西を区画する意味があったとすれば、SB01の前身という見方が有力であるが、方位は逆にわずかに東に振る。

SA02(図版9) 3度の建て替えを認めうる柱穴列である。一部に小ぶりの石の礎板をとどめており、南側に0.1mほど落ちる段があって、後代の削平を考慮すれば、対応する柱列があったかもしれない。柱間は2.4~2.5mで、東西にさらに延長している可能性が強い。わずかに西に振る方位を有し、南側の溝SD18にほぼ平行する。

## (2) 溝

SD01(図版9) 幅0.5m、深さ0.2mの小規模な溝で、こぶし大の礫が埋土に多数混じる。遺物は土師器が少量出土しており、中世京都Ⅰ期中段階ごろの溝とみられる。

SD02(図版9) 幅0.9m、深さ0.3mで、南へは延長するが北のAF14区には延長しないようである。小礫の多い暗灰色の埋土には、ほとんど出土遺物がなく、年代は決定しえないが、後述のSD03に併行するか、むしろ先行していた可能性があり、短時日のうちに埋ったのであろう。

SD03(図版9) 幅1.1m、深さ0.35m。X=840以南では攪乱のため確認できなかったが、第2次調査区で検出した溝SD23に連なると考えうる溝である。室町時代に再掘された形跡があるが、出土遺物の多くは平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期にかけての資料であり、特に軒丸瓦2点を含む瓦類が比較的まとまって出土した。そのほか、土師器、陶磁器類からみて、中世京都Ⅱ期には埋ったようである。方位を真北から約2°50'西に振っており、SD23も同様で、両溝の総延長は56mを越えるほどになることから、路面自体を検出していないものの、道路に伴なう側溝とみなしている。

SD04(図版10・13-4) 幅1.2m、深さ0.3m。真東西方向に約10m検出し、それ以上西へも東へも延長せず、両端とも南へ直角に屈曲する。「コ」の字型または矩形にめぐる溝の一辺と考えうる。また東端では、後述の溝SD08の延長部に接続している。A6層上面で検出した遺構群の中では最も新しい時期の遺構で、中世京都Ⅱ期ごろにあたる。

SD05(図版10・13-1) 石組SX02付近を西端とし、ここから東へ約12m続いて北へ直角に屈曲する。屈曲部から北を溝SD08としているが、底面近くの埋土の状況からみて、両溝は同時に掘削されたとみてよい。D-D'間の層位にこの溝の断面が観察される

(図版7)。出土する土師器は中世京都Ⅱ期古～中段階ごろにあたり、前述のSD04よりはやや早く埋った溝である。方位は、北辺が真東西であるが、溝幅が東ほど狭くなっており、溝全体としてわずかに真北から西に振る。

SD06(図版10・13-1・16-2) 溝状の遺構であるが、東は溝SD08には至らずに立ち上がり、西端は南北畔の中で終わっているようで、D-D'断面には現われない。溝というより、帯状の土坑というべきかもしれない。南肩の数カ所の部分で、南に突き出しており、これを杭状の施設の痕跡ともみなしうる。埋土は単調で、短期間のうちに埋ってしまった様相を呈しており、中世京都Ⅰ期新段階の良好な一括資料が出土している。

SD07(図版10) 幅0.8m、深さ0.3mで、東端で溝SD08に接続する。西端は南北畔のすぐ西側で立ち上がる。埋土中に遺物はほとんどないため、年代は定め難いが、SD08が存続していた最末期ごろの短期間の溝と考えている。

SD08(図版10) 幅0.5m前後と狭いが、すどく掘り込まれた溝である。SD05とひと続きの溝で、その屈曲部からは、底面が一段高くなって、さらに南にのび、SD04の東端と連絡する。またSD07も、その東端でこれに接続している。中世京都Ⅱ期古段階の遺物を出土するが、埋土の堆積状況からみて、その前後に幅をもつ存続年代を考えたい。

SD09(図版10) 幅1.9m、深さ0.45mをはかる溝である。底面直上に粘土、その上にA5層類似の埋土が堆積し、さらに黄褐色砂によって完全に埋まる。調査区南壁から北へ約3mにわたり、埋土上面にこぶし大の礫が、ぎっしり敷きつめられていた。埋土の状況からも、出土遺物のうえからも、この溝は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期ごろまで存続していたことがうかがえる。この溝の北端はゆるく立ち上がり、後述の溝SD11の末端と不連続ながらもほぼ接しており、SD11からの溢水を受けていたようである。SD09の方が先行していたが、埋没時期は両溝同じころとみなしうる。なお、この溝の方位は、真北から3°前後西に振っており、前述の溝SD03と平行している。

SD10(図版10) 溝SD09の東側に接するように平行する小溝。平安京Ⅲ期新段階から平安京Ⅳ期中段階の土師器を若干出土しており、SD09に先行するか、少なくともそれよりも早くに埋れてしまったようである。

SD11(図版10・12-1) 先の年報[京大調査会77]において、池SG11として報告した遺構である。東西幅は5m前後で、両肩とも少々入り組んでおり、東半分の底が柵状にやや高くなっている所には、ひとかかえほどもある数個の石が組まれていた形跡がある。苑池の跡である可能性があるものの、未だに確証は得ていない。埋土は、底面に貼りつく

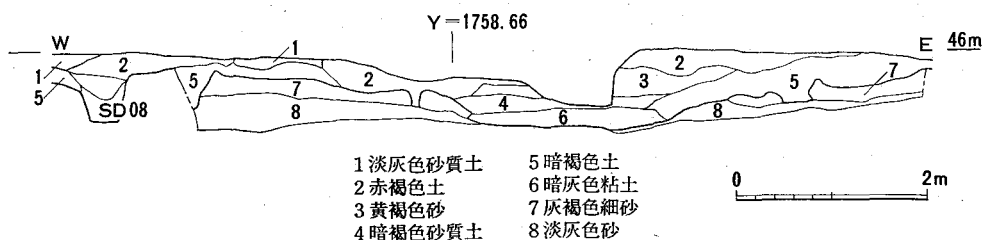


図3 溝SD11層位図

厚さ20cm前後の粘土層から、最上層のほとんど無遺物の黄褐色砂まで、前記SD09と類似した堆積状況を示しており(図3)、かなり長期にわたって水をたたえていたことがうかがえる。平安京Ⅳ期新段階に掘られ、中世京都Ⅰ期中段階まで存続したと考えている。溝SD08との関係とは別に、後述の溝SD18とどのように関係するかという視点をも含めて、この北方未発掘部分の調査の機会が待たれるところである。

SD12(図版10) 幅0.7m、深さ0.2mで、前記の溝SD05をまっすぐ東に延長した方向に掘られている。しかしこの溝は、西端で前記SA01と交わるあたりで確実に消滅し、SD05の東端とは10mほど離れる。出土遺物のうえから、このSD12は中世京都Ⅰ期中段階ごろには埋っていたようで、その時期はSD05より古い、同一直線上にあることは、これらをまったく無関係とはみなし難い。また、溝より南で柱穴状の小坑が多いことも両者共通する。おそらく、SD05はSD12の方位をふまえて掘削され、それらはひとつの街区境界線に沿うものではなかったろうか。2つの溝が共有できる直線を図上に描くと、これが正方位から西へ $2^{\circ}30'$ ないし $2^{\circ}40'$ という値を得ることも、前述した溝SD03の方位の振りとはほぼ一致するという点で興味深い。

SD13(図版10・13-2) 東部では溝肩が消えてしまうほど、残りの浅い溝である。また西方ほど幅は狭くかつ不規則に屈曲し、そのまま溝SD11に落ちこんでゆく。こぶし大の礫多数とともに、平安京Ⅳ期新段階にあたる土師器皿が多数投棄されていた。

SD14・SD15・SD16・SD17(図版10) SD14を除く3条は、いずれも方位を若干東に振り、ほぼ2m間隔で互いに平行する小溝である。SD14のみほぼ正方位でSD13に接続する。4条とも長く続くとは考えられず、もちろん水をたたえていた形跡もない。何かの抜き跡のようにも思えるが、出土遺物もほとんどなく、年代、性格とも不明である。ただ方位の点からのみ、SA01に併行する可能性があることに気づくだけである。

SD18(図版9) 幅は約2.5mと広いが、深さは0.25mという浅い溝である。北側に

0.1m 程度の段差が見られることから、このあたりがかなり削平されたことが知られ、元来相当に立派な溝であったと想像される。方位を西に振り出土遺物が平安京Ⅳ期中段階にあたることから、この遺跡の最も古い時期を再現するうえで、注目すべき遺構である。

SD19・SD20・SD21(図版11) いずれも小規模で、非直線的な小溝である。E-E'間の層位(図版8)や、互いの切り合い関係から、SD20が最も古く、次いでSD21、SD19の順に新しくなる。このうち、SD19は、井戸SE12が埋って後の溝であり、かつこの井戸は後述するように、中世京都Ⅰ期古段階ごろに埋ったとみることができる。SD19の北西端付近には、SE12より新しい井戸SE11やSE15が存在し、この溝は井戸に付属する排水施設である可能性が強い。また、SD20も井戸群を囲むように折れ曲る溝で、その南西端付近には、平安京Ⅳ期中～新段階の井戸SE16や中世京都Ⅰ期古～中段階の井戸SE16がある。SD21も形態的な特徴からみて、SD19やSD21と同様の機能を有する溝と思われる。

SD22(図版11) ほとんど掘り込まれておらず、幅約2mの両側に沿って大小の石列が配されているだけで、溝と呼ぶのは妥当ではないかもしれない。薄い細砂の堆積があり、中から土師器の小片等を若干出土したのみで年代は判定し難い。ただし、SD23が埋まってから後で、かつSD25に連なる砂礫層の堆積よりも以前の遺構である。

SD23(図版11) 第1次調査で発掘された溝SD03の延長上に、第2次調査で検出した溝である。SD03とはその方位のうえからも、中世京都Ⅲ期新段階ごろに再び掘りなおされた形跡をもった点までも同様である。井戸SE26が埋って後に掘削されたことは確実に、井戸が平安京Ⅳ期中段階の遺構とみなしうることから、溝の年代の上限を定めることが可能である。また、この溝の上層の粘土中からは、下層とかけはなれた時期の遺物が若干出土しており、その時期が後述のSD24とほとんど差のないことが注意される。ただし南半では、上層粘土の堆積はない。

SD24(図版11・13-3) 幅1.1m、深さ0.6mで、極めて整った逆台形状の断面を有し、他の溝と比べても、極めて直線的な溝である。形状が崩れていないのは、それだけ短命であったのかもしれない。埋土のほとんどは黄褐色の粘土で、その中に完形に近い羽釜類が数点埋っていた。正確に真南北方向に掘られており、X=879.9付近で急に立ち上がり、南へは続かない。中世京都Ⅲ期新段階にあたる土師器が出土している。

SD25(図版11) 図のうえでは北端にのみ描かれているが、東西の肩がこのあたりのみ明瞭であるにすぎない。しかし、ここから南へ、SD23を被うように広い幅で帯状に小

礫混りのよくしまった青灰色砂が堆積しており、これもまたSD25の延長と考えている。この砂層を切るかまたは被うように、多数の陶磁器を出土する近世後半期の砂礫層E5層が堆積している。このことと、少量の遺物から、SD25は室町時代ごろのものと考えている。

### (3) 井戸

40基の井戸と野壺を検出した。遺構平面図の中には、両者ともSEの記号で表わしたが、そのうちSE33～SE39は近世以降の野壺である(図版9～11, 図7)。検出した井戸は、石組の有無、内筒の有無などで以下の7種に分類した。素掘りの井戸で内筒のあるA1a類(図版14-1, 図4-SE26), 素掘りの井戸で内筒のないA1b類(図版14-2), 素掘りの井戸で方形木枠の痕跡があるA2類(図版14-3), 円筒形石組の井戸で内筒のあるB1a類(図版14-4, 図5-SE11), 円筒形石組の井戸で内筒のないB1b類(図4-SE12, 図5-SE03, SE32), 上部が拡がるように石を構築する逆円錐台形石組(朝顔形)の井戸で内筒のあるB2a類(図版14-5, 図5-SE19), 逆円錐台形石組の井戸で内筒のないB2b類の計7種である。

SE13, SE23, SE25, SE26はA1a類, SE02, SE04, SE06, SE09, SE

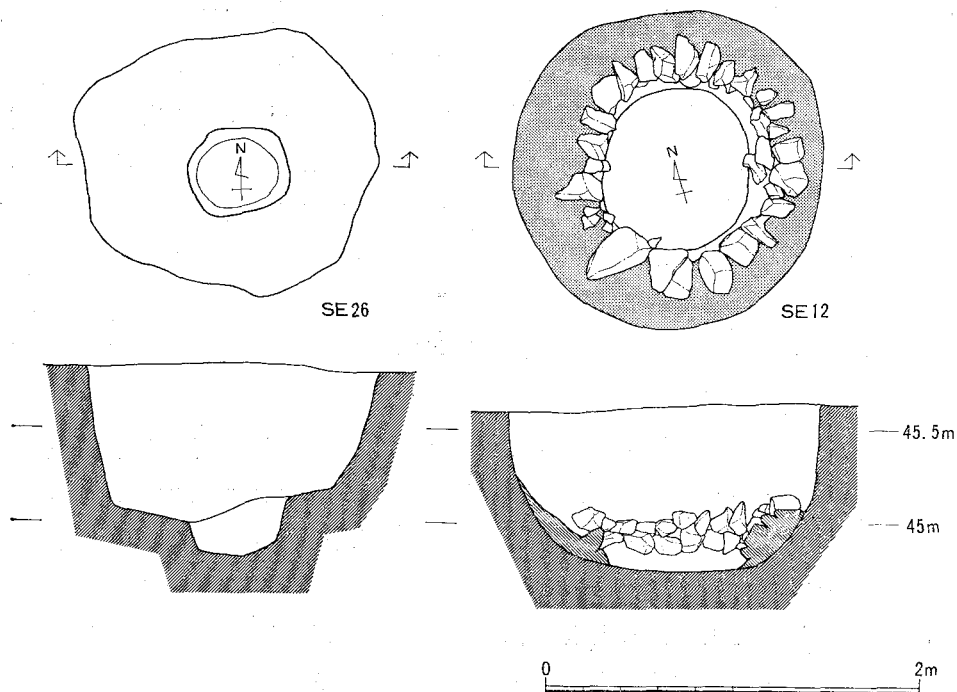


図4 井戸SE26・SE12実測図

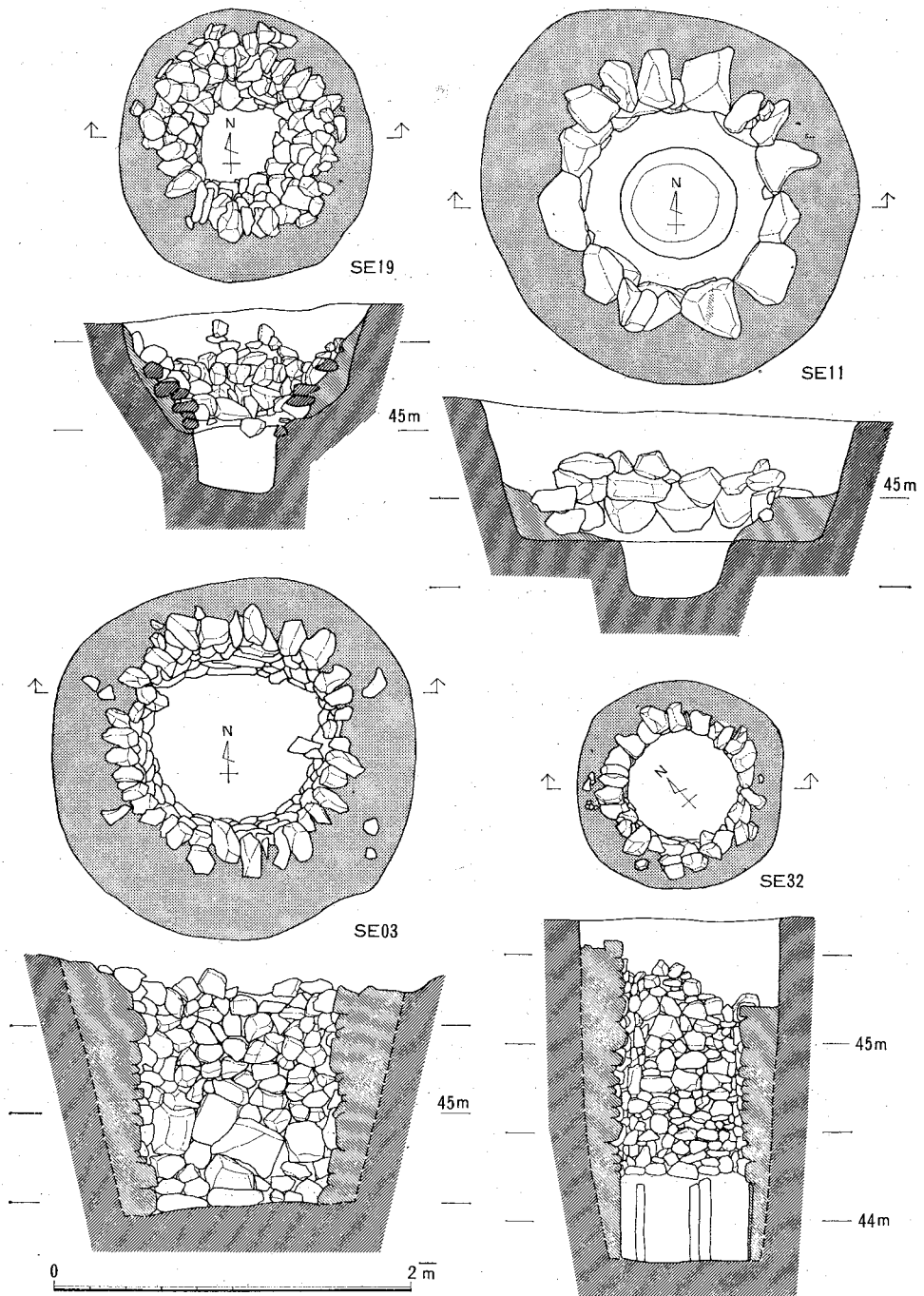


図5 井戸SE19・SE11・SE03・SE32実測図



15, SE16, SE17, SE20, SE22, SE27, SE28, SE29, SE40はA1b類, SE18, SE24, SE31はA2類, SE11はB1a類, SE01, SE03, SE05, SE07, SE10, SE12, SE21, SE30, SE32はB1b類, SE14, SE19はB2a類, SE08はB2b類である(表1)。

井戸を集中して検出した第2次調査区北半については、井戸の年代を表1で示したが、それ以外の井戸で年代が確定できるものは、SE01, SE02, SE05, SE21, SE28, SE32が近世京都Ⅲ期(江戸後期), SE03が中世京都Ⅱ期古段階, SE08が中世京都Ⅰ期中段階, SE09は平安京Ⅳ期新段階である。

前述の7種の形態差が時期差になるかを検討すると、表1でみるように、素掘りで内筒のあるA1a類は平安京Ⅳ期中段階で終り、石組の井戸B類が同じ時期から始まるのがわかる。また、B1b類では、掘形が大きく石組に用いる石も大きい井戸(図4-SE12)は平安～鎌倉時代で、掘形が小さく石組に用いる石も小さい井戸(図5-SE32)は江戸時代である。しかし、以上の2点以外は時期差を示すものではなく、逆に、表1の各時期別の種類でみるように、平安京Ⅳ期中段階～中世京都Ⅰ期新段階では、素掘りの井戸A類と石組の井戸B類を同時期に使用したと考えうる。

そこで各時期、各種類の井戸がどのように分布するかを、図6で示す。図6左には平安京Ⅲ期新段階～同Ⅳ期新段階の井戸、図6右には中世京都Ⅰ期古段階～同Ⅰ期新段階までの井戸を図示した。各井戸は3段階にまたがることはなく、使用期間は60年以内と考えうる。各時期の井戸は1～3基であるが、2つの時期にまたがる井戸のうち1基のみの井戸を前後の時期の井戸と対応させると、各時期の井戸は2基ないし、3基となる。唯一3基の井戸がある平安京Ⅳ期中段階は、素掘り井戸から石組井戸へ変化する時期で特殊と考えると、井戸2基が対になることが原則になっていると考えてよい。すなわちSE25とSE13, SE22とSE40, SE29・SE30とSE26, SE16とSE14, (SE14)とSE18, SE12とSE17, SE24とSE19, SE11とSE15の約240年間8対の井戸群である。そして、石組井戸が出現した平安京Ⅳ期中段階以降では、素掘り井戸と石組井戸とが対になるといえる。さらに、このように対になる井戸では、石組井戸は常に素掘り井戸より西から南ないし南東方向にある。このことは、相対的には石組井戸を白川扇状地の端部方向に造っていることを示している。

井戸の位置では、平安京Ⅳ期古・中段階の井戸が東端に多いが、それ以降の井戸は西半に多く溝SD23を東に越えることがない。SD23は第1次調査区のSD03に続く検出長56

表1 井戸の時期と分類

時 期		井 戸 名	井 戸 の 形 態	掘 形 の 径	井戸底の標高	内筒底の標高
平安京Ⅲ期	新	S E25	素掘円形 A1 a	1.5m	45.50m	45.00m
		S E13	素掘円形 A1 a	1.3m	45.07m	44.35m
平安京Ⅳ期	古	S E22	素掘円形 A1 b	1.35m	44.80m	—
		S E40	素掘円形 A1 b	—	—	—
	中	S E26	素掘円形 A1 a	1.5m	45.10m	44.80m
		S E29	素掘円形 A1 b	1.3m	45.08m	—
		S E30	石組円形 B1 b	2.0m	44.80m	—
	中～新	S E16	素掘円形 A1 b	1.6m	44.85m	—
		S E14	石組朝顔形 B2 a	1.1m	45.21m	?
	新	S E18	素掘方形 A2	1.1×1.4m	45.13m	—
中世京都Ⅰ期	古	S E12	石組円形 B1 b	1.9m	44.75m	—
	古～中	S E17	素掘円形 A1 b	1.6m	44.98m	—
	中	S E19	石組朝顔形 B2 a	1.5m	45.00m	44.70m
		S E24	素掘方形 A2	1.4×1.4m	44.87m	—
	中～新	S E11	石組円形 B1 a	2.0～2.3m	44.80m	44.45m
	新	S E15	素掘円形 A1 b	0.8m	44.75m	—

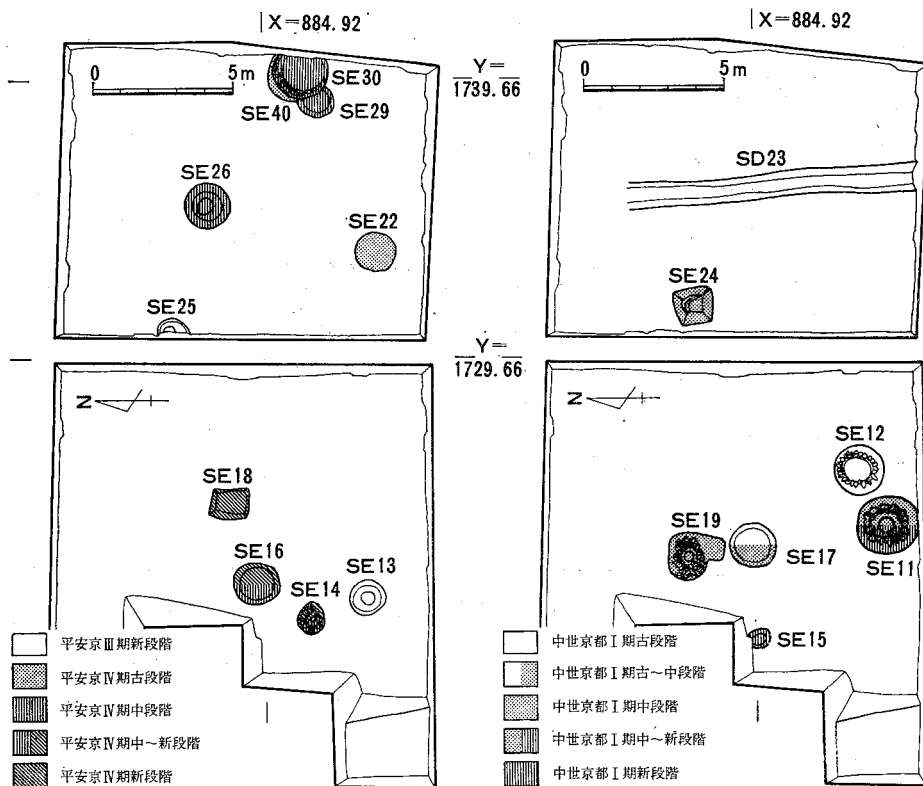


図6 井戸配置図(左:平安時代, 右:鎌倉時代)

mの溝で、道路の側溝の可能性を考えている。平安京Ⅳ期中段階以前の井戸の位置と同中～新段階以降の井戸の位置が明確に変わることから、SD23が道路の側溝か敷地割の役割かをもっており、井戸の位置を規制したと考えることができる。

各井戸底面(内筒部は除く)の標高から推測した地下水位は、平安京Ⅲ期新段階～中世京都Ⅰ期新段階では、上下に変動しているが(表1)、近世の井戸はこれらの時期より約1.5mほど低い。いつ地下水位が下がるかが問題である。

#### (4) 土坑

土坑ということで一括したうちには、その形状や遺物の出土状況などの点においてある程度の類別が可能である。SK01, SK08, SK10はあまり深くはないが、多数の土師器が不定形な範囲に拡がりをもって出土する、土器溜である。SK01はB6層より下で検出しており、その土師器は平安京Ⅳ期にあたる(図版9)。SK08, SK10は、A5相当層より上から掘り込まれた土器溜で、中世京都Ⅱ期中～新段階のものである(図版10)。

SK02, SK03, SK05, SK06, SK07は長円形ないしはそれに近いしっかりした形状と深さを有するが、遺物の出土は少ない(図版9・10)。これらのうち、SK02・SK03からは中世京都Ⅰ期中段階・同Ⅱ期古段階の土師器が、SK05からはそれらよりやや降る時期の土師器に加えて中国製陶磁器数片が出土している。SK06・SK07はともにA3層上面からの掘り込みで、室町中期を遡ることはないが、より下位のSD11の埋土中と同様の土師器が少量出土した。第2次調査区のSK13も、これらに類似する土坑であるが、平面は矩形を呈し、上面にびっしりとこぶし大の礫が詰められていた(図版11)。年代の指標となるような遺物はないが、近くに掘られた井戸群よりはやや上面で検出している。

SK04とSK09は、口径に比して深く掘り込まれていて、柱の抜き跡の可能性のある土坑である(図版10)。かなりまとまって土師器が出土しており、前者が中世京都Ⅱ期中段階、後者が平安京Ⅳ期古段階とみられる。

ほかにSK12は、径1.0m強で、ほぼ鉛直に約0.5m掘り込まれた土坑で、平安京Ⅳ期古段階の土師器皿が完形で多数出土した(図版11)。SK11は、東西径1.85mをはかり、ほぼ鉛直に約1.0m掘り込まれる。内部には底面に至るまで、こぶし大の河原石が比較的粗く詰まり、少量の遺物は、これら礫の投棄が近世のものであることを示している(図7)。

#### (5) その他

井戸以外で石を組んだ遺構が若干あるほか、埋積河道を検出している。

SX01(図版9・15-2) 造り出しのある花崗岩を西端にして、東端には一群の中で

最大の自然石をおき、この間約2.0mを東へわずかに上り勾配に、自然石を敷き並べた遺構である。南辺と北辺にはこれらに沿って別に、やや小ぶりの河原石を縁石として配する。東端手前の石敷上には、平瓦2枚が意図的に置かれた形跡がある。東西の軸方向はほぼ正方位を示す。瓦以外に共伴遺物はないが、後述するSX03と同様、図7にみられるような近世後半期以降の耕作遺構よりは古く、かつB5層の堆積よりは新しい時期におくべき遺構である。これが元来建物を伴っていたものかどうか不明であるが、これだけで単独に機能していたのではないと考える方が無理のないところで、その場合、このどちらかの端に、小祠のような建物を想定してみたい。

SX02(図版9・15-1) サブトレンチを発掘中に検出した石組で、東端部には、図中よりもさらに石が積まれていた。元来3～4段に積まれた石組で、東端が閉じていた形跡はうすい。溝SD05の西延長上にあたるが、両者の関係は確認できなかった。ただ、この石組に伴なうと考えうる灰釉系陶器すり鉢からみて、その年代は、室町前期とみられ、SD05と年代的に重なり合う時期があったかどうか微妙なところである。

SX03(図版10) 幅、深さともに0.3m前後、南北約7mにわたる溝状の掘形にこぶし大の河原石が詰められた石列遺構である。A2層の年代にあたる排水用の暗渠とみなしているが、関係する施設は不明である。石列の方位は真南北からわずかに東に振る程度である。層位のうえからも、方位のうえからも、石敷SX01と併行する年代を与えられよう。

SX04(図版10) SD09の東肩に沿って、平らな面を上にして置かれた石群である。整然と敷かれているわけでもなく、性格はよくわからない。

SX05(図版10) 幅0.6m、南北2.5mにわたる石敷で、このうち南半分は、各石の平坦面を上にして丁寧に並べている。これに貼り付いて出土した土師器小皿1点は中世京都I期ごろのものである。

SX06(図版11・15-3) 第2次調査区西部で検出した埋積河道である。この河道の東岸は45°前後の傾斜で東へ上がる。この斜面に厚さ5～10cm程度の青灰色粘土を南北約20m以上にわたって貼り付けている。この粘土帯は第1次調査区へも延びていた可能性が強いが発見していない。粘土帯の上端と下端との比高は、場所によって異なるが、垂直距離にして1m前後で、両端ともに、部分的に水平な面をとどめており、粘土の貼り付く斜面の上下限を示す。この粘土帯の東側では、砂礫が水平に堆積し、そのうちE13～15層中より、奈良時代の須恵器片や、弥生土器の細片が出土する。それに対し、粘土帯の西側では、東側と不連続の砂礫が、やや東下りの傾斜をもって堆積しており、粘土帯の西裾付近から

は、平安京Ⅱ期の土師器が出土した。両側の砂礫層とも、その礫種組成は高野川系の流路ないし氾濫を物語<sup>(2)</sup>る。これらのことから、その粘土帯は、平安中期に東側の砂礫が形成する斜面を保護するために人為的に施した護岸で、そのころ、高野川の河道がこの西側にまで及んでいたと考えられるのである。粘土帯の方位は、真北から西へ15°前後偏っており、流路の方向を示すものとすれば、平安後期以降に、一時期若干西へ振る遺構群が多くなる一因として考慮されるべきものであろう。

S X07(図版8) 痕跡的な河川による砂礫の堆積と考えている。E11・E12層を切る層位をなしており、中世京都Ⅰ期ごろまで、その流路を認めるべきものである。

#### (6) 近世以降の道路と耕作遺構

表土と耕土を排除した段階で調査区全域から検出した遺構は、主として、江戸時代から明治にかけての、耕作に伴うものであった(図7)。溝S D26, 井戸S E01・S E02・S E05・S E21・S E32, 野壺S E33~39, 柵列のほか、2列ひと組になってひとつの遺構とみなしうるラチス状遺構群がある(図版4-1)。

柵列は調査区のほぼ全域にわたって存在するが、大きく東と西の2群に分かれる。その間には、南北带状に柵列が存在しない部分があり、これが耕作地を東西に分ける境界になっていたことは明らかである。柵列はすべて東西方向に、直径10~20cmの丸太を、2.5m前後の間隔で矩形の掘形に立て並べたもので、中には3度くらいの立て替えを認めうる(図版4-2)。柵の方向はみな大差なく、北から東へ約5°振る。これらの埋土は耕土であり畑作にともなう柵と考えている。

井戸と野壺はしばしばひと組になって検出できる。S E01とS E37, S E21とS E39, S E32とS E36(図版14-6)という組合せがその例で、肥料を水と混ぜあわせて用いたことを物語る。野壺とした遺構は、みな漆喰造りの円形で、直径1.4~2.0m, 底面はかすかにすり鉢状をなす。本部構内遺跡A W28・A X28区の調査では、漆喰を用いず、素掘りかまたは木枠を用いた野壺が道路に沿って多数発見されており、S E02は、漆喰を用いずあまり深くないため、そのような野壺であった可能性がある[京大埋文研80]。石組の井戸のうち、S E01では、掘形に鶏卵大の河原石を裏込めとして詰め、石組の下側には10枚の井戸瓦を用いて筒部を造るという特徴がある。S E32は石組の下側に縦長の材を縦に埋め筒部を造るという特徴がある(図5)。

ラチス状遺構群は、柵列や野壺S E37を切って設けられており、何らかの土地利用の変化を予想させるが、その機能は不明である。この遺構も、柵列と同様に東西2群に分ける

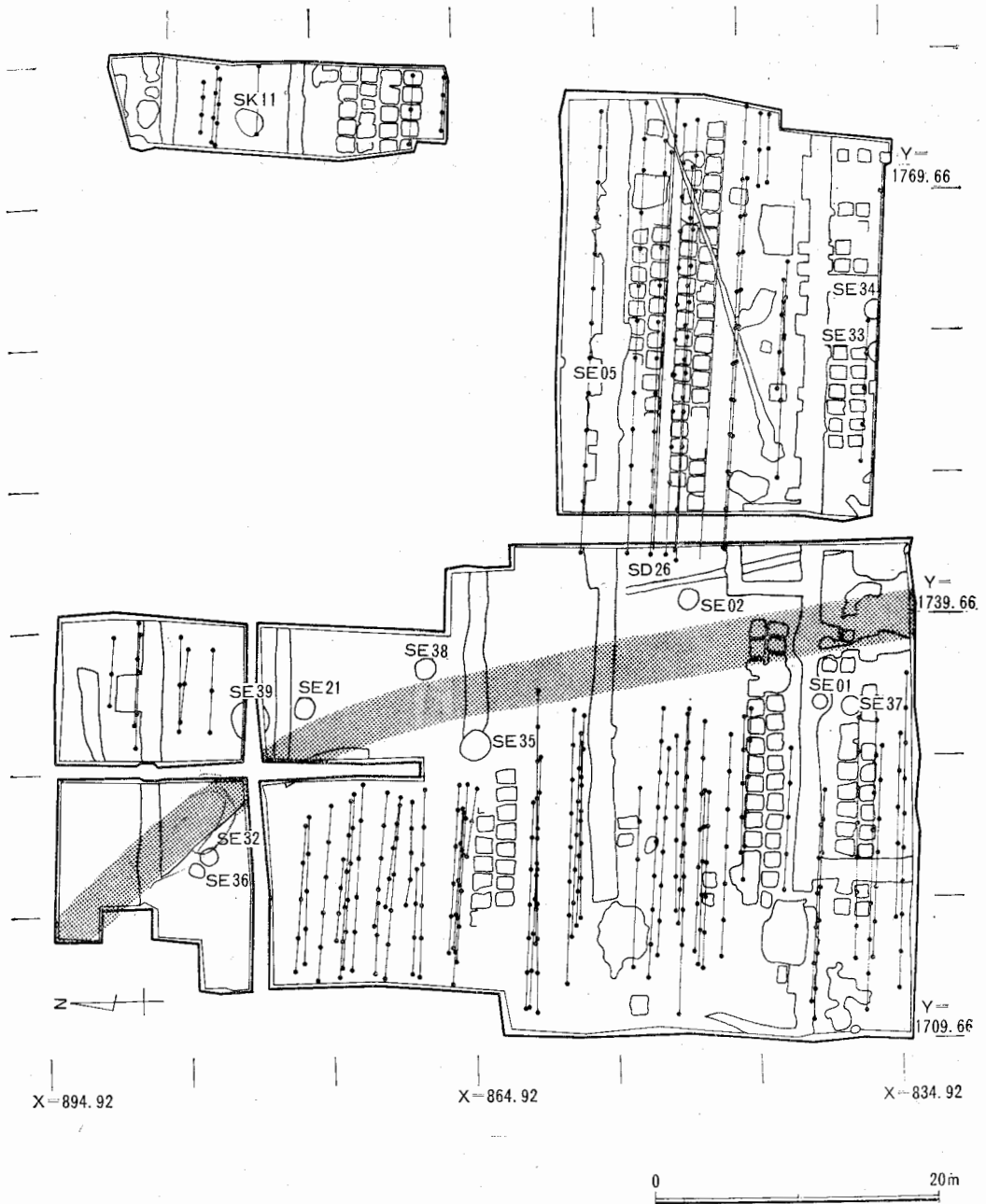


図7 近世遺構配置図

ことができ、柵列群の境界をまたぐものはない。第2次調査区の北西部では、SE32とSE36の北東側に高く0.4mほどの段があって、礫混黄灰色土(図版8-E3層)が北西から南東に向かって固く盛られている。この土層上面は路面であった可能性が強く、その路傍に井戸と野壺が並んでいたものと思われる。その南に連なる、柵列のない帯状の部分をつての道路跡とみなすことができ(図7梨地の部分)、AE14区からAF14区にかけての近世以降の井戸・野壺群がその路傍に沿っていたと推定できる。そうすれば溝SD26はその側溝となっていたのであろう。史料のうえでの考証は、後に触れる(第5章第1節)。

〔注〕

- (1) 土師器の時期区分については第4章と表2(P27)を参照されたい。
- (2) 西村進理学部助教授、石田志朗理学部助教授の御教示による。
- (3) はしご状に連なる浅い方形土坑群をラチス状遺構と呼ぶことにする。

### 第3章 遺物

#### 1 土器と陶磁器の種類と器種

土器と陶磁器とについて個別の説明を加える前に、説明に用いる種類と器種の用語について示すことにする。なお、土器の種類については『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』の用語に従っているが、同年報で須恵質陶器(土器)としたものは須恵器に含めた。

##### 種類

土師器：古墳時代以後の酸化焰焼成による軟質の土器。

黒色土器：表面に炭素を吸着する酸化焰焼成の土器。内面に炭素を吸着するものをa類、全面に吸着するものをb類とする。

瓦器：胎土を水簾し、表面に炭素を吸着する酸化焰焼成の土器。硬質の碗と胎土に砂粒を混える軟質大型の器種を含める。

須恵器：還元焰焼成による硬質の土器。

緑釉陶器：緑色に発色する鉛釉を施す硬・軟質の陶器。

灰釉陶器：灰釉を施す硬質の陶器。

灰釉系陶器：灰釉陶器の系譜をひき、灰釉を施さなくなった陶器。

須恵器系陶器：須恵器の系譜をひき、酸化焰焼成に転じた陶器。

##### 器種

器種の名称は通例に従って、碗、杯、皿、高杯、壺、甕、すり鉢、盤、羽釜、鍋等を用いる。ここでは、この中で区別が曖昧な平安時代以後の土師器碗、杯、皿について示す。

高杯を除く供膳用の土師器については、器形の深いものから碗、杯、皿と呼称し、碗と杯の境を器高指数25、杯と皿の境を同20程度に求めることができる。しかし器種名(形式)は、型式分類の対象となる一連の土器群を示す用語であり、器高指数による分類を厳密に適用すると不都合を生じることが多い。歴史時代の土器研究においても、土器の形式が何であるかということよりも様式から出発した方がよい[小林33]といえる。

古代の都城である平安京は次第に変容して、中世には京都と呼ばれるようになる。この地域から出土する土師器については、細かく分期することが可能であるが、その大きな変化に着目すると平安京Ⅰ～Ⅳ期・中世京都Ⅰ～Ⅳ期の<sup>(1)</sup>8期に大別することができる(表2)。

平安京Ⅰ期の最古・古段階では、器形の深浅に明確な3種の別があり、それぞれに法量の区別も存在する。このうち深い2種の区別は以後、急速に不明瞭となるが、平安京Ⅰ期



中・新段階<sup>(4)</sup>でもその識別は可能である。それに対して平安京Ⅱ期では深淺2種を基本とし、中段階<sup>(5)</sup>にはそれぞれに大小の別がある。この系譜をひく土師器は平安京Ⅲ期以後、中世京都Ⅱ期に至るまで、浅い器形のものが1種で、法量は大・小の2種を基本の組合せとするようになる<sup>(6)</sup>。

この系譜の土師器とは別に、中世京都Ⅰ期中段階ごろに、丸底で深い器形のものが少量現われ、中世京都Ⅱ期にその比率を増す。これも大・小の2種の組合せを基本とするが、色調が灰白色を呈するものが大部分を占めて、赤褐色の浅い器形のものと、容易に区別できる。

中世京都Ⅲ期以降は、この深い器形のものも平底となり、器高指数を減じていく。そして法量は大・小2種であったものが、少なくとも大・中・小の3種となり、また色調の別が器形の別と対応しない例が増す。

以上のうち、平安京Ⅰ期の深淺3種については深いものから碗、杯、皿とし、平安京Ⅱ期の2種については深いものから杯、皿とする。平安京Ⅲ期～中世京都Ⅱ期の浅い器形のものは皿とし、丸底で深い器形のものを碗とする<sup>(7)</sup>。中世京都Ⅲ期以後は小型で丸底の形態を残すもの以外は皿とする。そして平安京Ⅲ期の大型皿の一部は平安京Ⅱ期の小型杯の系譜をひき、中世京都Ⅲ期の皿の主体をなすものは中世京都Ⅱ期の碗の系譜をひくことに注意すれば、混乱が最も少ないであろう(表2)。

## 2 土器と陶磁器

各遺構・包含層から整理箱約230杯分の土器と陶磁器が出土した。本節ではこれを出土遺構と層位とに分け、前節で示した種類と器種の分類に基づいて説明を加える。なお説明で用いる土師器の分類と小期とについては次章で検討を加えるので参照されたい(表5)。

第2次調査区E13層(図8-1) 弥生土器が4点と奈良時代の須恵器小片が出土した。1は壺の肩部破片であり3条の篋描き沈線文を施す。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡褐色。外面に篋磨き、内面に撫でを施し、畿内第Ⅰ様式新段階にあたる。他の3点は小片である。なお弥生前期の集落の中心は、東北約1.3km付近にある。

SX06下層(図8-2～7) 2・3は護岸の粘土から、4～7は川に堆積した砂礫から出土した。2～4は「て」字状口縁の土師器皿である。なお本例を含め以下で土師器について特別の説明を加えない場合は色調が茶褐色ないし淡褐色であり、焼成は軟質である。5は黒色土器a類碗、6・7は須恵器蓋・杯である。6・7は奈良時代の遺物であり、平安京Ⅱ期にあたる土師器2・3が護岸の年代を示すと考える。

表2 土師器時期区分の大略

時代区分	土師器の時期区分	土師器の代表的な杯・皿・碗		
平安時代	前期	平安京Ⅰ期		
	中期	平安京Ⅱ期		
	後期	平安京Ⅲ期		
	後期	平安京Ⅳ期		
鎌倉時代	前期	中世京都Ⅰ期		
	後期	中世京都Ⅱ期		
室町時代	中世京都Ⅲ期			
		後期	中世京都Ⅳ期	

(京文研78, 同志社調査会78, 京大埋文研78・80, 本報告書から作成した) 縮尺1/5

S X06上層(図8-8~14) 護岸が埋積した後に堆積した砂礫から出土した。平安京Ⅳ期にあたる土師器皿が大部分を占め、河道を西北へ移して以後も、この地域がしばしば洪水を受けたことを示す。

S E25(図版17-290~300, 図版22) 290~297は土師器皿。290~292・296はC<sub>2</sub>類(P 64・65の表5参照), 297はC<sub>4</sub>類, 293~295はB<sub>4</sub>類であり、平安京Ⅲ期新段階にあたる。298は土師器受皿であり径12.8cmをはかる。299は土師器甕の口縁部である。300は枚方市楠葉産の瓦器碗であり、内外面に比較的密な暗文を施す。口縁部内面には沈線がない。なお以下で産地について記さない瓦器碗はすべて楠葉産と予想されるものである。本遺構出土の遺物量は多くはないが、平安京Ⅲ期新段階の良好な資料であるため、次章で別に考察を加える。

S E13(図8-15~17) 平安京Ⅲ期新段階にあたる土師器皿である。

S E22(図版17-301~328, 図版22) 301~323は土師器皿。301・302・311~313はC<sub>2</sub>類, 303・304・310はC<sub>4</sub>類, 305~308・314~317はC<sub>3</sub>類, 309・318~322はD<sub>4</sub>類, 323はD<sub>3</sub>類であり、平安京Ⅳ期古段階にあたる。324は受皿であり、径9.6cmをはかる。325は瓦器碗の高台であり、断面は梯形に近い。内面には螺旋状の暗文を施す。326は器種不明の須恵器底部であり、底面に回転糸切痕を残す。327は小ぶりの玉縁口縁をもつ白磁碗。328は底部が厚く低い高台を削り出した白磁碗である。本遺構出土品は平安京Ⅳ期古段階の良好な資料であるため、次章で別に考察を加える。

第2次調査区E12層(図版17-329~345, 図版22・23) 本資料は包含層の出土品であるが、まとまった時期の遺物が出土している。329~338は平安京Ⅳ期古段階の土師器皿。339は三脚がつく小型の土師器羽釜。口縁部が内彎し、口縁部外面に螺旋状の篋描き沈線文を施す。作りが丁寧であり、底部外面に煤が付着することから実用に供したことが判る。この種の形態のものは、本例より時期が降る瓦器に多い。340は須恵器すり鉢。外方に踏んばる高台があり、焼成はやや軟質である。出土量は平底のものに比べてごく少量である。341は灰釉系陶器皿。胎土は精良であり、高台の断面は整った梯形である。畳付けに靱圧痕を残す。342は白磁壺の口縁部。釉調は澄んだ乳白色を呈する。343・344は白磁皿。343は口縁端部が外折し、釉調は乳白色であるのに対して、344は口縁端部が内彎し、黄灰色の釉調を呈する。345は中国南方窯系の褐釉四耳壺。器形は肩が張り、頸部と胴部の境に一条の水平沈線文を、四耳の下に一条の蛇行する沈線文を施す。口縁端部が外折し、断面は整った梯形である。器壁が薄く釉調が良い。

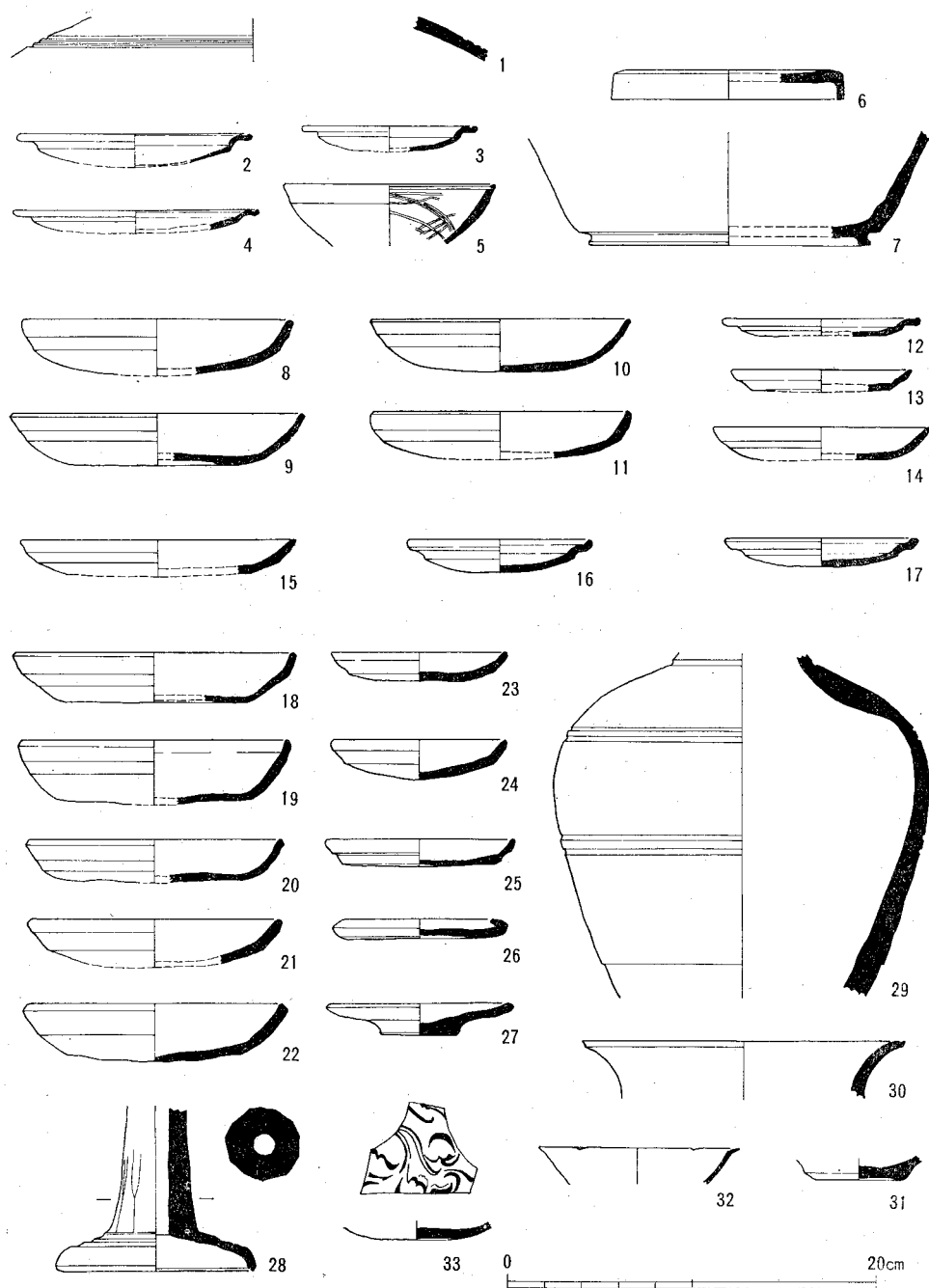


図8 E13層(1弥生土器), SX06下層(2~4土師器, 5黒色土器a類, 6・7須恵器), SX06上層(8~14土師器), SE13(15~17土師器), SD12(18~28土師器, 29緑釉陶器, 30・31灰釉系陶器, 32青白磁, 33白磁)出土の遺物

S E 40(図版17-346~363, 図版23) 346~357は平安京Ⅳ期古段階にあたる土師器皿。358・359は土師器受皿であり、それぞれ径10.6cmと9.8cmをはかる。360は須恵器すり鉢の口縁部片。口縁端部が外面とほぼ直角をなし、端部が外方に張り出す。361は須恵器碗の口縁部片である。362は輪高台の白磁皿。363は輪高台の白磁碗である。363は胎土がやや青色を帯び、釉と露胎の境が淡赤色に発色する。本例は越州窯系青磁の系譜をひく白磁と<sup>(9)</sup>考えうる。

S E 30(図版18-364~405, 図版24) 364~383は土師器皿。364~366がC<sub>3</sub>類, 373がC<sub>4</sub>類, 367・368がC<sub>5</sub>類, 369~372・374~383がD<sub>4</sub>類であり、平安京Ⅳ期中段階にあたる。384・385は土師器受皿であり、それぞれ径9.0cmと8.4cmをはかる。386・387は轆轤成形の土師器皿。387は底部外面に回転糸切痕を残し、386はそれを撫で消している。色調は灰白色であり、焼成が良い。389・390は土師器高杯の軸部。杯部と軸部の境が肥厚して稜をもち、軸下半部に縦方向の篋削りを施す。その結果、389は19面、390は12面の面取りがある。色調は淡褐色であり、焼成が良い。391は土師器壺または甕の底部。色調は茶褐色であり、焼成が良い。392~394は瓦器碗。392・393は内面に密な、外面にやや粗い暗文を施し、口縁部内面に沈線がある。394は整った断面三角形の高台をもち、内面に丁寧な磨き、外面に撫でを施す小碗である。395・396は瓦器盤。395は内外面に、396は内面に磨きを施すが、磨きを施さないものもある。すべて器壁が厚く、体部が弱く内彎して、口縁端部が水平の面をなす。397・398は須恵器すり鉢。397は口縁端部が丸く、播磨東部産の須恵器すり鉢とは異なる特徴をもつ。398は口縁端面が外面とほぼ直角をなす。399は中国製の黄釉鉄絵盤の口縁部。口縁部が外方に長く張り出し、口縁端部上面に目痕を残す。400は南蛮手陶器鉢<sup>(10)</sup>。胎土に大粒の砂粒を多量に含み、色調は明るい褐色を呈する。外面に右下がりの叩きを施し、少量の煤が付着する。401は白磁碗。器壁が薄く、口縁部は素縁で外反する。釉調は黄灰色を帯びる。402~404は白磁皿。402は401と同様、黄灰色を帯びた釉調であるのに対して、403・404は胎土がより精良であり、釉調は乳白色を呈する。402は口縁端部が内彎し平底。403は口縁端部が内彎し、見込みに櫛描き文を施す。404は口縁端部が外折し、高い輪高台がつく。見込みに篋・櫛描きの花文を施し、景德鎮窯の製品と<sup>(11)</sup>考えうる。405は青白磁皿。見込みに篋・櫛描きによる崩れた花文を施す。本遺構出土品は種類も出土量も多く、平安京Ⅳ期中段階の基準資料となるため、次章で別に考察を加える。

S D 12(図8-18~33, 図版23) 18~25は平安京Ⅳ期古段階~中世京都Ⅰ期古段階ごとの土師器皿。26は土師器受皿であり、径9.5cmをはかる。27は底部外面に回転糸切痕を

もつ土師器皿。色調は灰白色であり、焼成が良い。28は土師器高杯。軸下半部に12面の面取りを施し、裾部には轆轤目を残す。色調は灰白色、焼成が良い。裾の内面に煤が付着することから、杯部が破損した後に倒立させて、灯火器として用いたことが判る。29は緑釉二筋壺。胎土は石英・長石等の砂粒を含み、色調は明るい褐色である。釉調は淡緑色を呈し、焼成が良い。口縁部と底部を欠失し、肩部と胴部の境と、胴部の中位に篋描き沈線による二筋文を施す。頸部と肩部の境には凹線を施し、凹線の上端部が弱い凸帯となる。器形は肩が張り、檜崎彰一が12世紀第1四半紀に比定する最古段階の常滑三筋壺に近い特徴をもち、胎土は京都市右京区小塩の製品に類似する〔檜崎78〕。30は灰釉系陶器の壺。常滑の製品であり、口縁端部をつまみ、端面を形成する。31は灰釉系陶器碗。高台をほとんど消失する。32は青白磁輪花碗、33は見込みに片切り彫り花文を施す白磁皿である。以上のように本遺構からは、土師器、陶磁器ともに長期間にわたる遺物が出土している。

S D 10(図9-34~51) 34~48は平安京Ⅲ期新段階~平安京Ⅳ期中段階ごろの土師器皿。49は瓦器小碗。内面に密な篋磨きを、外面に撫でを施し、高台は断面三角形である。50は土師器羽釜。51は土師器鉢である。

S K 12(図9-52~70) 52~69は平安京Ⅳ期古段階にあたる土師器皿。70は胎土に砂粒をやや多く含む土師器羽釜である。

S D 09(図10-71~97, 図版24) 71~85は平安京Ⅳ期古段階~中世京都Ⅰ期中段階ごろの土師器皿。86・87は高杯の軸部。それぞれ12面と13面の面取りを施す。88は玉縁口縁の白磁碗。89・90は白磁碗の底部である。91は青白磁合子の蓋。92は緑釉陶器。軟質で淡緑色の釉がかかる。93は灰釉系陶器碗、94は灰釉陶器小碗である。95は瓦器羽釜の脚部。96は瓦器鍋。97は瓦器蓋である。

S E 16(図10-98~104, 図版24) 100~104は平安京Ⅳ期中~新段階ごろの土師器皿。98・99は瓦器碗。98は器壁が厚く、幅の広い暗文を内面に密に、外面にやや粗に施す和泉産の瓦器碗である。99は断面が整った三角の高台をもち、見込みに螺旋状の暗文を施す。

S E 26(図11-105~115) 105~113は平安京Ⅳ期中段階にあたる土師器皿。114は土師器蓋。胎土に砂粒をやや多く含む、色調は灰白色を呈する。口縁部付近の内面に煤が付着し、灯火器の蓋として用いられた可能性を示す。115は須恵器すり鉢。口縁端面が外面とほぼ直角をなす。

S D 13(図版19-406~433, 図版25) 406~425は土師器皿。413はC<sub>3</sub>類、406~409・414~416はC<sub>3</sub>類、410~412・417~425はD<sub>4</sub>類であり、平安京Ⅳ期新段階にあたる。426・

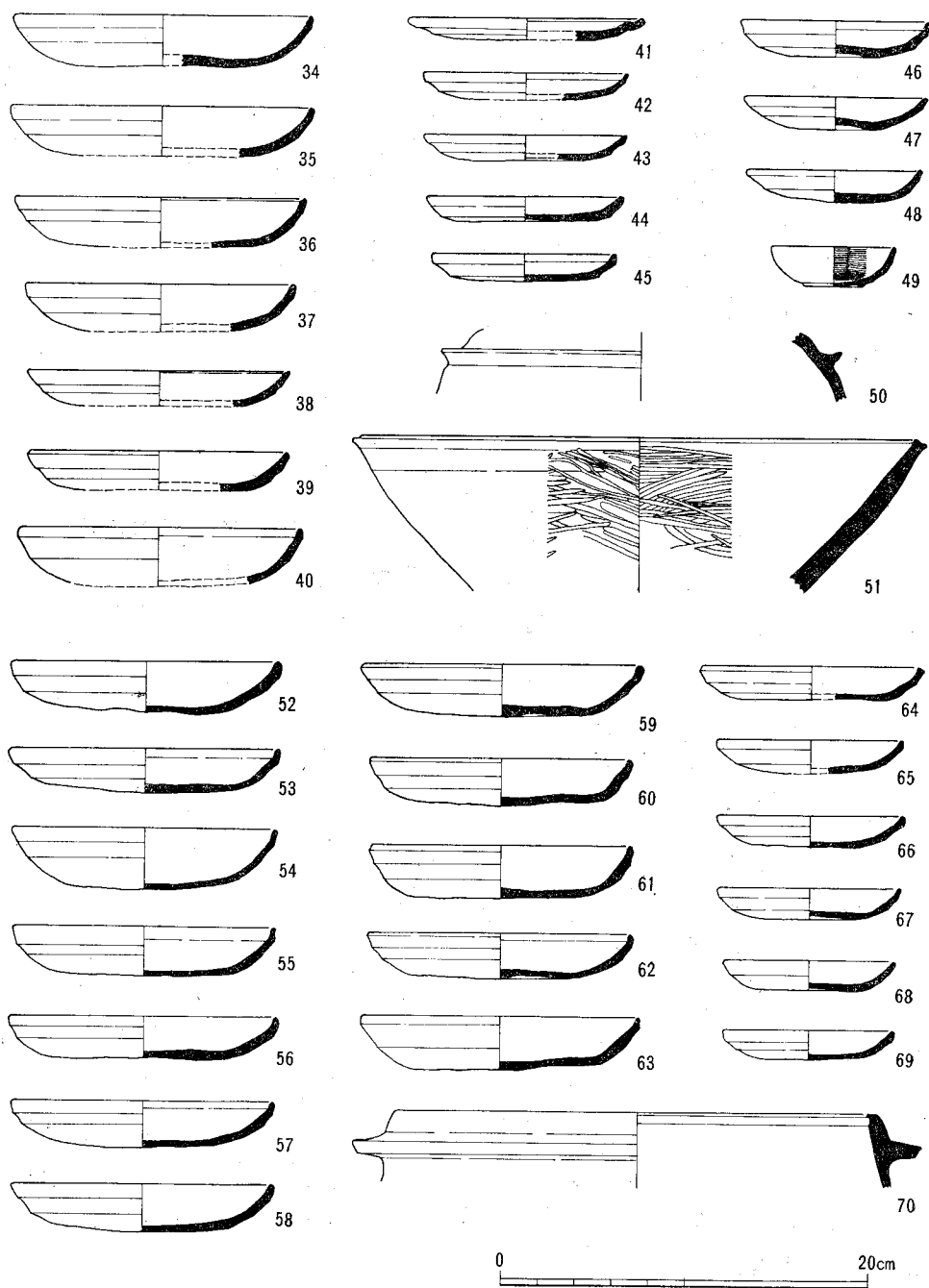


図9 SD10 (34~48・50・51土師器, 49瓦器), SK12 (52~70土師器) 出土の遺物

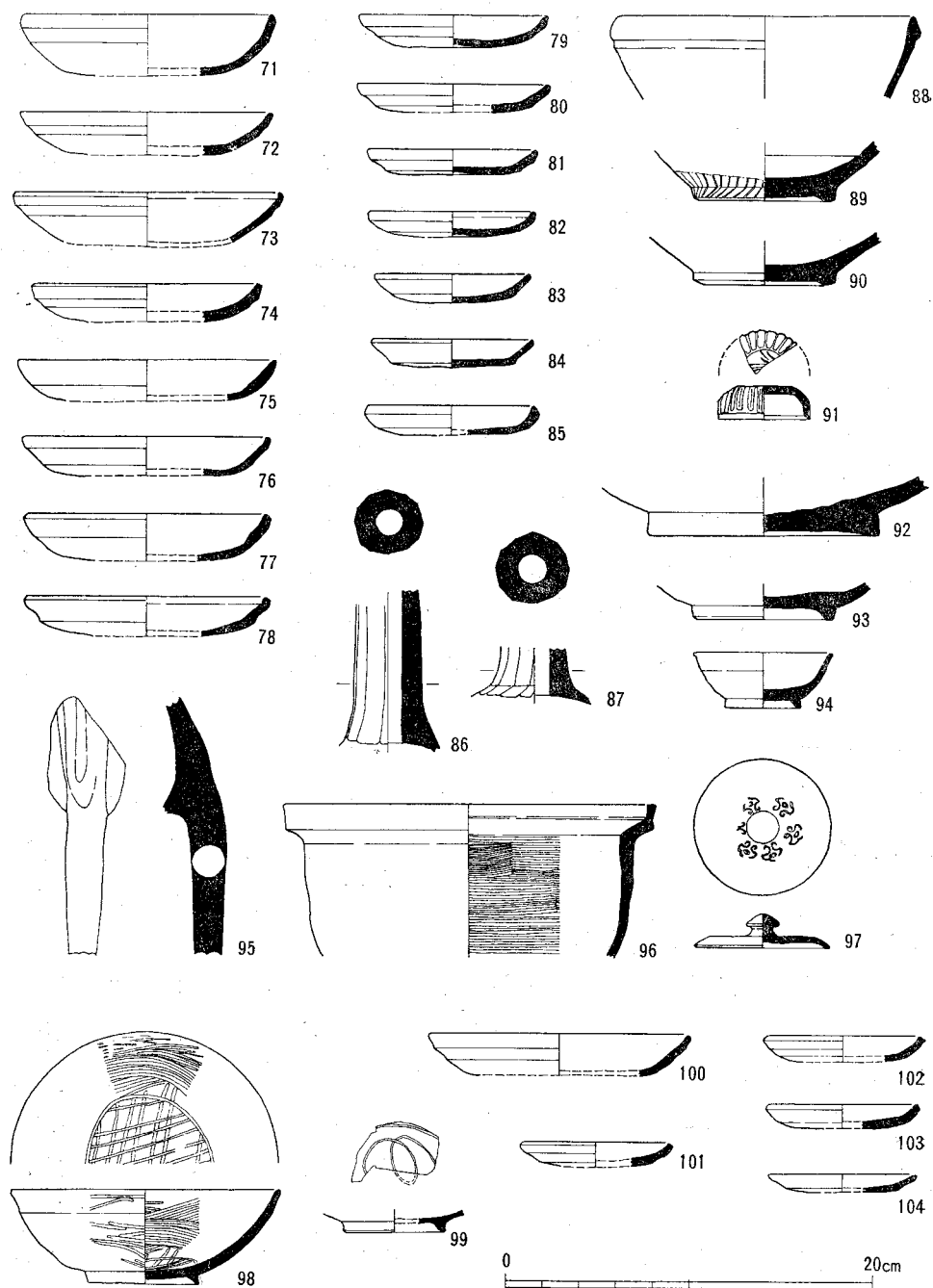


図10 S D09 (71~87土師器, 88~90白磁, 91青白磁, 92緑釉陶器, 93・94灰釉系陶器, 95~97瓦器), S E16 (98・99瓦器, 100~104土師器) 出土の遺物



427は土師器受皿であり、それぞれ径10.2cmと8.6cmをはかる。428は土師器鉢、外面に粘土紐の継ぎ目を残す。429は瓦器碗。器壁が薄く、内面には比較的密な暗文を施すが、外面には口縁部付近にわずかに施すだけである。430は灰釉系陶器碗。431は白磁輪花碗。432・433は白磁碗の高台である。本遺構は溝であるが出土品は平安京Ⅳ期新段階の良好な資料であるため、次章で別に考察を加える。

SE18(図11-116~134, 図版25) 116~127は平安京Ⅳ期新段階ごろの土師器皿。128・129は土師器受皿であり、それぞれ径10.4cmと9.7cmをはかる。130・131は白磁碗。いずれも釉調は灰白色を呈する。132・133は瓦器碗。132は内面にやや粗い磨き、外面に撫でを施す。高台は断面三角形であり、作りが粗雑である。133は口縁部が外反し、口縁端部内面に沈線がある。内面には比較的密な暗文を施すが、外面には口縁部付近に粗に施す。134は須恵器すり鉢。口縁端面の撫でが強く、外面とわずかに鈍角をなす。

SD23下層(図11-135~143, 図版25) 135~140は平安京Ⅳ期新段階ごろの土師器皿を主とし、同古段階のものが少量ある。141~143は灰釉系陶器碗である。141は胎土が精良であり作りが丁寧である。愛知県猿投山西南麓古窯址群の製品と推定できる。

SD11下層(図版19-434~441) 下層の第6層から出土した(図3)。434~441は平安京Ⅳ期新段階ごろの土師器皿である。

SD11中層(図版19-442~466, 図版26) 中層の第5層から出土した。442~454は中世京都Ⅰ期古段階ごろの土師器皿。454は底部外面に墨書の痕跡を残すが、判読することはできない。455は土師器羽釜。456は土師器高杯。軸部に14面の面取りを施し、裾部に轆轤目を残す。色調は灰白色であり、焼成が良い。457は瓦器皿。見込みに鋸歯状の暗文を施す。458は瓦器碗。高台は小さく、断面が三角形であり、見込みに螺旋状の暗文を施す。459は須恵器甕。頸部以下の外面に右下がりの平行叩き目を残し、それより上には削りを施す。内面は撫で。460は灰釉系陶器碗。体部から口縁部にかけて直線的に低く立ち上がり、高台は断面三角形である。461は灰釉系陶器すり鉢。462は白磁壺の高台であり、見込み周縁の釉を蛇の目状に掻き取る。463は玉縁口縁の白磁碗である。464は白磁水注の注口部。465は同安窯系の青磁碗である。内面に篋描き花文と櫛描き電光文、外面に櫛描き垂下文を施す。466は滑石製石鍋。鏝がなく、口縁部と破面に二次的な研磨痕がある。

SD11上層(図版20-467~526, 図版27・28) SD11を埋める土器溜状の第4層から出土した。467~514は土師器。484が灰白色碗であり、他が茶褐色の皿である。467・468がC<sub>3</sub>類、469~471がC<sub>2</sub>類、472~475・477~481・485~503がD<sub>2</sub>類である。476・482・

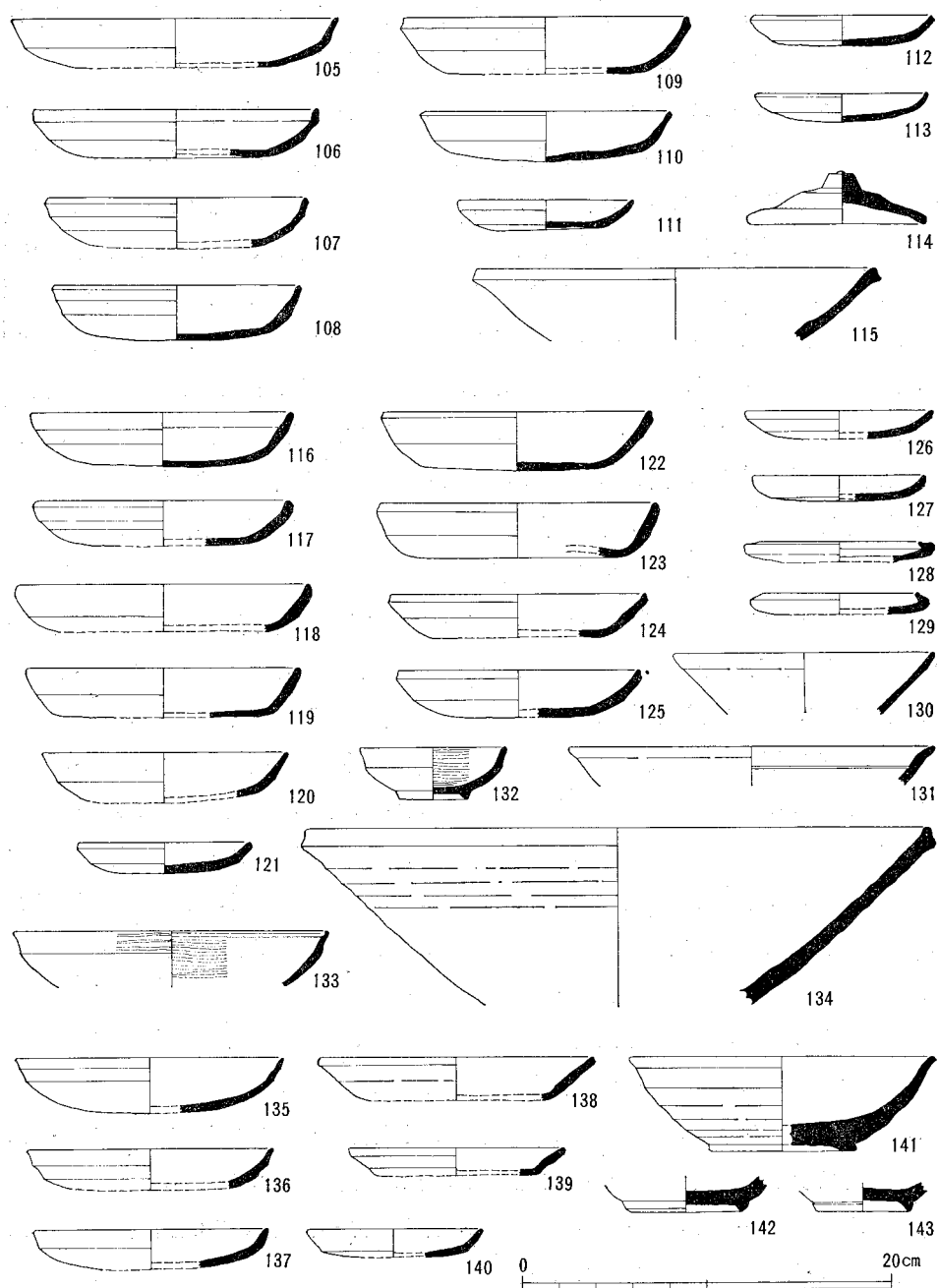


図11 S E 26 (105~114土師器, 115須恵器), S E 18 (116~129土師器, 130・131白磁, 132・133瓦器, 134須恵器), S D 23下層 (135~140土師器, 141~143灰釉系陶器) 出土の遺物

483・504～511はD<sub>3</sub>類であるがD<sub>3</sub>類の小型皿の口縁端部が丸くなったものと考えうる。これらは中世京都Ⅰ期中段階にあたる。なお503は底部外面に墨書がある。「一重」の文字を何度も重ねて書き、他に「陸」の文字が判読でき、手習いのための墨書と考えうる。書体は鎌倉末から南北朝期に多いものであり、上級公卿の手になるものではないという<sup>(49)</sup>。512～514は土師器受皿であり、それぞれ径8.6cm, 8.4cm, 8.0cmをはかる。515・516は瓦器盤。いずれも器壁が厚く、体部が内彎して、口縁端面が水平をなす。515は3足があり、口縁部付近の内外面にわずかに篋磨きを施す。518は口縁部が内彎する瓦器羽釜。517は、この種の瓦器羽釜の脚である。519・520は瓦器碗。内面には粗い暗文を施し、外面には施さない。両者とも器壁が薄く、520の高台は小さく、断面は三角形である。521は灰釉系陶器すり鉢。胎土は精良であり、高い高台がつき、土師器よりやや古い年代が予想される。522は灰釉系陶器碗。胎土が粗く、器壁が厚い。523～525は龍泉窯系青磁碗。内面に崩れた片切り彫り花文を施す。526は同安窯系青磁皿である。本遺構出土品は中世京都Ⅰ期中段階の良好な資料であるため、次章で別に考察を加える。

SD03(図12-144～169, 図版26・27) 144～151は中世京都Ⅰ期古段階～同新段階の土師器皿。152は土師器受皿。径9.2cmをはかる。153は鋳がある滑石製石鍋。154・155は須恵器すり鉢。156は須恵器甕。157・158は灰釉系陶器壺。常滑の製品であり、157は口縁端部をつまんで端面を形成している。158は口縁端部を外上方に引き上げる。159・160は瓦器碗。内面に粗い暗文を施し、外面には暗文を施さず、作りは粗雑である。161・162は瓦器羽釜。161は口縁部が内彎し、162は口縁部が短く直立する。163・164は瓦器盤。163は器壁が厚く、口縁端面が水平であるのに対して、164は器壁が薄く、体部が外反する。口縁端面は丸味をもち、内側に肥厚する。胎土に砂粒を多く含み炭素の吸着が悪い。165～167は白磁碗。168は同安窯系青磁皿。見込みに櫛描き電光文を施す。169は緑釉陶器盤。見込みに刻文がある。胎土は中国製の褐釉陶器に類似し、釉調はやや暗い緑色を呈する。なお内面に型押しで花文を陽刻する青白磁碗小片がある。

SE12(図13-170～175) 170～173は中世京都Ⅰ期古段階ごろの土師器皿。174・175は須恵器すり鉢。口縁端面は外面とほぼ直角をなすが、内面の撫でが強い。

SE17(図13-176～183) 176～180は中世京都Ⅰ期古・中段ごろの土師器皿。181は瓦器碗。182・183は須恵器すり鉢である。

SE19(図13-184～188) 184～186は中世京都Ⅰ期中段階ごろの土師器皿。187は瓦器碗。磨滅のため、暗文はわからない。188は内彎する口縁部をもつ瓦器羽釜。

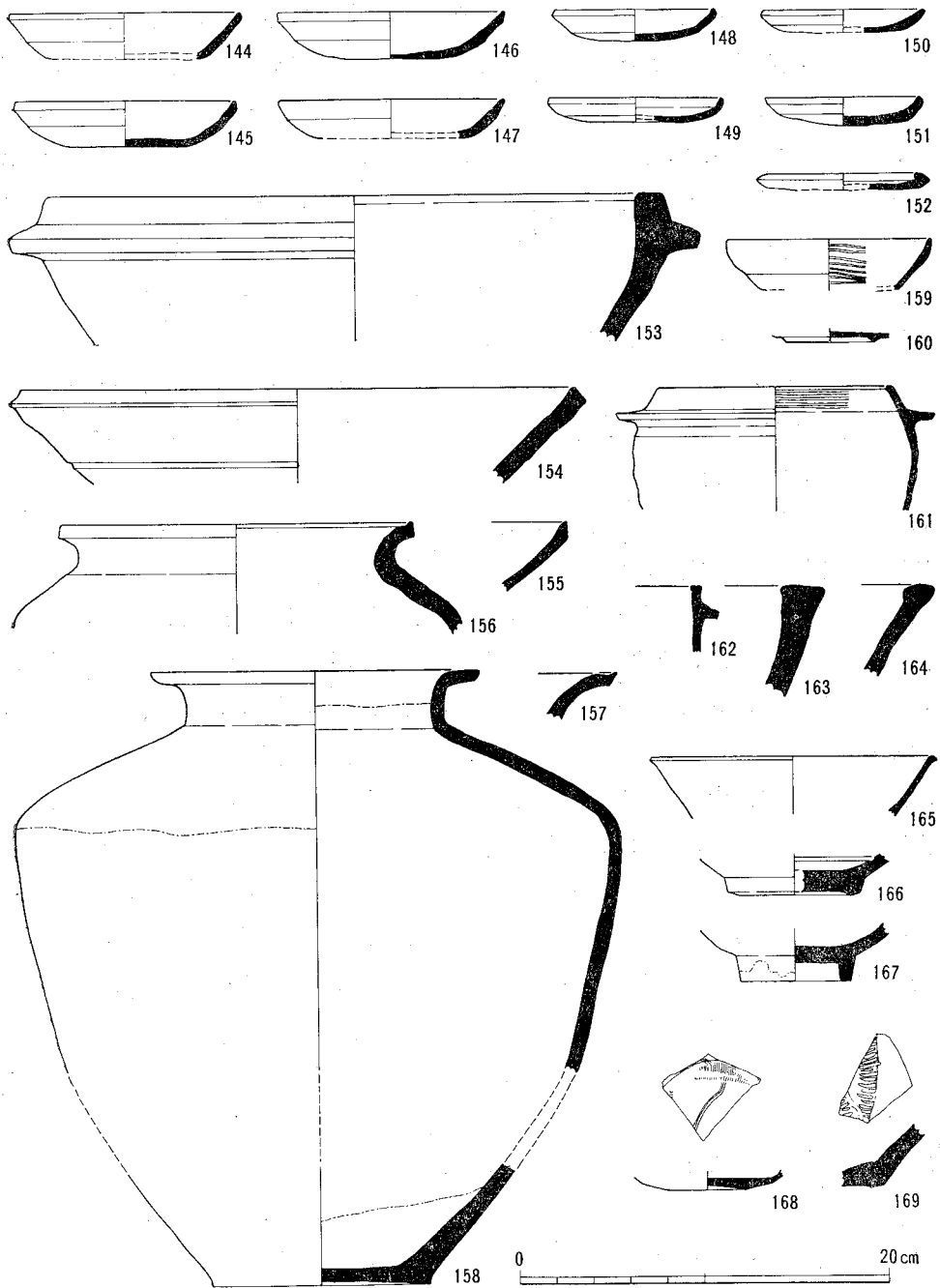


図12 SD03 (144~152土師器, 153石鍋, 154~156須恵器, 157・158灰釉系陶器, 159~164瓦器, 165~167白磁, 168青磁, 169緑釉陶器) 出土の遺物

S E11(図13-189~199) 189~193は中世京都Ⅰ期中~新段階ごろの土師器皿。196は底部外面に回転糸切り痕をもつ土師器皿。色調は灰白色であり、焼成は軟質である。197・198は瓦器甕と鍋。199は須恵器すり鉢。口縁端面が外面と鈍角をなし、丸味をもつ。

S E24(図13-200~204, 図版28) 200は土師器皿。201は底部外面に糸切り痕をもつ土師器皿。色調は灰白色で焼成が良い。202は土師器羽釜。203は灰釉系陶器碗の底部。204は玉縁口縁の白磁碗。土師器の細片には中世京都Ⅰ期中段階ごろのものが多い。

S D06(図版21-527~563, 図版29) 527~555が土師器。534・535は灰白色の碗。536は淡褐色の碗。551・552は灰白色の受皿。553・554は高台が付く皿B。他は茶褐色の皿である。527・528・532・533・537~540がD<sub>5</sub>類, 529・541~546・550がD<sub>6</sub>類, 530・547~549がC<sub>3</sub>類, 531がC<sub>5</sub>類であり、中世京都Ⅰ期新段階にあたる。土師器受皿551・552の径はそれぞれ5.6cm, 5.7cmをはかる。また皿Bの類例は、淀川水系沿いと瀬戸内地方にある。この時期、灰白色の土師器がやや比率を増し、土器法量の減少が著しい。555は土師器盤。器壁が厚く体部が直線的で、口縁端面が水平をなす。556は瓦器盤。胎土に砂粒を含み、炭素の吸着が悪い。557は瓦器羽釜。口縁部が短く直立する。558は須恵器すり鉢。口縁端面が外面と鈍角をなし、丸味をもつ。559は灰釉系陶器すり鉢。560は白磁水注。釉調は濁った乳白色である。561は白磁皿。見込みに片切り彫り花文を施し、釉調は乳白色である。562は龍泉窯系青磁碗。釉調は淡緑色であり、見込みに片切り彫りの崩れた花文を施す。563は滑石製石鍋。本遺構出土品は時期が遡る遺物を少量含むが、中世京都Ⅰ期新段階の良好な資料であるため、次章で別に考察を加える。

S E15(図14-205~210) 205・207は中世京都Ⅰ期新段階ごろの土師器皿。206は底部外面に回転糸切り痕をもつ土師器碗。色調は表面が茶褐色、内部が黒色を呈する。208は瓦器碗。内面に粗い暗文を施し、外面には施さない。209は瓦器鍋。210は須恵器甕で、口縁部は「N」字状である。

S D08(図14-211~222) 211~215は中世京都Ⅱ期古段階ごろの土師器。213が灰白色碗であり、他は茶褐色の皿である。216・217は土師器高杯の軸部。218は瓦器鍋。219は瓦器盤。220は須恵器甕, 221は灰釉系陶器碗, 222は白磁碗である。

S K10(図版21-564~594, 図版30) 564~592が土師器。564~569・572~582・588~590がE<sub>1</sub>類, 570・571・583がE<sub>3</sub>類, 584~587・591・592がE<sub>2</sub>類であり、中世京都Ⅱ期中段階にあたる。564~583は色調が赤褐色を呈する皿。584~592は色調が灰白色を呈する碗。このうち、590~592は凹み底小碗である。593は瓦器鍋。口縁部の屈曲が弱い。594は玉縁

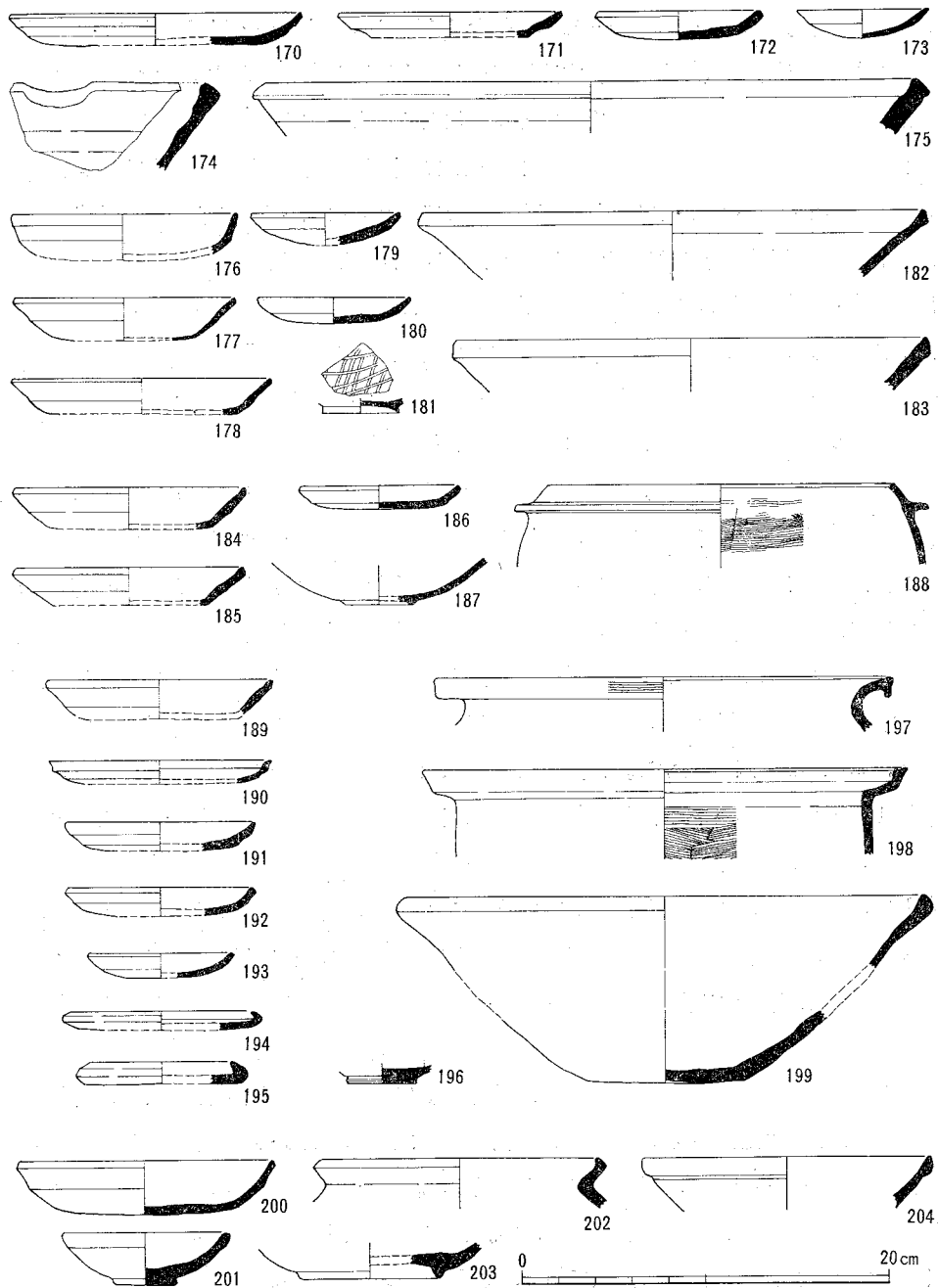


図13 S E12 (170~173土師器, 174・175須恵器), S E17 (176~180土師器, 181瓦器, 182・183須恵器), S E19 (184~186土師器, 187・188瓦器), S E11 (189~196土師器, 197・198瓦器, 199須恵器), S E24 (200~202土師器, 203灰釉系陶器, 204白磁) 出土の遺物

口縁の白磁碗。なおこの時期の土師器に伴なう白磁は口禿げの碗・皿であることが多く、玉縁口縁が共伴する例は少ない。本遺構出土品は土師器が主体をなすが、中世京都Ⅱ期中段階ごろの良好な資料であり、次章で考察を加えることにする。

SK08(図14-223~232, 図版30) 223~230は中世京都Ⅱ期中~新段階ごろの土師器。このうち223・224・228・229は色調が赤褐色の皿, 226・227・230は色調が灰白色の碗である。225は灰白色の受皿であり径は8cmをはかる。SK10出土の土師器皿・碗と本遺構出土品とを比較すると、大型の皿は口縁部に施した横撫での下端部が肥厚し、以下の指押えが強まる。また大型の碗に法量が分化する傾向が顕著となり、<sup>(64)</sup> 凹み底小碗の口縁部が直線的になるなど、SK10よりやや時期が降る要素をもつ。231は瓦器鍋。口縁部の2段の屈曲が弱い。232は須恵器すり鉢。口縁部が上下に拡張する。

SD23上層(図14-233~237) 233~236は中世京都Ⅲ期新段階ごろの土師器皿。237は口縁部が長く直立する瓦器羽釜。下層出土品とのあいだには年代の隔りがある。

SD24(図15-238~257, 図版31) 238~252は中世京都Ⅲ期新段階ごろの土師器。238~249は皿。色調は淡茶褐色である。250・251は土師器小碗の形態を留め、色調は淡茶褐色である。252は口縁部の横撫で下端部の肥厚が顕著であり、以下の部分に強く指押えを施す。色調は濃茶褐色である。253~257は瓦器羽釜。すべて体部が、やや外傾して立ち上がり、口縁部が長く直立する。口径は31cm前後、26cm前後、24cm前後の3種がある。

第1次調査区A5・A6層(図16-258~282, 図版32-596~599, 図版33) A5・A6層およびそれに相当する層からは平安京Ⅳ期~中世京都Ⅰ期を中心とする土師器をはじめとして、多くの種類の遺物が出土している。これらはまとまった時期のものではないため、このうちの中国製陶磁器をとりあげることにする。258~260は玉縁口縁の白磁碗, 261・262は口縁部が外反する白磁碗, 263・264・597は白磁皿。265は器形が不明の白磁底部。底部外面が柿色に発色し、そのほかの面には乳白色の釉がかかる。266~269は白磁碗の底部。266は見込み周縁の釉を蛇の目状に掻き取る。269は器壁が薄く内面に櫛描き文を施す。釉調は澄んだ乳白色である。270・271は白磁壺の口縁部。596・272は白磁壺の底部。596は高台が断面梯形であり、露胎が淡黄色を呈する。胎土の色調は白く、釉調は乳白色である。底部外面に墨書があるが判読できない。272は底部外面に稜をもち、露胎の部分が赤く発色する。胎土の色調は灰白色であり、釉調は青味を帯びる。273は外面に垂下文を施す白磁底部。274は青白磁四耳壺。肩部に片切り彫りの文様を施す。598は青白磁輪花碗。体部内面に崩れた片切り彫り花文と櫛描き文を施す。599は青白磁皿。見込みに片切り彫

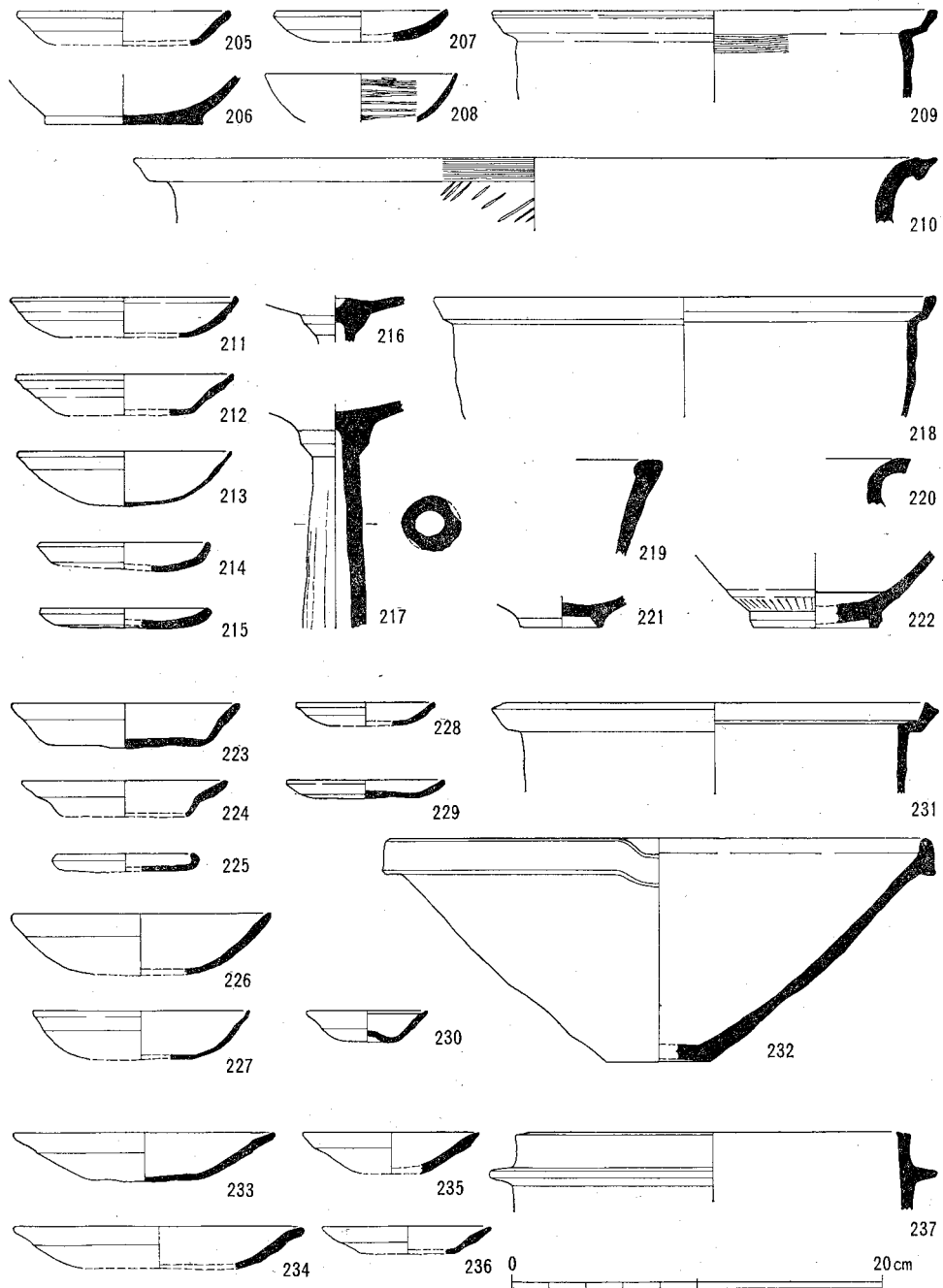


図14 S E 15 (205～207土師器, 208・209瓦器, 210須恵器), S D 08 (211～217土師器, 218・219瓦器, 220須恵器, 221灰釉系陶器, 222白磁), S K 08 (223～230土師器, 231瓦器, 232須恵器), S D 23上層 (233～236土師器, 237瓦器) 出土の遺物



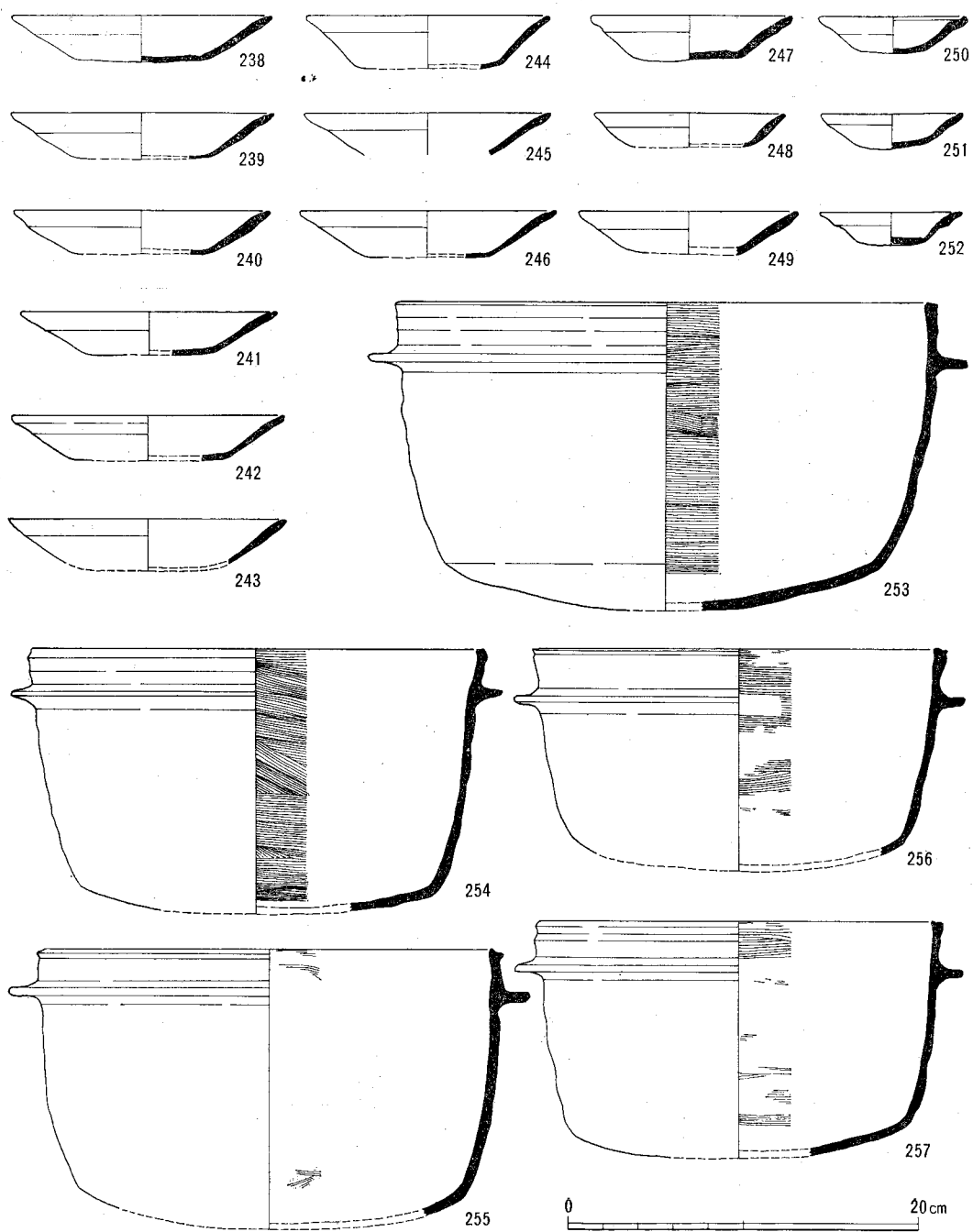


図15 S D24 (238～252土師器, 253～257瓦器) 出土の遺物

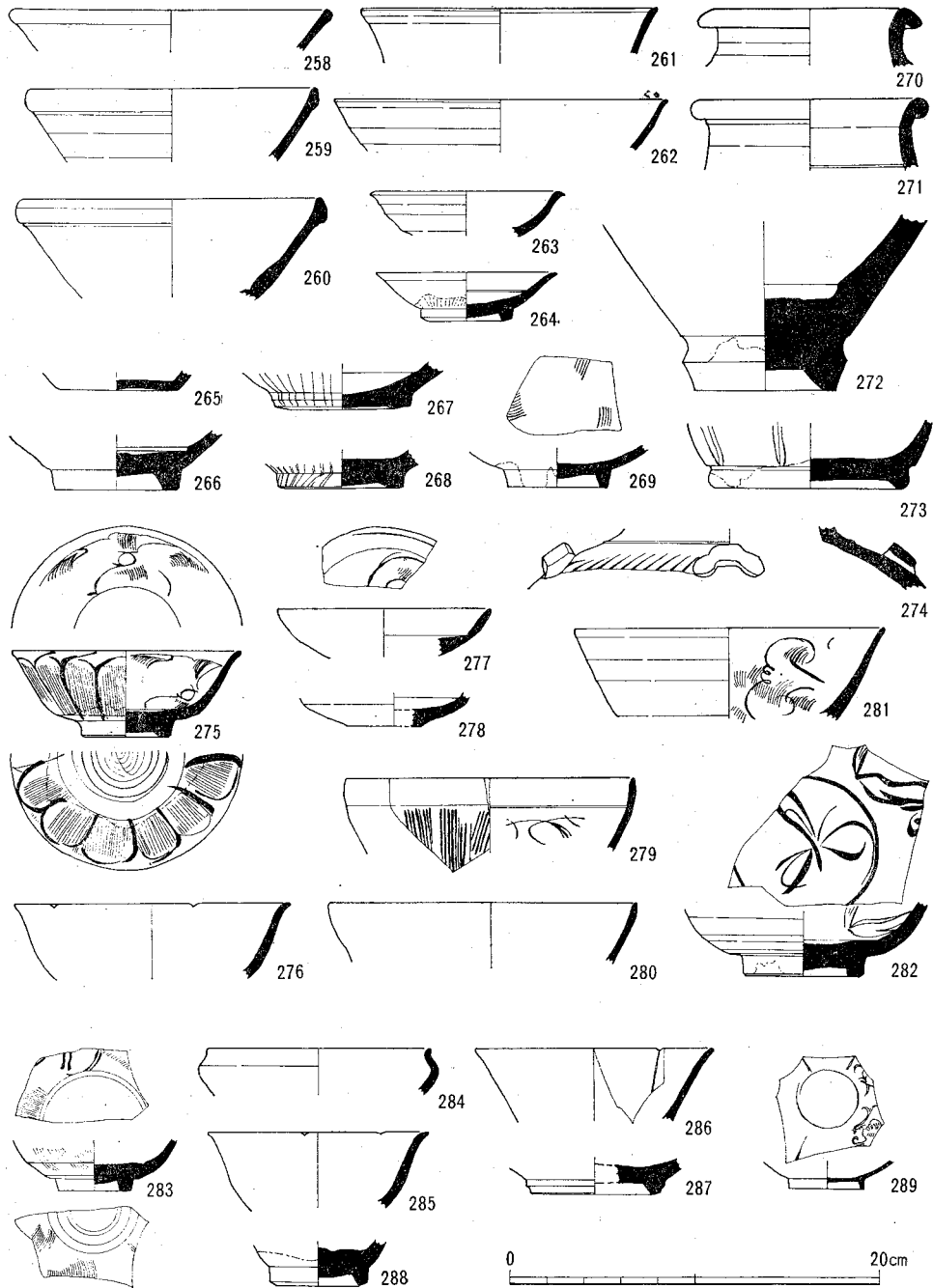


図16 A 5・A 6 層 (258~273白磁, 274青白磁, 275~282青磁), A 2・A 3 層 (283~287青磁, 288白磁), 攪乱層 (289青白磁) 出土の遺物

りと櫛描きの文様がある。275は同安窯系青磁碗。外面に片切り彫り蓮弁文を描き、蓮弁内に櫛描き垂下文を充填する。体部内面には、櫛・篋描きの崩れた花文を施す。釉調は緑褐色を呈する。276は青磁輪花碗。無文であり、釉調は暗緑色を呈する。277・278は同安窯系青磁皿。釉調は濃緑色。279は黄緑色の釉調を呈する青磁碗。外面に櫛描き垂下文、内面に篋描き螺旋文を施す。280は無文の青磁碗。釉調は濃緑色である。281・282は龍泉窯系青磁碗。内面に片切り彫りと櫛描きとによる崩れた花文を施し、釉調は明緑色である。

第1次調査区A2・A3層(図16-283~288) A2・A3層およびそれに相当する層からは中世京都Ⅱ期を中心とする土師器ほかが出土しているが、A5・A6層と同様、時期にまとまりがない。283は龍泉窯系青磁碗。外面に櫛描き文、内面に片切り彫りと櫛描きとによる文様を配し、釉調は緑灰色である。

284は口縁部が内傾する青磁であり、釉調は暗緑色である。285は青磁輪花碗。暗緑色の釉調を呈する。286も青磁輪花碗であるが、内面に白土を象嵌して垂下文を描く。胎土は暗青色、釉調は暗緑色であり、朝鮮製青磁である可能性が強い。287は青磁碗の、288は白磁壺の底部である。

なお289は攪乱された土層から出土しているが、これは見込み周縁に円圈を施し、体部内面を垂線で6区画して内面に型押しで陽刻花文を配する青白磁碗である。花文は、型押しが弱く実測できない部分があるが、残された破片では内面の全面に施している。

### 3 金属器、土製品、石製品

金属器としては、鉄釘と青銅製の火舎香炉・碗・皿が出土した。土製品は土製円塔と近世の伏見人形・泥面子、石製品は硯、石鍋、砥石などが出土した。ここでは古代~中世の遺物のうち、前節で述べた石鍋については省略し、残りのものについて説明する。

火舎香炉・碗・皿 各1点ずつ合計3点である。建物SB01の北西でA3・A4層発掘途中検出した小土坑から一括して出土した(図版16-1)。火舎香炉の火炉部には灰が充填していた。出土状況からみて、溝SD11が埋った後に一括して埋納されたものと考えうる。火舎香炉は厚さ0.15cmと薄手の鋳造製で、総高は9.3cm、炉外径は12.6cmである(図17-600, 図版33)。蓋は3段に段をなし、頂上に宝珠鈕がつき、鈕座には2本一対の凸線がめぐる。蓋の上段には3カ所に3個一組の猪目形透しがあり、中段には上段の透しのあいだ3カ所に1個ずつの猪目形透しを配している。火炉上端には幅1cmの鐐がつき、その内側に低い受部が立つ。火炉側面の中央と下端には2本一対の凸線がめぐる。そして、炉底には細づくりの猫足3個を下方から鉋で留めている。同様の火舎香炉としては、京都市左

京区花背別所第1次調査第1号経塚出土品〔魚澄・梅原23〕，和歌山県西牟婁郡白浜町出土品〔奈良国立博物館77〕，同東牟婁郡那智勝浦町那智経塚出土品〔石田37〕などがある。前述の花背別所第1号経塚からは仁平3(1153)年の銘のある経筒と筒形厨子が出土しており，この種の火舎香炉が製作された年代の一点を示している。前述した3遺跡出土の火舎香炉は器形，法量ともよく類似している。今回の出土品はそれらと器形は同様であるが，総高，口径とも1.9cmずつ大きい。一方，平安京左京四条一坊の溝SD-3灰褐色混礫泥砂層(13世紀末・14世紀初頭までの堆積層)から出土した火舎香炉の蓋は，高さ3.8cm，口径6.8cmとこれに比べてかなり小型であり，かつ背が高く，鈕も大きい。蓋は3段に段をなし，中段に鳥と雲の文様，下段に花文を線刻している〔平安京調査会75〕。この型式の蓋は平安末期以後に出現することは石田茂作がすでに指摘している〔石田37〕。

したがって今回の出土品は鎌倉後期まで降るものではなく，花背別所第1次調査第1号経塚出土の火舎香炉より大きめであることから，1153年をやや遡る年代をも含めた年代幅に収まるであろう。

碗は体部上半を欠損しており，高台の径は6.2cm，底部からの立ち上がりは丸みをもっている(図17-601，図版33)。素文で，厚さは0.13cmと薄い。皿は高台とその両側の底部が1cmほど残っているだけである(図17-602)。底部は碗と比べて平たく体部の立ち上がりはみられないので，皿と考えた。高台の径は5.6cm，厚さは0.13cmと薄い。以上の3点は密教法具の火舎香炉と六器の碗とその台皿にあたる。3点とも器壁が薄く，同時代の製作と考える。これらが埋納された時期は溝SD11が埋ったのちで，13世紀後葉ごろである。

土製円塔 直径4.6cm，高さ2.4cmの半球形の塔身部が1点出土した(図版32-603)。鐔の部分はまったく残っていない，塔身と鐔の接合部に打欠いたような痕跡が10カ所みられる。塔身部凸面にはみかけの釉調が淡緑色を呈する釉を施すが，底面には施釉せず，丁寧な撫で調整痕が残っている。塔身側面の一部に縦方向のシワがみえる。土製円塔は，京都市左

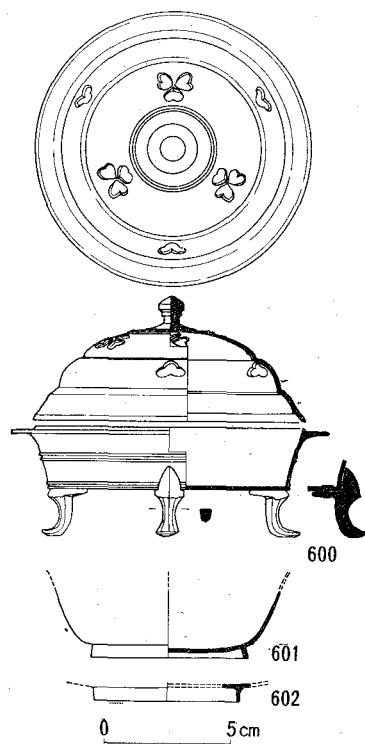


図17 火舎香炉，六器

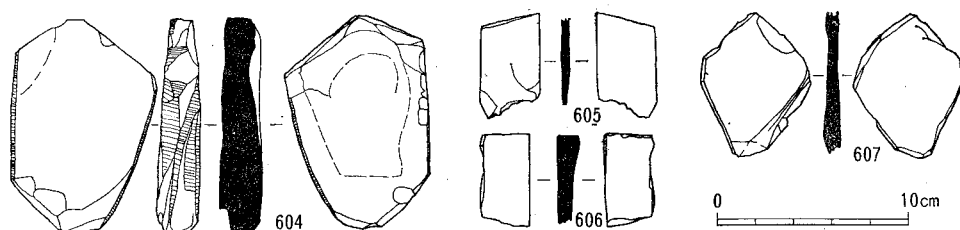


図18 石 製 品

京区法勝寺跡〔西田25, 木村・畑・上原75〕, 同尊勝寺跡〔杉山・岡田61〕, 同京大医学部構内 A O18区〔京大埋文研79〕, 平安京右京土御門木辻〔鳥羽離宮跡調査研究所76〕, 奈良県高市郡坂田村宮古〔石田27〕などで出土している。そのほか平安宮内や京都市伏見区鳥羽離宮跡でも出土しているらしい。<sup>69)</sup> 603は、型入力で成形することと緑釉を施釉することで、京大医学部構内、法勝寺跡、尊勝寺跡出土例に最も近い。塔身側面に縦方向のシワがみえる点は京大医学部構内出土例と同様で、法勝寺跡、尊勝寺跡出土例にはみられない特徴である。一方、右京土御門木辻出土例は轆轤成形で底面に糸切痕が残っており、無釉である。以上のように、土製円塔は畿内、特に平安京およびその周辺で多く出土する遺物で、時代は平安後期を中心とする時期であると考えられる〔石田27〕。型式は何種類かあるようであるが、緑釉のかかった型入力の土製円塔は白河の地に集中して出土しており、大治3(1128)年、白河法皇が供養した18万基の円塔〔西田25〕にこれがあたる可能性が高い。

**硯** 遺構から出土した硯は1点で、S D09から出土した(図18-604)。石材は粘板岩で、ほぼ完形である。側面には、ごくわずかに打欠き調整面が残っている以外、すべて使用面に対して直角方向の磨き調整を施す。海は浅く、裏面は多方向から磨いている。中世京都 I 期中～新段階の土師器と伴出した。

**砥石** 遺構から出土した砥石は3点で、石材はすべて黄褐色の粘板岩であり、605と606がS D11上層、607がS D06から出土した(図18)。605と606は長方形の砥石で、605は片面、606は両面に使用痕がある。607は不整形の砥石で、両面とも磨滅している。605と606は中世京都 I 期中段階、607は中世京都 I 期中～新段階の土師器と伴出した。

#### 4 瓦 類

発掘調査区からは、軒丸瓦21点、軒平瓦45点をはじめ多数の平瓦・丸瓦が出土した。このほか特殊なものとして瓦製円板、緑釉丸瓦がある。瓦の大半はD 5層から出土し、特定の建築遺構に伴なうものではない。なお軒瓦の出土地点、出土状況については、表3を参照されたい。

## (1) 軒丸瓦(図版34・37・38)

蓮華文軒丸瓦(1~7) 1・2は単弁八葉の蓮華文軒丸瓦で、弁を凸線で囲み、弁間には珠文を置く。その外側には、二重の圈線がめぐる。瓦当裏面には指押えの痕跡を残す。尊勝寺62型式〔杉山・岡田61P L 36〕・烏丸線内 No. 34-42〔烏丸調査会80図版29〕は同範<sup>例</sup>と思われる。尊勝寺・烏丸線例では瓦当が楕円形をなしている。

3・4は範の磨耗が著しいため、文様が不明瞭であるが、円勝寺出土の同範例E R-009〔円勝寺発掘調査団72P 82〕によれば、複弁五葉蓮華文であることが判る。内区には小型の五葉の花弁を置き、外区に11個の珠文をめぐらせる。円勝寺例では瓦当は楕円形を示すが、本例は円形である。同範例は、円勝寺のほか鳥羽離宮 D 1〔細谷68第33図〕・延勝寺〔六勝寺研究会72P 10〕などがあり、この範が頻繁に使われたことが判る。

5は範の打ち込みが弱く、瓦当面が磨耗しているため文様が不明瞭である。範キズから平安宮朝堂院例〔平安博物館77P 228-217〕が同範と考えられる。朝堂院例から、中房に1+6の蓮子、外区に16個の珠文を配する複弁八葉蓮華文であることが判る。

6は大型の中房に大粒の1+8の蓮子をもつ八葉蓮華文軒丸瓦で、弁間の隆線を表現するのみで子葉や花弁を省略している。

7は1+5の蓮子を3本の圈線が囲み、小型の花弁をもつ複弁十三葉蓮華文である。瓦当面には砂粒が付着しており、須恵質に焼成されている。尊勝寺22型式〔杉山・岡田61P L 35〕・円勝寺 S R-022〔円勝寺発掘調査団72P 86〕・六勝寺 S W A 09〔六勝寺研究会76図7〕と同範。

宝相華文軒丸瓦(8) 断面半球の中房部を持ち、四方に特殊な花弁を展開させる宝相華文である。弁間には細い蔓状の細線が走り、それが数本に分岐して空間を埋めている。鳥羽離宮から同文が出土している〔杉山69図版8-(2)〕。

巴文軒丸瓦(9~16) 9・11は左廻り、10は右廻りの巴文、尾を細長く引く。12~14は巴文の外側に珠文を配するもの。いずれも瓦当裏面に指押えの痕跡を残し、外縁と瓦当裏面との境目は、角ばらない。焼成はややあまく黒灰色を呈する。15・16は須恵質を呈し15は黒光りしている。やや大型で外区の珠文も大きく、瓦当裏面には不定方向に撫でが施されている。

## (2) 軒平瓦(図版35・36・39~42)

唐草文軒平瓦(17~30) 17は狭い内区に唐草文、外区には珠文を配するもので、瓦範よりも瓦当面が小さいために下の珠文が見えない。平瓦部凸面と瓦当部のなす角(瓦当角)

が大きく、頸部下端は横方向の篋削り、頸部から平瓦部凸面にかけては横撫でを施す。尊勝寺174型式〔杉山・岡田61P L 39〕・円勝寺S R-174〔円勝寺発掘調査団72P 90〕はこれと同範である。京都大学北部構内B E 29区からも同範品が出土している〔京大埋文研79第29図Ⅱ 93〕。

18～20は瓦当面左上から4回反転する偏行唐草文で、すべて同範である。17と同じく瓦当面が小さいため唐草の流れの中断が起っている。瓦範の磨耗が著しく後範の製品であると考えられる。瓦当部成形技法のよくわかる20を観察すると、平瓦広端部の凸面側に別粘土を貼り付けて瓦当部としていることが判るが、その他がすべて、この技法によるものとはいえないようである。頸部下端は横に篋削り、頸部は横に撫でを行ない調整するものが多い。法勝寺〔木村・畑・上原75図21-18〕・栗栖野瓦窯〔西田・梅原34図版21-4、木村30第4図16(4)〕などから同範品が出土している。

21・22は前述のものと同趣の偏行唐草文で、瓦当面は小さく瓦範も磨耗している。瓦当部は、平瓦の広端部を凸面側に屈曲させ、主に凹面側に別粘土を補充して成形しているため瓦当角が大きい。頸部下端は横方向の篋削りによって調整する。尊勝寺195型式〔杉山・岡田61P L 40〕・円勝寺S R-195〔円勝寺発掘調査団72P 90・91〕・豊楽院出土例〔佐藤68図版14-30〕と同範で栗栖野瓦窯の製品である〔西田・梅原34図版14-4〕。京都大学北部構内B E 33区からも出土した〔京大調査会77図版42A T 20〕。

23は偏行唐草文と思われるが、瓦当面が荒れていて文様は不明瞭である。頸部下端は横方向の篋削り、頸部は撫でによって調整を行なっている。

24は特異な中心飾をもつ均整唐草文で、瓦当部の成形技法は23と同様と思われるが、瓦当裏面から頸部にかけて調整を省略している。鳥羽離宮G 1〔細谷68第34図〕や法金剛院B K N 1〔中谷70第56図25〕は、同文意匠のものである。

25は左から右へ向かう太い偏行唐草文で、平瓦の端部を折り曲げて瓦当部を成形しており瓦当面の突出した部分に布目痕が残る。頸部、瓦当裏面は横に撫でを行ない、折り曲げの際生じたシワは指で深い撫でを施し消し去っている。焼成はあまい。

26は瓦当面の残りが悪いいためよくわからないが、退化した唐草文であろう。25と同様の方法で瓦当部を成形している。頸部のつけ根には曲げジワを残し、凹面側の屈曲部は丸く布目が瓦当面に連続する。

27は小片であるが唐草文と思われる。平瓦端部を折り曲げて瓦当を作っている。曲げジワの付近は撫でを行なっているが、これを十分消すに至っていない。瓦当上端部は、篋

削りが施されている。焼成はあまく、赤褐色を呈する。

28・29は同文異範の均整唐草文で、C字対向型を中心飾とし、蕨手を左右に三葉反転させている。瓦当部上端からやや下方に平瓦部が取り付け、平瓦部を包み込むように瓦当部を成形している。瓦当上面から凹面にかけて、また頸部下端から瓦当部にかけては、ともに横方向の撫でによって調整を行なう。須恵質に焼成されており、29は釉がかかり黒光りする。28では平瓦部凹面に糸切痕と布目痕を残し、凸面には格子叩きの痕跡がかすかに残る。高砂市魚橋瓦窯・尊勝寺〔杉山・岡田61別表2-239型式〕・安楽寿院比定地〔中村25図版24-4〕から同文異範が出土している。

30は均整唐草文と思われる。28と同じ瓦当成形法によっているが、接合する平瓦の端部凸面にキズをつけて接着を容易にしている。焼成堅緻で須恵質である。尊勝寺250型式〔杉山・岡田61別表2〕と同趣で、高砂市魚橋瓦窯出土瓦にも類品がある。

宝相華文軒平瓦(31~35) 31は半截花文を中心飾にして、蔓草状の唐草を左右に反転させている。焼成堅緻、須恵質で黒光りする。尊勝寺270型式〔杉山・岡田61 P L 40〕を逆転したものである。

32は双脚状の蕨手のつく花文を中心飾とし、唐草を左右に反転させたものと思われる。尊勝寺268型式〔杉山・岡田61 P L 40〕・法金剛院B K N 12〔中谷70第56図38〕はこれに類似する。

33は宝相華文を中心飾とし、特異な花文を5単位ずつ左右対称に配するもの。瓦当部成形法は不明である。平瓦部がほぼ完存し、縦位の縄叩き後、左上から円弧を描く縄目叩きを施している。醍醐寺境内〔鳥羽離宮跡調査研究所76第16図-22〕から同文が出土している。

34は梅鉢状の花文を中心飾とし、退化した蕨手を反転させたもので、平瓦端部を折り曲げて瓦当部を成形している。瓦当裏面は縄目叩きを行なっている。亀岡市王子瓦窯出土品〔安井60第98図12〕に類似する。

35は34の中心飾を連ねたものと考えられる。34と同じ瓦当成形法によっているが、瓦当裏面は横方向の撫で、頸部下端は篋削りで調整している。

幾何学文軒平瓦(36) 36は斜格子文で瓦当面を飾るものであるが、瓦当面に対して瓦範の横幅が小さい。瓦当角は大きく、21・22と同様の瓦当部成形法と考えられる。瓦当裏面から平瓦部にかけては横方向に撫でを行なっている。

巴文軒平瓦(37~40) 37は三ツ巴の連巴文で、平瓦の凸面側に粘土を補って瓦当を成形している。瓦当裏面から平瓦部にかけては、指押えと撫でによって調整する。



38は37と同じ連巴文で、頸の幅が広く、平瓦部も厚い。瓦当成形法は不明であるが頸部は篋削り、頸部は撫でによって調整する。平瓦部凸面には細かい縄目叩きがみられる。

39・40は右廻りの巴と雁とを交互に配する雁巴文である。瓦当面が平瓦に対して鈍角をなす。頸部下端は篋削り、瓦当裏面から頸部へは撫でを施す。40は特に薄手で小型、撫で調整を行なった平瓦凸面に篋記号がある。

剣頭文軒平瓦(41~46) 46は中央に左廻りの巴文を置き、左右に剣頭文を3個ずつ配する剣巴文。瓦当角は直角で、瓦当上端部は篋削りを行なって斜めの面に仕上げている。曲げシワは指押えによって消去している。残存する平瓦凸面には指押えが著しく、篋記号がみられる。

41~45は46と同じく平瓦端部を折り曲げて瓦当部を成形する剣頭文軒平瓦で、41・42・45では瓦当文様の突出した部分に凹面から連続する布目痕が顕著に残る。折り曲げによるシワは、指押え(42・45)もしくは撫で(41・43・44)によって消去する。瓦当上端は、斜めに篋削りを施す。平瓦凸面は、縄目叩きがみられるもの(41)以外は、全面を指押えと撫でによって調整し、頸部下端は、篋削りを行なう。42は凹面に(図21-5)、40・43は凸面に(図21-4・1)にそれぞれ篋記号がある。

### (3) 丸瓦・平瓦(図19・20)

調査区出土の平瓦・丸瓦のほとんどは、小片で完形品はなく、それらが使用された建築物から移動し堆積したものと考えられる。平瓦はA~Hの8種、丸瓦はA~Cの3種に分類した。

丸瓦A 玉縁付の大型の丸瓦である。凸面に叩きの痕跡はなく、横方向に丁寧に撫で調整を行なっている。側面は一面で成形され、分割痕は認められない。凹面には糸切痕と細かい布目痕が残っている。胎土には砂粒は含まず、焼成も良く灰白色を呈する。玉縁端の径12cm、外径は16cm、厚さ2cm。

丸瓦B 玉縁付の小型の丸瓦である。凸面には縦方向に細かい縄目叩きが認められ、玉縁部外面のみに撫で調整を行なっている。側面は篋削り、凹面側の側縁には面取りを施す。凹面の布目は細かく、玉縁部で少しシワが生じている。灰白色で胎土には砂粒を含む。玉縁端の径9cm、外径10.5cm、厚さ1.5cm。

丸瓦C 丸瓦A・Bが粘土板を用いているのに対し、粘土紐を型に巻きつけて円筒となし、玉縁部を削り出して作っている。玉縁部の凹凸両面は横方向の撫でによって調整を行ない、端部は丸く仕上げている。凸面は縦方向に篋削りを行ない、凹面は縦に撫でを施

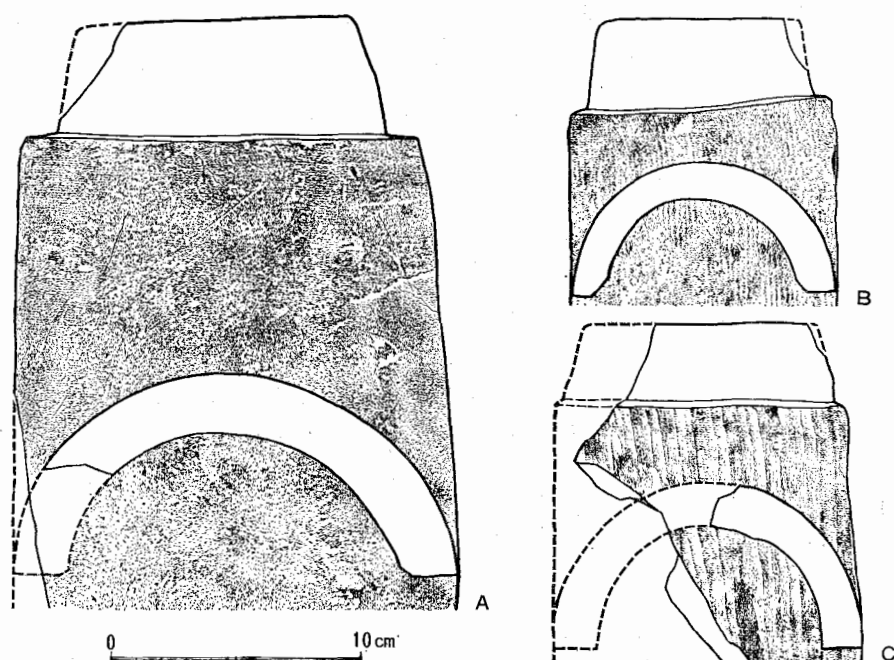


図19 丸 瓦

しているが、粘土紐の継ぎ目を完全に消し去ってはいない。須恵質に焼成されている。外径14cm、厚さ2cm。

緑釉丸瓦(図版38-47) 赤褐色に焼成された玉縁付丸瓦の凸面に緑釉をかけたもの。施釉は玉縁部、側面には原則として及ばない。凸面には縄目叩きが少し残る。凹面の布目は細かく、玉縁部でシワを生じている。側面は一面で成形されている。厚さ2cm、外径14cm。

緑釉瓦は平安京では、平安宮、東寺、西寺、仁和寺、法成寺などの平安前期・中期における宮殿官衙、官寺、有力寺院において使用された。またその瓦窯も、栗栖野、小野、河上、鎮守庵、醍醐の森、森ヶ東などにあったことが判明している[木村77]。しかし平安後期の六勝寺関係の遺跡では出土をみない。同様の緑釉丸瓦は、京都大学北部構内B E33区からも出土している[京大調査会77]。

平瓦A類 厚さ2.0~2.5cmの平瓦で、凸面は縦方向の撫でによって調整を行なっている。凹面には、比較的細かい布目痕が残るが、一部に縦方向の撫で施すものがある。焼成は堅緻で須恵質である。

平瓦B類 凸面に格子叩きを施すもので、叩きには正格子・斜格子など、数種類ある。

いずれも細長い叩き板を、側縁と平行に用いたものと推定される。凹面には糸切痕や比較的荒い布目痕を残すが、縦方向に撫でているものもある。胎土に砂粒を含むものもあり、須恵質に焼成され青灰色のものが多い。厚さは2.0cm 前後である。

平瓦C類 凸面に平行叩きを施したもの。凹面には非常に細かい布目痕や糸切痕が残る。胎土には黒い砂粒を含む。須恵質に焼成されており、釉がかかって黒光りするものもある。厚さは2.0～2.5cmで、やや厚めである。

平瓦D類 1.5cm 前後の薄手小型の平瓦で、胎土には小石や砂粒を多く含む。色調は黒灰色、黄白色など様々である。焼成もややあまく、胎土の関係から表面が平滑でなく、糸切痕や布目痕もあまり明確でない。凸面、凹面とも横方向に篋削りを行なっているため、砂粒が動いた形跡が認められる。その上に格子目叩きを施しているが、これも明瞭には残っていない。叩き板の形状と叩き方は、平瓦B類と同様と考えられる。京都大学北部構内BG36区平瓦Ⅱb類に相当する〔上原78b〕。

平瓦E類 平瓦D類とはほぼ同様の方法で製作されているが、凸面の叩きは縄目によるものである。しかし縄目は、非常に不明瞭である。凹凸両面とも表面に砂粒が付着し、離れ砂として使用したものであろう。厚さ1.5cm 前後のものである。BG36区平瓦Ⅱa類に相当する。

平瓦F類 整然としたやや太めの縄目が縦方向に走るもの。胎土には、砂粒を含み、須恵質に焼成されている。凹面には、糸切痕や布目痕を残すものもあるが、撫でを縦方向に行なうものもある。凹凸両面に離れ砂が付着する。厚さは2cm 前後。BG36区平瓦Ⅰb類に相当する。

平瓦G類 凸面にはやや太目の縄目が縦方向に走るが、極めて不明瞭であり、糸切痕のみえる場合がある。凹面には糸切痕や布目痕が残るものとそうでないものがある。色調は、黒灰色、赤褐色、黄白色など様々である。凹凸両面に離れ砂が認められる。BG36区平瓦Ⅰc類に相当する。

平瓦H類 凸面にやや細かい縄目が縦方向に走るもの。厚さ2.0cm 前後で、胎土には砂粒を含む。凹面は、布目痕の残るものや撫でを行なうものなどがある。色調は、青灰色、黄白色など一様ではない。

A～Hの8種に分類した平瓦は、すべて一枚作りによるものである。また縄目叩きによるものは、一応E～Hの4種に分類したが、これはあくまで目安にすぎない。縄目の分別は、きわめて難しく、なおかつ布目痕、撫で、糸切痕といった他の製作上の技法要素との

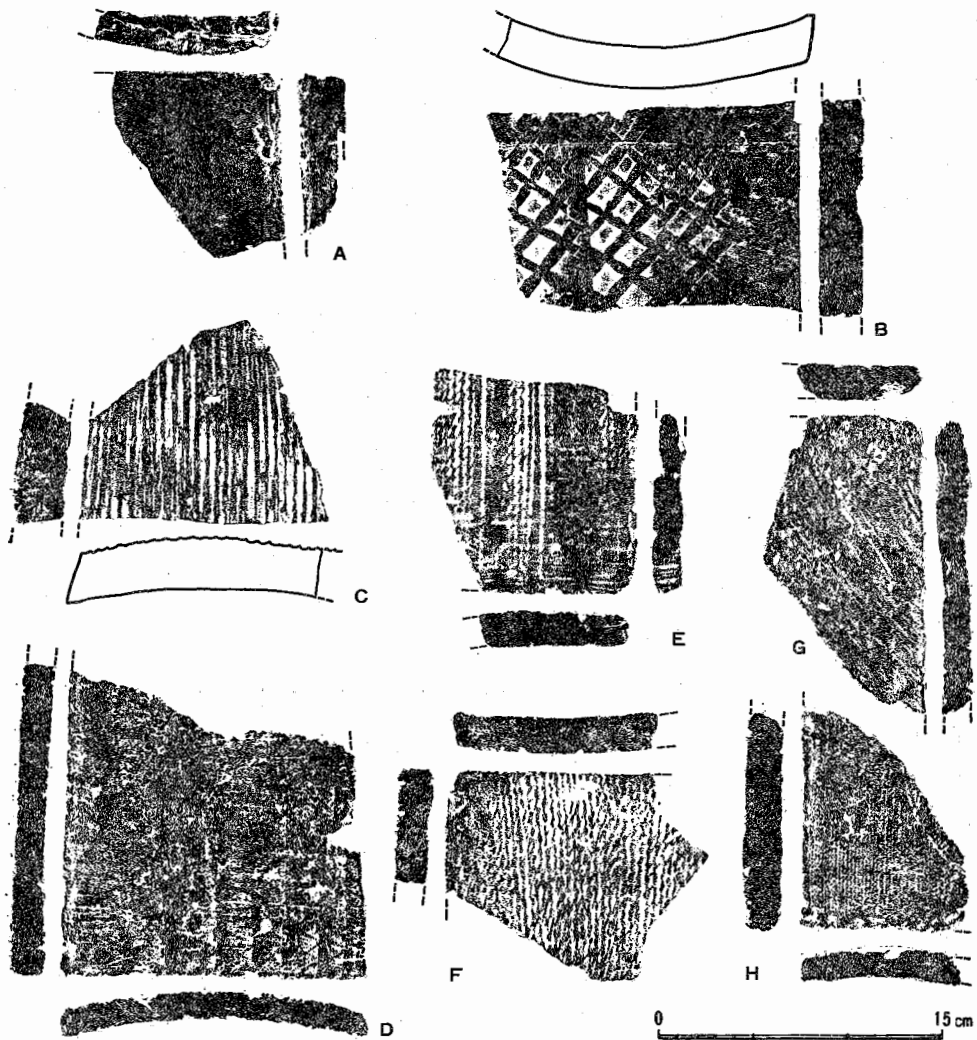


図20 平 瓦

絡み合いも、必ずしも前述の分類規準に合致するものばかりとはいえない。やや大きめの平瓦破片を観察すると、一枚の平瓦において縄目叩きを施した部分と、それを省略した部分とがある場合が認められるので、分類が枳然としないのもうなずけるだろう。

#### (4) 瓦製円板(図版42-48・49)

E類もしくはH類と推定される平瓦に、打ち欠きおよび研磨を行なって、直径約7cmの円板に仕上げたもので2点出土している。敗瓦を再利用したものと考えるが、その用途は

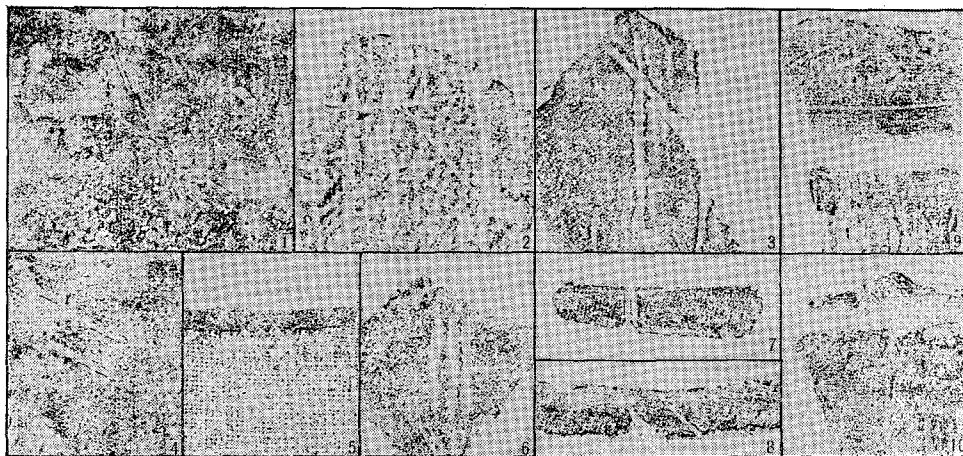


図21 篋記号 縮尺 1/2

不明である。小野市播磨広渡寺廃寺から、ほぼ同大で有孔のもの〔和田80〕が出土しているが、用途を異にするものかもしれない。

#### (5) 平瓦・丸瓦の篋記号(図21)

平瓦凸面に篋記号のあるものは6点で、「Ⅲ」、「H」、「X」、「=」などの種類があり「Ⅲ」の認められるものは、撫で調整を行なっている。いずれも軒平瓦の一部と考えられる。平瓦端面には、篋記号「H」、「/」があり、平瓦E類に記されたと思われる。丸瓦では、玉縁部凸面に篋記号「/」があり、丸瓦B類と考えられる。

#### (6) 小 結

調査区から出土した瓦は、中央官衙系瓦屋の製品と地方瓦生産地系の製品のものに分けられる。平安後期の瓦について総括的に論じた上原真人の編年案〔上原78a〕に従って、まず中央官衙系瓦屋の製品と考えられる軒瓦について分類整理してみよう。

上原のいう第Ⅲ期(12世紀前半)に相当する軒平瓦は、17～22と考えられる。これらは11世紀後半に中央官衙系瓦屋で採用された唐草文を受けついだものであるが、同範品の中に異なった瓦当部成形技法を持つことが特徴である。調査区出土のものには、他遺跡出土の同範品と比較して瓦当面の上下幅が狭く、篋が極端に磨耗したものがみられ、同範品のうちでは後出のものと考えられる。

36～40は第Ⅳ期(12世紀中葉)のものである。第Ⅳ期は主として巴文系の文様が主流を占め、若干の唐草文・幾何学文が混る。瓦当部成形技法は、折り曲げた平瓦の端に粘土を補うというやり方であると推定される。

41～46の剣頭文を基本とするものが第Ⅴ期に相当する。これらは、木村捷三郎のいう「完成した折り曲げ造り」によるもので、調査区出土のものは瓦当上面を斜めに篋削りを行ない、曲げジワを指押えや横撫でによって消去している。折り曲げ造りによる軒平瓦には、平瓦部凹面の布目が、そのまま瓦当面の布目と連続し、平瓦成形時の縄目叩きや曲げジワを残すものがある。こうしたものに比べて調査区出土の折り曲げ造りの軒平瓦は、その調整技法において丁寧であるといえる。この完成した段階の折り曲げ造りの軒平瓦の細部調整技法における精粗の2者は、第Ⅴ期中央官衙系軒平瓦の新旧2相を示すと考えられる〔上原78a〕。また、剣頭文の単位文様の割り付け法の変化と上記の調整法の差異が対応することが指摘されている〔上原78b〕。

さて、中央官衙系瓦屋の軒丸瓦の瓦当文様は、第Ⅲ期と第Ⅳ期の間に大きな変化がある。第Ⅳ期の年代決定の基準となっている栢杜遺跡八角円堂跡では、出土した軒丸瓦のうち蓮華文軒丸瓦は20%にすぎず、70%以上は巴文軒丸瓦が占めている。また、こうした蓮華文軒丸瓦には小型品が多く、文様も極めて退化した様相を呈する。1～5は、この時期より少し遡るものと考えられる。これらにおいては、同範品の中に瓦当が楕円形のものと円形のもののがみられ、前者は瓦当面小型化への過渡的形態とも考えられる〔京大調査会77〕。

また瓦範の使用頻度が高かったため範の磨耗の著しいもの（3～5）がみられ、第Ⅲ期とした軒平瓦との組合せを考えてよいであろう。

第Ⅳ期から第Ⅴ期にかけて、軒丸瓦は巴文意匠が主流となる。24は、鳥羽南殿比定地の出土状況から9の巴文軒丸瓦との対応が考えられ〔京大調査会77〕、巴文・剣頭文系の軒平瓦は7～14の巴文軒丸瓦にほぼ対応するものと考えてよいだろう。なお、平瓦D～H類・丸瓦B類は、これら中央官衙系軒瓦に対応するものと考えられる。

次に、地方瓦生産地系のものとして、亀岡市王子瓦窯〔安井60〕を中心とする丹波系瓦窯の製品（34・35）と神戸市神出古窯〔真野74〕、明石市三本松古窯〔島田39〕、高砂市魚橋瓦窯〔今里55〕、三木市久留美古窯・与呂木古窯〔是川70〕などの播磨国内に分布する瓦陶兼業窯の製品と考えられるもの（7・28～32）がある。また中央官衙系瓦屋の製品と共通する面が多いが、瓦当部の製作技法や瓦当文様において瓦窯系列の比定を確定できないもの（24・25・33・36・38）が存在する。丹波系瓦窯の操業は、11世紀後半から12世紀前半に及ぶものと考えられている。軒平瓦の瓦当部成形技法には、平瓦部の凸面側に別粘土を貼り付けるものや平瓦の端部を折り曲げるものがあるが、これらが中央官衙系の軒平瓦とはほぼ軌を一にした技法変遷をたどったとするならば、調査区出土の34・35は、丹波系瓦窯の製品と

しても、やや時期の降るものと考えられる。

播磨系列の軒平瓦では、平瓦部と瓦当部は別々に製作される。すなわち、瓦範を打ちつけた粘土塊の裏面に溝状の凹部を作り、そこに平瓦の端部をさしこみ、接合部附近や瓦当裏面を丁寧に横に撫でるという技法を用いている。また焼成が極めて堅緻で須恵質のものが多いのも著しい特徴である。こうした特徴をもつものが28～32であるが、軒丸瓦でも、焼成状態に留意して7・15・16を播磨系列として抽出できる。この組合せが成立するならば、巴文意匠の採用から推して、12世紀中葉以降のものも含まれていると判断される。このうち平安前期に流行した均整唐草文の流れをくむ28・29や宝相華文32は、型式学的にみて、やや古い時期のものであろう。播磨系列と考えられる軒瓦は、尊勝寺造営に際して、国充制に基づき、播磨守基隆が東西両塔・南大門の造営を担当したという『中右記』康和4(1102)年7月21日の記載から、尊勝寺創建時に比定しうるものや、中央官衙系第Ⅳ期に併行すると考えられるもののほかに、在地的な変異の著しいものが多数存在しており、それらの編年の位置付けは容易ではない。平瓦B・C類、丸瓦C類は、これら播磨系列の軒瓦に対応するものと考えられる。

さて平安後期における文献に現われた寺院・宮殿等の造営・修復・改築記事と軒瓦の同範関係を重ね合わせることによって、瓦の年代の1点をおさえようとする試みがある〔中谷71〕。中谷雅治は、法金剛院・鳥羽離宮南殿・法勝寺・尊勝寺・円勝寺出土の軒瓦において、15種の軒丸瓦と9種の軒平瓦に同範のものがみられることを指摘したうえで、これらの同範関係をもつ瓦の出土地の組合せを、造営記事の年代の組合せに重ね合せて考えようとした。その結果、分析資料の多くが大治2(1127)年から大治5(1130)年のあいだに比定されるという見解を示した。この見解に従うと、本調査区出土軒瓦のうち大治年間に比定できるのは7と17である。

また複数の場所から同範瓦が出土する場合、その出土地のうち最も新しい時期の年代(建物の創建年代)に少なくともその瓦の使用年代の上限を置くことができる<sup>68)</sup>〔乗安79〕。そこで第Ⅲ期の軒瓦について、その同範関係から更に細かく比定を行なうと、3と4は延勝寺落慶供養の久安5(1149)年以降、17・22・23は円勝寺供養の大治2(1127)年以降などが推定されてくる。つまり本調査区出土の第Ⅲ期の軒瓦は、12世紀前半でも、やや新しい年代のものであろうと考えられるのである。元永1(1118)年に完成し、保元1(1156)年に焼亡した白河北殿と、この地が大きくかわっているならば、上記の第Ⅲ期の瓦は大治4(1129)年白河北殿の改造拡張以降の変遷に関与するものとしてさしつかえないであろう。

さて今回出土した瓦には、中央官衙系瓦屋の製品と播磨・丹波の2つの地方系列の瓦窯の製品がかなり含まれていることが特徴である。こうした地方産のものが使用されるのは、いうまでもなく六勝寺の各遺跡においてはまったく普遍的にみられる現象であり、六勝寺を中心とする白河街区の北方縁辺部と考えられる本調査区一帯に位置した建造物についても六勝寺におけるのと同様な瓦の供給体制の存在したことが推定されるのである。ところが本調査区の北側にあたる医学部構内A O 18区〔京大埋文研79〕・同A P 19区出土の12世紀中葉～13世紀と考えられる瓦は、ほぼ中央官衙系瓦屋の製品に限られている。これは、成功、栄爵を条件とした国充制によって瓦の調達を諸国司に負担させたり、荘園貢納物として瓦を入手しようとする供給体制に関与しなかった人々の建造物が、本調査区北方の地域に存在したことを示している。これに対して、調査区出土の瓦類は、当時における様々な供給系統に関与しえた造営主体なくしては考えられない多様性を持っているわけであり、白河北殿という院の御所にふさわしいあり方を示すものといえよう。今後A O 18区、A P 19区の調査成果と出土資料の検討を通じてこうした問題の深化をはかりたい。

## 〔注〕

- (1) 平安京Ⅲ期の一部と平安京Ⅳ期については、文献史からみても土器様式からみても、中世に含めることが可能であるが、土師器の時期区分を厳密にこれと対応させることは難しい。むしろ、おおよそ平安時代（平安京）と鎌倉～室町時代（中世京都）とに区分し、それぞれを細分する中で、中世的様相がどのように形成されたかをみる方が混乱が少ない。
- (2) 平安京左兵衛府跡SD 4出土品〔京文研78〕。
- (3) 平安京主水司跡A区SX 1出土品〔京文研78〕ほか。
- (4) 平安京西寺井戸跡出土品，平安京主水司跡B区SK 10出土品〔京文研78〕ほか。
- (5) 平安京左兵衛府跡SD 1出土品〔京文研78〕ほか。
- (6) 法量が減少する過程で、大・小2種以外のものも少量存在するが、基本は大・小2種の組合せからなる。
- (7) この種の小型のものに凹み底となるものがあり「ヘソ皿」という通称がある。またこの種のものは後に扁平となることから、『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』ではこれを皿とした〔宇野78〕。しかしこの時期にはこれを皿と区別して碗とするのが妥当であるため「ヘソ皿」は「凹み底小碗」と呼ぶことにする。
- (8) 通常の皿の底部に融着したまま用いられた例があるため〔京大埋文研78〕，受皿としたが，盛器として用いられた可能性もある。この種のものは，ほかの土師器と同様に平安京Ⅲ期から中世京都Ⅱ期にかけて法量を減じていく。
- (9) 高槻市教育委員会橋本久和氏に御教示を頂いた。



- (10) 京都大学文学部助手岡内三真氏に御教示を頂いた。
- (11) 同志社大学講師鈴木重治氏に御教示を頂いた。
- (12) 名古屋大学文学部教授樫崎彰一氏に御教示を頂いた。
- (13) 京都大学文学部助教授大山喬平氏，同助手今谷明氏に御教示を頂いた。なお，土師器の年代は，書体から予想された年代よりやや古いと考える。
- (14) 大型の椀には当初から若干の大小が存在する。
- (15) 京都市左京区花背別所経塚第1次調査第1号経塚出土の青銅製(唐金製)火舎香炉も同様に灰がつまっていた〔魚澄・梅原23P 8〕。
- (16) 京都市埋蔵文化財研究所堀内明博氏の御教示による。
- (17) 本稿では，同範の認定は主として，写真によった。
- (18) ただし，この考えは難波宮・長岡宮においてみられるように，建物に瓦を葺く際に，古い建物の瓦を再利用するということが，この時代にはなかったということを前提とする。

表3 瓦類の出土地点

蓮華文軒丸瓦				
番 号	出土地点・遺構・層位	実 測 図	写 真	備 考
1	AE15 D5	図版 34	図版 37	
2	AF15 D5	図版 34	図版 37	
3	AF15 D5	図版 34	図版 37	
4	AE15 D5	図版 34	図版 37	
5	AE15 D5	図版 34	図版 37	
6	AE14 D5	図版 34	図版 37	
7	AF14 SE24	図版 34	図版 37	
宝相華文軒丸瓦				
8	AE14 D3 AF15 D3	図版 34	図版 37	
巴 文 軒 丸 瓦				
9	AE14 D5	図版 34	図版 37	} 別に同文1点出土
10	AE14 SD04	図版 34	図版 38	
11	AF14 SE24	図版 34	図版 38	} 別に同文1点出土
12	AE14 SD03	図版 34	図版 38	
13	AE14 D3	図版 34	図版 38	
14	AE15 D3	図版 34	図版 38	
15	AE15 D3	図版 34	図版 38	
16	AE15 D1~2	図版 34	図版 38	
50	AE14 SD03	—	図版 38	
51	AE14 SD08	—	図版 38	
唐草文軒平瓦				
17	AE15 D5	図版 35	図版 39	} 別に同範4点出土
18	AE15 D1	図版 35	図版 39	
19	AE15 D4	図版 35	図版 39	
20	AF14 SE24	図版 35	図版 39	
21	AE15 SD11	図版 35	図版 39	
22	AF15 SD11	図版 35	図版 39	
23	AE14 D3	図版 35	図版 39	
24	AE14 D5	図版 35	図版 39	
25	AE14 D4	図版 35	図版 39	
26	AE15 D3	図版 35	図版 40	
27	AF14 E8	図版 35	図版 40	
28	AE14 SE03	図版 35	図版 40	

番 号	出土地点・遺構・層位	実 測 図	写 真	備 考
29	A E14 D 3	図 版 35	図 版 40	
30	A F14 S D20	図 版 35	図 版 40	
52	A F14 E 8	—	図 版 39	
宝相華文軒平瓦				
31	A E14 D 3	図 版 35	図 版 39	別に同範 1 点出土
32	A E14 D 5	図 版 35	図 版 40	
33	A E15 D 5	図 版 36	図 版 40	
34	A F15 C 4	図 版 36	図 版 40	
35	A E14 S D04	図 版 36	図 版 40	
幾何学文軒平瓦				
36	A E14 D 5	図 版 36	図 版 40	
巴 文 軒 平 瓦				
37	A E15 D 3	図 版 36	図 版 41	} 別に同文 4 点出土
38	A E14 S D04	図 版 36	図 版 41	
39	A E15 D 3	図 版 36	図 版 41	
40	A E15 D 3	図 版 36	図 版 41	
53	A E15 D 3	—	図 版 41	
54	A F14 F 6	—	図 版 41	
剣頭文軒平瓦				
41	A E15 D 5	図 版 36	図 版 42	} 別に同文 4 点出土
42	A E15 D 3	図 版 36	図 版 41	
43	A E15 D 5	図 版 36	図 版 42	
44	A E15 D 3	図 版 36	図 版 42	
45	A E14 D 5	図 版 36	図 版 42	
46	A F15 S D11	図 版 36	図 版 42	
緑 釉 丸 瓦				
47	A E15 S D11	—	図 版 38	
瓦 製 円 板				
48	A F15 D 5	—	図 版 42	
49	A F15 D 5	—	図 版 42	

## 第4章 遺物の考察

### 1 考察の方法

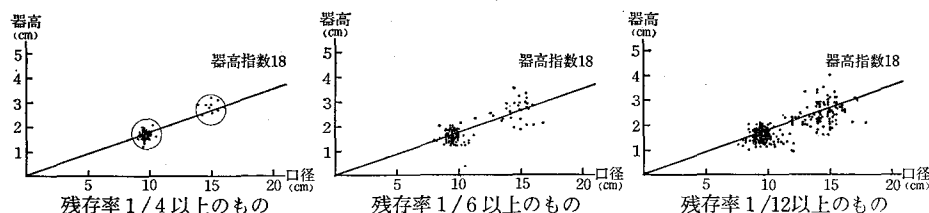
出土遺物の整理は、前章で示した種類と器種とに分け、遺構・層位での共伴関係をもとにして変化を考察する方法で行なっている。そして各器種別の変化と共伴関係をもとにして土器様式を設定することが第1の課題であるが、消費地の研究においては、各種類・各器種の土器・陶磁器がどのような比率で用いられたかを知ることが重要である。そのためには土器・陶磁器の個体数を算出しないといけないが、これを異なる方法で計算すると数値に大きな差を生じる場合がある。

個体数の計算は、個体識別によって行なうことが最も正確であるが、本調査区で出土した土器・陶磁器類は数十万片を数える。この個体を識別することは事実上不可能であり、また土師器・須恵器・陶磁器の種類の別によって識別の精度が変わる。また破片数の計算は、おおよその傾向を知るには有効であるが、破損の程度によって誤差を生じやすい。そこで本報告書では、異なる種類・器種の土器・陶磁器について、ほぼ同一の精度で計算でき、大量の資料の処理が可能である口縁部計測法によって個体数の計算を行なった。まずその方法を示す。

口縁部計測法 (1)出土した土器・陶磁器を接合した後、口縁部を含むものをすべて抽出する。(2)抽出した土器・陶磁器を遺構・層位ごとに、種類と器種とに分け、分類を行なう。(3)分類した土器・陶磁器の口径と器高と残存率(残存する口縁周の長さ/復原した口縁全周の長さ)を計測する。(4)種類、器種、分類、法量を同じくする土器・陶磁器の残存率を合計し、その個体数とする。なお、残存率の計算は、以下のように行なった。半径5mm間隔の同心円を描き、この同心円を15°ずつ24分割する。計測する口縁部片を該当する円周上におき、全周に対する比率を読みとった。また同じ器種に属するものは法量を口径で区別し、5mmごとに残存率を合計した。(例:土師器・皿・A<sub>1</sub>類・口径14.5cm以上15.0cm未満・1/3破片→3点で1個体と計算)

口縁部計測法は、口縁部の平面形が円形であるものについては、種類と法量と破損の程度が異なる大量の土器の個体数をほぼ同じ精度で計算できる。また土器・陶磁器の考察には、口縁部の分類が有効であるという利点がある。ただし口縁部は破損して失われやすいという欠点もある。陶磁器の高台や高杯の軸部のように破損しにくい部分で個体数を計算

表4 計測値の誤差 (S E22出土の土師器皿)



すると、口縁部計測法によるより多い数値を得ることがある。これは口縁部計測法で得た個体数の総量を補正する手掛かりとなるが、各種類・各器種の土器・陶磁器が占める比率の計算には口縁部計測法による数値が有効である。

**計測値の利用** 遺跡から出土した土器を考察する場合、より小さな破片に至るまで、分類・計測の対象にすることが望ましいが、小さな破片の計測値は誤差が生じやすく不正確であることが多い。

表4は計測値の誤差を法量表で示したものである。残存率1/6未満のものを含めると数値は分散するが、同1/6以上は比較的まとまり、同1/4以上に限ると口径の計測がより正確になるので、一定の範囲に集中することが判る。

他方、遺物の破損の程度は遺構の種類や埋積の状況によって大きく異なるが、本調査区で発掘例が多い井戸の遺物の個体数についてみると、1/6以上のものは1/12以上のものの70～80%程度であることが多いのに対して、1/4以上のものに限定すると40%以下になる例が多い。

このことから本報告書では残存率1/6以上の土器・陶磁器の計測値を用いることとし、1/6未満で重要なものについては別に示した。

なお、本調査区の遺構出土品で分類・計測の対象とした土器・陶磁器の口縁部破片総数は5204点(土師器88.9%、須恵器2.8%、瓦器碗・皿1.2%、その他の瓦器2.5%、灰釉系陶器2.0%、白磁1.1%、青磁0.6%、青白磁0.1%、その他0.8%)であり、これを口縁部計測法で完形品に換算すると794.8個体分(土師器98.4%、須恵器0.2%、瓦器碗・皿0.4%、その他の瓦器0.5%、灰釉系陶器0.2%、白磁0.2%、青磁0.1%)である。このうち、残存率が1/6以上の破片数は1825点(土師器98.8%、須恵器0.1%、瓦器碗・皿0.3%、その他の瓦器0.4%、灰釉系陶器0.2%、白磁0.1%、青磁0.1%)であり、完形品に換算すると458.3個体分である。本章第6節では、この458.3個体分について、種類及び器種の構成比率を時期別に示す。

## 2 土 師 器

土師器は供膳用のものが主であり、その時期区分の大略は表2(P27)のようにまとめることができる。この各期は、口縁部形態(調整)と法量の変化とによって3～5の小期に分けることができるが、まず基本となる口縁部形態の分類を示す。

### (1) 土師器の分類(表5)

土師器杯・皿・碗の口縁部は形態と調整とによって次のように分類することができる。

#### A類(外面篋削り手法)

A<sub>1</sub>類：口縁部に幅広い横撫でを施す(b手法)。

A<sub>2</sub>類：口縁端部にまで篋削りを施す(c手法)。

A<sub>3</sub>類：口縁端部にまで篋削りを施すが、口縁端部外面直下に横撫でが残る。

#### B類(「て」字状口縁手法, e手法)

B<sub>1</sub>類：口縁端部に1段の横撫でを施す。撫で部分の外反が弱く、器壁が薄い。

B<sub>2</sub>類：口縁端部の撫で部分が強く外反し、端部を内側に肥厚させる。器壁が薄い。

B<sub>3</sub>類：撫で部分の外反が強く、端部を内側に肥厚させるが、器壁が厚い。

B<sub>4</sub>類：撫で部分の外反と端部の肥厚が弱く、器壁が厚い。

#### C類(2段撫で手法)

C<sub>1</sub>類：口縁部に2段の横撫でを施し、上段の撫での部分が外反する。器壁が薄い。

C<sub>2</sub>類：上段の撫での部分が弱く外反し、器壁が厚い。

C<sub>3</sub>類：上段の撫での部分が弱く内彎し、端部が丸い。

C<sub>4</sub>類：上段の撫での部分がつまみ上げたようになる。

C<sub>5</sub>類：口縁端部に面取りを施す。

#### D類(1段撫で手法 a 群)

D<sub>1</sub>類：口縁部に1段の横撫でを施し、外反させる。口縁端部は丸い。

D<sub>2</sub>類：口縁部に1段の横撫でを施し、直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。

D<sub>3</sub>類：口縁部に1段の横撫でを施し、弱く内彎させる。口縁端部は丸い。

D<sub>4</sub>類：口縁部に1段の横撫でと端部面取りを施し、弱く内彎させる。

D<sub>5</sub>類：1段撫でと口縁端部面取りを施すが、直線的で底部との境が屈曲する。

D<sub>6</sub>類：1段撫でと口縁端部面取りを施し、直線的。器壁がやや薄い。

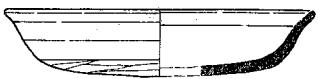
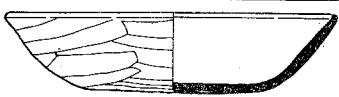
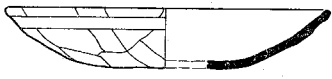







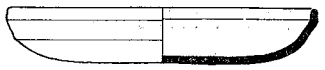

#### E類(1段撫で手法 b 群)

E<sub>1</sub>類：口縁部に1段の横撫でを施す。直線的に立ち上がり、端部が丸く、器壁が薄い。




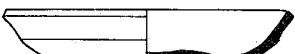
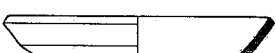

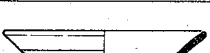
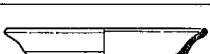
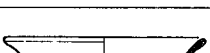
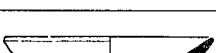

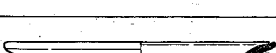
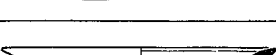
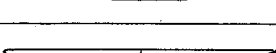
E<sub>2</sub>類：1段撫での部分が弱く外反し、端部を内につまむ。

E<sub>3</sub>類：1段撫での部分が外反し、端部を丸くおさめる。

表5 土師器杯・皿・碗の口縁部分類(1)

分類	例	備考	
A <sub>1</sub> 類		横撫でを施す (b 手法)	外面鋭削り 手法 (杯・皿・碗)
A <sub>2</sub> 類		鋭削りを施す (c 手法)	
A <sub>3</sub> 類		1 段の横撫で + 鋭削り	
B <sub>1</sub> 類		弱く外反し 器壁が薄い	「て」字状 口縁手法 (杯・皿)
B <sub>2</sub> 類		強く外反し 器壁が薄い	
B <sub>3</sub> 類		強く外反し 器壁が厚い	
B <sub>4</sub> 類		弱く外反し 器壁が厚い (宇野78b <sub>2</sub> 類)	
C <sub>1</sub> 類		強く外反し 器壁が薄い	2 段撫で 手法 (皿)
C <sub>2</sub> 類		弱く外反し 器壁が厚い (宇野78a <sub>2</sub> 類)	
C <sub>3</sub> 類		弱く内彎し 端部が丸い	
C <sub>4</sub> 類		上段をつまみ 上げて撫でる (宇野78a <sub>4</sub> ・b <sub>4</sub> 類)	
C <sub>5</sub> 類		口縁端部に 面取りを施す (宇野78a <sub>5</sub> ・b <sub>5</sub> 類)	

土師器杯・皿・碗の口縁部分類(2)

D <sub>1</sub> 類		外反し 端部が丸い	1 段撫で 手法 a 群 (皿・少量の碗)
D <sub>2</sub> 類		直線的で 端部が丸い	
D <sub>3</sub> 類		弱く内彎し 端部が丸い	
D <sub>4</sub> 類		口縁端部に 面取りを施す (宇野78a <sub>8</sub> ・b <sub>8</sub> 類)	
D <sub>5</sub> 類		直線的で 端部面取り (宇野78a <sub>8</sub> ・b <sub>8</sub> 類)	
D <sub>6</sub> 類		端部面取り 器壁が薄い	
E <sub>1</sub> 類		直線的で 端部が丸い	1 段撫で 手法 b 群 (皿・碗)
E <sub>2</sub> 類		弱く外反し 端部を内につまむ (宇野78a <sub>10</sub> ・b <sub>10</sub> 類)	
E <sub>3</sub> 類		弱く外反し 端部が丸い (宇野78a <sub>7</sub> 類)	
E <sub>4</sub> 類		外反し、横撫で 下端部が肥厚する	
F <sub>1</sub> 類		端部が丸く 器壁が厚い	1 段撫で 手法 C 群 (皿・少量の碗)
F <sub>2</sub> 類		直線的で撫での 部分が外反する	
F <sub>3</sub> 類		直線的で 端部をつまむ	
F <sub>4</sub> 類		直線的で 器壁が薄い (宇野78a <sub>3</sub> 類)	

(京文研78, 同志社調査会78, 京大埋文研78・80, 本報告書から作成した) 縮尺 1/4



E<sub>4</sub>類：1段撫での下端部が肥厚し、以下に強い指圧痕を残す。

F類(1段撫で手法c群)

F<sub>1</sub>類：口縁部に一段の横撫でを施し、口縁端部が丸い。直線的で器壁が厚い。

F<sub>2</sub>類：直線的に低く立ち上がり、撫での部分が弱く外反して、口縁端部をつまむ。

F<sub>3</sub>類：直線的に立ち上がり、口縁端部をごく弱くつまむ。

F<sub>4</sub>類：直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。器壁が薄い。

以上の各類は、本調査区から出土した土師器を検討するため、平安京とその周辺の地域から出土する平安～室町時代の土師器杯・皿・碗の代表的なものについて、口縁部形態(調整)を分類したものである。A～Fの各類は、必ずしも時期差を示すものではなく、器種や法量によって分類した中で各類が占める比率の変化に時期差が読みとれる(表2)。なお本分類にあたるものは、平安前・中期ごろには畿内に広く分布する。以後は山城以外での出土例が少なくなり、室町中・後期ごろには、山城以外でもしばしば出土する。

## (2) 法量

法量についての考察は、時期幅の大きい資料や計測誤差のあるものを除き、良好な一括遺物で完形品を多数含むものによらなければならない。本報告書では残存率1/6以上のものについて基礎資料を作成したため、法量については若干の誤差を含むと予想される。これを補正するため、口径1.0cmごとの個体数を示すグラフを法量表に付した(表6～12)。このグラフで個体数が急激に増加する法量を1つの規格とみなし、大きなものからAⅠ・AⅡ……とする。

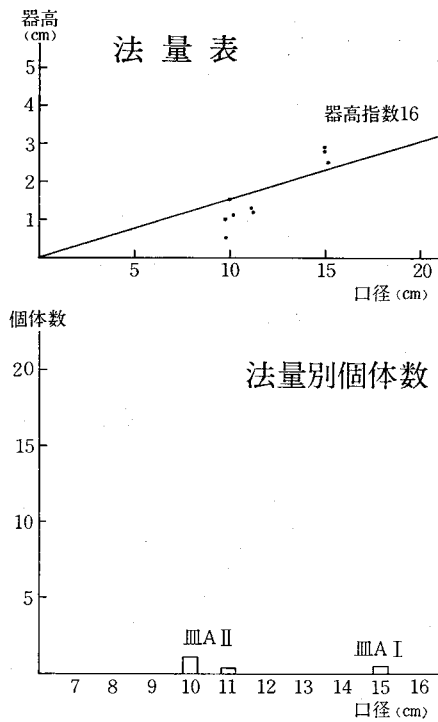
## (3) 土師器の変化

本調査区で得られた遺構出土品には、良好な一括遺物と考えるものと、時期幅のある遺物からなるものがある(P89表20)。このうち比較的良好な資料である、平安京Ⅲ期のS E25、平安京Ⅳ期のS E22・S E30・S D13、中世京都Ⅰ期のS D11上層・S D06、中世京都Ⅱ期のS K10出土品をとりあげて考察を加えることにする。

S E25(表6, P28) 本遺構は遺物の出土量が少なく、口縁部形態の比率と法量とを問題にするには十分ではないが、平安京Ⅳ期の資料との差をみるために示す。皿AⅠは口径15cm(口径14.5cm以上15.5cm未満のもの)に中心があり、口縁部形態はC<sub>2</sub>類が多数を占める。皿AⅡは口径10cmに中心があり、11cmのものもある。口縁部形態はB<sub>4</sub>類が46.4%、C<sub>2</sub>類が11.9%、C<sub>4</sub>類が41.7%である。

平安京Ⅲ期の土師器皿は、2段撫で手法(C類)の大型皿AⅠと、「て」字状口縁手法(B

表6 SE25出土の土師器皿  
(平安京Ⅲ期新段階)



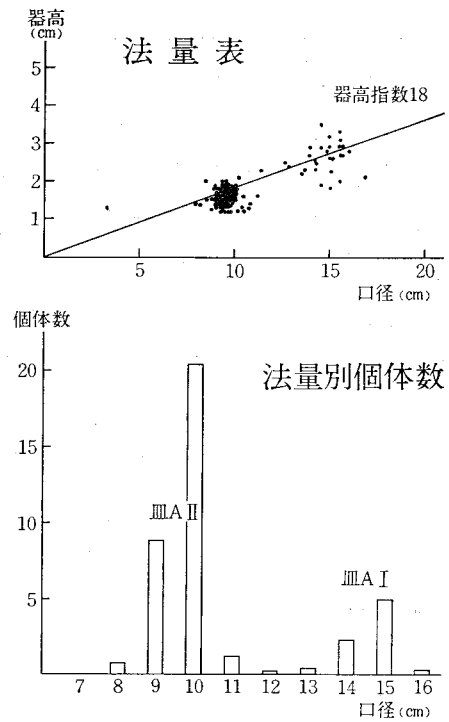
口径 口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
B <sub>1</sub> 類	—	—	—	63.4	0	—	—	—	0	—
C <sub>2</sub> 類	—	—	—	0	44.4	—	—	—	100	—
C <sub>4</sub> 類	—	—	—	36.6	55.6	—	—	—	0	—

法量別口縁部形態の比率(単位%)

口径	規格	皿A II	皿A I
B <sub>1</sub> 類		46.4%	0%
C <sub>2</sub> 類		11.9%	100%
C <sub>4</sub> 類		41.7%	0%

規格別口縁部形態の比率

表7 SE22出土の土師器皿  
(平安京Ⅳ期古段階)



口径 口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C <sub>3</sub> 類	—	0	6.2	11.7	0	0	50	34.0	15.5	0
C <sub>4</sub> 類	—	0	0	2.1	0	0	50	20.8	6.9	0
C <sub>5</sub> 類	—	25	5.2	13.4	14.8	0	0	7.5	49.6	100
D <sub>3</sub> 類	—	25	11.0	8.2	0	0	0	0	0	0
D <sub>4</sub> 類	—	50	77.6	64.6	85.2	100	0	37.7	28.0	0

法量別口縁部形態の比率(単位%)

口径	規格	皿A II	皿A I
C <sub>3</sub> 類		10.1%	21.3%
C <sub>4</sub> 類		1.4%	11.1%
C <sub>5</sub> 類		10.9%	36.5%
D <sub>3</sub> 類		9.0%	0%
D <sub>4</sub> 類		68.6%	31.1%

規格別口縁部形態の比率

類)の小型皿AⅡとを基本の組合せとする。ただし皿AⅠにも1段撫で手法(D類)のものが少量あり、皿AⅡではB類が比率を減じてC・D類が増加する。SE25出土品は、「て」字状口縁手法の皿AⅡが末期的なB<sub>4</sub>類であり、比率も小型皿全体の50%以下になっていることから、平安京Ⅲ期新段階に属することが判る。

SE22(表7, P28) 皿AⅠは口径15cmに中心があるが、SE25に比して14cmのものが増加する。口縁部形態は、C<sub>3</sub>類が21.3%, C<sub>4</sub>類が11.1%, C<sub>5</sub>類が36.5%, D<sub>4</sub>類が31.1%であり、2段撫で手法(C類)のものが主である。皿AⅡは口径10cmに中心があるが、SE25より9cmのものが増している。口縁部形態は、C<sub>3</sub>類が10.1%, C<sub>4</sub>類が1.4%, C<sub>5</sub>類が10.9%, D<sub>3</sub>類が9.0%, D<sub>4</sub>類が68.6%であり、1段撫で面取り手法のもの(D<sub>4</sub>類)が主である。

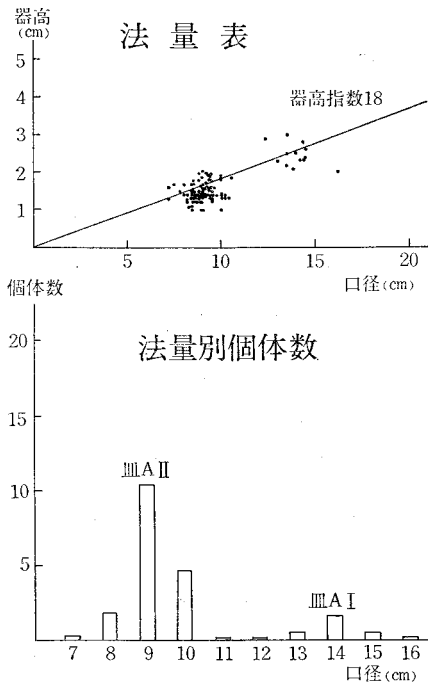
SE30(表8, P30) 皿AⅠは口径14cmに中心がある。口縁部形態はC<sub>3</sub>類が12.3%, C<sub>5</sub>類が33.9%, D<sub>3</sub>類が12.3%, D<sub>4</sub>類が41.5%であり、1段撫で手法(D類)のものが約半数を占めている。またC類では2段撫で面取り手法(C<sub>5</sub>類)のものが主体をなす。皿AⅡは口径9cmのものが10cmのものより多くなる。口縁部形態はC<sub>3</sub>類が4.9%, C<sub>4</sub>類が6.1%, C<sub>5</sub>類が3.5%, D<sub>3</sub>類が12.1%, D<sub>4</sub>類が73.4%であり、1段撫で面取り手法のものが、SE22よりさらに増加する。

SD13(表9, P31) 皿AⅠは口径14cmのものが大多数を占める。口縁部形態はC<sub>3</sub>類が12.9%, C<sub>4</sub>類が2.8%, C<sub>5</sub>類が33.2%, D<sub>4</sub>類が51.1%であり、皿AⅠでも1段撫で面取り手法(D<sub>4</sub>類)が主体をなすようになる。また数値的には2段撫で面取り手法(D<sub>5</sub>類)のものが、30%以上を占めているが、SE30と比較すると2段撫での稜が明確でなく、1段撫で手法のものとの識別が難しいものが多くなる。皿AⅡは口径9cmのものがほとんどである。口縁部形態は、C<sub>3</sub>類が9.2%, D<sub>3</sub>類が14.8%, D<sub>4</sub>類が76.0%であり、1段撫で手法(D類)のものが90%以上を占めるようになる。

IV  
平安京~~Ⅲ~~期は、「て」字状口縁手法(B類)の皿がなくなり、2段撫で手法(C類)の大型皿AⅠと1段撫で手法の小型皿AⅡを基本の組合せとするが、皿AⅠでもD類、特に1段撫で面取り手法のもの(D<sub>4</sub>類)が増加していく。この変化は皿AⅠの口径が15cmから14cmに、皿AⅡの口径が10cmから9cmになる法量の減少と併行して生じたと考える。小型の皿の調整に適した1段撫で面取り手法が、まず小型皿AⅡに採用され、次いで大型皿AⅠに及んだともいえる。

皿AⅠの主体が2段撫で手法(C<sub>3</sub>~C<sub>5</sub>類)のものであり、皿AⅡの主体が1段撫で手法

表8 S E30出土の土師器皿  
(平安京Ⅳ期中段階)



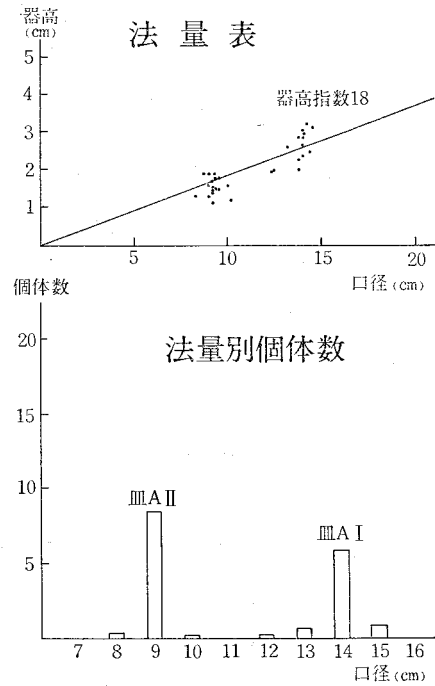
口径 器高	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C <sub>3</sub> 類	0	0	6.4	3.6	0	0	0	13.3	0	0
C <sub>4</sub> 類	0	0	1.6	9.4	0	0	0	0	0	0
C <sub>5</sub> 類	0	16.9	5.2	3.6	0	0	0	63.3	33.3	100
D <sub>3</sub> 類	0	0	14.0	10.8	0	0	30.8	0	33.3	0
D <sub>4</sub> 類	100	83.1	72.8	72.6	100	100	69.2	23.4	33.3	0

法量別口縁部形態の比率 (単位%)

口径 器高	規格	皿A II	皿A I
C <sub>3</sub> 類		4.9%	12.3%
C <sub>4</sub> 類		6.1%	0%
C <sub>5</sub> 類		3.5%	33.9%
D <sub>3</sub> 類		12.1%	12.3%
D <sub>4</sub> 類		73.4%	41.5%

規格別口縁部形態の比率

表9 S D13出土の土師器皿  
(平安京Ⅳ期新段階)



口径 器高	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C <sub>3</sub> 類	—	0	21.7	0	—	0	0	16.4	0	—
C <sub>4</sub> 類	—	0	0	0	—	0	0	3.6	0	—
C <sub>5</sub> 類	—	0	0	0	—	0	40	37.9	0	—
D <sub>3</sub> 類	—	0	3.9	0	—	0	0	0	0	—
D <sub>4</sub> 類	—	100	74.4	100	—	100	60	42.1	100	—

法量別口縁部形態の比率 (単位%)

口径 器高	規格	皿A II	皿A I
C <sub>3</sub> 類		9.2%	12.9%
C <sub>4</sub> 類		0%	2.8%
C <sub>5</sub> 類		0%	33.2%
D <sub>3</sub> 類		14.8%	0%
D <sub>4</sub> 類		76.0%	51.1%

規格別口縁部形態の比率

(D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>類)のものであるSE22が平安京Ⅳ期古段階にあたり、ⅢAⅡでも1段撫で手法(D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>類)が増加し、2段撫で手法の中では面取りを施すC<sub>5</sub>類が主体となるSE30は平安京Ⅳ期中段階にあたる。ⅢAⅠ・AⅡともに1段撫で面取り手法(D<sub>4</sub>類)のものが主となるSD13は平安京Ⅳ期新段階にあたる。

SD11上層(表10, P34) ⅢAⅠは口径14cmに中心があるが、12~13cmのものも存在する。口縁部形態はC<sub>3</sub>類が5.7%, C<sub>5</sub>類が2.9%, D<sub>5</sub>類が91.4%であり、D<sub>5</sub>類が大多数を占める。ⅢAⅡは口径9cmに中心があり、8cmのものもある。口縁部形態はC<sub>3</sub>類が1.7%, C<sub>5</sub>類が1.0%, D<sub>3</sub>類が16.6%, D<sub>5</sub>類が80.7%であり、D<sub>5</sub>類が主体をなすが、粘土円板の端部を折り曲げて弱く内彎させただけの作りが粗雑なD<sub>3</sub>類も増加する。

SD06(表11, P38) 本遺構では時期が遡る小量のものを除くと、ⅢAⅠの口径は、12cmに中心がある。口縁部形態はC<sub>3</sub>類が2.8%, D<sub>5</sub>類が85.1%, D<sub>6</sub>類が12.1%であり、1段撫で面取り手法(D<sub>5</sub>・D<sub>6</sub>類)のものが約97%に達する。ⅢAⅡは口径8cmのものが9cmのものよりやや多くなる。口縁部形態はC<sub>3</sub>類が1.1%, D<sub>3</sub>類が13.2%, D<sub>5</sub>類が55.1%, D<sub>6</sub>類が30.6%であり、扁平なD<sub>6</sub>類が増加する。

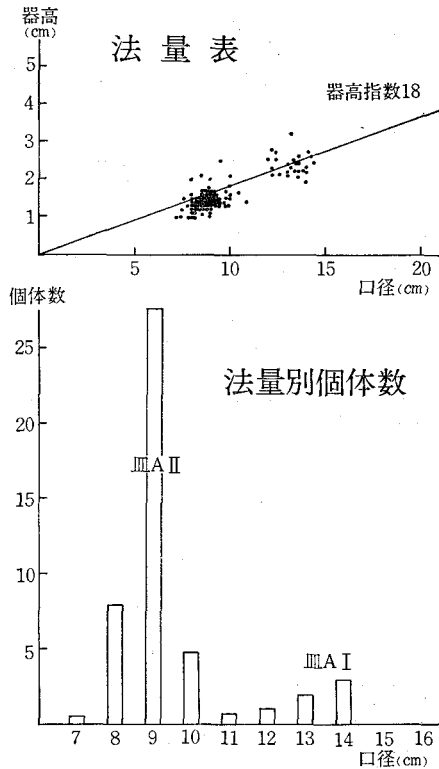
中世京都Ⅰ期には大型ⅢAⅠも小型ⅢAⅡも1段撫で面取り手法(D<sub>5</sub>・D<sub>6</sub>類)によるものが主体をなすが、ⅢAⅡでは口縁部の面取りが明確でないものが次第に増す。また土師器皿の法量の減少が著しい。

中世京都Ⅰ期古段階の皿では、平安京Ⅳ期新段階とほぼ同じ法量をもつが、口縁部と底部の境が屈曲するD<sub>5</sub>類の比率が増す。そしてⅢAⅠに12~13cmのものが増加して、ⅢAⅠ・AⅡともにD<sub>5</sub>類の比率が最も高くなるSD11上層が中世京都Ⅰ期中段階にあたる。なお、この時期に小量であるが椀が現われる。それに対して、ⅢAⅠの口径が12cmを中心とし、ⅢAⅡにも口径8cmのものが増すSD13が中世京都Ⅰ期新段階にあたる。この時期にはⅢAⅡで1段撫で面取り手法の比率が低下し、灰白色の椀が増加する傾向にある。

SK10(表12, P38) Ⅲと椀がある。ⅢAⅠは口径11cmに中心があり、10・12cmのものもある。口縁部形態は、E<sub>1</sub>類49.4%, E<sub>3</sub>類50.6%である。ⅢAⅡは口径8cmに中心があり、7cmのものも小量ある。E<sub>1</sub>類が58.4%, E<sub>3</sub>類が41.6%である。灰白色の椀AⅠは口径12cmに、椀AⅡは口径7cmに中心がある。椀は土師器総量の36.0%であり、そのうち凹み底小椀は椀AⅡの73.7%を占める。

中世京都Ⅱ期には、口縁端部面取り手法がすたれて、1段撫で手法b群(E類)によるものが増加する。また従来のⅢAⅠ・AⅡに加えて、灰白色の椀AⅠ・AⅡがさらに増加し、

表10 SD11上層出土の土師器皿  
(中世京都Ⅰ期中段階)



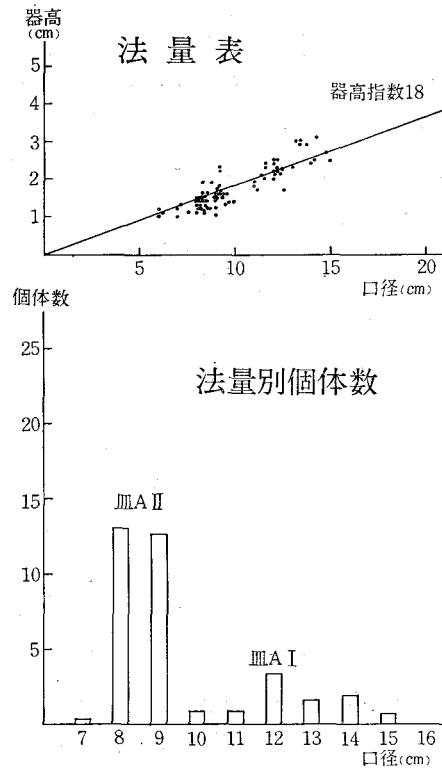
口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C <sub>3</sub> 類	0	2.5	0.8	0	21.1	0	0	5.8	—	—
C <sub>5</sub> 類	0	0	1.3	6.2	0	0	7.9	5.8	—	—
D <sub>3</sub> 類	0	16.8	15.7	22.0	0	0	0	0	—	—
D <sub>5</sub> 類	100	80.7	82.2	71.8	78.9	100	92.1	88.4	—	—

法量別口縁部形態の比率 (単位%)

口径	口径例	規 格	皿A II	皿A I
C <sub>3</sub> 類			1.7%	5.7%
C <sub>5</sub> 類			1.0%	2.9%
D <sub>3</sub> 類			16.6%	0%
D <sub>5</sub> 類			80.7%	91.4%

規格別口縁部形態の比率

表11 SD06出土の土師器皿  
(中世京都Ⅰ期新段階)



口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
C <sub>3</sub> 類	0	0	2.3	0	0	0	10.3	0	0	—
C <sub>5</sub> 類	0	0	0	0	0	0	0	32.7	38.9	—
D <sub>3</sub> 類	0	9.0	17.6	38.1	0	0	0	12.2	33.3	—
D <sub>5</sub> 類	0	59.9	50.0	61.9	76.2	85.2	89.7	55.1	27.8	—
D <sub>6</sub> 類	100	31.1	30.1	0	23.8	14.8	0	0	0	—

法量別口縁部形態の比率 (単位%)

口径	口径例	規 格	皿A II	皿A I
C <sub>3</sub> 類			1.1%	2.8%
D <sub>3</sub> 類			13.2%	0%
D <sub>5</sub> 類			55.1%	85.1%
D <sub>6</sub> 類			30.6%	12.1%

規格別口縁部形態の比率

(本遺構には時期が異なるものを少量含み、上の規格別表ではそれを除いた数値を示した。)

小型碗AⅡの中では凹み底小碗の比率が増す。

中世京都Ⅱ期古段階では、皿AⅠに1段撫で面取り手法を残すD<sub>1</sub>類があるが、E<sub>1</sub>類が主となる。また碗AⅡでは凹み底小碗の占める比率は高くない。SK10はE<sub>3</sub>類の比率が約50%になり、凹み底小碗が碗AⅡの70%以上を占めて、中世京都Ⅱ期中段階にあたることが判る。またこの時期は碗の器壁が薄く作りが丁寧であることに特色がある。中世京都Ⅱ期新段階には、碗の器壁が厚くなり、碗AⅠには法量の規格が変化する傾向がある。また皿AⅠではE<sub>1</sub>類の比率が増す。

以上にあげた平安京Ⅲ期から中世京都Ⅱ期にいたる土師器は、大・小2種の規格を基本とし、口縁部形態が法量の減少と密接な関係をもって変化したと考える。それに対して平安京Ⅱ期には杯と皿の区別があり、中世京都Ⅲ期には皿の規格が増加して、本調査区で主体をなすものの差が大きい。ここであげたものは、土師器の変化からみて、大きくは一つのまとまりをなす時期のものである。

各期の年代 以上で考察した土師器の各期の正確な実年代を知ることは困難であるが、他遺跡の例と今回の調査とによって得られた知見を記す。

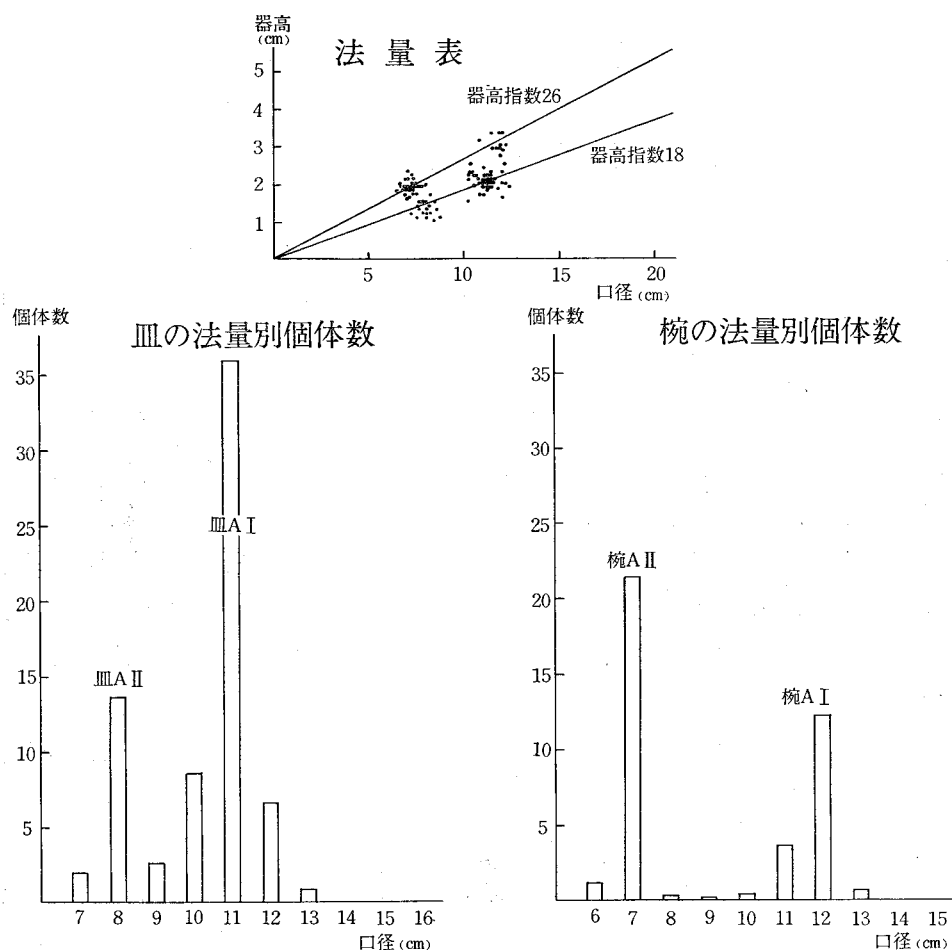
遺構の実年代が判り、良好な遺物が出土した例は次の3例がある。平城上皇没年(824年)に年代の下限をもつ平城京SE311B様式の土師器〔奈文研62〕は平安京Ⅰ期古段階にあたり、平安宮内からは、これに先行する最古段階の資料が出土している。<sup>(1)</sup>寛治5(1091)年5月13日の墨書がある須恵器鉢が出土した平安京左京四条一坊SE-8出土の土師器は平安京Ⅲ期新段階にあたる〔平安京調査会75〕。天文1(1532)年に焼け落ちた<sup>(2)</sup>と考える山科寺内町第2号石室出土の土師器は中世京都Ⅳ期中段階にあたる。このことから、きわめて<sup>(3)</sup>おおまかではあるが、平安京Ⅰ～Ⅳ・中世京都Ⅰ～Ⅳ期の8期は、8世紀末から16世紀中葉にかけての約800年であり、各期は100年を前後する期間と予想される。また、各期の古・中・新の小期は型式学的にみて連続的なものであり、各期をほぼ3等分すると考える。

付近の遺跡で編年研究が行なわれているのは、同志社大学キャンパス内の遺跡である〔同志社調査会78b〕。同遺跡におけるⅠ期は平安京Ⅳ期、Ⅱ期は中世京都Ⅰ期、Ⅲ期は中世京都Ⅱ期にほぼ相当し、それぞれ12・13・14世紀ごろの年代が与えられている。

本調査区では実年代の判る遺構や焼土層、紀年のある遺物は出土しなかったが、遺跡の盛衰と、関連する文献資料(表13)とをあわせて上述の年代観を考察すると次のように理解することができる。

遺跡から出土した土器・陶磁器の量を時期別にまとめると表14の通りである。本調査区

表12 SK10出土の土師器皿・椀（中世京都Ⅱ期中段階）



口径	7cm	8	9	10	11	12	13	14	15	16
E <sub>1</sub> 類	64	57.9	56.2	39.4	51.9	49.1	34.8	—	—	—
E <sub>2</sub> 類	36	42.1	43.8	60.6	48.1	50.6	65.2	—	—	—

皿法量別口縁部形態の比率 (単位%)

口径	規格	皿A II	皿A I
E <sub>1</sub> 類		58.4%	49.4%
E <sub>2</sub> 類		41.6%	50.6%

皿規格別口縁部形態の比率

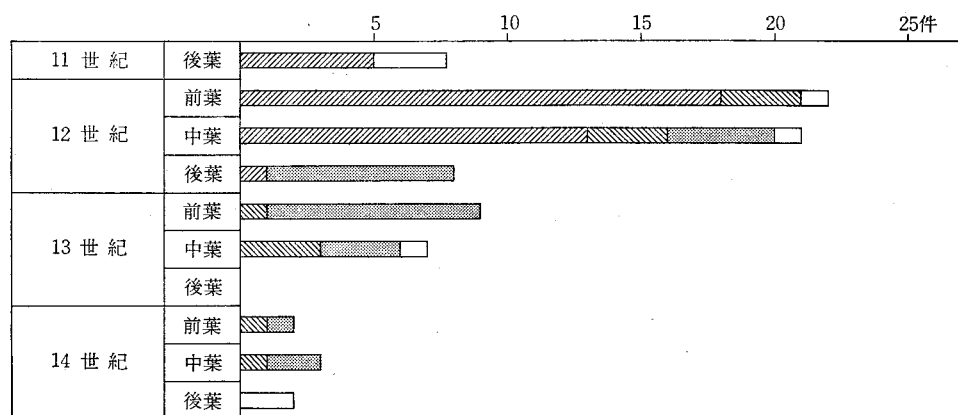
比率	皿A II	皿A I	椀A II	椀A I
総量との比率	16.6%	47.4%	20.9%	15.1%
器種内での比率	26.0%	74.0%	58.0%	42.0%
凹み底の比率	0%	0%	73.7%	0%
器種の比率	64.0%		36.0%	

皿・椀・凹み底椀の比率

(総個体数110)



表13 関連文献資料の数量と構成 (表21参照)



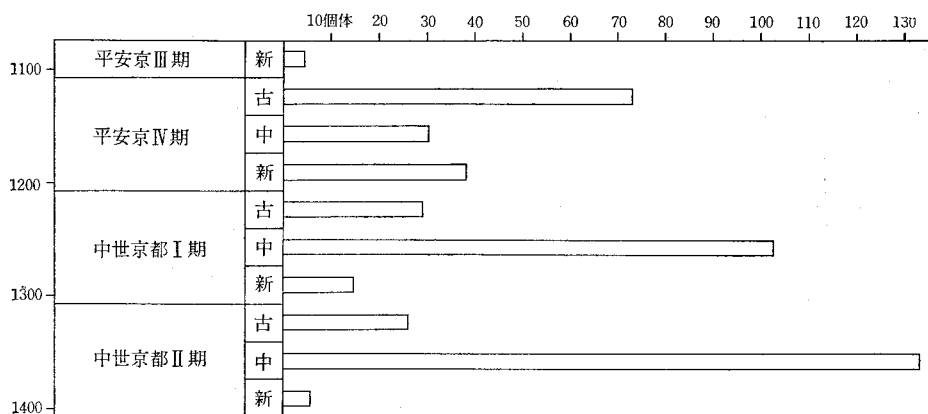
( 〰 創建・創始・供養    〰 再建・修理・改造・移転    ■ 被災    □ その他 )

では、護岸跡を除く、井戸・溝等の遺物は平安京Ⅲ期新段階から出土しはじめる。そして出土量が著しく多い時期は平安京Ⅳ期古段階、中世京都Ⅰ期中段階、中世京都Ⅱ期中段階である。中世京都Ⅱ期新段階以後は遺物の出土量が急速に減少する。これと文献資料(表13)とを対比すると、遺物量の増加に反して、文献に現われる頻度が低下することが判るが、文献資料のうち創建・再建等の建築関係の記事と比較すると一定の関係のあることが判る。

鴨東の本遺跡一帯が本格的に開発されるのは、法勝寺が造営される承暦1(1077)年以後のことである[宇野79]。また本調査区は平安後期には、岡崎を中心とする遺跡群、特に白河北殿の北辺にあたり、院の近臣の役宅があった[川上77]。この白河北殿が院の御所として完成移徙されるのは元永1(1118)年7月10日であり、大治4(1129)年には、改造され北へ拡張されている[杉山62]。そして12世紀の文献をみると、建築関係の記事が最も多いのは12世紀前葉である。遺物の出土量が多い平安京Ⅳ期古段階はここにあたる可能性が強い。

中世京都Ⅰ期中段階には、従来あった遺構の多くを埋積する形で多量の土器が投棄されている。12世紀後葉から13世紀にかけては建築関係の記事が減少し被災関係の記事が増加するが、この間でやや被災記事が少なく建築関係の記事が多いのは13世紀中葉である。保元の乱で焼失した白河北殿の付近には寿永2(1183)年に、崇徳院と藤原頼長の霊を鎮めるため栗田宮が営まれるが、栗田宮は康元1(1256)年に焼失し、再建されたとする記事等が中世京都Ⅰ期中段階の遺物量の増加と関連する可能性がある(表21)。

表14 出土遺物総量の変化（主要遺構出土品で残存率1/6以上のもの）



14世紀には本遺跡付近の記録は少ないが、前・中葉には建築関係の記事があり、後葉にはない。また14世紀後葉にはそれまでと性格を異にする記事がある。鎌倉時代には本遺跡の北に藤原北家勅修寺家流の本拠である吉田遺跡の中心地があったが、この勢力は南北朝の内乱時、南朝方に加担したため没落する〔泉80〕。これを示すのが永徳4(1384)年の足利義満寄進状である。同寄進状によると、「東は神楽岡西、南は近衛末、西は河原(鴨川)、北は土御門末を限る」吉田遺跡の主要な地域が神領として吉田社に寄進される。また応永3(1396)年には足利義持が本調査区を含む、「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原(除崇徳院、大吉祥院敷地)」の熊野神社境内管領を聖護院に命じる〔川上77〕。本調査区では中世京都Ⅱ期中段階に遺物の出土量が多いが、同新段階には出土量が激減して、近世京都Ⅲ期(江戸後期)に至る。本遺跡付近では14世紀になると遺跡の性格が大きく変わるが、この出土遺物が減少する時期を14世紀後葉ごろとすると、上のような大きな動きのある時期と一致する。

以上の諸点から、直接的な証拠は少ないが、平安京Ⅳ期・中世京都Ⅰ期・中世京都Ⅱ期は、ほぼ12・13・14世紀にあたり、古・中・新の各段階は各期をほぼ3等分するものと考えられる。

土師器については、本遺跡以外のより良好な発掘例を加えることによって、各期をさらに細かく分期することが可能である。しかしより重要な課題は、他の種類の土器・陶磁器との関係を知ることにある。ただし、種類が異なり、扱い方にも差があったと予想される土器・陶磁器の相伴関係を知るためには、より良好な一括遺物を多数検討することが必要である。土師器の年代の考察に瓦器や陶磁器の年代を採用しなかったのは異なる種類の土

器・陶磁器についてはその共伴関係を明確にし土器様式を確立することが先決と考えるからである。ただし、本遺跡の資料だけでは、土器様式を設定するには十分でないため、次節以下では各遺構での共伴関係を基礎資料として示すことにする。

### 3 瓦 器

瓦器は、碗、皿、盤、羽釜、鍋、口付手鍋等がある。このうち平安京Ⅲ期新段階～同Ⅳ期古段階の土師器と共伴した瓦器は碗だけであり、以後は瓦器の器種がしだいに増加する。また碗と皿は楠葉産と考えるものが大部分を占め、和泉産のものも少量ある<sup>(6)</sup>。その比率は6.3:1である。

碗300は楠葉産の瓦器碗であり、内面に丁寧な暗文を、外面にはわずかに間隔のあく暗文を施し、横撫でによって口縁部が直線的になる。本例は橋本久和のいうⅠ-3期にあたり〔橋本80〕、平安京Ⅲ期新段階の土師器と共伴している(図版17S E25)。碗392・393は口縁部が内彎し、内面はわずかに間隔のあく暗文、外面には間隔のあく暗文を施す。Ⅱ-2期にあたり、平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している(図版18S E30)。またこれと共伴した瓦器小碗394は内面に丁寧な暗文を施し、整った断面三角形の高台をもつ。なお小片であるため実測ができなかったがⅡ-1期にあたる瓦器碗の破片がSE40で平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。碗429は器壁が薄く、内面に省略した暗文、外面には口縁部付近にわずかに暗文を施し、Ⅱ-3期にあたる。この碗は平安京Ⅳ期新段階の土師器と共伴した(図版19S D13)。小碗132は、394より内面の暗文が粗雑であり高台も作りが悪い。またⅡ-3期にあたる瓦器碗133と平安京Ⅳ期新段階の土師器とが共伴している(図11S E18)。皿457は口径8.5cmであり、口縁部が外反して見込みに鋸歯状の暗文を施す。法量からみてⅢ-1期ごろと予想されるが、暗文は崩れていない。見込みに崩れた螺旋状の暗文を施す瓦器碗458と中世京都Ⅰ期古段階の土師器とを共伴している(図版19S D11中層)。

碗519・520は内面に渦巻状の暗文、見込みに崩れた螺旋状の暗文を施し、Ⅲ-2期にあたる。これは中世京都Ⅰ期中段階の土師器を伴出している(図版20S D11上層)。なお本調査区では中世京都Ⅰ期新段階以後の土師器と瓦器とが共伴した例を得ていないが、付近の同志社大学キャンパス内の遺跡では、Ⅳ期の瓦器碗が中世京都Ⅱ期の土師器と共伴している〔同志社調査会78b〕。これらの共伴関係から、橋本久和のいうⅡ-1～Ⅱ-3・Ⅲ-1～Ⅲ-3期の瓦器はそれぞれ平安京Ⅳ期古～新段階・中世京都Ⅰ期古～新段階の土師器に対応すると考える。また想定した実年代も一致する。

盤395・396は平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴し(図版18S E30)、本調査区で最も年代

の遡る瓦器盤である。すべて器壁が厚く、体部が内彎し、口縁端面が水平をなす。底部外面には靱圧痕を残す。395には内外面に、396は内面に磨きを施すが、撫でを施すだけのものもある。この形態の系譜をひくものは盤515のように中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した例がある(図版20SD11上層)。それに対して、盤556は口縁端面が丸味をもち、端部が内側に肥厚する。また器壁がやや薄く、体部は弱く外反して立ち上がる。胎土には砂粒を多く含み、炭素の吸着も悪い(図版21SD06)。中世京都Ⅰ期新段階以後の土師器と共伴する瓦器盤は、この形態をとるものが多く、その中には胎土に砂粒を多く含み炭素が吸着しない、土師器とみなしうるものもある。

瓦器羽釜には口縁部が内彎し3脚がつくもの(1a類)、口縁部が内彎し3脚がつかないもの(1b類)、口縁部が短く直立するもの(2類)、口縁部が直立しやや発達したもの(3類)、口縁部が長く直立するもの(4類)がある[宇野78]。なお口縁部が直立する羽釜には3脚のついた例がない。口縁部が内彎する羽釜1類は、平安京Ⅳ期新段階・中世京都Ⅰ期古段階の少量の土師器と共伴した例があり、确实には中世京都Ⅰ期中～新段階の土師器に共伴している(図版20SD11上層、図13SE19)。口縁部が短く直立する羽釜2類は小片が中世京都Ⅰ期中段階の土師器を出土したSD01にあり、また羽釜557は中世京都Ⅰ期新段階の土師器と共伴している(図版21SD06)。他方、付近の京都大学医学部構内AO18区SK16では平安京Ⅳ期新段階～中世京都Ⅰ期古段階の土師器にこの種の羽釜2類が共伴している[京大埋文研79第6図]。このことから、中世京都Ⅰ期を通じて口縁部が内彎する羽釜1類と、短く直立する羽釜2類とが共存したことが判るが、主体は羽釜1類にある。このほか口縁部が直立し、やや発達した羽釜3類の小片はSK04で中世京都Ⅱ期中段階の土師器に共伴した。口縁部が長く直立する羽釜4類の253～257は、中世京都Ⅲ期新段階の土師器と共伴している(図15SD24)。中世京都Ⅱ期には口縁部が直立する羽釜3類が主体となり、中世京都Ⅲ期の口縁部が長く直立する羽釜4類につながっていくようである。

瓦器鍋は、2段に屈曲する口縁部をもつが、この屈曲が顕著なものと、甘いものがある。口縁部が顕著に屈曲する瓦器鍋は、中世京都Ⅰ期中・新段階の土師器と共伴した例があり(図版20SD11上層、図14SE15)、屈曲が甘い例は中世京都Ⅱ期中段階の土師器と共伴している(図版21SK10)。なお本調査区では中世京都Ⅰ期中段階を遡る土師器と瓦器鍋の共伴例がないが、平安京左京四条一坊SD-3黄褐色砂層では平安京Ⅳ期新段階ごろの土師器と瓦器鍋、及び口縁部が内彎する瓦器羽釜とが共伴している[平安京調査会75]。

瓦器口付手鍋は出土例が少ないが、SD04とSK04で小片が中世京都Ⅱ期古～中段階の

土師器と共伴した。

以上の瓦器と土師器との関係をみると、土師器皿と瓦器碗の変化はほぼ対応し、また平安京Ⅳ期中段階以前の土師器と共伴する瓦器には碗・皿以外の器種がないといえる。平安京Ⅳ期中段階以後は瓦器の器種が次第に増加して、瓦器碗の占める比率が低下していくのである。

#### 4 須恵器

須恵器はすり鉢と甕とが大多数を占め、碗や壺等のごく小量である。

すり鉢は播磨東部で生産されたと想定されるものが主体をなし、その口縁部形態には一連の変化がある。口縁端面が外面と直角をなし、外側へ張り出すもの(1類)、口縁端面が外面と直角をなすもの(2類)、口縁端面が外面と鈍角をなすもの(3類)、口縁端面が丸味をもって肥厚するもの(4類)<sup>6)</sup>、口縁端面が上下に拡張するもの(5類)等がある[宇野78]。土師器との共伴例としては1類(360)と平安京Ⅳ期古段階の土師器(図版17S E40)、2類(115・398)と平安京Ⅳ期中段階の土師器(図11S E26、図版18S E30)、3類(134・182・183)と平安京Ⅳ期新段階・中世京都Ⅰ期中段階の土師器(図11S E18、図13S E17)、4類の小片と中世京都Ⅰ期新段階の土師器(図14S E15)、5類(232)と中世京都Ⅱ期中～新段階の土師器(図14S K08)等の例がある。これらと異なる共伴例もあるが、すり鉢1・2類は平安京Ⅳ期古～中段階の土師器、すり鉢3類は平安京Ⅳ期新～中世京都Ⅰ期古段階の土師器、すり鉢4類は中世京都Ⅰ期中～新段階の土師器、すり鉢5類は中世京都Ⅱ期の土師器と共伴する例が多い。

なお規格にもいくつかの種類があるが、小片が多く、規格を問題としうるだけの量を得ていない。なお上記のものと異なる系譜に属するものが小量ある。すり鉢340には外方に踏んばる高台があり焼成が悪い(図版17E12層)。すり鉢397は口縁端部が丸く胎土は精良で焼成が良い(図版18S E30)。すり鉢340は平安京Ⅳ期古段階、397は同中段階の土師器と共伴している。

甕には口縁端部が肥厚するものと素縁のもの、頸部が外反するものと直線的であるもの、胴部が球形に近いものと長胴のもの等がある。外面の叩きには格子叩きと平行叩き及び細かい綾杉状の叩き等があり、頸部に叩きを残すものと無であるいは削りでそれを消すものがある。また外面に叩き目を残さないものもある。甕にはこのようにいくつかの種類があるが、これらを系譜に別けて分類することは、まだできていない。おおよその傾向としては、平安京Ⅳ期の土師器に共伴するものには格子叩き、中世京都Ⅰ期の土師器に共伴す

るものには平行叩き、中世京都Ⅱ期の土師器に共伴するものには細かい綾杉状の平行叩きを施すものが多いといえる。

これらのうち22点について胎土分析を行ない、うち3点の甕については産地が同定されている〔檜崎ほか79〕。資料番号京大1は胴部外面に細かい綾杉状の叩き、内面に刷毛目と撫でを施す。口縁部が外反し頸部外面に右上

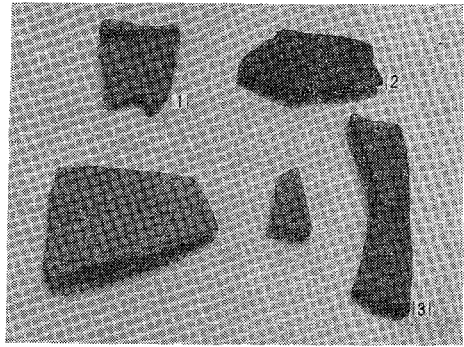


図22 胎土分析資料

がりの叩きを残す。焼成は悪く、SD08で中世京都Ⅱ期古段階の土師器と共伴した(図14-220, 図22-1)。京大2は右上がりの平行叩きを残す甕。SD11中層で中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した(図版19-459, 図22-2)。京大5は外面に粗い格子叩き、内面に刷毛目と撫でを施し焼成が良い。SD04で中世京都Ⅱ期古～中段階を中心とする土師器と共伴している(図22-3)。分析は主成分を原子吸光分析法により、その結果から、粘土化率と酸性度を計算して行なわれた。その結果、京大1・2は、兵庫県三木市与呂木10号窯と同明石市江井ヶ島出張窯の製品に、京大5は岡山県勝田郡勝間田町夫婦岩窯の製品に近似することが示されている。

## 5 陶磁器

陶磁器は、灰釉系陶器、中国製陶磁器、朝鮮製青磁が出土している。

灰釉系陶器 碗, 皿, 壺, 甕, すり鉢が出土している。

本調査区で灰釉系陶器碗・皿(山茶碗・山皿)が土師器と共伴した最も古い例はSE25である。碗は小片であり実測できないが、愛知県猿投山西南麓古窯址群(以下、猿投窯と略す)の製品であり、器壁が薄く、口縁部が外反する。共伴した土師器は平安京Ⅲ期新段階であるが、その中でも末期にあたり、年代は11世紀末～12世紀初め頃であろう。皿341も猿投窯の製品であり、断面梯形の高台を持ち、その畳付けに靱圧痕を残す。口縁部は外反し、口径9.0cmを計る(図版17E12層)。檜崎彰一のいう猿投三筋文陶器Ⅲ期(12世紀第2四半期)〔檜崎78〕に併行するものであり、平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴した。その想定した年代に大きな差はない。碗460は愛知県知多古窯址群の製品である。器壁は薄く、体部は直線的に低く立ち上がり、断面三角形のしっかりした高台を持つ(図版19SD11中層)。常滑三筋文陶器第2段階(12世紀第2四半期)に併行するものであり、中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した。碗522は猿投窯の製品であり、器壁が厚く、体部が丸味をも

って立ち上がる。断面三角形で小さな高台をもち、底部内面に指撫度を施す(図版20SD11上層)。三筋文陶器Ⅴ期(12世紀第4四半期)かそれより若干年代が降るものであり、中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した。このように碗460・522については、編年の序列が土師器と一致するが、想定した実年代は土師器が1小期分程度は新しいという結果を得た。この程度の差は土師器と陶磁器の使用期間の差とみなすべきか、いずれかの年代観を補正すべきかの判断は資料の増加を待つ。

灰釉系陶器壺・甕はすべて常滑の製品と思われる。檜崎彰一・赤羽一郎のいう古常滑第Ⅰ～Ⅳ段階[檜崎75, 赤羽77]の壺・甕の破片が出土しているが、包含層や出土遺物に年代幅がある遺構から出土した例が多く、共伴関係が判る資料を得ていない。平安京Ⅳ期の土師器を出土する遺構では、常滑甕の出土量はごく少なく、中世京都Ⅰ～Ⅱ期の土師器を出土する遺構では、少量は共伴することが多い。

灰釉系陶器すり鉢521は猿投窯の製品である。口縁部が弱く外反して端部が面をなし、高い高台がつく。猿投三筋文陶器Ⅳ期(12世紀第3四半期)にあたり、共伴した碗522や中世京都Ⅰ期中段階の土師器より年代が遡る(図版20SD11上層)。

中国製陶磁器 白磁, 青白磁, 青磁, 褐釉陶器, 黄釉鉄絵陶器, 緑釉陶器がある。

白磁327は小ぶりの玉縁口縁がつく碗であり、横田賢次郎・森田勉のいう白磁碗Ⅱ類の口縁部にあたる(図版17SE22)[横田・森田78]。本調査区で小ぶりの玉縁口縁がつく白磁碗で伴出遺物が判る例は、この1点であり、平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。大ぶりの玉縁口縁がつく白磁碗463・594は白磁碗Ⅳ類の口縁部にあたり、それぞれ中世京都Ⅰ期中段階、中世京都Ⅱ期中段階の土師器と共伴している(図版20SD11上層, 図版21SK10)。口縁部が外折し、輪花になる白磁碗431は白磁碗Ⅴ-3・c類にあたり、平安京Ⅳ期新段階の土師器と共伴した(図版19SD13)。このほか口縁端部が外折し、白磁碗Ⅴ～Ⅷ類のいずれかにあたる白磁碗小片が、平安京Ⅳ期中・新段階、中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した例がある(SE29, SE17, SD01)。白磁碗401は口縁部が弱く外反し、釉調が黄灰色を呈する(図版18SE30)。白磁皿Ⅵ類と同じ特徴をもつ碗であり、平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。

白磁碗底部328は、底部が厚く、高台を低く削り出す(図版17SE22)。白磁碗Ⅳ-1類の底部にあたり、平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。白磁碗底部432は、高台外面を垂直に、内面を斜めに削り出し、白磁碗Ⅱ類の底部にあたる(図版19SD13)。これは平安京Ⅳ期新段階の土師器と、高台の外面を垂直に、内面は段をもって削り出す白磁碗433と

に共伴している。また白磁碗462・222は見込み周縁の釉を蛇の目状に掻き取り、白磁碗Ⅶ類の底部にあたる(図版19S D11中層, 図14S D08)。中世京都Ⅰ期古段階、同新段階の土師器に共伴している。

なお白磁碗底部363は、胎土が青味を帯びる。高台の形状も、断面四角形の輪高台であり他の白磁と異なる特徴をもつ(図版17S E40)。越州窯系青磁の系譜を引くものと想定され、平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴している。

白磁皿は釉調が乳白色で高台のあるものとないもの、黄灰色で高台のないものがある。白磁皿362は、高台があり、口縁端部を丸くおさめる(図版17S E40)。白磁皿Ⅱ-1・a類にあたり、平安京Ⅳ期古段階の土師器と共伴している。白磁皿343は釉調が乳白色、高台がなく、上げ底であり、口縁部が外折する(図版17E12層)。白磁皿Ⅳ-1・a類に類似するが、高台状の削り出しはなく、平安京Ⅳ期古段階にあたる土師器に共伴している。白磁皿403は釉調が乳白色、口縁部が内彎し薄く、見込みに櫛描き文を施す(図版18S E30)。白磁皿Ⅶ-1類にあたり、平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。白磁皿344・402は釉調が黄灰色で、口縁部が内彎し、平底である(図版17E12層, 図版18S E30)。白磁皿Ⅵ-1・a類にあたり、それぞれ平安京Ⅳ期古・中段階の土師器と共伴している。

白磁皿404は高い高台と、直立して外折する口縁端部をもち、見込みに篋・櫛描きの花文を施す(図版18S E30)。景德鎮の製品と推測され、平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。

白磁壺342は、口縁部の折り返しが弱く、平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴している(図版17E12層)。また白磁水注464・560は、それぞれ中世京都Ⅰ期古・新段階の土師器と共伴している(図版19S D11中層, 図版21S D06)。

以上を簡単にまとめると、平安京Ⅳ期古段階の土師器に伴なう白磁としては、小ぶりの玉縁口縁をもつ碗があり、大ぶりの玉縁口縁をもつ碗や、口縁端部が外折する碗もあると考える。皿には、高台があり口縁端部を丸くおさめるもの、高台がなく口縁端部が外折するもの、口縁部が内彎して薄く、見込みに花文を施すもの等がある。また釉調が黄灰色で高台がなく口縁部が内彎する皿があり、これと同様の碗もある。このように、平安京Ⅳ期古段階の白磁碗・皿には多くの種類があり、以後平安京Ⅳ期新段階ごろから、種類と量を減じていく。この中で大ぶりの玉縁口縁をもつ碗は中世京都Ⅱ期の土師器との共伴例があるものの、中世京都Ⅰ期以後の土師器と共伴する例は少なくなる。口縁端部が外折する碗は中世京都Ⅰ期の土師器との共伴例があり、外折の部分がやや丸味をもつ。また見込み



の釉を蛇の目状に掻き取るものが増す。口禿げの碗・皿の、良好な資料は得ていない。

青白磁でまとまった共伴遺物が判るのは皿405のみである(図版18S E30)。高台がなく見込みに崩れた花文を施し、平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。このほか碗32は口縁端部が外折し、輪花状になる青白磁碗であり平安京Ⅳ期古段階～中世京都Ⅰ期中段階ごろの土師器と共伴している(図8SD12)。また青白磁合子蓋91は平安京Ⅳ期古段階～中世京都Ⅰ期古段階ごろの土師器と共伴した(図10SD09)。また、型押しによる陽刻花文青白磁碗289が攪乱層から出土し(図16)、同小片がSD13で中世京都Ⅰ期古～新段階の土師器と共伴した。

龍泉窯系青磁は碗が大多数を占める。碗523～525は内面に片切り彫り花文を施し、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2・b類にあたるが、花文は崩れている(図版20SD11上層)。中世京都Ⅰ期中段階の土師器と共伴した。同様に碗562も内面に崩れた花文を施し、中世京都Ⅰ期新段階の土師器と共伴している(図版21SD06)。本調査区で出土した龍泉窯系青磁碗では中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した小片が最も古いですが、土師器出土量が少なく、確実ではない。なお外面に蓮弁文を施した龍泉窯系青磁碗も出土しているが、まとまった共伴遺物が判る例を得ていない。

同安窯系青磁碗465は外面に櫛描き垂下文、内面に櫛描き電光文と篋描き花文とを施し、同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類にあたる(図版19SD11中層)。中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した。また同安窯系青磁皿526は、見込みに櫛描き電光文を施し、底部外面の釉を掻き取る(図版20SD11上層)。同安窯系青磁皿Ⅰ-2類にあたり中世京都Ⅰ期中段階の土師器に共伴している。

大宰府や北摂の遺跡では龍泉窯系・同安窯系青磁が12世紀中葉の土師器・瓦器に共伴することが示されているが[横田・森田78, 橋本80], 本調査区では12世紀に比定した土師器とこれらの青磁が共伴した確実な例がない。ただしA5・A6層出土の同安窯系青磁碗275等は遺構出土青磁より古い特徴をもち、年代が遡る可能性がある(図16)。

褐釉陶器としては四耳壺345が出土している(図版17E12層)。付近の京都大学医学部構内A O18区SK16で平安京Ⅳ期新段階～中世京都Ⅰ期古段階の土師器と共伴した褐釉四耳壺[京大埋文研79第6図I16]と比較すると、肩の張りがより強く、口縁端部が水平に外折する。また器壁が薄く釉調がよい。平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴している。

黄釉鉄絵陶器としては盤399が出土している(図版18S E30)。口縁端部の外折した部分が長く張り出し、端部上面に目痕を残す。平安京Ⅳ期中段階の土師器と共伴している。

緑釉陶器は盤の底部と思われる破片169が出土している(図12SD03)。見込みに刻文を施し、胎土は褐釉陶器に近い。中世京都Ⅰ期古～新段階の土師器と共伴している。

以上のように、本調査区では平安京Ⅳ期古段階の土師器に共伴する中国製陶磁器として、各種の白磁と褐釉陶器があるが、同中段階には青白磁、黄釉鉄絵陶器が加わり、中世京都Ⅰ期古段階に龍泉窯・同安窯系青磁が加わる。ただし、青磁の出現時期等については、平安京Ⅳ期中～新段階の良好な資料をより多く考察する必要がある。

## 6 土器・陶磁器の構成と比率

前節で、本調査区で得た、土器・陶磁器の共伴関係についての知見を示したが、本節ではこれらの土器・陶磁器がどのような比率で用いられたかを考察する。なおこのような作業は本来、土器様式を設定して年代を確定してから行なわなければならない。しかし現在の段階ではそれができていないため、遺構出土資料のうち、土師器が短い時期にまとまる資料を良好な一括遺物として扱い、その資料の時期を土師器による時期区分名で示した。土師器の時期がまとまらない資料は考察の対象から除外している。

算出した比率の信頼度と普遍性は遺物総量と遺構・遺跡の性格によって決まるため、まず時期別の遺物総量を示す(表14)。平安京Ⅳ期古段階、中世京都Ⅰ期中段階、中世京都Ⅱ期中段階の資料は比較的多く、平安京Ⅲ期新段階、中世京都Ⅱ期新段階の数値は除外した方がよいことが判る。またこれらは井戸、土坑、溝の出土品が大多数を占め、集落一般の遺構から出土したものである。そして本調査区の性格は、平安京Ⅲ期新段階～平安京Ⅳ期中段階ごろには、鴨東に拡張された平安京城の北辺にあたり、特に南に隣接する白河北殿

表15 土器・陶磁器の種類別の比率(\*は存在するが量が数値として現れないもの)

		土師器	瓦器	須恵器	灰釉系	白磁	青白磁	青磁	その他	石鍋
平安京Ⅲ期	新	95.7%	4.3%		*	*				
	古	99.3%	*	0.2%	*	0.5%			*	
平安京Ⅳ期	中	96.6%	2.7%	*	*	0.7%	*		*	*
	新	98.6%	1.4%	*	*	*			*	
中世京都Ⅰ期	古	100%	*	*	*	*		*		*
	中	98.2%	0.4%	*	1.4%	*		*	*	*
	新	100%	*	*	*	*		*		
中世京都Ⅱ期	古	100%	*	*	*					*
	中	100%	*	*	*	*				*
	新	100%								

の造営後(1118年以後)は、当地に院の近臣の役宅があったらしい。平安京Ⅳ期新段階以後は、栗田宮や熊野神社との関連で、別の展開があるが、中世京都Ⅰ期～中世京都Ⅱ期頃には、北に隣接する吉田遺跡(藤原北家勧修寺家流の本拠)がより盛んであった。

まず土器・陶磁器の種類別の比率をみると、土師器が最も多く、96%以上を占める(表15)。なお中世京都Ⅰ期新段階以後、土師器がほぼ100%を占めるのは、遺跡の中心から離れ、土師器を一括投棄した土器溜が多いためと考える<sup>(8)</sup>。

瓦器は平安京Ⅳ期新段階ごろから比率を減じ、その主体を、椀・皿から羽釜・鍋等の大型の器種が占めるようになる。

須恵器すり鉢・甕と灰釉系陶器壺・甕・すり鉢は、占める比率は高くないが、各期の遺構から、少量の破片が出土することが通例である。すり鉢・甕は灰釉系陶器より須恵器の方が多いが、中世京都Ⅰ期には灰釉系陶器の比率が増す。

中国製陶磁器の比率が数値として現われるのは、平安京Ⅳ期古・中段階であり、0.5～0.7%の数値を得ている。これは遺跡の性格の変化と密接な関係があり、この時期には通常の白磁のほかに、より高級品と考えられる青白磁も出土している。なお0.5～0.7%という数値は、大阪府高槻市の中世5遺跡における平均約1.6%[橋本80]、大阪府高石市大園遺跡における1%[大園遺跡調査会76]より少ない値である。しかし高槻市の中世5遺跡における比率は中世前期を中心とする資料について破片数で算出した数値である。本遺跡においても同様の方法で計算すると中国製陶磁器の比率は1.8%となり、高槻市におけるより、わずかに多い数値を得る。なお本調査区で残存率が1/6以上の破片数を計算すると中国製陶磁器は0.3%であり口縁部計測法による比率に近い数値を得ている。

器種別の比率をみると、平安京Ⅳ期古段階から中世京都Ⅰ期中段階にかけて、皿が96%以上を占め、土師器の占める比率とほぼ等しいが、以後はしだいに比率を減じ中世京都Ⅱ期新段階では50%以下になる(表16)。椀は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅰ期中段階にかけて2%を前後する比率であるが、以後比率を増し、中世京都Ⅱ期新段階では50%を越える。高杯はごく少量であるが、中世京都Ⅱ期の遺構からも出土する。壺は出土例が少ないが、甕と認定した破片には壺が含まれている可能性がある。羽釜とすり鉢は平安京Ⅳ期～中世京都Ⅱ期を通じてあり、盤と鍋はやや遅れて現われる。

各種類別の器種構成をみると、土師器には皿・受皿・糸切底皿・椀・高杯・羽釜がある(表17)。皿は平安京Ⅳ期古段階～中世京都Ⅰ期中段階にかけては約95%以上を占めるが以後は比率を減じる。椀は中世京都Ⅰ期中段階に現われて以後、比率を増し、先にみた皿・

表16 器種別の比率（\*は存在するが量が数値として現れないもの）

		皿	椀	高 杯	壺	甕	すり鉢	鍋	羽釜	甕
平安京Ⅲ期	新	94.3%	5.7%						*	
平安京Ⅳ期	古	99.3%	0.5%	*	0.2%	*	*		*	
	中	97.3%	1.7%	*	*	*	*		*	1.0%
	新	98.6%	1.4%	*		*	*	(*)	*	*
中世京都Ⅰ期	古	100%	*	*	(*)	*	*		*	*
	中	97.1%	2.6%			*	0.3%	*	*	*
	新	94.4%	5.6%			*	*	*		
中世京都Ⅱ期	古	81.9%	18.1%	*		*		*	*	*
	中	66.9%	33.1%				*	*	*	*
	新	48.2%	51.8%							

表17 土師器の器種別比率（\*は存在するが量が数値として現れないもの）

		皿A	皿B	受皿	糸切底皿	椀A	椀B	高杯	斐・羽金	総個体数
平安京Ⅲ期	新	76.6%		23.4%					*	5.3
平安京Ⅳ期	古	98.5%		1.5%				*	*	74.0
	中	95.1%		4.9%	*		*	*	*	24.2
	新	97.2%		2.8%					*	33.9
中世京都Ⅰ期	古	100%		*	*			*	*	9.4
	中	97.4%		1.4%	*	1.2%				86.3
	新	94.4%	*			5.6%				12.3
中世京都Ⅱ期	古	81.9%				18.1%		*		17.5
	中	66.9%		*		33.1%				120.6
	新	48.2%				51.8%				7.0

表18 各時期における瓦器，須恵器，陶磁器，石製容器の器種

[illegible]

表19 主要器種の変遷（\*は存在するが量が数値として現れないもの）

	皿	碗	鉢	甕	羽釜・鍋
平安京Ⅳ期	土師器 99.9% 白磁 0.1% 青白磁 * 灰釉系 *	瓦器 76.5% 白磁 23.5% 灰釉系 * 土師器 * (青磁 *)	須恵器 * (灰釉系 *)	須恵器 * (灰釉系 *)	土師器 * 石鍋 * 瓦器 *
中世京都Ⅰ期	土師器 99.9% 瓦器 0.1% 白磁 * 青磁 * 灰釉系 *	土師器 67.3% 灰釉系 20.1% 瓦器 12.6% 青磁 * 白磁 *	須恵器 * 灰釉系 *	須恵器 * 灰釉系 *	瓦器 * 土師器 * 石鍋 *
中世京都Ⅱ期	土師器 100%	土師器 100% 瓦器 * 青磁 * 白磁 * 灰釉系 *	須恵器 * 灰釉系 *	須恵器 * 灰釉系 *	瓦器 * 石鍋 *

碗の比率の変化は土師器の器種構成の変化によって生じたことが判る。受皿・高杯・羽釜は中世京都Ⅰ期にしたいに比率を減じ皿・碗が土師器の大多数を占めるようになる。なお各期を通じて土師器は出土遺物総量の96%以上を占めているが、これは消耗率が高いためと推定され、器種構成からみると、土師器は大きな比率を占めていない。

瓦器の器種は碗が平安京Ⅲ期新段階から中世京都Ⅱ期に至るまでであり、盤・羽釜・鍋・口付手鍋がやや遅れて加わる(表18)。

須恵器はすり鉢と甕が大多数を占め、ごくまれに碗が出土する。灰釉系陶器は壺・甕・すり鉢が主であり、碗・皿も出土している。

中国製陶磁器は碗・皿が主であり、これに合子・盤・壺等が加わる。

以上をもとに主要器種の変遷をみると次の通りである(表19)。皿は平安京Ⅳ期から中世京都Ⅱ期に至るまで、土師器が99.9%以上を占め、残りの0.1%弱が中国製磁器・瓦器・灰釉系陶器である。それに対して碗は平安京Ⅳ期には、瓦器が最も多く、白磁がこれに次いで、この2者で碗の大多数を占める。中世京都Ⅰ期には土師器、灰釉系陶器、龍泉・同安窯系青磁の比率が増し、瓦器と白磁は減少する。中世京都Ⅱ期には土師器が碗の大多数を占めるが、他遺跡の例では龍泉窯系青磁の比率も高まるようであり、瓦器は少量である。甕・すり鉢は須恵器と灰釉系陶器が大多数を占める。この両者では須恵器の方が多いが、中世京都Ⅰ期には灰釉系陶器の比率が高まる。羽釜・鍋は、平安京Ⅳ期には土師器が主体をなし、中世京都Ⅰ・Ⅱ期には瓦器が大多数を占める。また、各期を通じて少量の石鍋がある。

本調査区出土資料の概要は以上の通りであるが、この資料はまず南に隣接する院の御所や六勝寺関係の遺跡および北に隣接する吉田遺跡の中心地の資料と対比されるべきであり、次いで京の中心地、畿内・畿外の諸地域と比較するための基礎資料として扱うべきであろう。しかし本調査区の資料に限っても、上に示したように一定の変遷があり、また視点を変えるならば、この時期の京近郊における土器・陶磁器消費の特質をみることもできる。

本調査区の主体となる資料は中世前期(平安後期<sup>(9)</sup>～室町前期)に属するものである。この時期、京近郊で大量に消費する土器・陶磁器には、土師器、瓦器、須恵器、灰釉系陶器、各種中国製陶磁器があり、種類が多い。他方、器種構成は、碗・皿、壺・甕・すり鉢、羽釜・鍋等が主体をなして中国製陶磁器の一部を除くと比較的簡素である。そして、土器・陶磁器の種類と器種との間に密接な関係を認めることができる。すなわち、中世前期の京郊における基本的な食器組成は、煮沸には楠葉をはじめとする畿内で生産した瓦器羽釜・鍋、調理と貯蔵には播磨東部を中心とする西国諸地域で生産した須恵器すり鉢・甕、及び東海地方で生産した灰釉系陶器壺・甕・すり鉢、供膳には京近郊や畿内諸地域で生産した土師器と瓦器の皿・碗、及び中国製陶磁器という組合せを想定できる<sup>(10)</sup>。

この組成は、平城京出土品にみるような、土師器・須恵器という少ない種類の土器に多くの器種があり、施釉陶器は量が少なく用途も特殊であるという古代前期の在り方とは異質である。古代後期(平安前・中期)の平安京出土品では、土師器・須恵器の器種が減少する一方、黒色土器と緑釉・灰釉陶器に多くの器種があり、中国製陶磁器は小量である。この古代後期の段階をへて、平安後期に中世前期の食器組成が確立したと考える<sup>(11)</sup>。中世前期の個々の土器・陶磁器は古代より作りのわるいものが多いが、その食器組成はより高度な生産と流通の体制によって成り立っていたといえるであろう。そして中世後期には、この基本的な在り方は引き継がれるが、備前をはじめとする須恵器系陶器や、東海地方で生産した施釉陶器の比率が増し、近世の段階へと連なっていくのである。

〔注〕

- (1) 平安宮左兵衛府跡SD4出土品〔京文研78〕。
- (2) 土師器には墨書の年代に須恵器鉢の使用期間を加えた年代を与えることができるであろう。
- (3) 同遺跡を調査した国士舘大学イラク古代文化研究所講師岡田保良氏から御教示を頂いた。
- (4) 瓦器碗については高槻市教育委員会橋本久和氏から御教示を頂いた。
- (5) 以下、産地を記さないものはすべて楠葉産と考えるものである。
- (6) 口縁端面が外反するものは4類に含める。

- (7) 名古屋大学文学部教授榎崎彰一氏，同大学院修士課程齊藤孝正氏から多くの御教示を頂いた。
- (8) 吉田遺跡の中心により近い京都大学医学部構内の遺跡では，この時期，土師器以外の土器・陶磁器の比率が本遺跡より高い。
- (9) 院政期～南北朝期頃とする説をとる。
- (10) 本遺跡では灰釉系陶器碗が比較的多く出土しているが，これは京の中心地の傾向とは異なることを京都市埋蔵文化財研究所堀内明博氏ほか多くの方々に御教示頂いた。
- (11) このような動きは，平安京Ⅲ期の後半に顕著となり，平安京Ⅳ期新段階にはほとんどの要素が出揃っている。

## 第5章 遺構の考察

### 1 遺跡の構成

2次にわたる京都大学病院構内の発掘調査によって出土した大量の遺物について、各遺構から出土した良好な一括資料を中心に、遺物整理を行ない、型式学的な検討を加えた成果を前章でまとめた。その結果、ある程度まとまった資料を出土した遺構に関しては、遺物の編年を前提として、その消長時期の検討が可能となった。出土遺物からみた遺構年代観を表20に示す。

遺構の種類としては、溝(SD)、井戸(SE)、土坑(SK)など遺物を多く出土し、表中に掲載することができたもののほかに、建物(SB)、柵(SA)およびその他(SX)がある。

溝・井戸からの出土遺物は種類に富むのに対して、土坑(土器溜)では土師器が大多数を占めることが多い。また、土器溜のように遺物が一括して投棄された遺構や、溝SD11のように時期の異なる数層の埋土を持ち、長期にわたって存続した遺構もある。そのうち溝の年代観について、遺物のうち最も新しい時期のまとまった資料は、その廃棄、埋没の年代をほぼ示すものと考えられるが、それより遡るとみられる遺物をどう扱うかには問題が残る。より古い時期の資料はその遺構の存続年代を反映するものとも考えられる。しかし、遺構の年代の上限を遺物に求めるのは危険であり、ここでは遺跡全体の構成やその変遷を

表20 出土遺物からみた遺構の年代

1100			1200			1300			1400			1500		
平安京Ⅲ期			平安京Ⅳ期			中世京都Ⅰ期			中世京都Ⅱ期			中世京都Ⅲ期		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新
		SE 25	SE 22	SE 26	SE 18下	SE 12	SE 08	SE 15	SE 03					
			SE 40	SE 29		SE 18上	SE 19		SK 03	SK 04	SK 10			
			SK 09				SK 02							
			SK 12											
					SD 18	SD 11下	SD 11中	SD 11上	SD 08	SK 08				SD 23上
														SD 24
			SD 10		SD 13			SD 06		SD 05				
					SD 23下			SD 03			SD 04			
					SD 12			SD 01						
					SD 09									



辿る中で検討を加え、無理のないところを採ることにした。

このようにして、各遺構を編年的に整理してみると、それぞれの時期に応じた遺構の配置を想定することが可能となる。一方、前章第4節で考案したように、遺物の総量の時期別変化をみると、平安京Ⅲ期新段階から中世京都Ⅱ期新段階までの間に、ほぼ3度の増減（ピーク）を認めることができ、これに中世京都Ⅲ期と近世京都Ⅲ期を加えて、本遺跡の形成過程を5期に区分して把握できる可能性がある。ここでは、それぞれの時期における遺構の配置を復元的に整理してみた。

（1）第1期（11世紀末～12世紀前半、図23）

平安京Ⅲ期新段階にはじまり、Ⅳ期古・中段階を中心とする時期。遺跡西北部を中心にSE13、SE25、SE22、SE40、SE29、SE30、SE26、SE04など多数の井戸が掘られ、東南部では、SD10に続いてSD09、SD18が形成される。SD12もすでにあったようで、その南側にはSK09といった土坑のほか、柱穴と考える小坑が見られ、すでに建物の痕跡も認めうる。なお、SE26との切合い関係からみて、SD23はまだ現われていない時期とする。11世紀末から12世紀前半までの状況である。

（2）第2期（12世紀後半～13世紀末、図24・25）

平安京Ⅳ期中段階から新段階にかけて、第1期との画期を認める。すなわちSE26が埋まった後にSD23が掘削され、井戸はその溝の西北に集中する。SD03は、遺物こそ平安京Ⅳ期にまで遡りえないが、この溝はSD23に連続するものであり、同時に開削された遺構とみなしたい。さらにこの時期の中心となる遺構は、新たに現われるSD11とSD13、第1期より存続するSD09である。SD11は東西幅が広く、肩が直線的でないうえに、近辺に小規模な石組がみられたりすることから、単なる溝ではないと思われるが、これが池のような造園的なものであるという確証は得ていない。この遺構の北方は未調査のままであるため、最終的な判断は将来に譲りたい。SD13はSD11に流入する痕跡をとどめ、SD11の南端とSD09との間是不連続であって、SD11で溢水した場合にその水がSD09に流れ込んだらしい。これらの遺構は、中世京都Ⅰ期の中段階にはほぼ埋まったようで、その時点までを第2期の前半とする（図24）。この時期の遺構としては、他にSD01、SD02、SE07、SE08、SE09、SE12、SE14、SE16、SE17、SE18、SE19、SE24などが併行する。このように、本遺跡のうちで、遺構の形成が最も盛んでかつ最も西寄りにまで、生活痕をとどめるのがこの時期である。ただし、SD03とSD09とはともに方位を2°～3°西へ振る溝で、両者のあいだに、この時期の顕著な遺構がない。第1次調査直後の

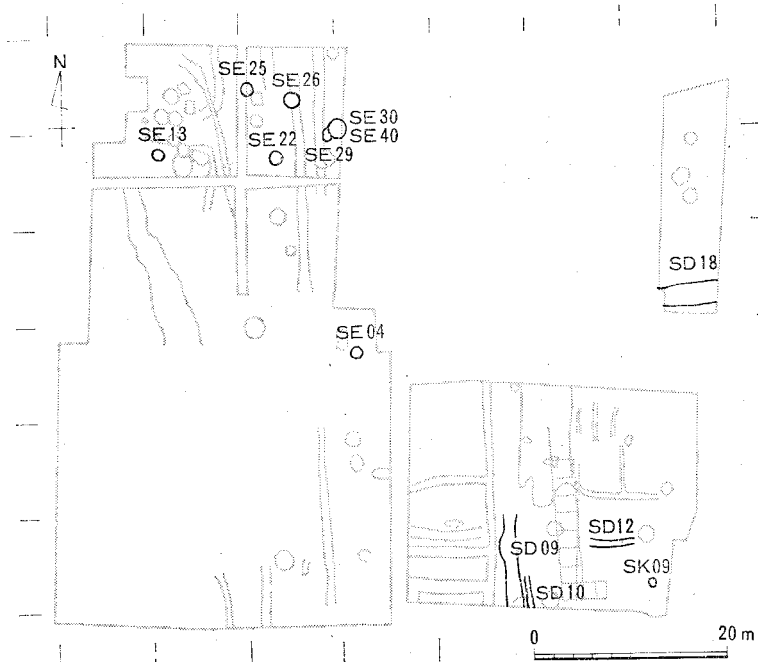


図23 第1期の遺構配置図

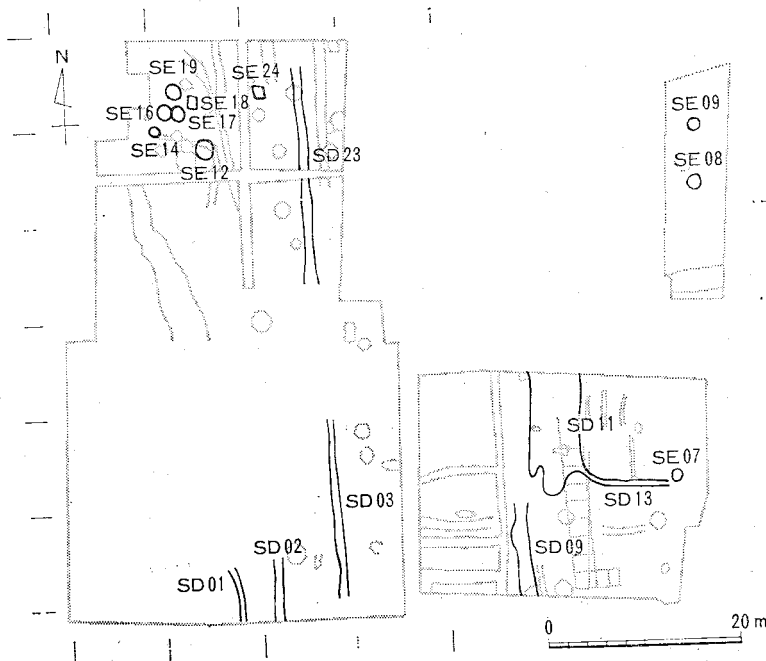


図24 第2期前半の遺構配置図

時点では、SD03とSD02とを対にして、このSD03を道路の東側に沿う側溝と考えようとしたが〔京大調査会77〕、この溝の東側SD09までのあいだも、これと併行する時期の遺構はまったく希薄であり、そのあいだを道路敷と考えることも可能である。しかし、その場合、道幅は大路なみとなり、問題が残る。いずれにせよ、路面自体を検出していないので、現時点では判定し難い。

SD09、SD11が埋まり、SD03はかろうじて存続していた時期を第2期の後半とする(図25)。一時的に遺構の密度が希薄になり、不定形の特異な平面を有する溝SD06が現われるほかSK02、SK07など、土器の投棄坑かと考えられる土坑が若干存在する。また、第1期から続く西北部の井戸群は、まだ存続している。

結局、第2期は、平安京Ⅳ期中段階ごろから中世京都Ⅰ期古段階を中心とし、12世紀後半から13世紀末までということになる。

### (3) 第3期(14世紀、図26)

溝SD08とこれに接続する溝SD04、SD05、SD07、井戸SE03がおもな遺構で、後半には大量の土師器を投棄した土坑SK08、SK10のほか、回廊状の建物SB01が現われる。SD08は、前時期のSD09やSD03に代わる南北方向に長く続く溝であるが、この第3期の中では比較的早い段階で埋没したものであるらしい。またこの溝は直角に折れてSD05とひと続きの遺構となっており、その西延長上に石組SX02がある。性格はよくわからないが、SD05の端部を形成する石組かもしれない。

一方、SD04は東端でSD08を介し、北のSD05東端に接続するが、その位置で溝底面に段を生じており、同一時期の掘削とは考え難い。SD04出土の遺物は、年代にも幅があるようで、こちらを時期の降る遺構とみている。このSD04は両端で南へ折れ曲がるようで、しかもその内側に、SK04など、柱穴を思わせるような小坑が、不規則ながら存在し、この溝が建物に伴うものである可能性を残す。

唯一の建物遺構SB01は、層位のうえからこの時期も後半のものと考えうるが、时期的にも性格に関しても決定的な資料に乏しい。ただ、この北端のすぐ西側でこれよりやや下位より検出した小坑に、青銅製の火舎香炉と六器が埋められており、SB01も宗教建築の遺構であった可能性がある。

以上の第3期の遺構は14世紀の前・中葉に形成されたと考えうる。

### (4) 第4期(15世紀、図26)

14世紀後葉、中世京都Ⅱ期新段階をもって、本調査区の平安時代以降形成された遺構群

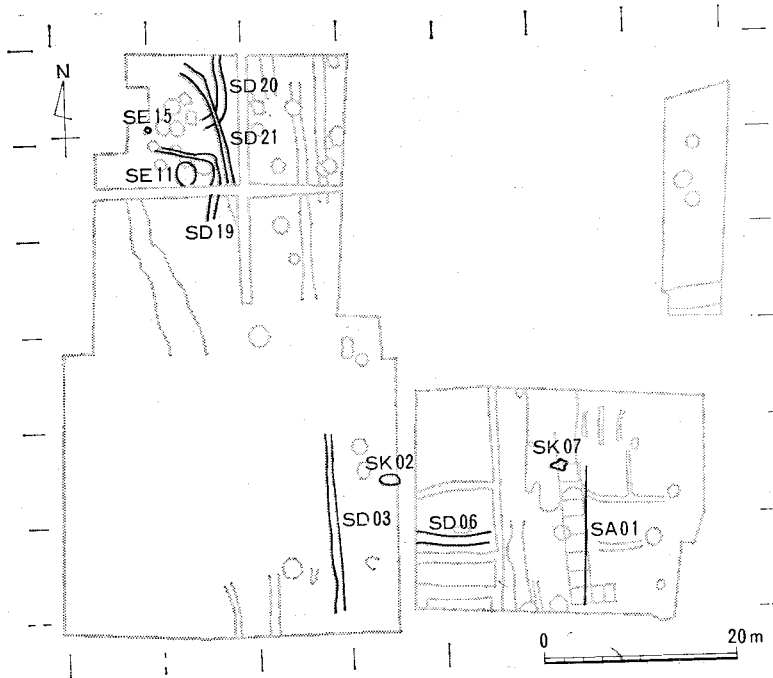


図25 第2期後半の遺構配置図

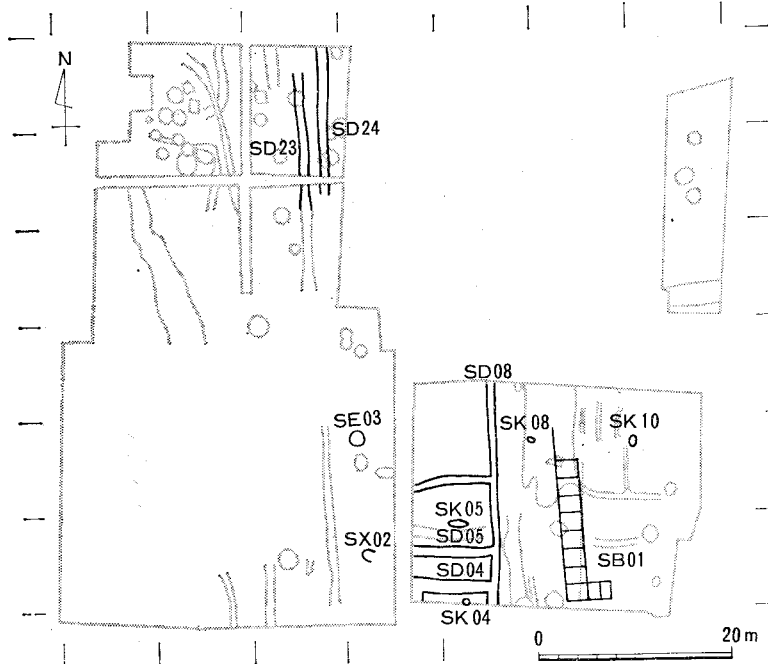


図26 第3・4期の遺構配置図

はほぼ終末を迎える。かなり大がかりな整地によって耕地化が進むのがそのころなのであろう。ただし、15世紀後葉の中世京都Ⅲ期新段階で、遺跡西北部に南北方向の溝SD24が現われ、同時期に、SD23が掘りなおされた形跡がある。同じ遺構面に、柱穴らしい小坑を多数検出している。溝中からは、羽釜、鍋類が多数出土していることから、ごく近くに住宅建築の存在を想定しうる。SD24は方位を真南北方向にとっており、医学部構内発見の遺構群〔京大埋文研79〕と関連があると考えられる。いずれにしろ、第3期までの遺構群との直接的関連性はほとんどないとみなしてよく、短期間で廃棄されたものらしい。

#### (5) 第5期(19世紀, 図7)

第4期の遺構群が埋没した上層には、厚く耕作土が堆積し、この地は、近代を迎えるまで長く耕地であったことをうかがわせる。ただ、耕作に伴う遺構としては、古い時期のものがなく、近世も終末段階のころの遺構に限られる。これが第5期の遺構群である。井戸と野壺のほかに溝SD26および少なくとも69列を数える柵とラチス状遺構と呼んでいる規則的に並ぶ矩形の浅い土坑群があり、これらの組合せ関係を検討することによって、当時の地割や地籍境界をある程度まで推定することができ、第2章第2節でその境が道路

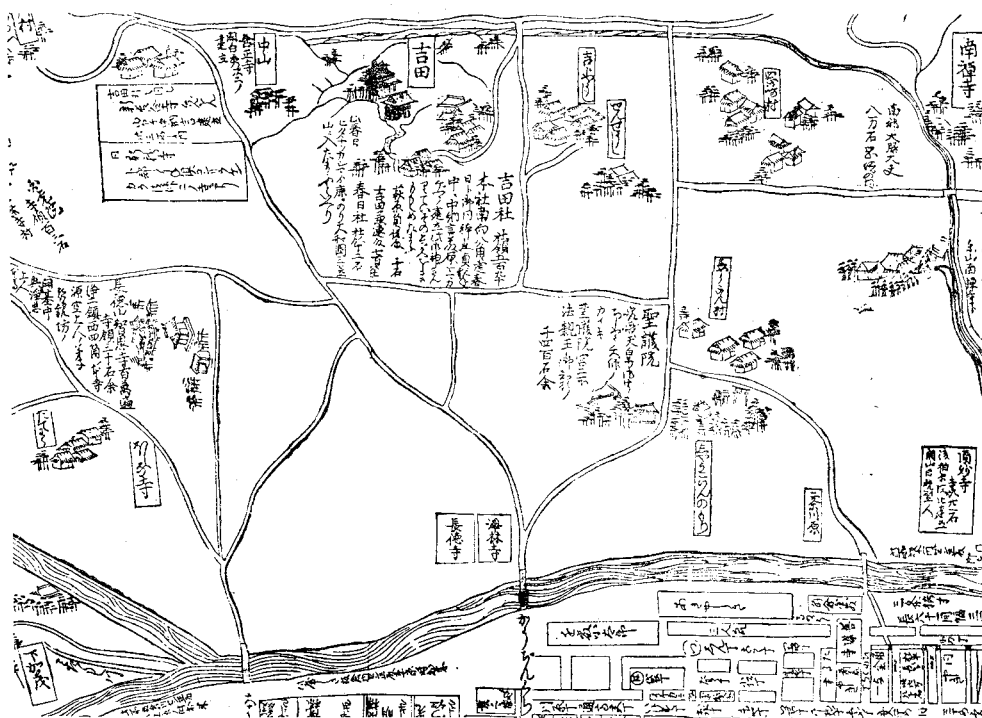


図27 『新撰増補京大会図』(元禄4年)にみる調査区周辺

であった可能性を指摘した。明治20年測図の地図(図1)や、慶応年間の京絵図にこの道はみえないが、元禄4(1691)年刊行の京大絵図(図27)や、鴨東を鳥瞰した宝暦年間(1751~64年)の『花洛名勝図会東山之部』には、荒神口の東から熊野神社の北に出て黒谷に至る道が描かれており、今回推定している道筋が、事実存在していたことを裏づける。

ここで、この道が、下層の溝SD03に被い重なっていることに気づく。溝SD03は、溝SD23に連なり、平安末期に、街路に併行して設けられたと考えている溝である。この溝はまた、第4期すなわち室町後期のある時点で再度掘られた形跡も認めている。この溝は地籍境界として、この地の土地利用を規定したものと考えられるが、境界として近世に至っても影響を与えており、上記の重なり合いは、その結果によるものであろう。

## 2 遺構の変遷と白河北殿北辺の展開

本遺跡において、以上のように遺構の構成の変遷をとらえたが、それぞれの時期における遺構のまとまりや、その変遷過程のうえに確認できたいくつかの画期を、歴史上どのように理解すべきか、つまりそれぞれの時期における歴史的事象と対応させつつとらえなおすことができないかということについて、ここで推考してみようと思う(表21)。

まず、当地を含む、鴨川の東で神楽岡(吉田山)の西南麓一帯が、どのようにして開かれていったかを考える。平安京が造営される以前、鴨東地域がある程度開かれた土地であったことは、北白川廃寺や八坂法観寺跡などから明らかであり、最近では、神楽岡西麓の京都大学本部構内でも奈良時代の住居跡が発見されている。さらに遡れば、京都大学北部構内、同教養部構内、岡崎遺跡など、神楽岡周辺には縄文・弥生時代遺跡が多数分布していることから、この地が早くから人々の居住するところとなっていたことが知られる。平安京が造営されてまもなく、神楽岡の周辺は、皇族や藤原氏の別業や墓所が営まれる地となり、また、山門・寺門の子院群が東山沿いに進出していた。10世紀ごろの景観を推定してみると、岡の北には、栗田寺・円覚寺・天神社、岡の東には浄土寺・如意寺・円成寺・禅林寺のほか、より岡に近い側には延喜式に載せる白河陵・愛宕墓・後愛宕墓など藤原良房にゆかりの陵墓があり、岡の南には東光寺や摂関家の別業白河殿(白河院)が営まれていた[岡田80]。そして、比叡山と如意ヶ嶽の山間に源をもつ白川の流れが、岡の東から南へというほぼ現在の流路のほか、岡の北側にもいく筋かの分流をなしていた[藤岡78]。岡の西方では、そのころ高野川あるいはその支流がまだ広い河原を形成して、本調査区付近まで流路が及んでおり、そこに注ぐ白川の分流とともに、時にはよどみ、あるいは氾濫していたらしい。寛和2(986)年に朝廷のまつところとなって二季祭が始まった吉田社は、

この河原からほど近い岡の西麓に座していたが、調査区あたりは、居住地としての条件はまだ整わなかったようである。

神楽岡西麓のこうした土地柄に改良の手が加わった痕跡と考えるのが、護岸のある川 S X06 である。砂礫の面に貼られた粘土の中や、すぐ西側の砂礫中より出土する土器が示す年代は、10 世紀末を降らない。この護岸をまもなく埋めるのは高野川系の砂礫で、かつその流れは南南東に向いていたことがわかっている。その後の過程で、さらにどの程度人為的な作業が伴ったのか、また白川による砂礫の堆積がどのように作用したのか明らかではないが、後述する白河泉殿の造立からみて、11 世紀の終りごろには、流れは西方へ押しやられてほぼ安定し、その後背湿地が、池泉として有効に利用しながら開発されていったと考えることができる。<sup>(9)</sup> 小河川 S X07 も、生活用水に利用される程度の痕跡的な流れであった。

承暦 1 (1077) 年、二条大路末に法勝寺が供養される。白河天皇はこの寺の法事に伴って、寛治 7 (1093) 年ごろ、前大僧正覚円の坊舎を御所と定めた。これは水石風雅な御所であったことから「泉殿」と呼ばれた。その占地を法勝寺西面から 5 町ぶんおよそ 600m ほど離れて、南は二条末から北は大炊御門末までとする推定[杉山 62]が有力で、おそらく後背湿地の開発がその立地を可能にしたと考える。12 世紀代になって、尊勝寺(1103 年)、蓮華蔵院(1114 年)、最勝寺(1118 年)と、御願寺や仏堂の供養があいつぎ、熊野社の創始もそのころと伝えられる。鴨川の東、白河と呼ばれた土地が、しだいに都市化の様相をみせはじめていたとみることができる。最勝寺が供養される直前の同じ 1118 年、白河法皇は泉殿の北隣、大炊御門大路末をはさんで新しい御所を設けた。これが「白河北殿」である。大治 3 (1128) 年には円勝寺の供養もあり、翌年には北殿が改造拡張される。御所の新造、改造の直接の契機が何か、明らかではないが、あいつぐ院や女院の御願寺の造立によって、白河における院の御所の利用頻度はますます高まっていたことであろう。白河北殿の位置に関して、大炊御門末をはさんで泉殿とほぼ併立していたことを除いては、『保元物語』以外に依る史料があまりない。それによれば、北の門は大炊御門末の 1 町北春日小路末に面している。ただ、『愚管抄』中の「白河ノ中御門河原ニテ千駄ノ阿弥陀堂ノ御所トキコニルサシキ殿ト云御所ヘワタラセ給エケリ」との記述や、大治 4 年の改造記事から北を中御門末までとする可能性が指摘され、杉山信三は北殿を 2 町四方とする推定図を提示しているが、積極的にこの案をとることはできない。<sup>(10)</sup> 北殿の東西を限る史料となるとさらに乏しい。『保元物語』は、西は河原に面していたことを示唆するが、同時に「院の御所の西、

藤中納言家成卿の宿所に云々」とも載せる。いずれにしる南殿の北という地点からずれず、河原にほど近いところであったという推定にとどめざるをえない。

この北殿に関して、その敷地内にどのような建物が配置されていたか知りえないが、南殿を蓮華蔵院という九輪阿弥陀堂と一体となった御所ととらえるのとは少々趣きを異にする。ただ、北殿より西で冷泉末と春日末との間に、長承1(1132)年造立の阿弥陀堂宝莊殿院を置くという杉山の考証があり、『保元物語』では北殿、宝莊殿院ともに西を河原に面しているごとく記述されており、南殿と蓮華蔵院との関係と同様、保元当時には、宝莊殿院の敷地を北殿と一体のものとしてとらえることがあった可能性も否定できない。さらに北殿の東隣には、長承1(1134)年に院の別当藤原顕頼が「白河北殿東御所」なるものを造進し、これが康治1(1142)年に御堂として供養され、のち仁平1(1151)年にはその池の中島に多宝塔が造立されている。この間、北殿およびその近辺の市街地の動向にかなりあわただしいものがあったことは、史料中の火災の記事からも伺い知れる。天養1(1144)年5月には北殿自体が焼亡するが、同年10月にはただちに再興されており、北殿がそれだけ緊要な御所であったことが察せられる。久安4(1148)年には北殿北辺に火事があり、顕頼の宿所ほか焼亡した。この火災でも復旧は速やかであったに違いない。

そして保元1(1156)年、保元の乱を迎える。この乱は、以後の政治史を大きく方向づけたという点で重大な出来事であったには違いないが、乱というにはあまりに短期間であり、戦場は北殿近辺に限られ、決して白河一帯が戦火にさらされたというものではなかったようだ。北殿と前斎院(統子内親王)御所が焼亡したというが、宝莊殿院は罹災からまぬがれたのか、少なくとも承久3(1221)年に火災を被るまで堂舎は存続していた。とはいえ、乱の前後において、市街地の営みの活発さには、史料に現われる限り、その差は歴然としている。乱後、北殿はもはや再興されることなく、跡地には平治1(1159)年に千輪阿弥陀堂が清盛によって造進され、元暦1(1184)年には栗田宮崇徳院廟が創始されるものの、史料にみる白河の地に関する記事はめっきり減り、しかも各種罹災記事はあっても、再建・復興の様子はまれになってしまう(表13・21)。

本調査区の第1期と第2期の遺構群は、白河における街区の形成と保元の乱後の衰退の過程としてとらえることができよう。しかし、その画期をちょうど乱をもってあてることが妥当かどうか検討を要する。遺跡は、土師器の時期区分による平安京Ⅳ期中段階ごろから中世京都Ⅰ期古段階すなわち12世紀後半から13世紀前葉にかけて、北へ拡大しており、保元の乱直後に多くの遺構が廃絶した状況ではない。ここで乱が白河の街区に対して、決



表21 調査区周辺に関する文献記事(1)

年 代	事 項
1072 延久 4	白河天皇即位
1075 承保 2	法勝寺事始〔法勝寺金堂造営記〕
1076 3	法勝寺阿弥陀堂木作始〔法勝寺阿弥陀堂造立日時定記〕
1077 承暦 1	法勝寺金堂・講堂ほか供養〔承暦元年法勝寺供養記〕
1083 永保 3	法勝寺塔・薬師堂など供養〔朝野群載〕
1084 応徳 1	増誉白河房(聖護院)〔後二条師通記〕
1085 2	法勝寺常行堂供養〔水左記〕
1087 寛治 1	白河法皇による院政開始、堀河天皇即位
1093 7	法勝寺常行堂御所〔中右記〕
1095 嘉保 2	覚円坊を法勝寺御所とする(白河泉殿)〔中右記〕
1102 康和 4	尊勝寺金堂など供養(堀河御願)
1103 5	増誉僧正熊野社創始
1105 長治 2	尊勝寺阿弥陀堂など供養
1107 嘉承 2	鳥羽天皇即位
1109 天仁 2	法勝寺曼陀羅堂供養〔百鍊抄〕
1114 永久 2	白河泉殿内に阿弥陀堂供養(蓮華藏院)〔白川御堂供養記〕
1115 3	白河泉殿改造〔殿暦〕
1117 5	白河御塔(のち最勝寺)供養
1118 元永 1	最勝寺金堂、薬師堂供養(鳥羽御願)。白河北殿造営〔中右記〕
1122 保安 3	法勝寺小塔院供養
1123 4	法勝寺の北に白川新御堂建立。崇徳天皇即位
1125 天治 2	円勝寺事始
1126 大治 1	円勝寺三重塔供養
1127 2	円勝寺五重塔、三重塔供養。法勝寺西大路神楽岡へ延長
1128 3	円勝寺供養(待賢門院御願)
1129 4	白河北殿改造。鳥羽院政。最勝寺五大堂供養。証菩提院供養(篤子御願)。 白河天皇没
1130 5	最勝寺五大堂再興。蓮華藏院に新阿弥陀堂と塔供養
1132 長承 1	宝莊殿院供養。得長寿院供養
1134 3	白河北殿東御所造営〔百鍊抄〕
1139 保延 5	成勝寺供養(崇徳御願)
1140 6	法勝寺九重塔修理〔百鍊抄〕
1141 永治 1	近衛天皇即位。歆喜光院供養(美福門院御願)
1142 康治 1	白河東小御堂供養〔本朝世紀〕
1143 2	金剛勝院・押小路殿造営(美福門院御願)
1144 天養 1	白河北殿焼亡、直ちに再興
1145 久安 1	二条十一面堂
1146 2	延勝寺事始
1148 久安 4	白川北殿北辺の御所預東市正正経宅、故民部卿顯頼宿所并小屋が焼亡 〔本朝世紀〕
1149 5	延勝寺金堂・塔など供養(近衛御願)。得長寿院修理

## 調査区周辺に関する文献記事(2)

年 代	事 項
1151 仁平 1	東御所に宝塔〔本朝世紀〕。福勝院供養（高陽院御願）
1154 久寿 1	福勝院三重塔供養〔兵範記〕
1155 2	後白河天皇即位
1156 保元 1	保元の乱。北殿，斎院御所焼亡
1158 3	二条天皇即位。後白河院政
1159 平治 1	平清盛，千鉢阿弥陀堂を造進〔百鍊抄〕。平治の乱
1163 長寛 1	延勝寺阿弥陀堂供養〔本朝世紀〕
1164 2	成勝寺阿弥陀堂供養
1165 永万 1	六条天皇即位
1167 仁安 2	法勝寺不動堂供養〔百鍊抄〕
1168 3	高倉天皇即位
1169 嘉応 1	法勝寺九重塔落雷
1174 承安 4	法勝寺九重塔落雷。尊勝寺僧房火災
1176 安元 1	法勝寺九重塔落雷
1178 治承 2	法勝寺九重塔大風で破損〔平家物語〕
1180 4	安徳天皇即位。福原遷都
1184 元暦 1	粟田宮創始〔吉記〕
1185 文治 1	大地震，法勝寺法華堂を除き顛倒〔吉記〕。得長寿院，宝荘敝院回廊など顛倒
1191 建久 2	後白河法皇没
1208 承元 2	法勝寺九重塔雷火で焼失
1213 建保 1	法勝寺九重塔再建
1214 2	尊勝寺南大門，風により顛倒
1219 承久 1	尊勝寺西塔焼失〔百鍊抄〕。最勝寺塔焼亡
1221 3	承久の乱。六波羅探題設置。宝荘敝院焼亡〔百鍊抄〕
1227 安貞 1	尊勝寺金堂顛倒〔百鍊抄〕。歆喜光院破壊〔明月記〕
1231 寛喜 3	尊勝寺東塔炎上〔明月記〕
1232 貞永 1	法勝寺円堂，群盗により破壊〔明月記〕
1237 嘉禎 3	粟田宮東方へ遷座
1247 宝治 1	延勝寺阿弥陀堂焼失〔葉黄記〕
1256 康元 1	粟田宮焼失，再建。崇徳院御影堂の初見
1261 弘長 1	粟田宮損壊
1267 文永 4	尊勝寺再建の儀
1320 元享 1	歆喜光院再興
1330 元弘 1	元弘の乱
1334 建武 1	粟田宮焼亡
1336 延元 1	神楽岡城の合戦
1342 暦応 5	法勝寺金堂など火災。再建の儀
1384 永徳 4	吉田社に神領寄進〔將軍義満寄進状〕
1396 応永 3	熊野神社境内管領を聖護院に命じる

定的な破壊をもたらすことがなく、その主戦場が本遺跡地まで及んでいなかったことを考慮する必要がある。ある程度被害が及んでいたかもしれないが、当初は、それまでの災害の経験と変わらず、しばらくは復興の動きを示していたとしても不思議はない。むしろ、白河千駄阿弥陀堂の造営や栗田宮の創始は、街区再編を促したと想像しうる。第2期の端緒と考えている溝SD03、SD23に沿って推定できる街路の設置も、そうした動きの中でとらえてよいのであろう。

瓦の出土状況についてみると、第1期の遺構に伴伴する軒瓦類と、第2期前半に属するものがある。ただし、建物に係する遺構に伴うものはなく、瓦葺の堂宇が本調査区内に存在していたということにはならない。軒瓦は本調査区では南へいくほど多く出土をみることから、瓦葺の堂宇は本調査区の南方にあったと推測できる(P59表3)。北殿焼亡以前においては、長承1(1132)年造立の宝莊嚴院、康治1(1142)年供養の北殿東小御堂やその中の多宝塔があり、ほかには北殿の築地塀も瓦で葺かれていたと考えてもよいであろう。また、北殿の北辺にあり久安4(1148)年に焼亡した記事のある、東小御堂を寄進した藤原頼頼の宿舎にも瓦が葺かれていた可能性も考慮する必要がある。他方、北殿焼亡以後は、宝莊嚴院のみが承久3(1221)年まで残るものの、北殿の跡地には千駄阿弥陀堂が清盛によって造進される。退転の経緯は明らかではないが、供養されたのは平治1(1159)年のことである。

さらに降って元暦1(1184)年に栗田社が創始される。創建当初、もと崇徳院が所持していた鏡を神体とし、同じく普賢像も合せて祀られたというが、この社殿とは別に崇徳院御影堂が建てられ、康元1(1256)年には青蓮院門主が検校に補せられたという〔西田30〕。おそらくその時までには御影堂が存在していたのである。その宮の位置について、『吉記』は「以春日河原為其所、保元合戦之時、彼御所跡也」とし、『源平盛衰記』には「春日ガ末ノ北、河原ノ東也、此所ハ大炊殿ノ跡先年ノ戦場也」とあり、いずれも北殿のあった場所をさしている。しかしその場所では鴨川の氾濫の危険があったため、嘉禎3(1237)年東方へ宮を遷したことが『百練抄』にみえる。もともと北殿の跡地であったとすれば、常に洪水の危機にさらされていたとも考えられず、また北殿跡には、すでに千駄阿弥陀堂がその地点を占めていた点からも、宮はかなり河原寄りに創建され、千駄阿弥陀堂がはやくに廃絶した跡に遷されたと考えてはどうであろう。『山城名勝志』は崇徳院御影堂の旧地を「在<sup>(3)</sup>鴨川東聖護院森西北車道南也」と伝えて、現京都大学病院構内の南あたりに比定している。福山敏男は、諸記録から嘉禎の移転後の位置を丸太町通新道南側付近と推定し、

創立当時は移転地の西1町～2町ほどの地点とした〔福山77〕。

以上のように、第1期と第2期の遺構群とは共通する時代背景をもち、両期の主要遺構の方位が $2^{\circ}$ ～ $3^{\circ}$ 西へ振ることも共通している。その方位は、推定最勝寺北築地跡や、推定尊勝寺南大門跡の方位と同じであり、はずれに近いとはいえ、白河の地に新しく形成された街区の中の遺構としてとらえることができる〔岡田79〕。結局、院の御所が焼亡したのちも、鴨東白河の市街を維持する基盤は、遺跡のうえでみるかぎり、ただちに大きく崩れるということにはなかったといえよう。しかしそれも長くは持続せず、遺構の変遷における第2期後半の状況によれば、13世紀中葉以後は極度の衰微期に至ったとみることができる。

つづく14世紀にはいり、鎌倉幕府に両統迭立の議がおこり、やがて足利氏が再び京都に政権をうちたてて南北朝時代が始まる。この頃、にわかに活気を取り戻すかのように本遺跡には再び多くの遺物・遺構が集中する。第3期の遺構群である。第2期までの遺構にくらべると、溝SD05・SD08とこれにつらなる溝SD04など、その方位はずっと真北に近くなっており、井戸もSE03ただ1基のみ検出されたにとどまり、白河の街区にくみこまれたかつての遺構群と様相を異にする。ただ、第2期の溝SD03・SD23に沿って想定した街路が、道の存続はともかく、地割のうえで溝SD08を制約しているように思われる。

14世紀も末のこととして、熊野社境内が南は大炊御門末、北は近衛末に及んでいたことはすでに触れた(第1章第2節)。ただし「崇徳院、大吉祥院敷地」を除くことが同じ史料中にあり、栗田宮が存続していたことが知られる。<sup>(4)</sup> 栗田宮は嘉禎の東遷ののち、康元1(1256)年と建武1(1334)年の少なくとも2度の火災を受けながらも、再三にわたって復され、応仁1(1467)年の乱による焼亡まで衰えなかったという〔西田30〕。この熊野社境内は久寿2(1155)年には福勝院を含んで近衛の北まで及んでいた<sup>(5)</sup>のであるから、200年余を経て、その北限が南へ押しやられたことになる。それに対して、『京都坊目誌』が伝える永徳4(1384)年の吉田社の社領は、南を近衛末で限っており、当時近衛末が両社境内を境する形になっていた。12世紀末から14世紀にかけて、福勝院や栗田宮のほかに、鴨川の東で神楽岡までの間には、源頼政の宿所や勧修寺家流吉田家の第宅・菩提所などが史料のうえから知られているが、それらが退転してゆく一方で、14世紀を通じてこの一帯は吉田社と熊野社を軸として再編されつつあったとみなすことができる。遺跡の密度の点でもこの時期には、京都大学構内では医学部構内の方が病院構内をしのぐようになり、吉田近衛町においても大量に同時期の土器を出土する遺跡が報告されている〔京都府教委78〕。

第3期の遺構群については、こうした時代背景をとらえることはできても、それ以上に

具体的な解釈を及ぼすことはできないのが現状である。この時期以降、当地は田畑化が進んだものと考えており、第4期の遺構といっても溝SD24とその周辺の小坑群が一隅にみられる程度で、それも15世紀後葉の短時日のことである。この時期の遺跡の中心はもっと北ないし東寄りに想定するほかない。院政期の白河の中心を占めていた南の六勝寺付近は、応仁の乱がその衰亡を決定的にして、荒地または田畑化が進行したようであるが、本調査区付近では、それよりはやくに市街地は消滅したとみなすのが妥当であろう。

第5期の遺構はもっぱら耕作にともなう遺構で、京都大学の施設が現われる明治30年代までの景観を想起させる。近世後半には熊野神社門前に家並が現われ、北には吉田社も庶民信仰の間に根をおろし、京都らしい景観がみられたことであろう。そこで、洛中から鴨東にわたる道筋がどうなっていたかを考えると、前に述べた荒神橋付近から本調査区の南へ通じる道に思いあたる。荒神口はその名のとおおり、近世はじめより洛中から鴨東に通じる要所であった。そこから北東へ白川道となり、その途中から吉田社の参道が東へのび、また北へ別れて修学院方面に通じた。元禄4(1691)年版の京大絵図をみると、三条より北で鴨川にかかる橋としては、二条橋と今出川橋との間は荒神橋のみである。当時熊野神社へ至るにはその東詰から南下するか二条河原から北上する以外に道はなかった。荒神橋が古くから恒常的な橋であったことは、近江から北国に通じる白川道の重要性から容易に想像しうるが、暦仁1(1238)年に入道兵庫頭重房なる者が「鷹司河原橋」を勧進し、2年後にその供養があったという『百鍊抄』の記載<sup>6)</sup>がこの橋の重要さを裏付ける。その頃ならば、おそらく白河北殿北辺に通じていた第2期の南北街路があったはずで、その道は多少ずれたとしても第3期にも存続していた可能性がつよいこと、さらには元禄の絵図にのせる道とも一部重なりあうことはすでに述べたところである。そして宝永2(1705)年の序をもつ『花洛名勝図会東山之部』にも二条橋のすぐ北の橋は荒神口にかかる橋で、それらしい道筋が描かれている。ところがこの宝永頃の図には、その道とは別に、熊野神社からまっすぐ西に延びる道が鴨東につきあたり、そこに鳥居をおいている。門前には家並もみえる。この後まもなく、丸太町通りに鴨川をわたる恒常的な橋が設けられたであろうことは想像にかたくない。そうすれば、荒神橋から熊野神社に至る道の機能はほぼ失われるわけで、幕末頃の図にはこの道がみられなくなることも肯けるのである。

### 3 遺跡の歴史的性質

前節では、平安時代から近世の初頭に至るまで、遺跡周辺地域の歴史的展開の中で、遺構群の変遷をとらえようと試みた。史料から辿りうる歴史的環境を、できる限り復原し、

また遺構の検討から史料に現われないこの地域の変容過程を明らかにできたと思う。本節ではさらに、本調査区の各期の遺構群それぞれが示すその性質について、まとめることにする。

本調査区で検出した最も古い時期の遺構である護岸のある川 S X06 は、10 世紀頃には高野川系の河川がこの地を流れていたことを示している。したがって、高野川は現在の流路より、300 m ほど東を流れていたことになる。また護岸を埋めている砂礫には加茂川の礫に含まれる輝緑凝灰岩が含まれていないことから、加茂川と高野川の合流点はさらに南であったと考えうる。平安京の造営時に鴨川を現堀川付近から現在の場所に改修したとする説もあるが、今回の調査結果からみると、逆に平安後期の鴨東の開発に伴って高野川が西へ移され、現在の「Y」字形の流路が形成されたと推測できる。本調査区のみならず白河街区の本格的な開発は、この高野川の西遷を前提としてなされているのである。

調査区が本格的に開発されるのは、法勝寺の建立(1077 年供養)を契機とする六勝寺・院の御所の造立と軌を一にする 11 世紀末から 12 世紀前半である。そして白河北殿の創建からその焼亡に至る 1118～1156 年に対応する平安京Ⅳ期古・中段階は遺物が多い時期の一つであり(P75 表 14)、またこの時期に比定しうる瓦は出土瓦のうち約 1/3 をしめている。このことからこの地が白河北殿の北辺として開発され、頻繁に利用されていたと想像できる。この時期の遺構すなわち第 1 期の遺構群は、井戸が集中する西北部と、方位を真北から若干西にふる溝のある東南部とからなり、その配置は遺跡が拡大する第 2 期の遺構群の基本となっている。この時期の遺跡は北へは及んでいず、京都大学医学部構内や教養部構内では、この時期の遺構はごくわずかに検出されるにすぎない。以上のことから、第 1 期の遺構や遺物を残した人々は、白河北殿の造営とかかわり、院政を支えた勢力と予想される。

保元の乱以後、白河北殿は再建されることなく、院の御所は他の地域へと移ったが、本調査区では、遺物量に若干の減少をみるものの、この時期にあたる第 2 期の遺構が多い。とくに本調査区での主要な遺構といえる検出長 56 m の溝 S D03・S D23 と、幅 4.5 m の幅広い溝状遺構になる S D11 は 12 世紀後半に造作されるのである。

この時期の遺構群は主要な遺構が出現するものの、その基本は、井戸が集中する西北部と方位を西に振る溝群のある東南部とからなっている。この構成は第 1 期とほぼ同じであり、遺構群を形成した主体には変化がなかったことを示している。ただし検出長約 56 m の溝の出現など街区の成立を推定させる新たな遺構もある。またこの出現とともに本調査区より北に位置する京都大学医学部構内や教養部構内では 12 世紀後半の瓦がまとまって出土

し、遺構もこの期に増加することから、吉田近衛町に比定される福勝院の建立(1151年)とあわせて、この時期に北側への開発の波及を考える必要がある。すなわち調査区周辺は白河北殿の成立によって開発が盛んとなった地域であるが、白河北殿の焼亡にはあまり影響されず、逆に北側へも開発が波及するといえる。これは平氏・鎌倉政権の成立、承久の変のような政治変動を経ながらも、院政を支えた勢力がこの地では健在であったことを物語っているといえよう。

さてこの時期の遺物では、12世紀後半に比定しうる瓦が本調査区出土瓦総数のうち2/3を占める。ただし13世紀も中葉以後の瓦は出土せず、造営のピークはこの地ではほぼ12世紀に収まるものと考えられる。一方、土器・陶磁器類は13世紀中葉にもピークがあるが、これは主要遺構といえる溝SD11の埋没時の投棄によるものである。この13世紀中葉を境にして遺構と遺物は急激に減少する。

14世紀になると遺構群の構成はがらりと変わる。第3期の遺構群は、方位がほぼ真北に近い遺構群、井戸、やや方位を西に振る建物、土器溜からなる。遺構が東南部に集中するという一点のみ第1・2期の遺構と共通するものの、溝の方位や井戸の位置とその集中度においては、それ以前の遺構群と異なる。また遺物についても同様で、瓦の出土が皆無であって遺構から出土する中国製陶磁器もごくわずかであり、その内容に大きな変化を認める。真北方位の遺構は医学部構内でも検出しており、その地でもほぼ14世紀前葉ごろに東へ振る方位から真北方位へ変わることが判明している〔京大埋文研79〕。この方位の変化に関する文献資料としては、現医学部構内付近に第宅や菩提寺をもつ吉田氏(藤原北家勸修寺家流)の子孫吉田定房が、建武4(1337)年吉田から南朝のあった吉野へと移ったこと(『公卿補任』)、吉田社の若宮が延元1(1336)年に現医学部構内に造立されたこと(『京都坊目誌』)、そして永徳4(1384)年の足利義満寄進状で吉田社の社領の四至が「東は神楽岡、南は近衛末、西は河原、北は土御門末を限りとし、吉田泉殿跡の一部」と定まったこと(『京都坊目誌』)がある。また熊野社の四至についても前述したように、応永3(1396)年には、東は今辻子より西へ、南は大炊御門末、西は河原、北は近衛末であり、すくなくとも14世紀末には神楽岡(吉田山)より西はすべて、吉田社と熊野社の社領に編入されていることがわかる。そして、12世紀末から吉田に居を構えた吉田氏が移転することや、吉田社がそれとあい前後してその地に入ることからみると、すでに14世紀前半には、吉田山から西の地域の再編が開始されたと推定できるであろう。このように考えると、方位の変化を、遺構や遺物を残した人々の変化とすることができ、12世紀当時院政を支えていた勢力が、

この14世紀前半には、この地から追われ、南北朝統一に貢献のあった吉田社、足利家ゆかりの僧が入室する聖護院という新興勢力がとってかわったのであろう。さらにつけ加えるならば、卜部氏が吉田姓を名のりはじめるのも、このころの吉田兼熙からである。

14世紀末ごろ吉田山から西では大規模な整地があったようであるが、本調査区では確認していない。しかし、15世紀以後は、15世紀末の土師器皿と瓦器羽釜とを少量出土した溝やピットを検出したのみで、それ以後、居住に関する遺構がなくなる。遺物も近世後期までほとんどなく、15世紀には本調査区は耕地となったと考えられる。この状況は約2km東北の京都大学北部構内まで一様にみられ、応仁の乱よりも遡る15世紀初頭ごろに、京都大学設立時までの京近郊の農村景観が形成されたと考えうる。

〔注〕

- (1) 13世紀にはいつて営まれた後鳥羽上皇の白河泉殿や西園寺公経の吉田泉殿もこうした池泉を利用したものであろう。前者は押小路末に〔杉山62〕、後者は現今出川通り 付近から一条末あたりに〔川上77〕それぞれ比定されている。
- (2) 『愚管抄』の中の「中御門河原ニテ」とは単純にそこで鴨川を渡ったと考えるべきであろう。
- (3) 車道とは中御門末の道のことであることが『鈴鹿家記』にみえる。
- (4) 大吉祥院とは、久安4(1148)年に建立された、覚宗僧正の白川房に営まれた堂である。その位置は同じ史料によって熊野社近辺であったという以上はわからない〔杉山62〕。
- (5) 『兵範記』同年12月17日の条に、福勝院が近衛末にその南西門をひらいていたことがみえ、かつこの院が「今熊野領已四至内也」とある。
- (6) 『百鍊抄』仁治1(1240)年2月11日の条。



## 参 考 文 献

- 赤羽一郎 1977年 「常滑——知多半島古窯址群」『世界陶磁全集3 日本中世』
- 石田茂作 1927年 「土塔について」『考古学雑誌』第17巻第6号
- 1937年 「密教法具概説」『仏教考古学講座第13巻』
- 泉拓良 1980年 「医学部構内遺跡の発掘調査」『京大広報』No. 189
- 今里幾次 1955年 「播磨国魚橋瓦窯址の研究」『兵庫史学』第6号
- 上原真人 1978年 a 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号
- 1978年 b 「第3章遺物 1 瓦」『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡BG36区——』
- 魚澄總五郎・梅原末治 1923年 「花背村の経塚及び関係遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告第4冊』
- 宇野隆夫 1978年 「京大病院遺跡出土の土器——古代末から中世——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 1979年 「鴨東の開発——平安京と京近郊——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 円勝寺発掘調査団 1971年 「円勝寺の発掘調査(上)」『仏教芸術』82号
- 1972年 「円勝寺の発掘調査(下)」『仏教芸術』84号
- 大園遺跡調査会 1976年 『大園遺跡発掘調査概報2』
- 岡田保良 1979年 「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1980年 「平安時代鴨東白河の景観復原」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 梶川敏夫 1977年 a 「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1976—Ⅱ』
- 1977年 b 「法勝寺跡」『仏教芸術』115号
- 梶川敏夫・渡辺和子 1977年 「尊勝寺跡推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1976—Ⅱ』
- 烏丸調査会(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会) 1980年 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』
- 川上貢 1977年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 木村捷三郎 1930年 「山城幡枝発見の瓦窯址——延喜式に見えたる栗栖野瓦屋」『史林』第5巻第4号
- 1977年 「仁和寺出土の緑釉瓦」『仏教芸術』115号
- 木村捷三郎・畑美樹徳・上原真人 1975年 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1974—Ⅱ』
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会) 1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』

京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)

1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』

1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊——京大農学部遺跡BG36区——』

1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』

1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』

京都大学広報委員会 1977年 『京都大学建築80年のあゆみ 京都大学歴史的建造物調査報告』

京都府教委(京都府教育委員会) 1978年 「吉田近衛町発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1978』

京文研(京都市埋蔵文化財研究所) 1978年 『平安京跡発掘調査概報』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978—Ⅱ』

工楽善通・藤村泉 1973年 『尊勝寺跡発掘調査概報』

小林行雄 1933年 「弥生式土器研究の前に」『考古学』第4巻第8号

是川長 1970年 「三木市の古窯と経塚」『三木市史』

佐藤虎雄 1968年 「平安京豊楽院の遺物」『古代学』第6巻第4号

島田清 1939年 「播磨国東部地方に於ける出土古瓦について」『夢殿』第19冊, 『総合古瓦研究第2分冊』

杉山信三 1962年 『院の御所と御堂——院家建築の研究——』『奈良国立文化財研究所学報第11冊』

1969年 「鳥羽離宮跡昭和43年度発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1969』

杉山信三・岡田茂弘 1961年 「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』  
『奈良国立文化財研究所学報第10冊』

杉山信三・梶川敏夫 1975年 「法勝寺金堂跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1974—Ⅱ』

同志社調査会(同志社大学校地学術調査委員会)

1978年 a 「常盤井殿町遺跡発掘調査概報——同志社女子大学心和館増築地点の調査——」  
『同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 12』

1978年 b 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』『同志社校地内埋蔵文化財調査報告  
資料編Ⅱ』

鳥羽離宮跡調査研究所 1976年 「醍醐寺境内地に於ける埋蔵文化財発掘調査概報」『埋蔵文化財調査  
概報集』

中谷雅治 1970年 「法金剛院境内出土の古瓦」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1970』

1971年 「平安時代後期の瓦当文様」『平安博物館研究紀要第2輯』

中村直勝 1925年 「安楽寿院」『京都府史蹟勝地調査会報告第6冊』

奈文研(奈良国立文化財研究所) 1962年 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』『奈良国立文化財研究所学報  
第15冊』

浪貝毅・梶川敏夫 1976年 『京都市埋蔵文化財年次報告——1975』

奈良国立博物館 1977年 『経塚遺宝』

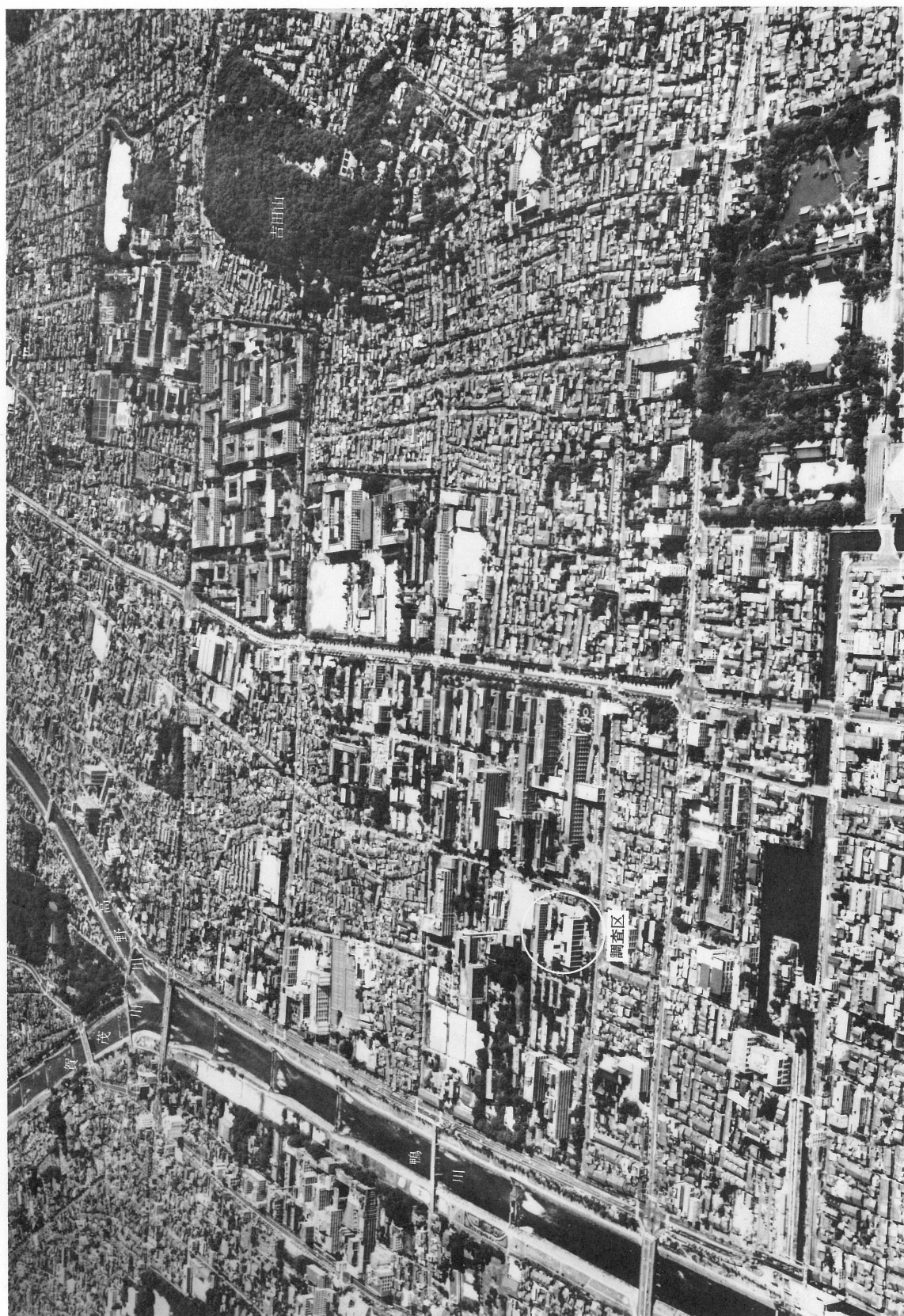
- 梶崎彰一 1975年 『日本の陶磁 第2巻古代中世篇』  
 1978年 「初期中世陶における三筋文の系譜——第1部三筋文系陶器とその編年——」『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV  
 梶崎彰一・山崎一雄・飯田忠三・内田哲男 1979年 「陶磁器の釉薬及び胎土の成分からみた産地同定の研究」『昭和53年度特定研究「古文化財」年次報告書』  
 西田直二郎 1925年 「法勝寺遺址」『京都府史蹟勝地調査会報告第6冊』  
 1930年 「崇徳天皇御廟所」『京都府史蹟勝地調査会報告第11冊』  
 西田直二郎・梅原末治 1934年 『栗栖野瓦窯址調査報告』『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第15冊』  
 乗安和二三 1979年 「平安後期の瓦に関する覚書」『日本古代学論集』  
 橋本久和 1980年 『上牧遺跡発掘調査報告書』『高槻市文化財調査報告書第13冊』  
 坂東善平 1970年 「京都市円宗寺址の瓦について」『古代学研究』58号  
 福山敏男 1943年 「六勝寺の位置について」『美術史学』81・82号  
 1977年 『中世の神社建築』『日本の美術』No.129  
 福山敏男ほか 1975年 『法勝寺跡』『京都市埋蔵文化財年次報告1974—Ⅱ』  
 藤岡謙二郎 1978年 「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』  
 平安京調査会 1975年 『平安京発掘調査報告——左京四条一坊——』  
 平安博物館 1977年 『平安京古瓦図録』  
 細谷義治 1968年 「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報1968』  
 真野修 1974年 「雌岡山周辺の古窯址群」『神戸古代史』Vol. 1-No. 3  
 安井良三 1960年 「篠村A号瓦窯址」『亀岡市史上巻』  
 横田賢次郎・森田勉 1978年 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心に——」『九州歴史資料館研究論集4』  
 六勝寺研究会 1972年 『延勝寺跡の発掘調査』  
 1976年 『六勝寺跡 六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』  
 和田晴吾 1980年 「土器類」『播磨広渡寺廃寺跡』

## 图 版

図版一 調査地区割図



図版二 調査区遠景（南から）







1 第1次調査区(南から)



2 第2次調査区(南から)



1 第1次調査区西部(南東から)

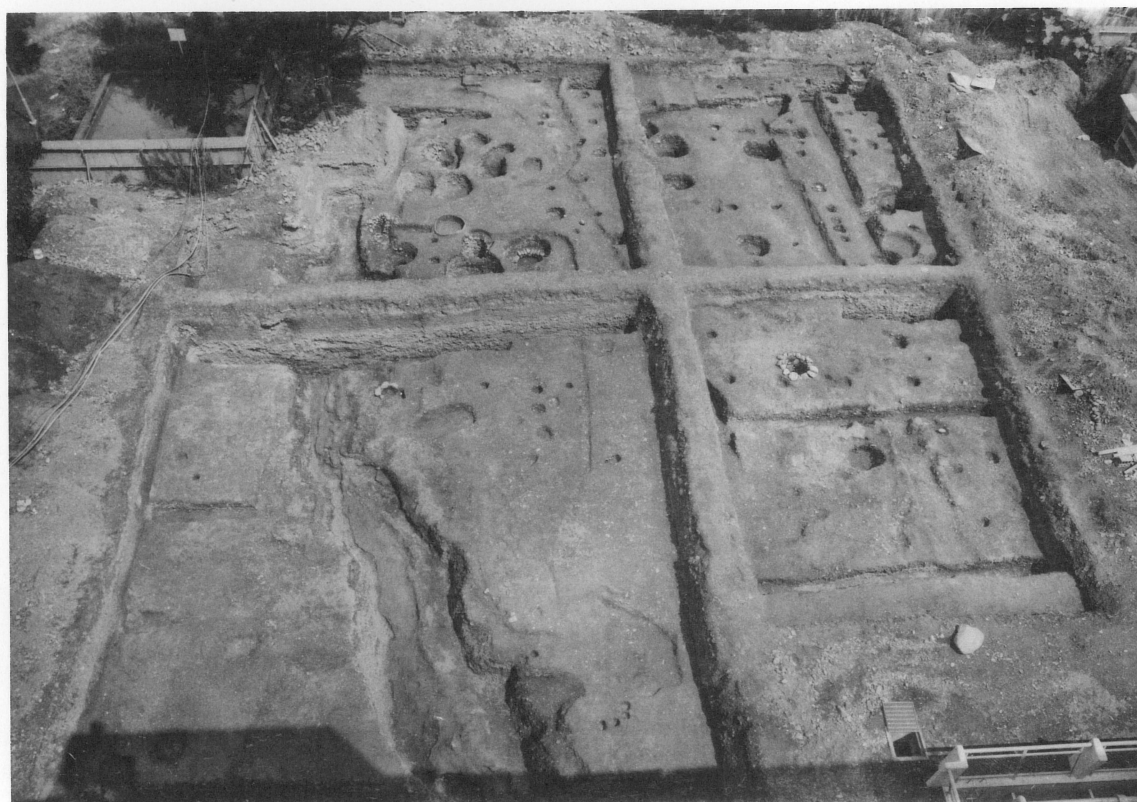


2 第2次調査区(南から)

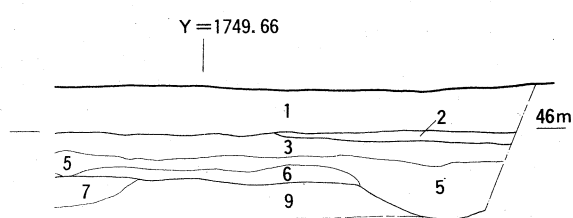
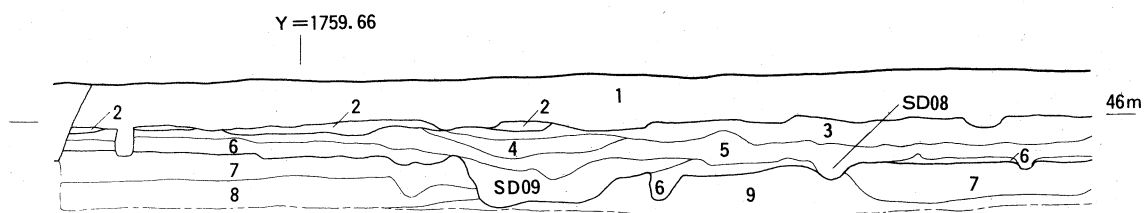
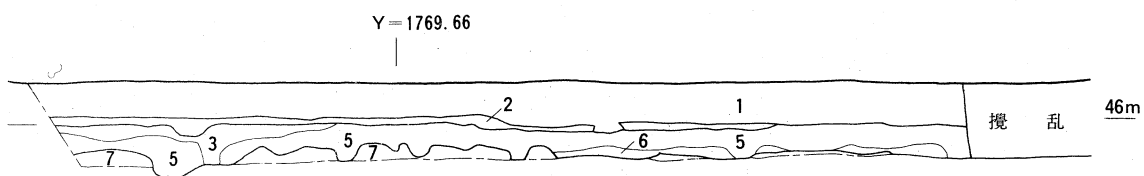




1 第1次調査区東部(南西から)

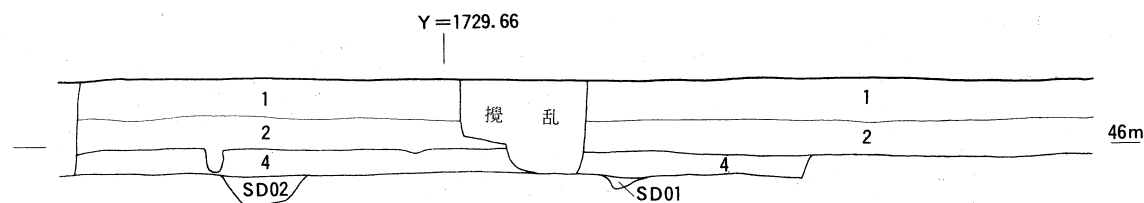
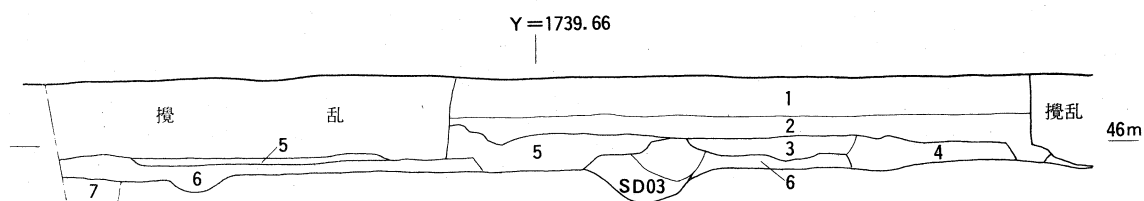


2 第2次調査区(南から)

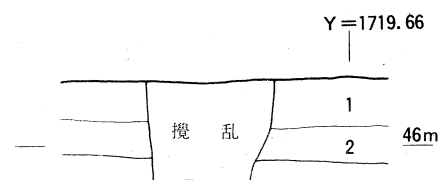


A—A' 層位圖

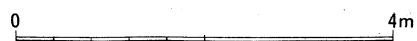
- |               |           |
|---------------|-----------|
| A 1 黑褐色土及灰黑色土 | A 6 暗黃褐色土 |
| A 2 淡灰色砂質土    | A 7 灰褐色細砂 |
| A 3 赤褐色土      | A 8 淡灰色砂  |
| A 4 黃褐色砂      | A 9 暗灰色砂礫 |
| A 5 暗褐色土      |           |

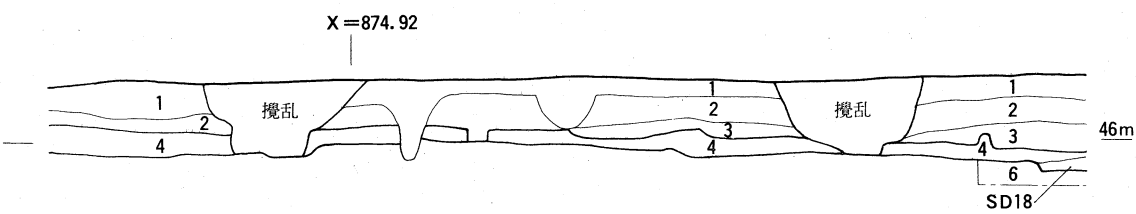
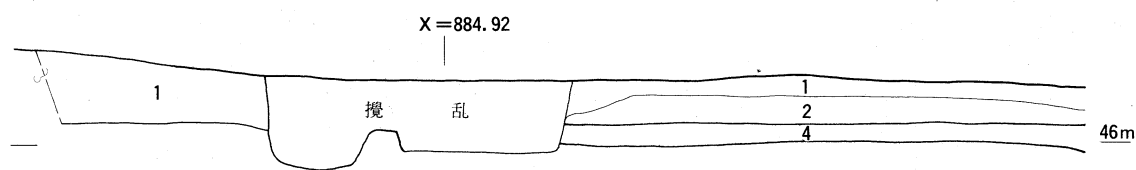


B—B' 層位圖

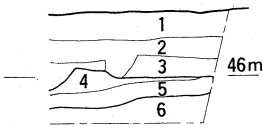


- |              |            |
|--------------|------------|
| B 1 黑褐色土     | B 5 暗灰色砂質土 |
| B 2 灰黑色土     | B 6 暗褐色土   |
| B 3 明灰色砂礫    | B 7 暗灰色砂礫  |
| B 4 礫混暗灰色粘質土 |            |

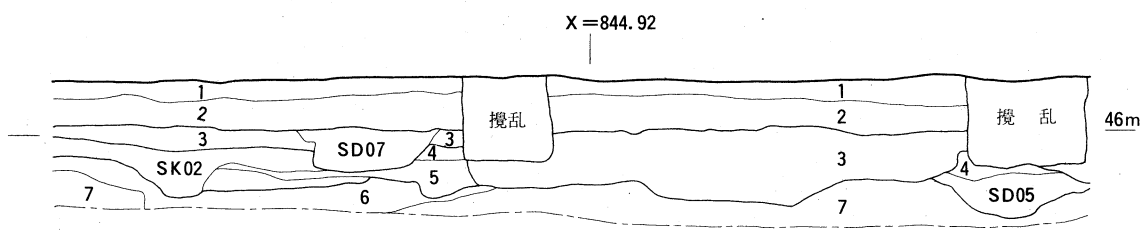
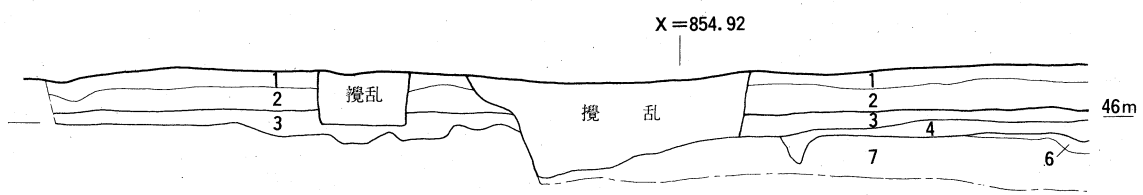




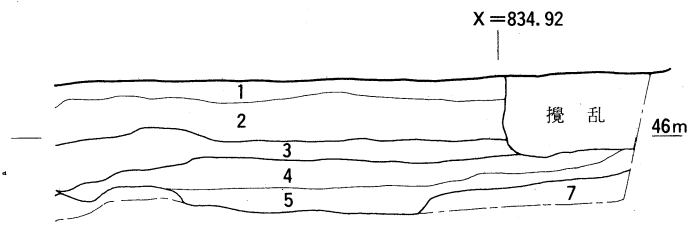
C-C' 層位圖



- |          |             |
|----------|-------------|
| C 1 黑褐色土 | C 4 黃灰褐色砂質土 |
| C 2 灰黑色土 | C 5 暗灰褐色砂質土 |
| C 3 黑色土  | C 6 黃褐色粘質土  |

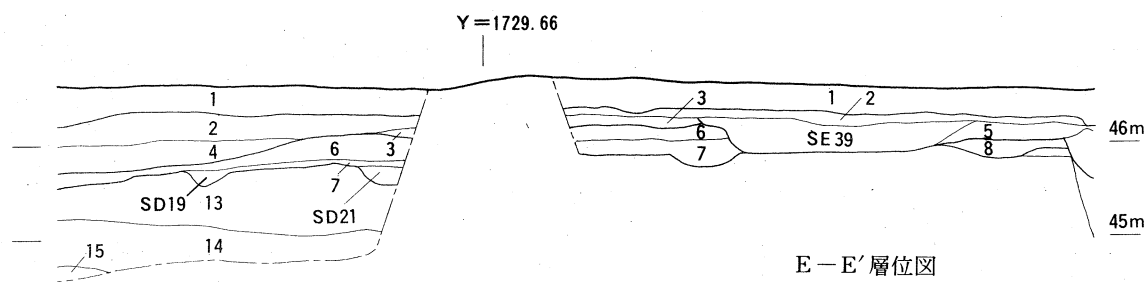
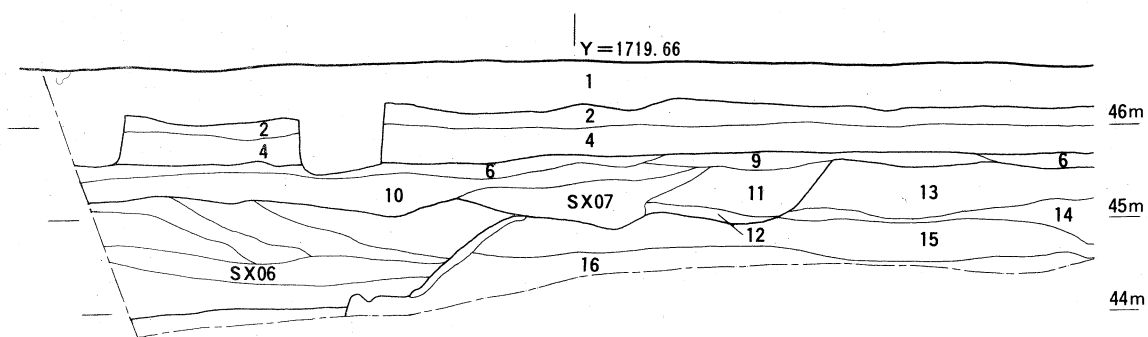


D-D' 層位圖



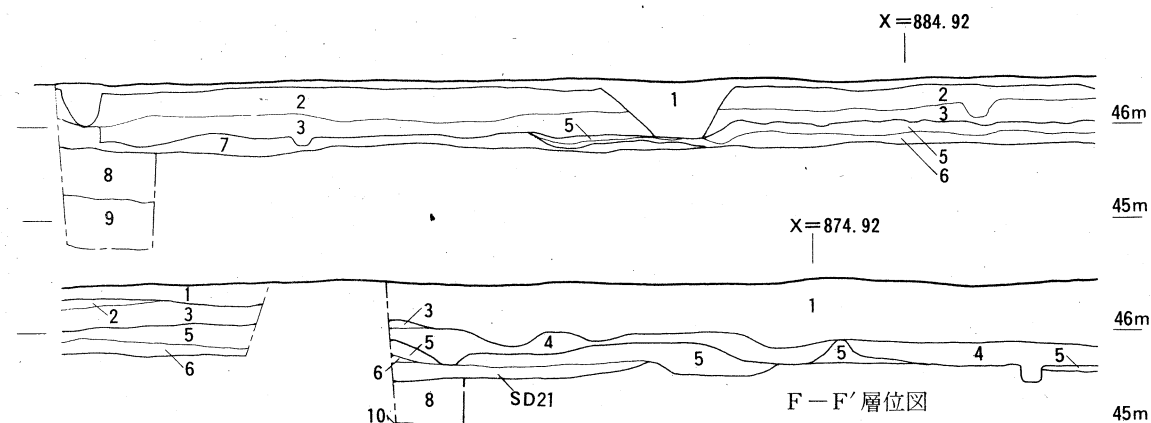
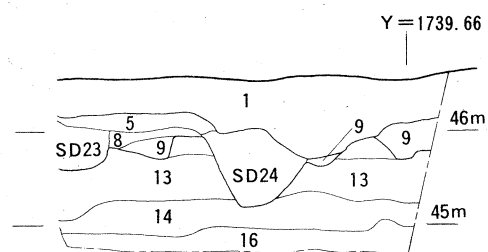
- |            |           |
|------------|-----------|
| D 1 黑褐色土   | D 5 暗褐色土  |
| D 2 灰黑色土   | D 6 黃灰色砂  |
| D 3 暗灰色砂質土 | D 7 暗灰色砂礫 |
| D 4 赤褐色土   |           |





E-E' 層位図

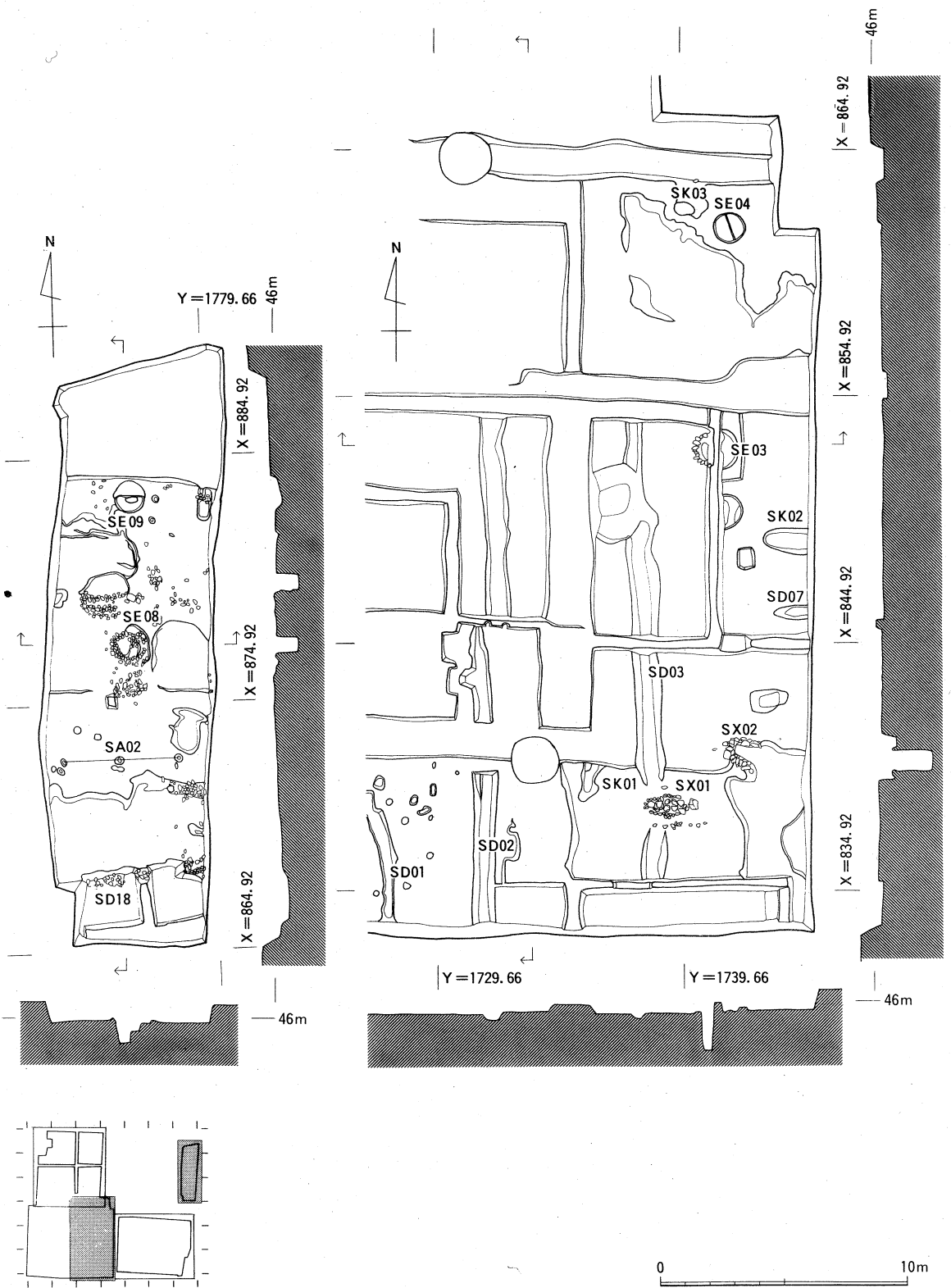
- |            |             |
|------------|-------------|
| E 1 表土・攪乱  | E 9 赤褐色土    |
| E 2 黒褐色土   | E 10 灰色砂礫   |
| E 3 礫混黄灰色土 | E 11 礫混暗褐色土 |
| E 4 灰黒色土   | E 12 暗灰色シルト |
| E 5 明灰色砂礫  | E 13 赤褐色砂礫  |
| E 6 黄褐色土   | E 14 灰色粗砂   |
| E 7 茶褐色土   | E 15 橙色砂礫   |
| E 8 青灰色砂礫  | E 16 シルト混砂礫 |



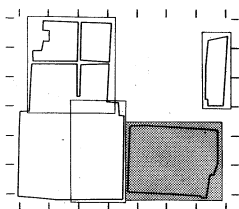
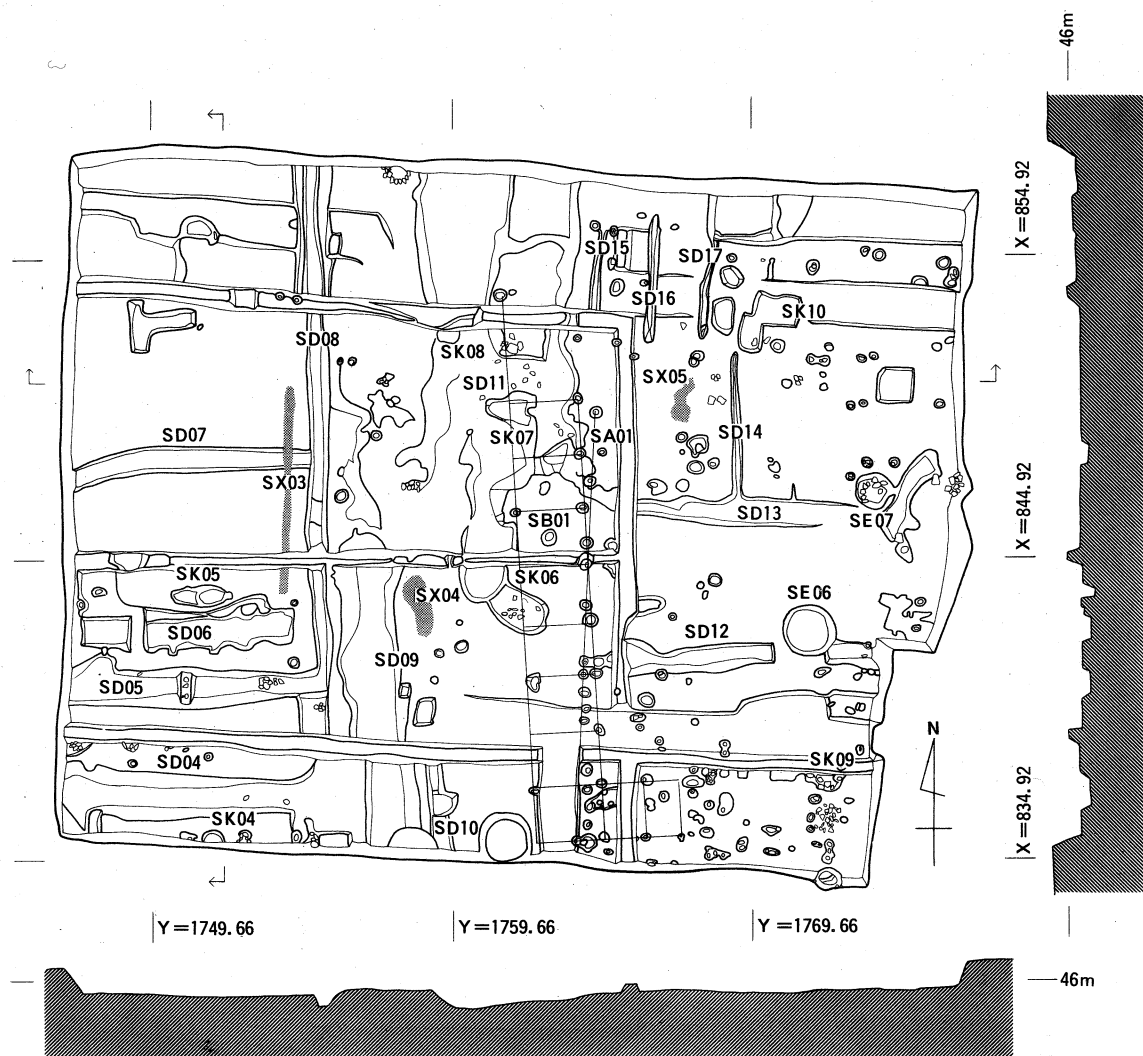
F-F' 層位図

- |            |           |
|------------|-----------|
| F 1 表土・攪乱  | F 6 茶褐色土  |
| F 2 黒褐色土   | F 7 灰色砂礫  |
| F 3 礫混黄灰色土 | F 8 赤褐色砂礫 |
| F 4 黒灰色土   | F 9 黒褐色砂礫 |
| F 5 黄褐色土   | F 10 灰褐色砂 |





第1次調査区西部と東北部



第1次調査区東部



第2次調査区



1 溝SD11(北から)

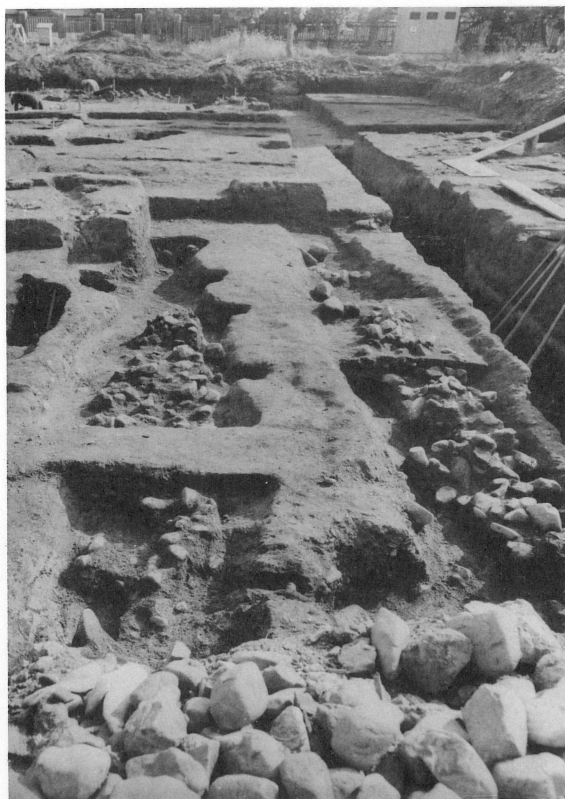


2 柵SA01(南から)



3 建物SB01(北から)

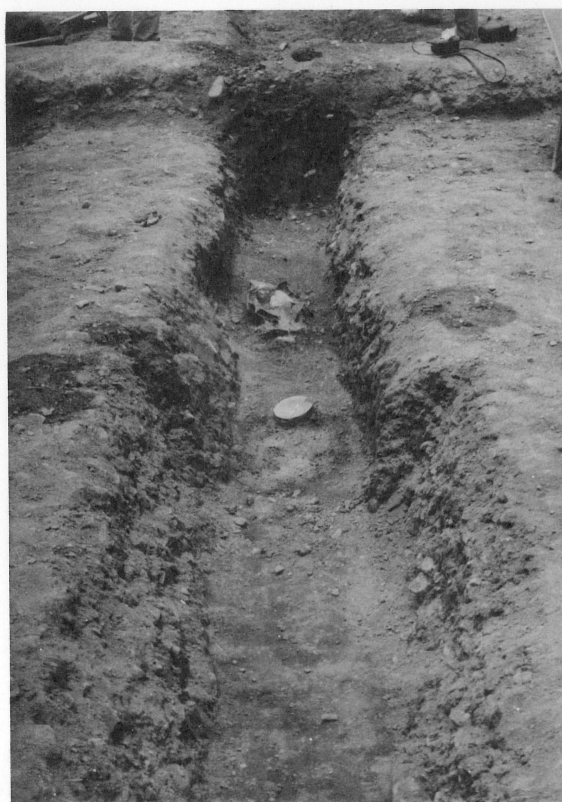




1 溝SD05・SD06(西から)



2 溝SD13(西から)



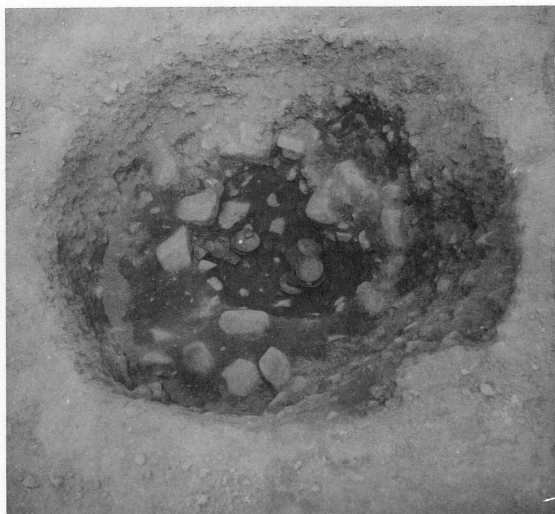
3 溝SD24(南から)



4 溝SD04の検出(西から)



1 井戸SE13



2 井戸SE22



3 井戸SE18



4 井戸SE11



5 井戸SE19



6 野壺SE36(左), 井戸SE32(右)



1 石組SX02(南東から)



2 石敷SX01(西から)



3 護岸SX06(南から)

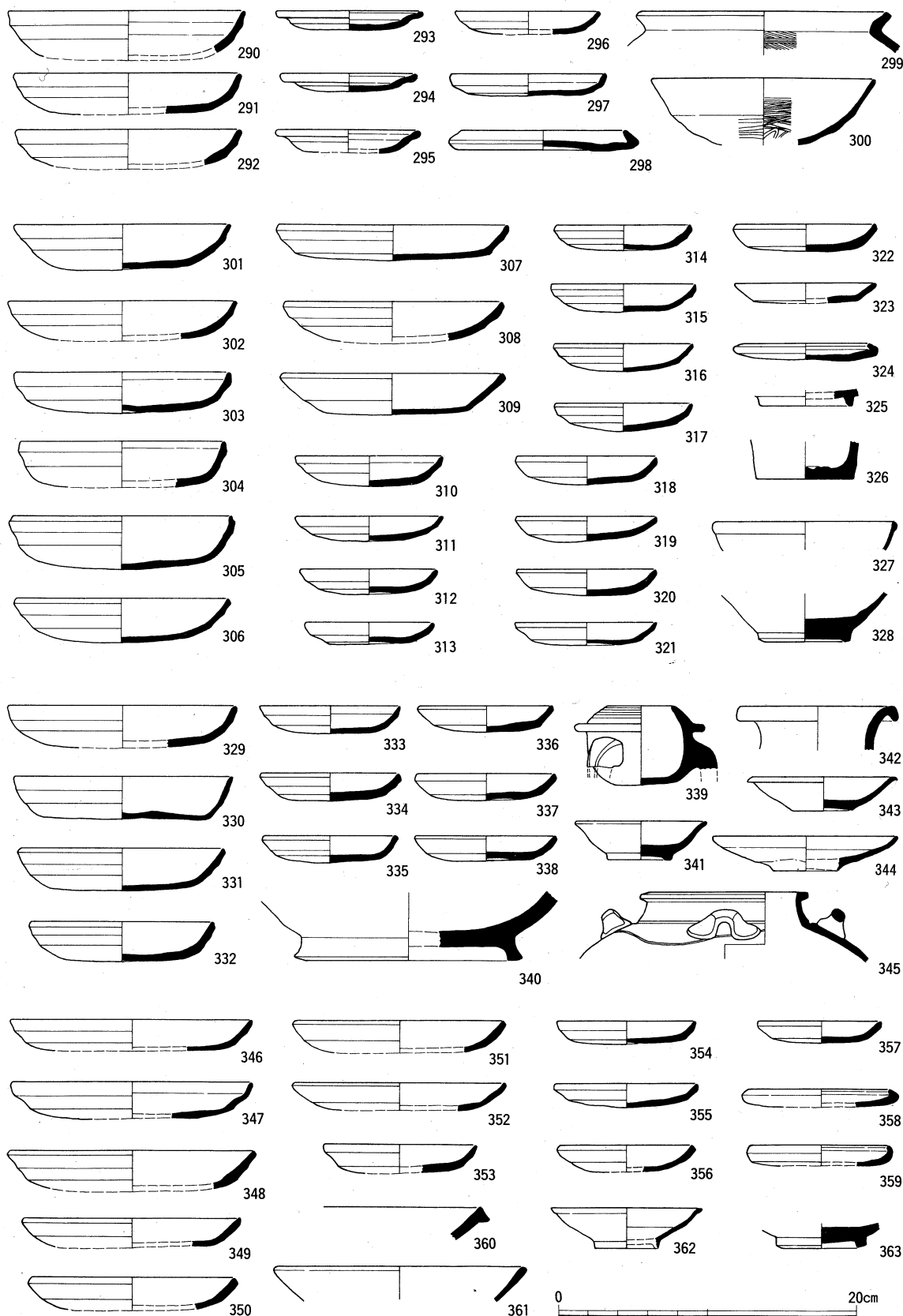




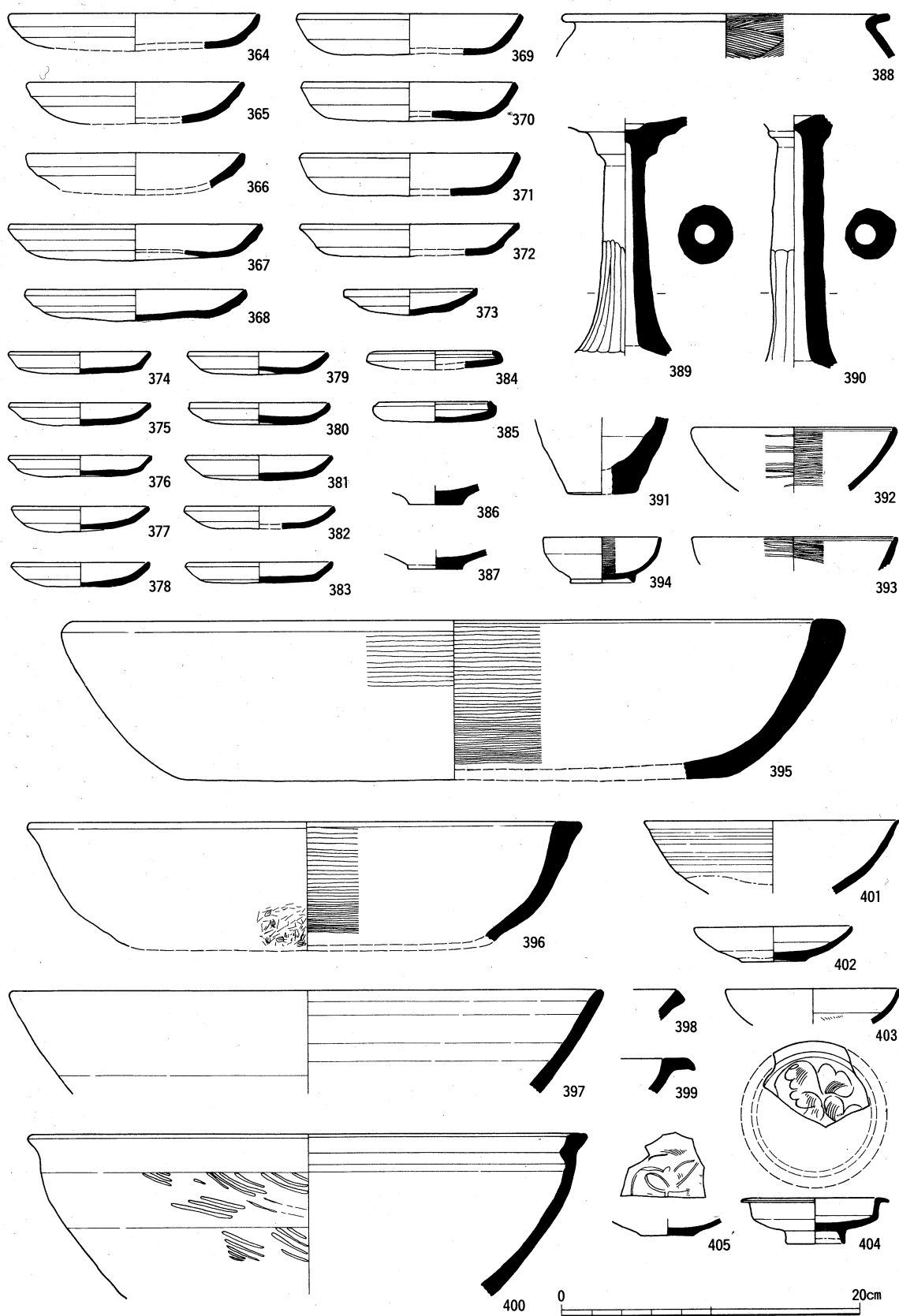
1 火舎香炉・六器の出土状況



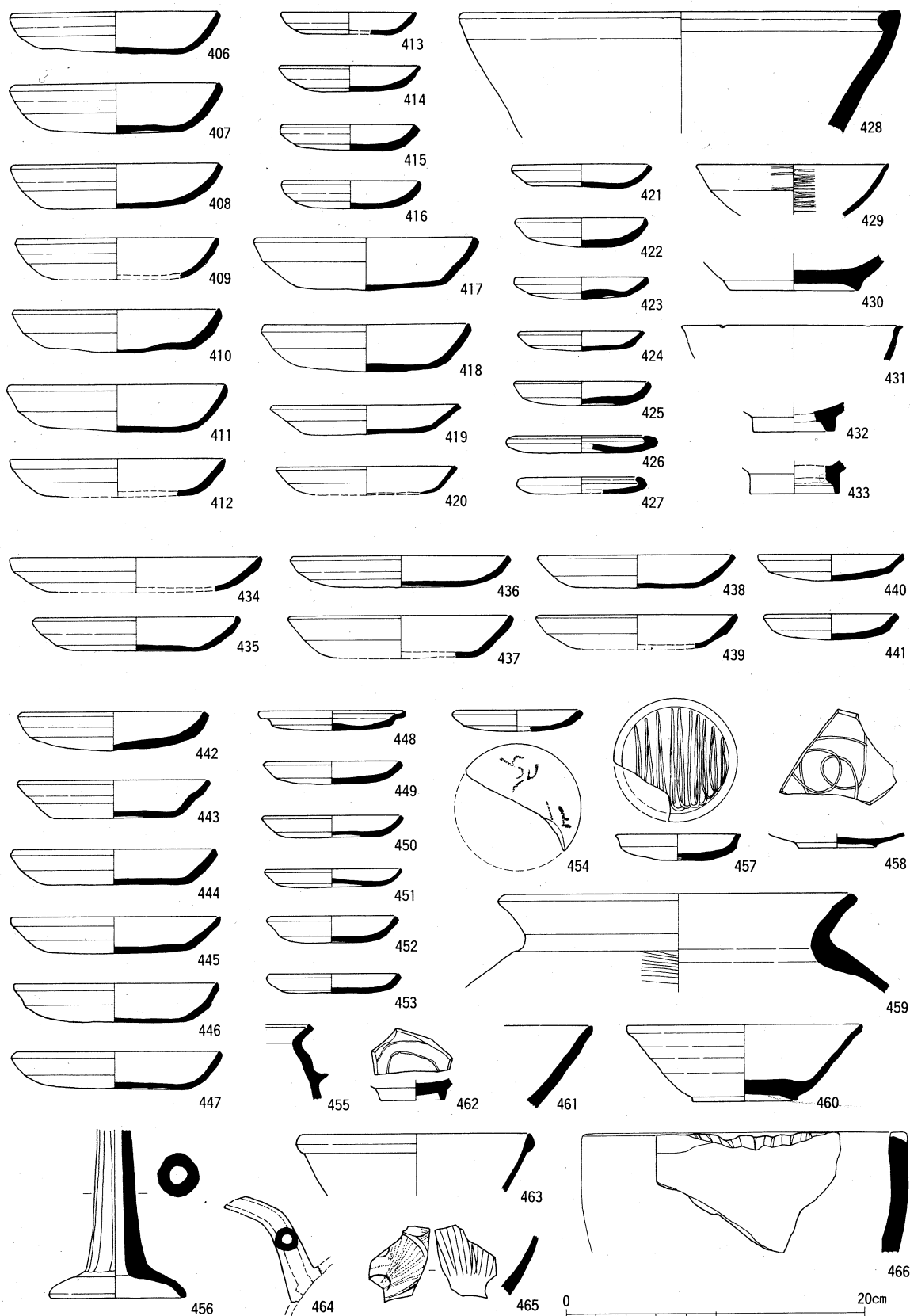
2 溝SD06の土器出土状況



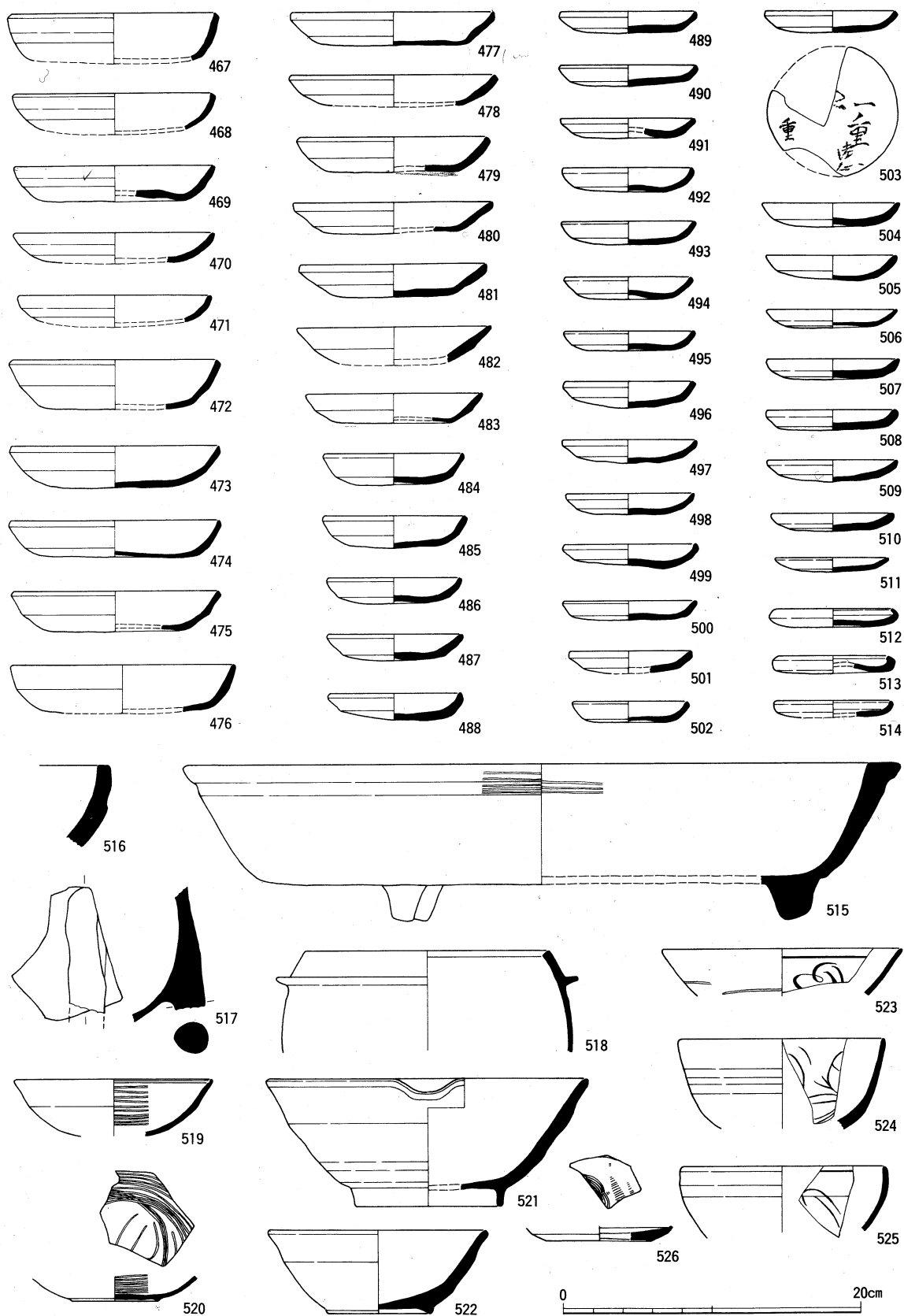
SE25(290~299土師器, 300瓦器), SE22(301~324土師器, 325瓦器, 326須恵器, 327・328白磁), E12層(329~339土師器, 340須恵器, 341灰釉系陶器, 342~344白磁, 345褐釉陶器), SE40(346~359土師器, 360361須恵器, 362・363白磁)



SE30(364~391土師器, 392~396瓦器, 397・398須恵器, 399黄釉鉄絵陶器, 400南蛮手陶器, 401~404白磁, 405青白磁)

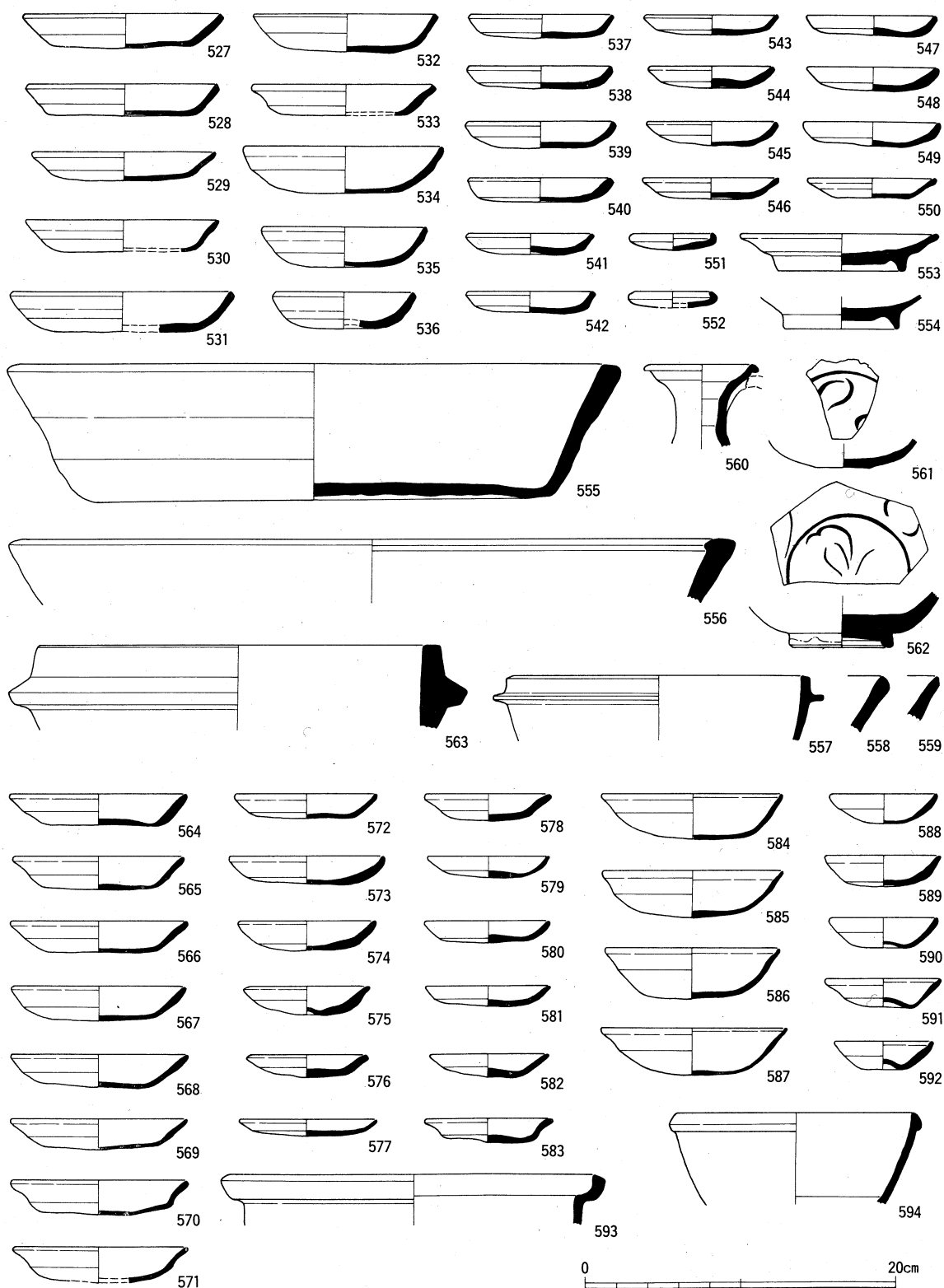


SD13(406~428土師器, 429瓦器, 430灰釉系陶器, 431~433白磁), SD11下層(434~441土師器)  
SD11中層(442~456土師器, 457・458瓦器, 459須恵器, 460・461灰釉系陶器, 462~464白磁,  
465青磁, 466石鍋)

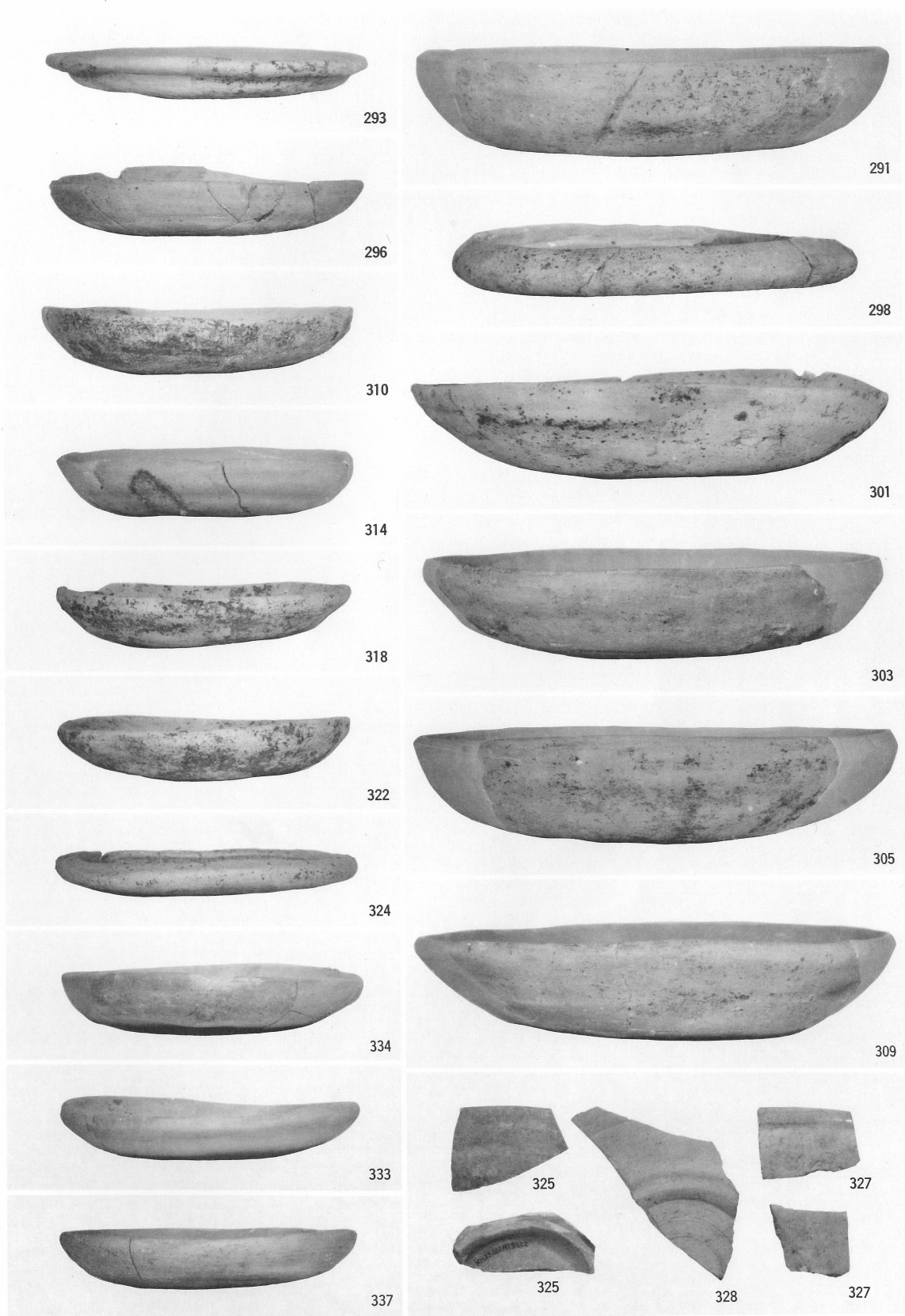


SD11上層(467~514土師器, 515~520瓦器, 521・522灰釉系陶器, 523~526青磁)

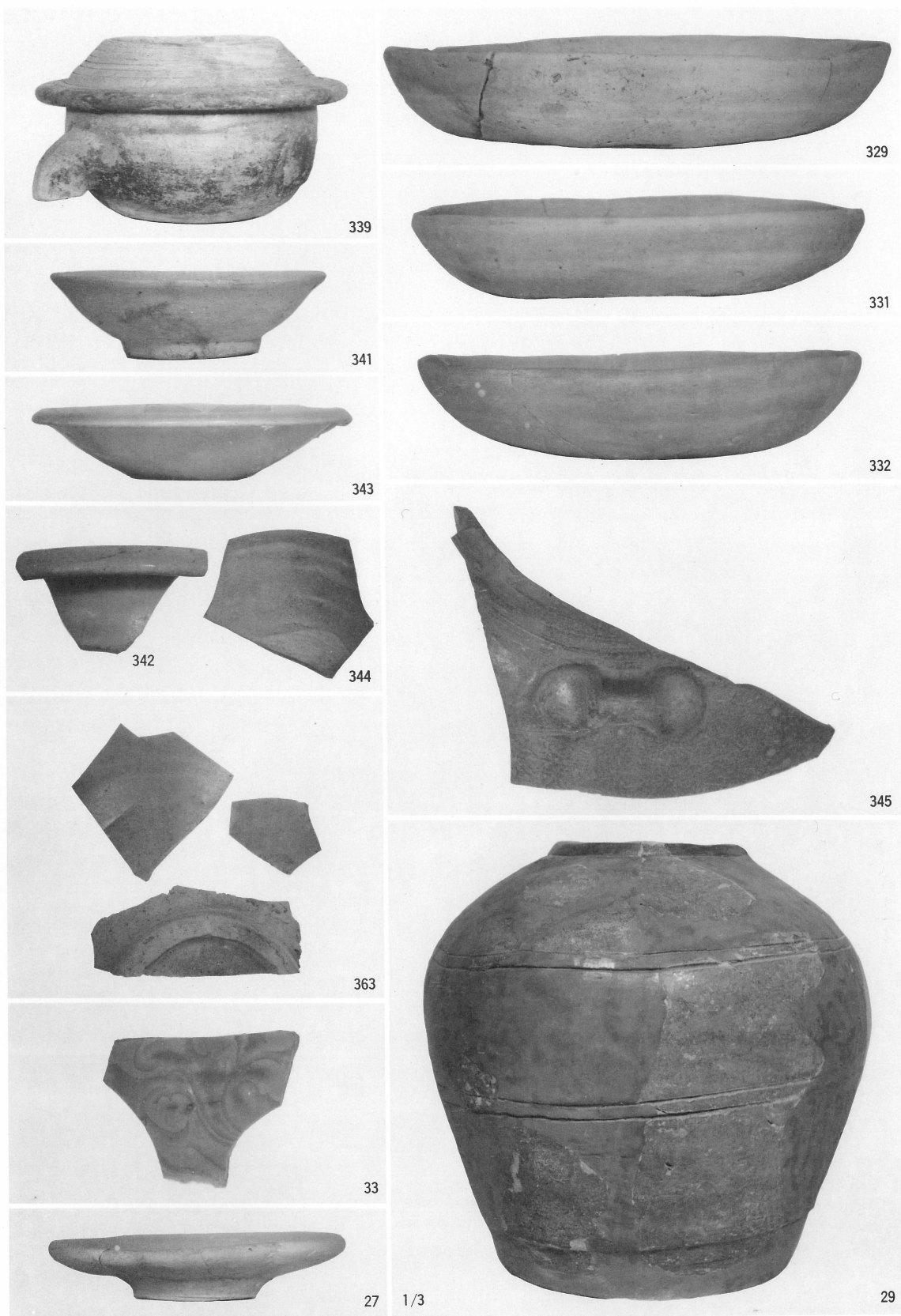




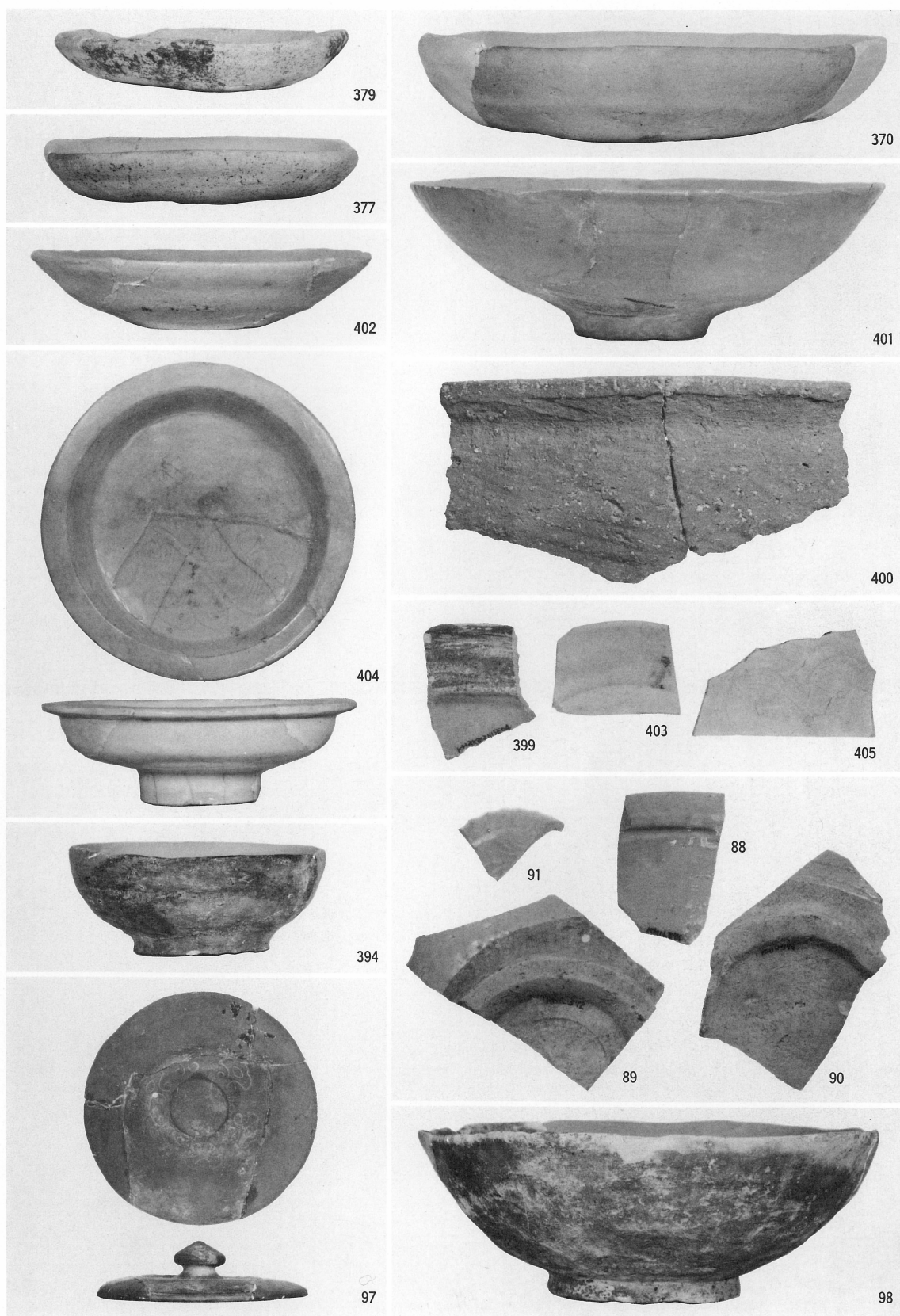
SD06(527~555土師器, 556・557瓦器, 558須恵器, 559灰釉系陶器, 560・561白磁, 562青磁, 563石鍋)  
SK10(564~592土師器, 593瓦器, 594白磁)



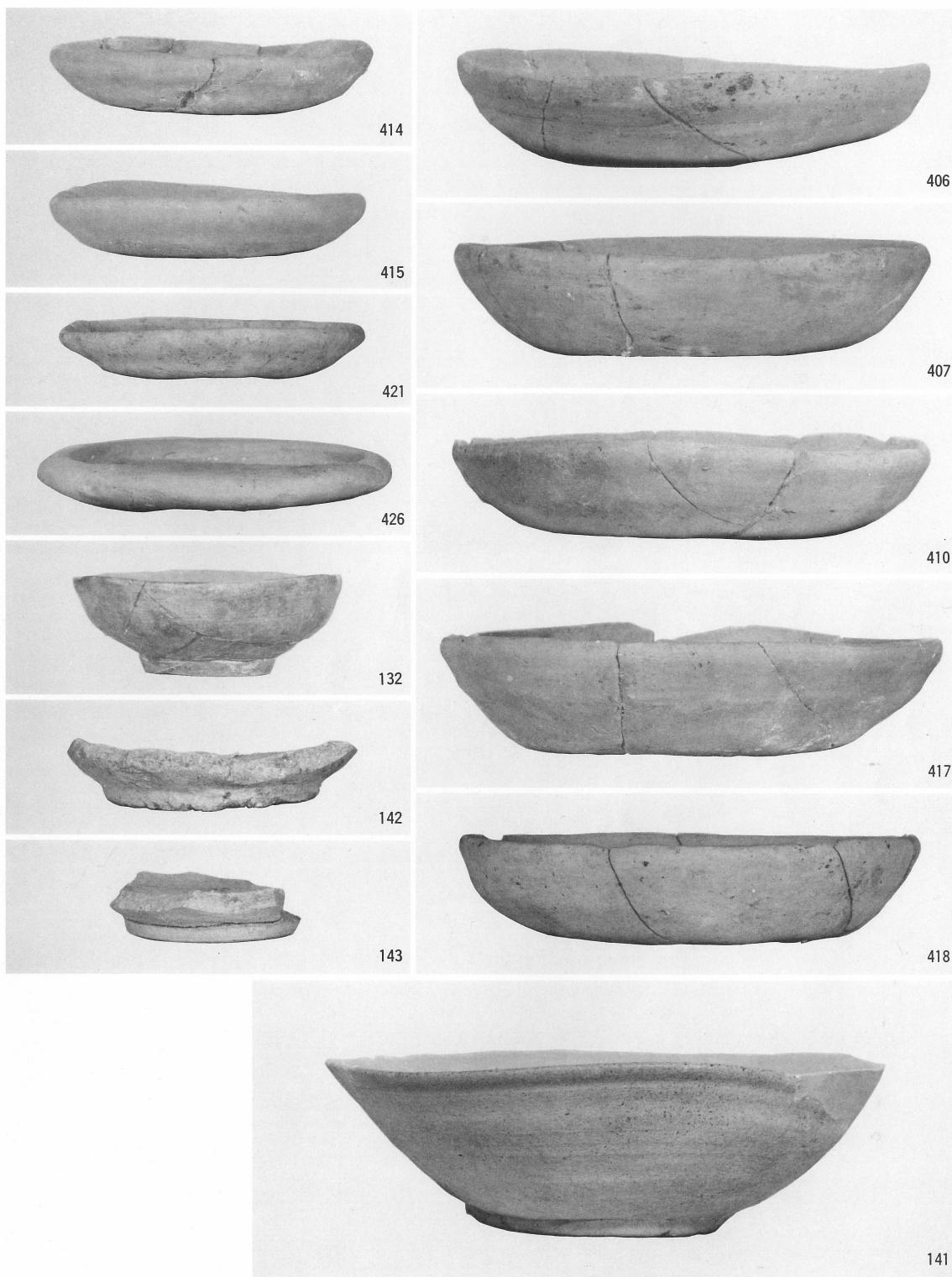
SE25(291・293・296・298土師器), SE22(301・303・305・309・310・314・318・322・324土師器, 325瓦器, 327・328白磁), E12層(333・334・337土師器)



E 12層(329・331・332・339土師器, 341灰釉系陶器, 342~344白磁, 345褐釉陶器)  
SE40(363白磁), SD12(27土師器, 29綠釉陶器, 33白磁)

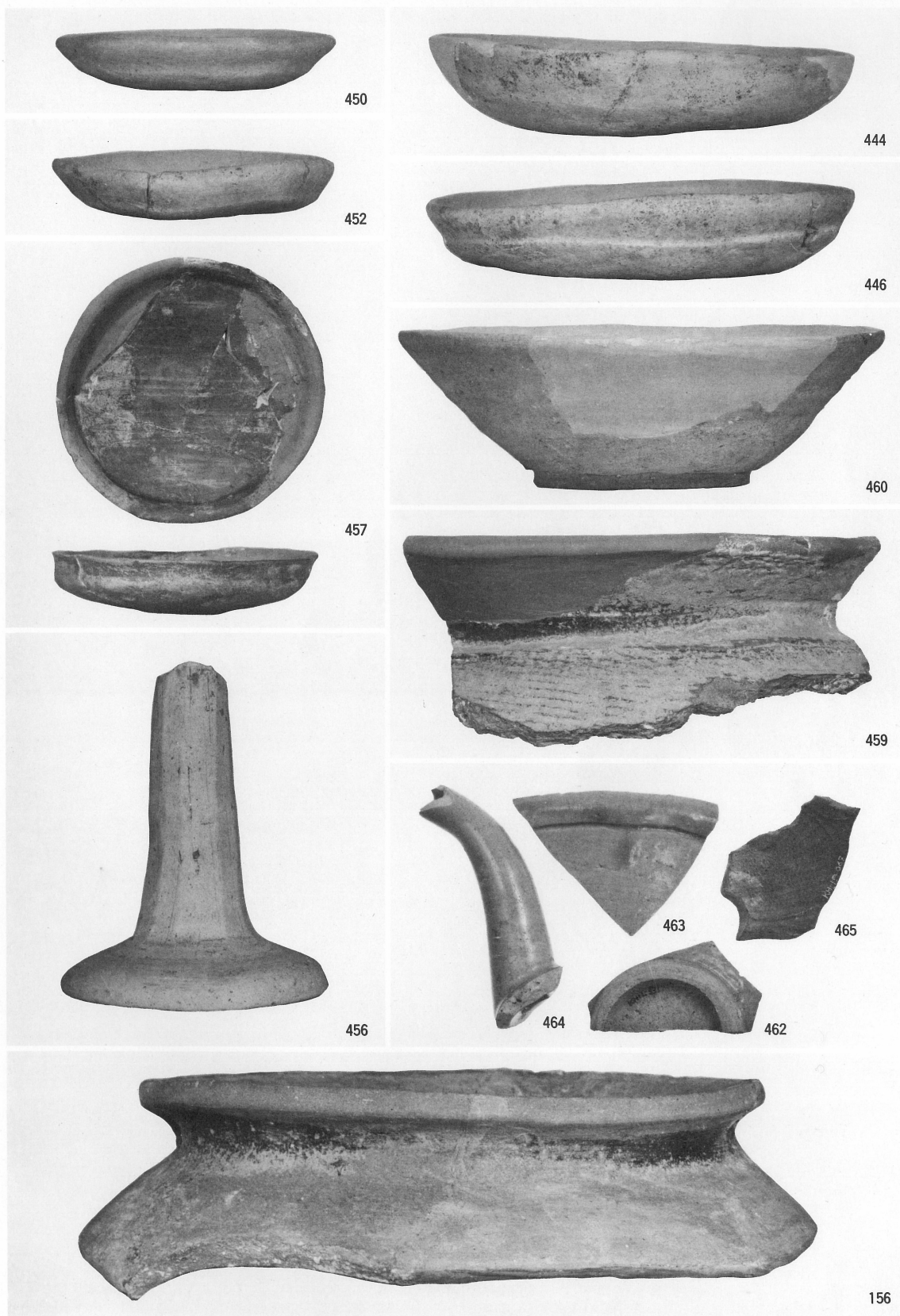


SE30(370・377・379土師器, 394瓦器, 399黄釉鉄絵陶器, 400南蛮手陶器, 401~404白磁, 405青白磁)  
SD09(88~90白磁, 91青白磁, 97瓦器), SE16(98瓦器)

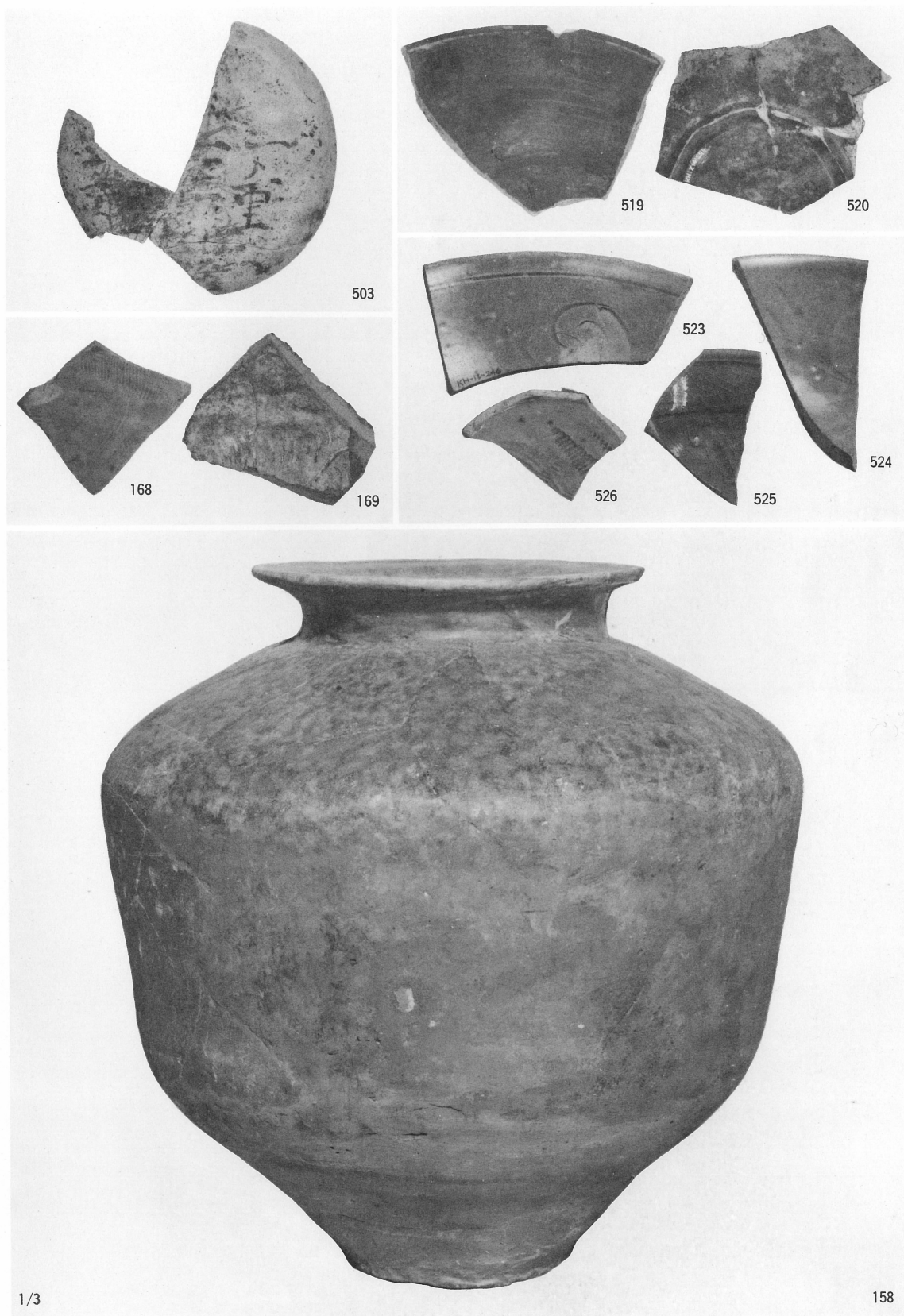


SD13(406・407・410・417・418・414・415・421・426土師器), SE18(132瓦器), SD23下層(141～143灰釉系陶器)





SD11中層 (444・446・450・452・456土師器, 457瓦器, 459須恵器, 460灰釉系陶器, 462~464白磁, 465青磁)  
SD03 (156須恵器)

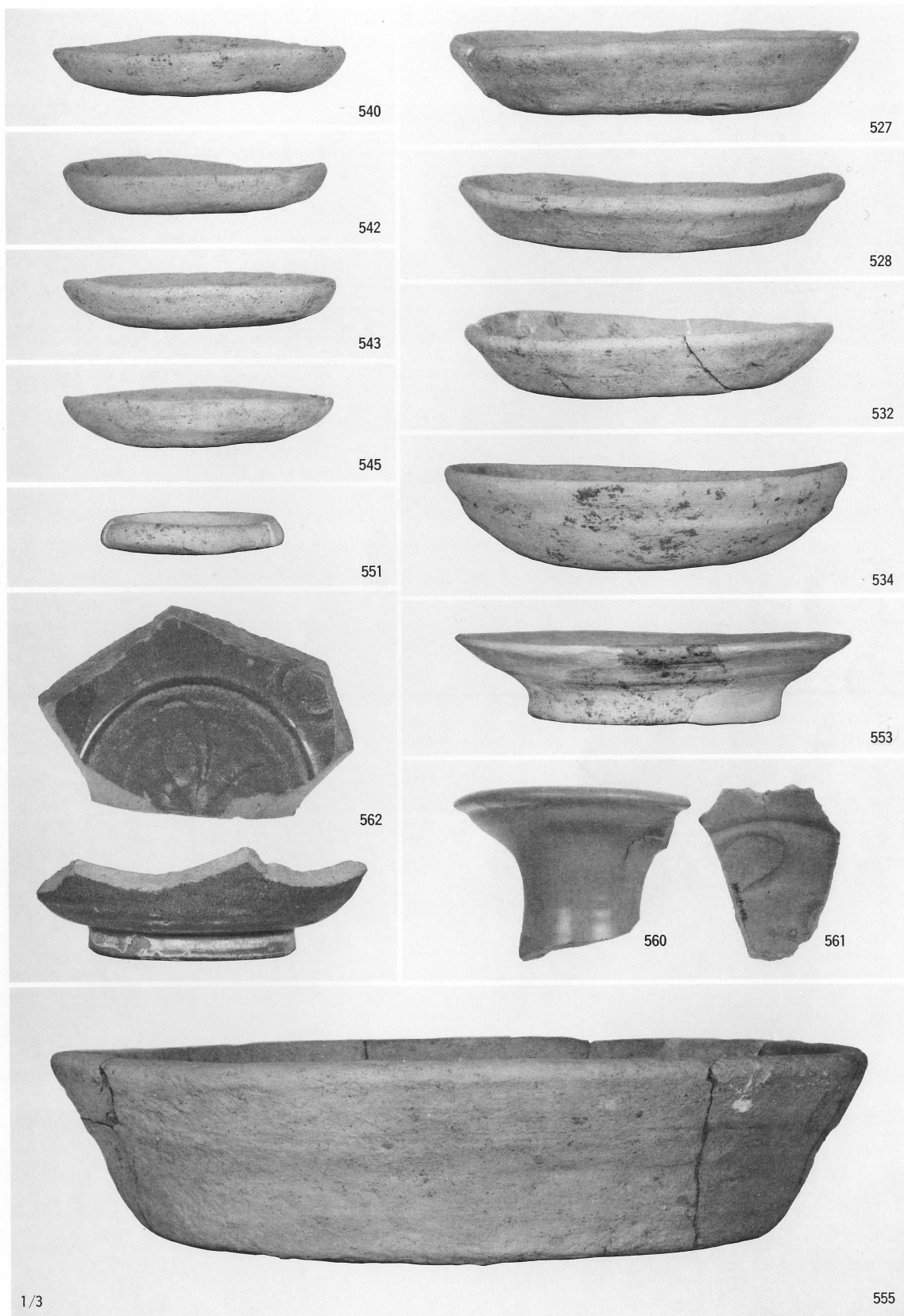


SD03(158灰釉系陶器, 168青磁, 169緑釉陶器), SD11上層(503土師器, 519・520瓦器, 523～526青磁)

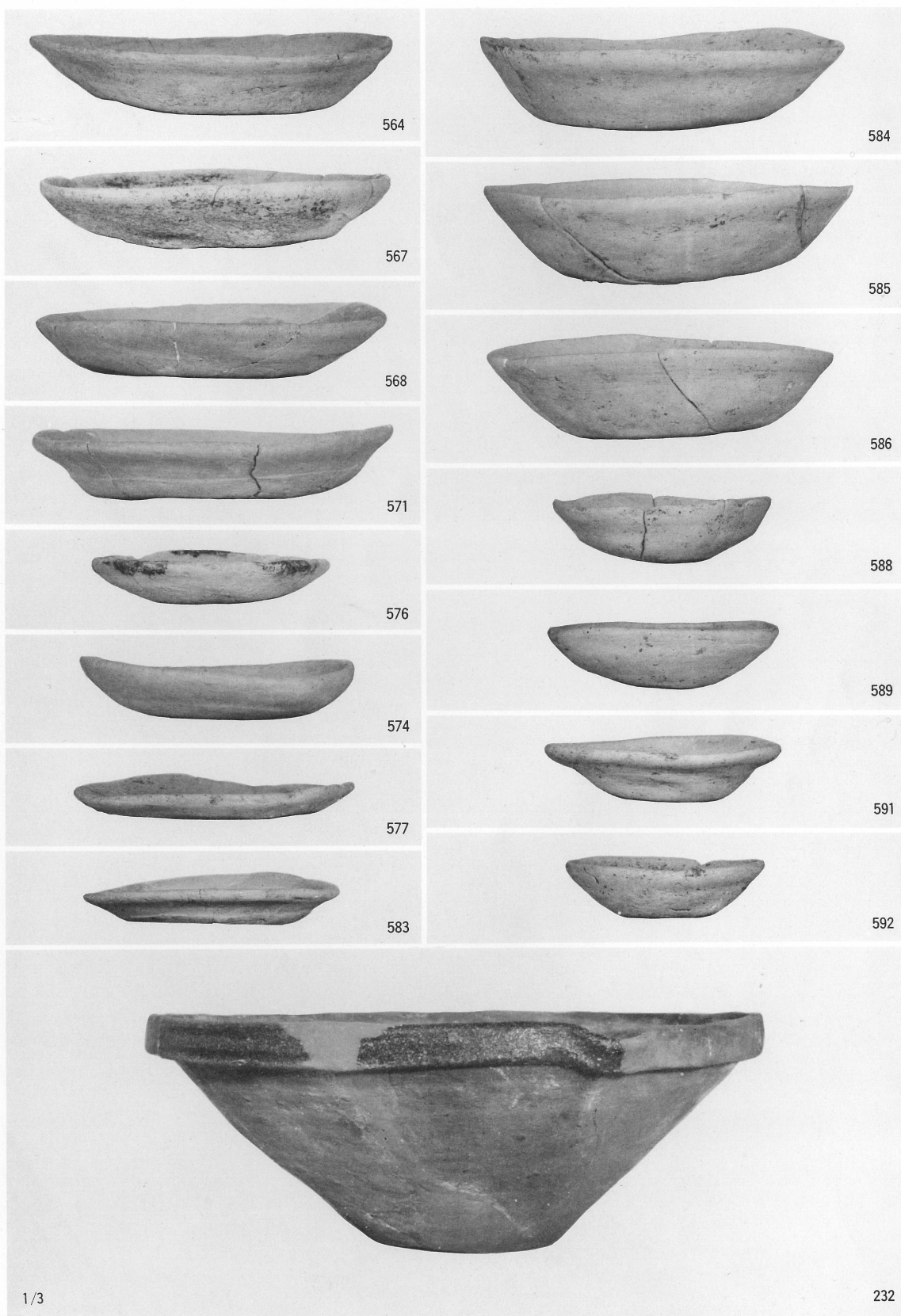


SD11 上層(473・474・481・484・488・505・509・512土師器, 521・522灰釉系陶器, 515瓦器)  
SE24(201土師器)





SD06(527・528・532・534・540・542・543・545・551・553・555土師器, 560・561白磁, 562青磁)



SK10(564・567・568・571・574・576・577・583~586・588・589・591・592土師器), SK08(232須恵器)



SD24(238・247・249・250・251・252土師器, 253・255瓦器)

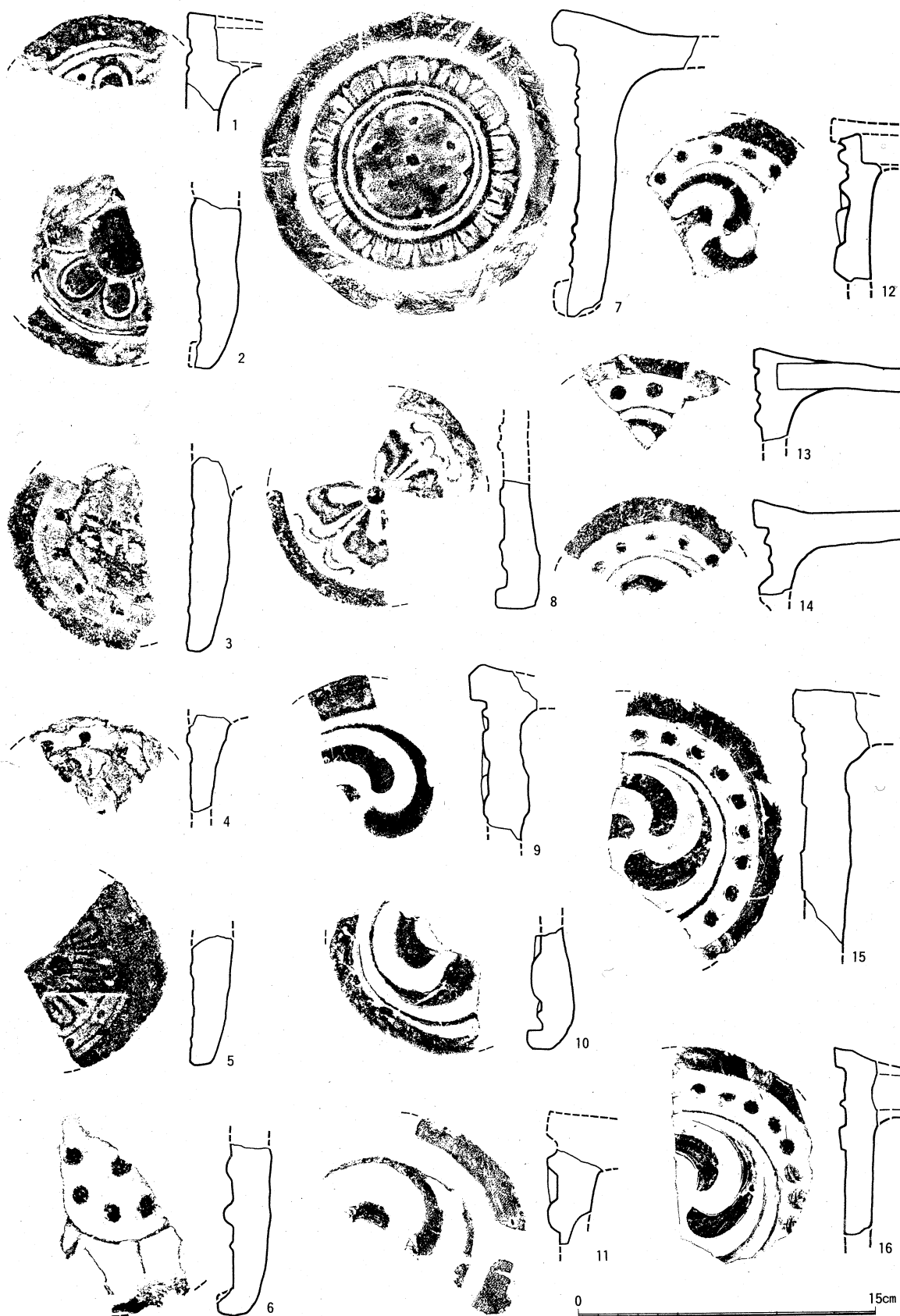




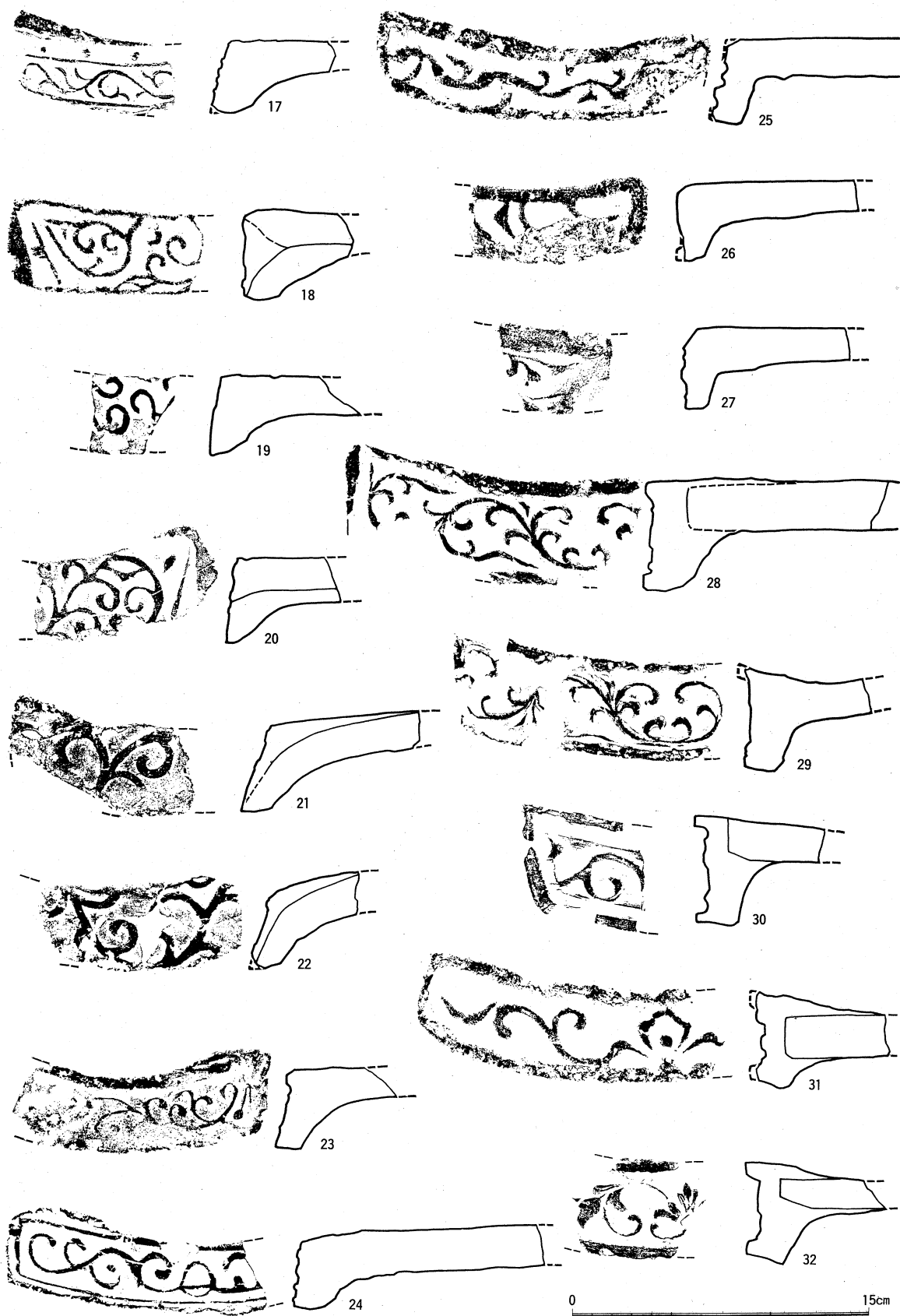
A 5・A 6 層(270～272・596・597白磁, 274・598・599青白磁, 282青磁)  
 攪乱層(289青白磁), 土製円塔(603)



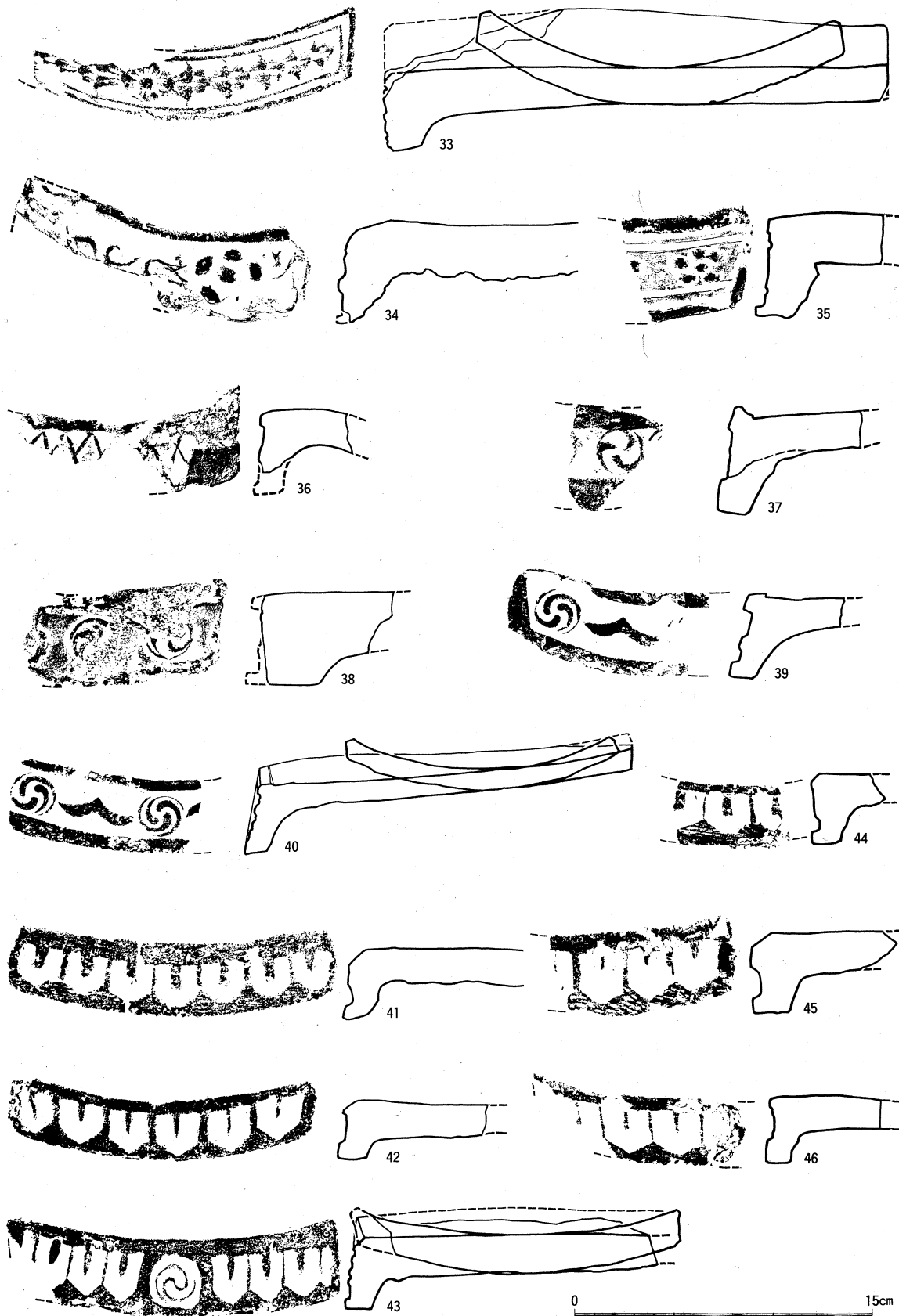
A 5・A 6 層(275青磁), A 2・A 3 層(286青磁), 火舎香炉(600), 六器(601)



軒九瓦(1~16)

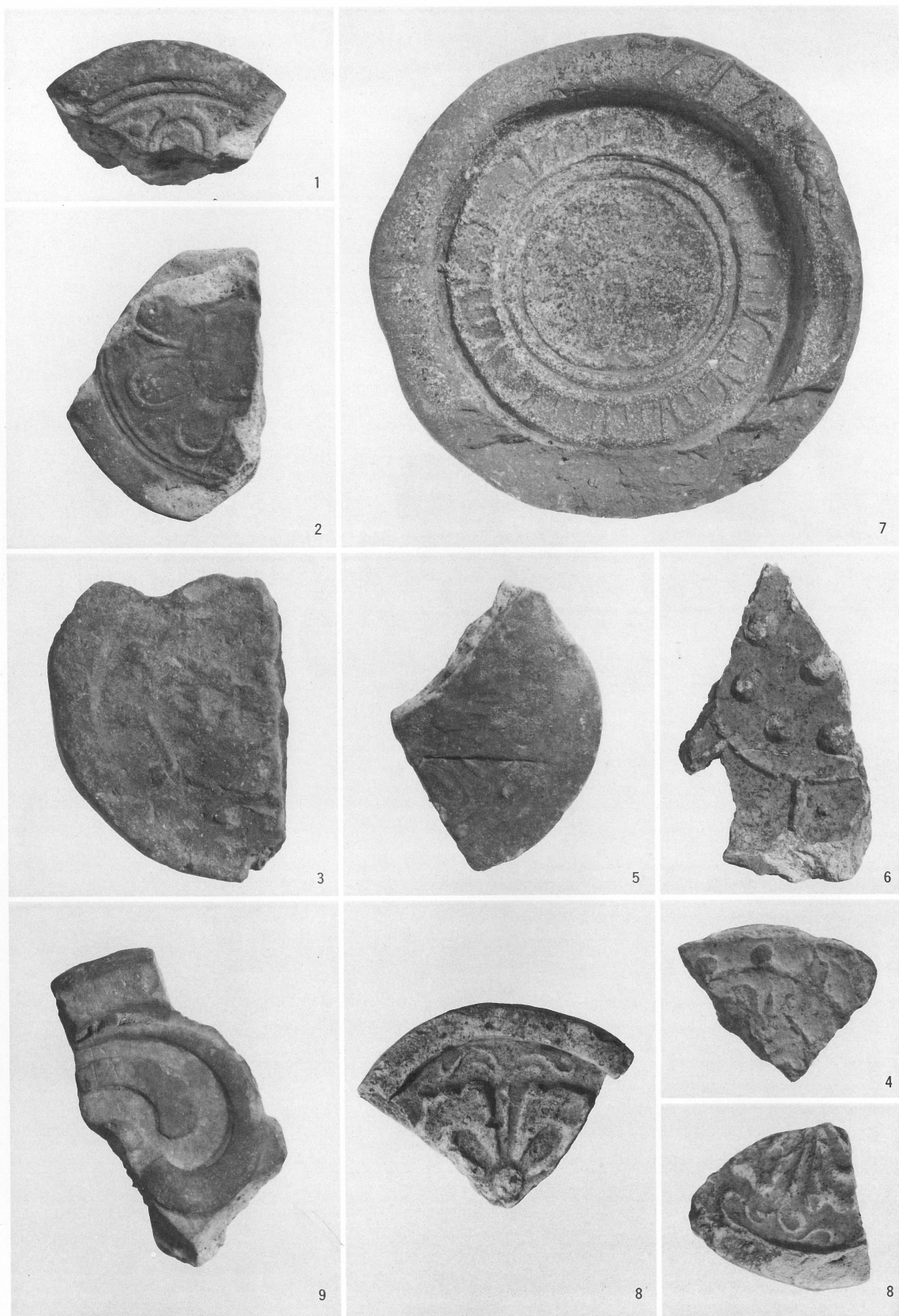


軒平瓦(17~32)

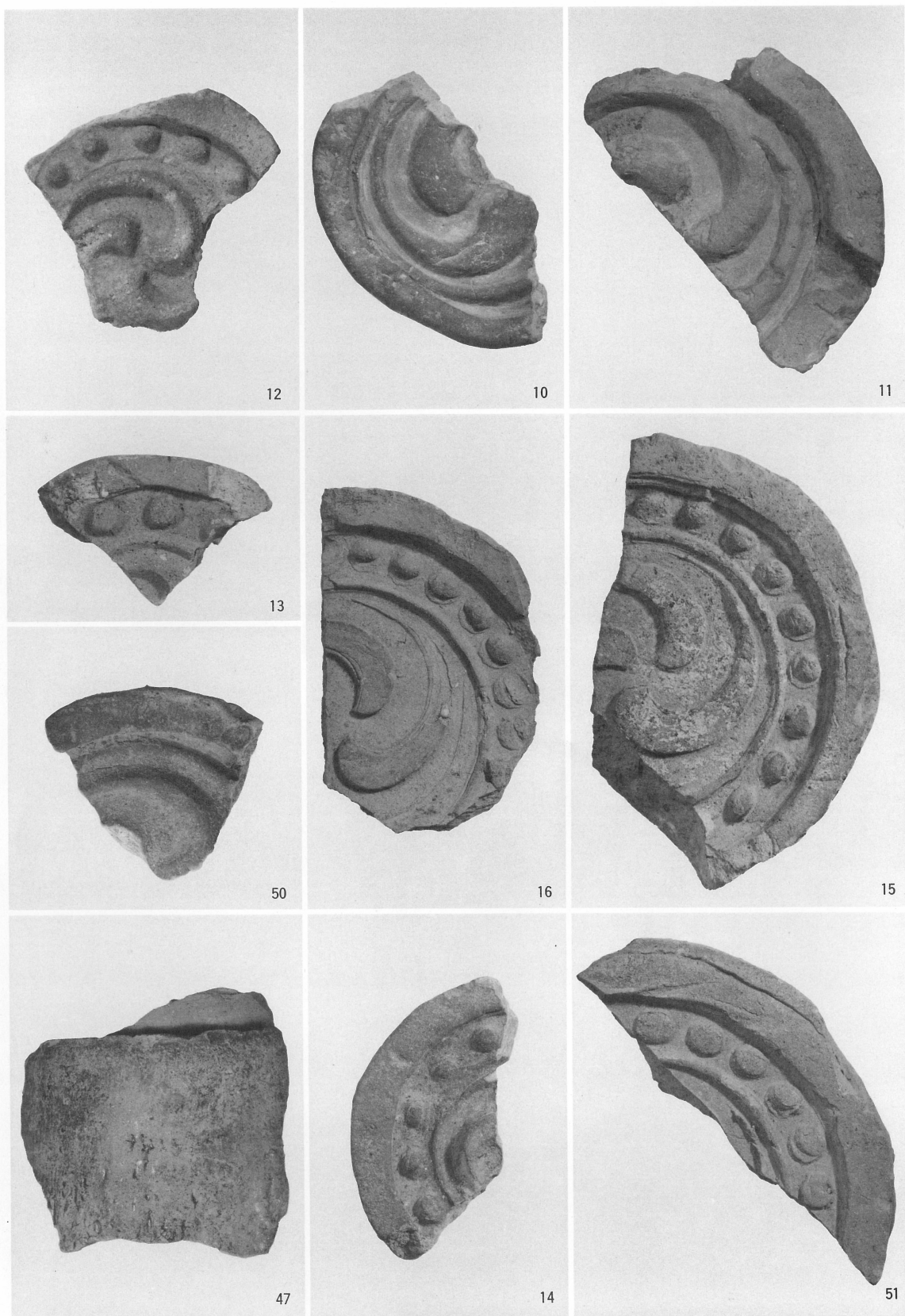


軒平瓦(33~46)

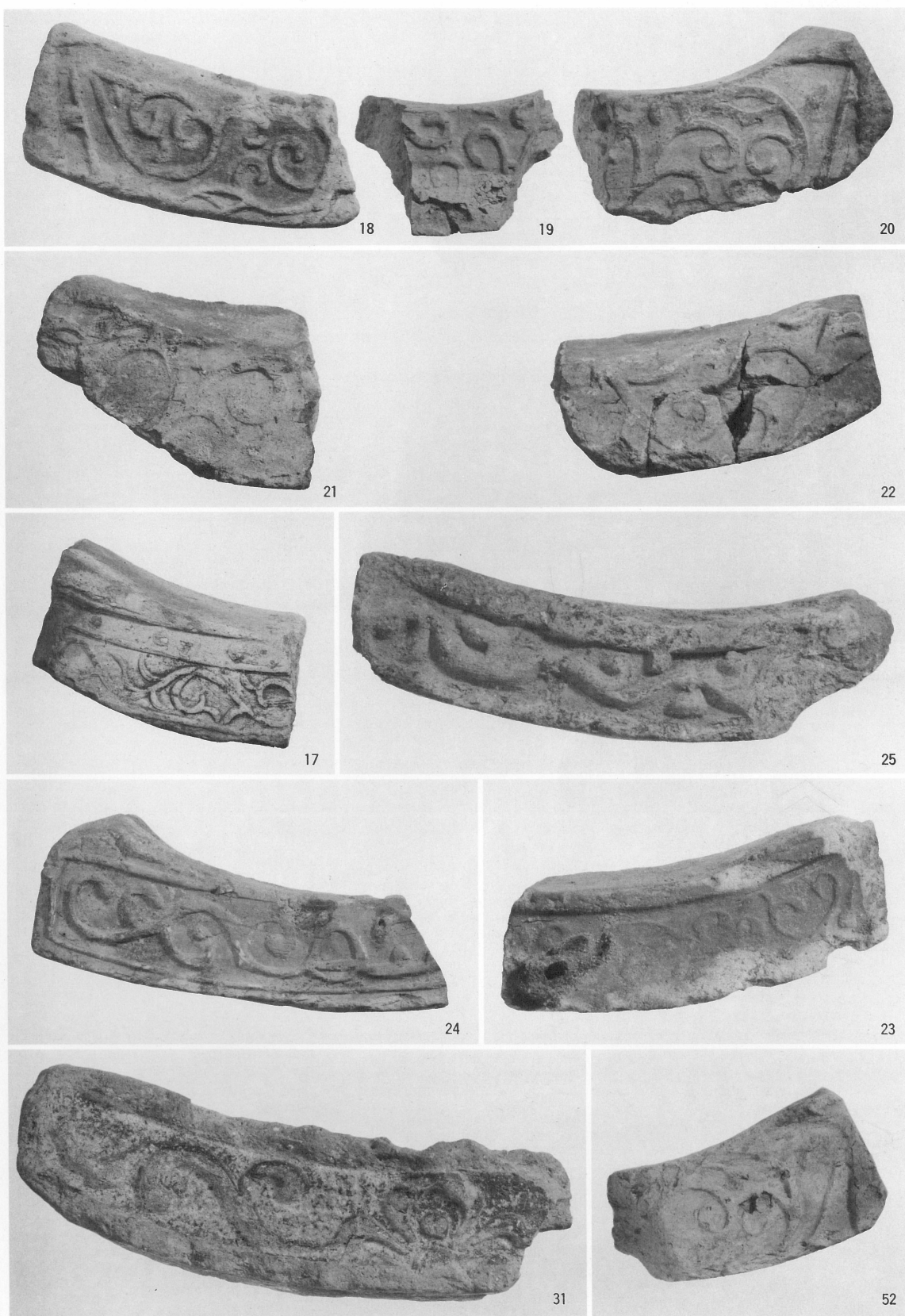




軒丸瓦(1~9)



軒丸瓦 (10~16・50・51), 緑釉丸瓦 (47)

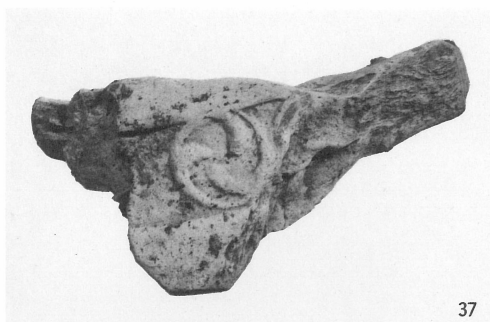


軒平瓦 (17~25・31・52)





軒平瓦 (26~30・32~36)



37



38



39



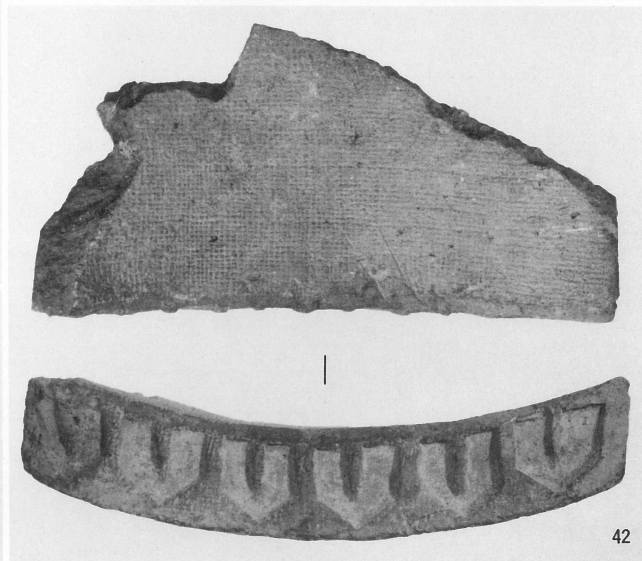
53



54

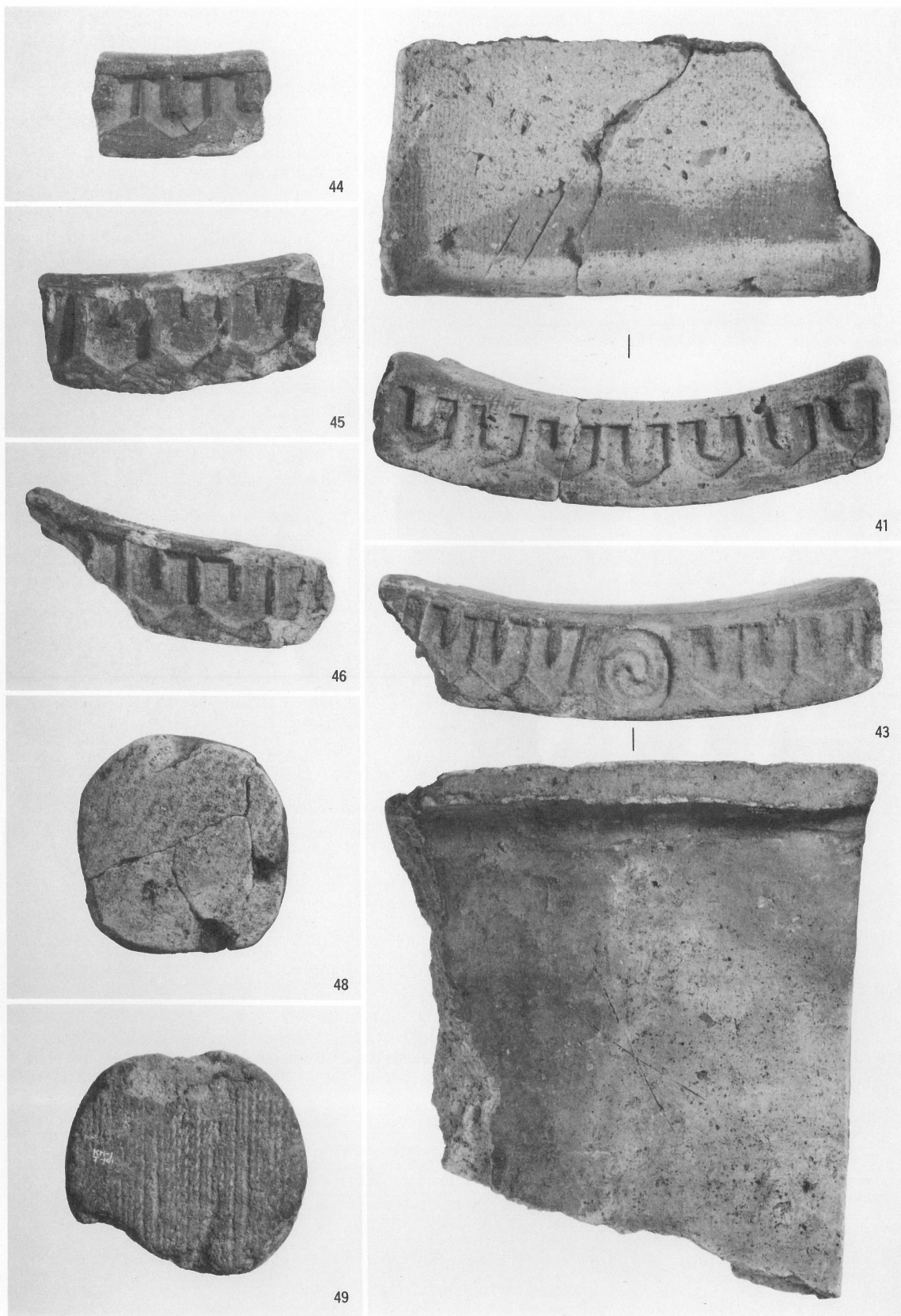


40



42

軒平瓦 (37~40・42・53・54)



軒平瓦(41・43～46), 瓦製円板(48・49)

昭和56年3月10日 印刷

昭和56年3月14日 発行

## 京都大学埋蔵文化財調査報告 Ⅱ

——白河北殿北辺の調査——

編集行 京都大学埋蔵文化財研究センター  
京都市左京区吉田本町

印刷 株式会社 図書同朋舎  
京都市下京区中堂寺鍵田町2  
電話 (361) 9121(代)

# 正誤表

		誤	正
本文	54頁6行	「  」「\\」	「  」,「\\」
	68頁24行	平安京VI期	平安京IV期
図版	15 - 2	SX01 (西から)	SX01 (東から)

1

